

奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

内容刷新

〔記念〕特別号



1964・4

4月号

奇譚クラブ

4月号

定価二五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード 大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りく」	臨月腹アップ 大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りと」	臨月妊婦の全身 大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りせ」	臨月腹の側面 大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りそ」	臨月腹の背面 大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りも」	臨月垂れ腹 大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りみ」	妊婦ヌード 大手札三枚一組 九〇〇円 安原さゆり 略号「やま」	妊婦しぼり 大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「やむ」	臨月妊婦三態 大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よむ」	産み月のお腹 大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よま」	動物的な腹部 大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よま」
妊娠八カ月の緊縛 大手札三枚一組 四〇〇円 児玉 昌子 略号「にあ」										
妊娠五カ月の緊縛 大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「にこ」										
妊娠前裸縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「まさ」										
妊娠初期の緊縛 大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「めろ」										
妊婦の股間縛 大手札三枚一組 四〇〇円 児玉 昌子 略号「にふ」										
妊婦の股間縛 大手札三枚一組 六〇〇円 児玉 昌子 略号「にと」										
分娩後縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「につ」										
分娩後股間縛 大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「にて」										
○女体緊縛資料の部○										
全裸緊縛姿態 大手札四枚一組 四〇〇円 遠藤百合子 略号「ゆり」										
鼻をいたぶる 大手札三枚一組 三〇〇円 遠藤百合子 略号「ゆは」										
鼻責めの陶酔 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「ない」										
苦悶の裸身 大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「なほ」										
裸身の晒し 大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「くせ」										
全裸股間縛 大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「わあ」										
強烈エビ責 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「えり」										
蒲団に悶ゆ 大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「なき」										
悦虐の果て 大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「なみ」										
椅子エビ責 大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号「おき」										
六尺鞭縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号「ろは」										
弓吊り責め 大手札二枚一組 二五〇円 梨花悠紀子 略号「つき」										
強烈責、被虐の果 大手札五枚一組 五〇〇円 梨花悠紀子 略号「りお」										
乳房いじめ 大手札二枚一組 二五〇円 大塚 啓子 略号「とお」										
激痛ノ逆エビ責め 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚 啓子 略号「きえ」										
美貌の裸身に縄目 大手札三枚一組 三〇〇円 絹川 文代 略号「きん」										
腰元吊り責め 大手札二枚一組 二五〇円 村井知可子 略号「こり」										
腰元間謀の拷問 大手札四枚一組 四〇〇円 村井知可子 略号「こく」										
強烈エビ縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「もい」										
乳房責の苦悶 大手札二枚一組 二〇〇円 関谷富佐子 略号「もろ」										
全裸ムチ打ち 大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「もた」										
強打に泣く裸身 大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「むち」										

狙われた和装の娘

[illegible]

完成 々々 堂

限定版

縛られた女体ばかりの超豪華アルバム (全部実写フォト)

グラビヤ美術印刷、両面特アート使用

頒価 一〇〇〇円 (送共)

略号「美 3」

アルバム

↓ 緊縛女体百二十態 / 本誌優秀モデル陣総登場

鮮明なるグラビヤ印刷によって、印画紙に焼付けたと同様の美しい百二十ポーズの女体緊縛フォト「美しき縛しめ」を限定版にて企画、完成いたしました。直ちにお申込み下さい。

美しき縛しめ 第三集

美人モデルの素晴らしい緊縛姿態が、春に先がけて匂う花のように咲き競って皆さまのお求めを心から、お待ちしております。両面特アート紙にギツシリと満載された緊縛美女オンパレードは本誌ならではの企画です。写真はいずれも、今まで一回も発表されたことのない、とっておきの未発表の秘蔵品です、すぐお申込み下さい。

完成しました!! 一般書店売りは一切いたしません!! 直接お申込み者に限る

「美しき縛しめ」第一集、第二集では、アート紙に対するコロタイプ印刷によって、往年の緊縛モデル達の麗姿をアルバム上に再現した。ところがここに再び十何年ぶりで、アルバム「美しき縛しめ」の第三集を企画しました。これは限定版のため、直接御申込み下さった方にのみ頒布いたします。書店売りは一切いたしません。故、必ず直接お申込み願います。

(登場モデル名)

絹川文代、長野良子、大塚啓子、梨花悠紀子、関谷富佐子、遠藤百合子、新井マリ子、五月亜紀子、東浦ひかる、竹野ひろ子、愛川悦子、加茂良子、四方清美、桜井葉子、栗本ミチ、大井小夜子、等、アルバム型式によつて最も強烈な緊縛ポーズの中、素晴らしい美しさを持つものばかりを選んで、皆様の貴重なコレクションの一端を担う価値のあるものを作成いたしました。

第1 グラビヤ 物置小屋の責め 梨花悠紀子
 責めのある部屋 大塚啓子
 縛りに興味のある乙女 花本京子
 鼻責めの四ポーズ 大塚啓子
 法悦境の細ブレイ 関谷富佐子

巻頭口絵

アイデア画 オラン・ウータンの檻 四馬孝・画
 ドミナとスレイブの部屋
 1 鼻輪と舌輪 2 コルセット責め
 3 責道具の怖え 4 三人の女スレイブ
 5 目隠しの階段昇り
 女相撲 砂の足形(遺恨相撲から)
 女体切腹 天主閣炎上 雪崎京人・提供
 四馬孝・画

第2 グラビヤ 革製覆面と手錠 大塚啓子
 光と影の双曲線 梨花悠紀子
 黒光りする那智石 大塚啓子
 麻縄乱舞足首の美 大塚啓子
 遠くつわと後手 遠藤百合子

◆奇クサロン◆ 編集部編 (33)

戦争の惨状作... (33) 〇一読者の製作集... T・H生 (34) 〇「切腹」
 〇「切腹」から三月後を見る... 森田敬三 (35) 〇「切腹」から三月後の短評...
 佐渡雅作 (36) 〇愛天古林短情... 〇「女の暗し首」... 水野弘 (37) 〇「切腹」
 〇「切腹」... 下野はじめ (38) 〇「短情往来」... 遠藤百合子 (39) 〇「切腹」
 〇「切腹」... 野中儀成 (40) 〇「モデル嬢への便り」... 関田弘志 (41) 〇
 大塚啓子さんへ... 谷良文夫 (42) 〇「ふんどし」の血闘... 北村英一 (42)

△私のイメージV流腸に関する幻想 栗瀬 長 (49)

雑誌II 映画、女優、臍 南方 佳男 (52)

「奇譚三十九夜」物語 (第三十四夜) 辻村 隆 (56)

女性切腹についての考察 腹を切る女と腰巻 森田 敬三 (76)

倒錯の夫婦生活 交替日の私 西村 憲一 (80)

SF偶談 パンティと死刑マニヤ 黒田 寿 (89)

姫小姓奇聞 悦庵絵灯籠 (5) 万田 不仁 (92)

(告白) クリスマスマニヤその後の体験 北沢 操 (94)

壮烈満州開拓団女子の自決 四人の女性の切腹見聞記 赤城宗一郎 (98)

犬の首輪 芳野 眉美 (102)

サジスチック 絹子の休日 大中 忠 (104)

長篇SM小説 宇宙のどこかで 佐治 麻造 (108)

十三人の女死刑囚 (地獄船篇) 佐出 須登 (112)

連載小説 花と蛇 (第十回) 団 鬼六 (116)

女斗美ファンタジック・シリーズ 真夜中の女子レスリング 芦浦紫舞夫 (120)

読者体験記 鼻に狂う 齊藤 金雄 (124)

廣作「妖花」 芳野 眉美 (128)

◇読者通信 (132)



一切書店売りをしませんから、今すぐ発行所へ代金一〇〇〇円をお送り下さい。御予約の方々は、お申込み順に漸次発送いたしております。只今からのお申込みは、折返えし発送できます。局留受領の方は、二月二十九日にお出向き下さるようお願いします。

天星社へ

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
荒縄にゆだねる肌	亀甲型股間しぼり	くさりに捕捉される	正面立姿全身縛り	誇る若さの縄目	吊られた可憐乙女	もたえる首の鎖	突き出した腰部	カクテルドレスの女	高々と上った後手	くびれた胸と腹部	首縄から膝縄まで	セーラー服を縛る	黒縄地獄	全裸にてもたえる	洋服タンスに用る	汗まみれの被虐	叫ぶ捕われの乙女	木洩れ陽に白き肌	十文字しぼり	黒髪いじめ	柱後手縛りにて	高小手股間縛り	後手背高しぼり	柔肌高小手	長髪を胸に秘めて	首じぼり柱ざらし	後手しぼり猿ぐつわ	首吊りのフレイ	
(絹川)	(大塚)	(山路)	(大塚)	(長野)	(五月)	(絹川)	(長野)	(絹川)	(梨花)	(大塚)	(大塚)	(梨花)	(四方)	(関谷)	(大塚)	(梨花)	(大塚)	(絹川)	(桜井)	(大塚)	(山路)	(絹川)	(水本)	(梨花)	(長野)	(山路)	(絹川)	(大塚)	



















オラン・ウータンの檻

四馬孝・画



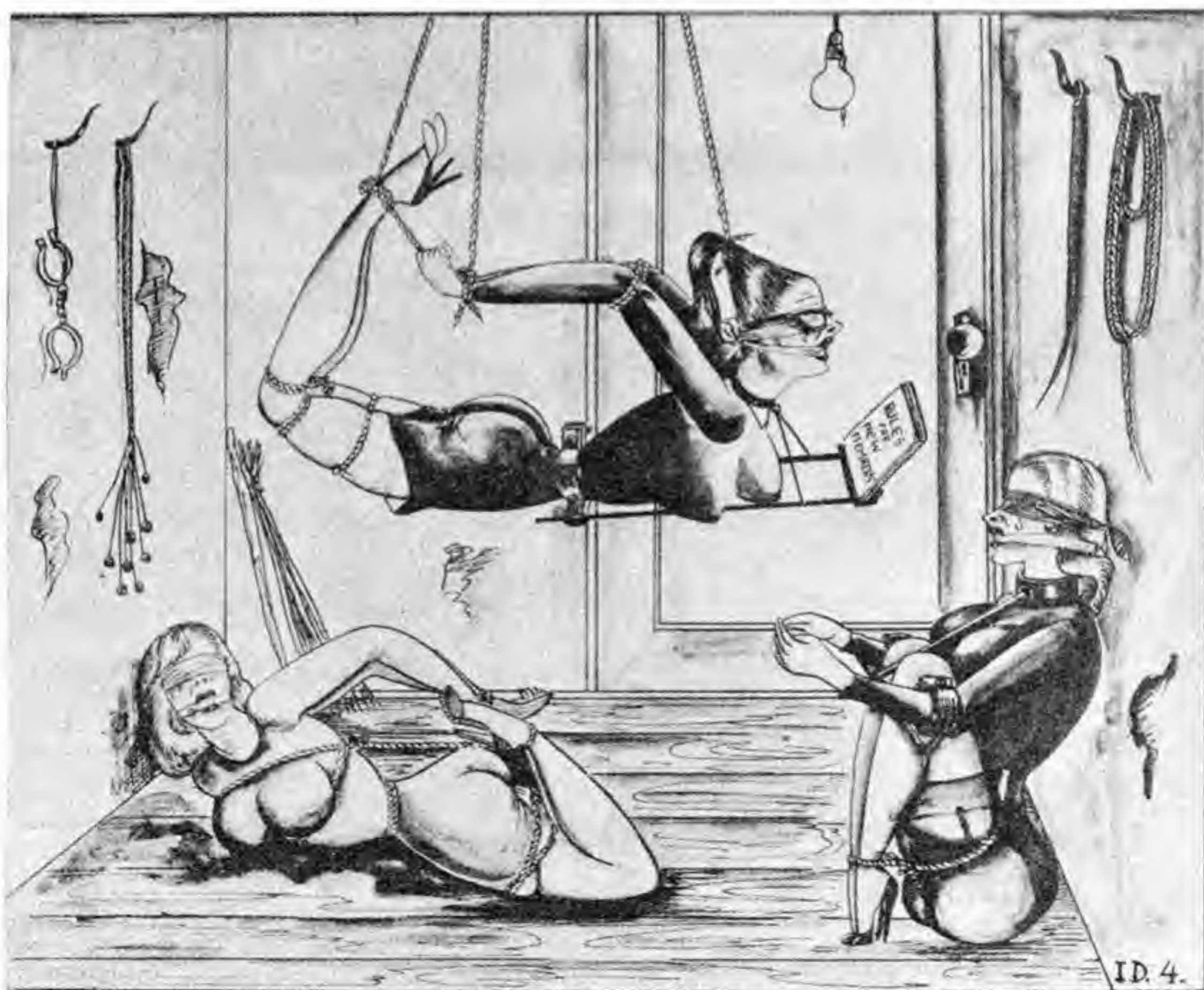
I.D. 1.

ドミナとスレイブの部屋

(1) 鼻輪と舌輪

(2) コルセット責め



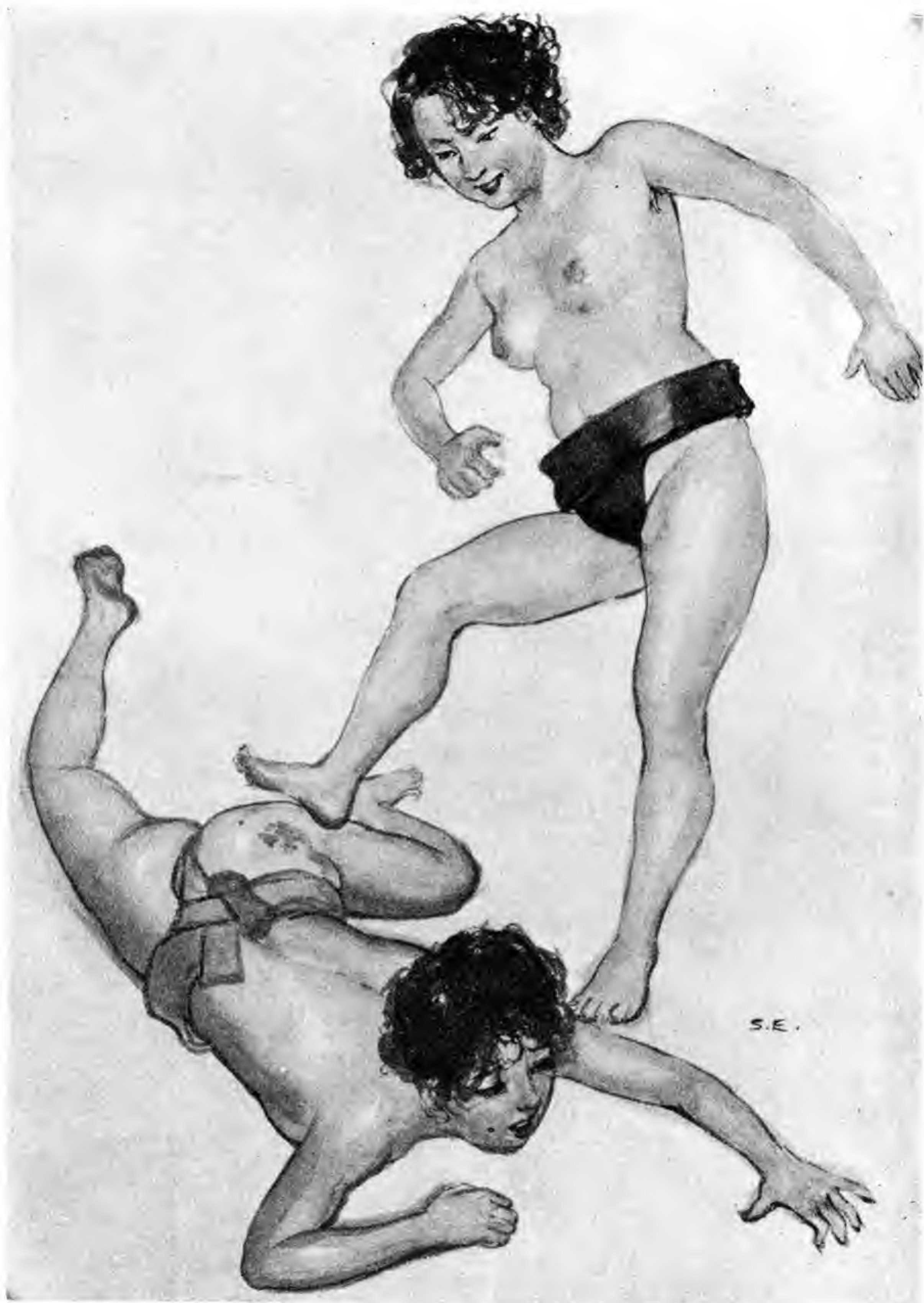




(3) 責道具のある部屋

(4) 三人の女スレイブ

(5) 目隠しの階段昇り



砂の足形

(遺恨相撲から)

雪崎京人提供



褌を締め直す

雪崎京人提供



〔女体切腹〕

天主閣炎上

四馬孝・画



















最近の映画やテレビの立ち回り（殺陣）を見てみると、やたらと太刀の触れ合う音や人を斬ったときの音などを誇張して迫真性を持たそうとしている。それに正面から顔を斬られて額から血を噴き出しているところなどをリアルに画面いっぱいに出している。

今流行の戦争物にしても、敵弾に傷ついた兵士の血まみれの姿を息を引きとるまでを刻明に描写しているのが、輸入物にも日本物にも多い。もっとも日本物は外国物の模倣であらうけれど。

そういった子供達のいうカッコイイ戦争場面の惨虐性を帯びた映画の詳細なる描写が、何ら問題にされないというこの原因については、次のように考えられる。

西部劇でピストルを乱射するというような場面は、もう子供たち

の間でも興味範囲から見放されつつあり、どうしても、もっとリアルなもの、真実味を帯びたものという狙いから、西部劇に代って戦争物へ、チャンバラ劇に代って戦争物という風に転換されたものであって、いずれはまた、この流行は近い将来に変わってゆくであろうということである。

殊に、あの悪夢のような戦争の人類にもたらす惨酷な悲劇を経験したことのない青少年にとっては戦争劇からは、人間本来の斗争本能は満足させられても、戦争の悲惨さを体得することはできない。私達身をもって第二次世界大戦

を斗いぬいてきた者にとっても、戦争劇の中からは、戦争の楽しい追憶だけが回顧されるような気がして慄然とすることがある。

最近、高校生の集団自動車強盗とか、中学生の教師刺傷事件あるいは決斗による殺傷事件など、青少年の間における殺伐な事件が続いて起っているが、やはり現在の世相が暴力至上主義であり、英雄尊重の思想である限り、その原因を家庭とか、学校とかジャーナリズムなんかに転嫁したところで急に解決しようにもない。

暴力報復法律無視の赤穂四十七士をテーマにした忠臣蔵が依然としてとてもはやされる限り、国会議事堂での乱斗はたえないし、長島や王がスポーツの英雄として子供達の憧れの的になるような風潮が漲っている間は、社会の主流派からはずれた子供達は、愚連隊に入って暴力を揮うか、労組の幹部となつて、赤旗を振るはかはないだろう。

戦争の惨虐性については、誰も

反対はしないが、簡単に一人や二人の力でこれを勃発させることは出来ない。だから、暴力を如何に懼れる人達でも、戦争映画や戦争劇、戦記物などが、どのように好戦的に描写されていようと、それによって、子供たちがやがて本物の戦争を始めるだろうとは思っていない。

暴力というものは、どんな些細なものでも、これは恥しいものであるという思想がゆきわたらない限り、暴力は暴力を生んで果てしい循環をくりかえすことになるのではないか。

嘗て日本には目的のためには手段を選ばないという思想があったが、今も尚その伝統は薄暗い湿地に隠花植物のように、根強くはびこっている。青少年たちがこの暴力思想に知らず知らずのうちにとりつかれたとしても、一向に不思議ではない。

それが単純に自己の利益のために発散されている間は他愛のないものとして世間嘲の程度で過ぎるのであるが、正義という旗じるしでカムフラージされたときは、暴力はいきいきとして神々しい光さえ放ってくるのである。

戦争の惨虐性

編集子



一読者の戯作集

T・S生

女子大生たちの華やかな新春パ

ーティが開かれています。うら若い九人の女性が集っています。いずれ劣らぬ美貌の乙女ばかりです。典雅優雅なお振り袖の訪問着の長い袂の流れるように美しい線の動きが、私たちの目を楽しませてくれます。彼女らの端麗な容姿を、より魅力的にしているのは、高胸にかけられた縛しめの縄目です。乙女たちのたおやかな両の手は、すべて後ろにまわされて、背中に結んだ帯の上で高々と括られているのです。いま、この会場内には、妖しい雰囲気が出されています。黒い瞳に愁いを含んだ彼女たちの眼差しが男の胸を騒が

せます。

A子「どうして、あたくしたちをお縛りになりますの？ あたくしたちは逃げたりなどしませんのに」

青年「あなたが、お美しいからですよ」

B子「あたくし、なんにも悪いことをしてありませんのに、どうして、こんなに厳しく縛られなければならないんですの？」

青年「胸縄のしまり具合はいかがですか？」

C子「いつまで、こうして括られていなければなりませんの？ お願いでございます。どうぞ、この縄をお解きになってくださいま

せ」

青年「いいえ、あなたは、いつでも縄目姿のままです。とてもチャーミングですよ」

D子「どうぞお許しくださいませ。あたくしは、もう、あなたさまのおっしゃるとおりになりますから」

青年「いいえ、許しはいたしません。その美しい捕われ姿を存分に楽しませてもらいますよ」

E子「あたくしの縄尻をお持ちになって、いったい、あたくしをどこへお引き立てになりますの？」

青年「あなたは、もうどうすることもできない捕われのお姫さまなのです。黙ってお歩きなさい」

G子「あたくしは、縄で括られたままで、これから、どこへつれていかれますの？ あたくしを家へ帰らせてくださいませ」

青年「すなおに歩くのです。あなたは、後ろ手姿のままです。半屋へ入れられるのです」

H子「あたくし、こんなにきつ

ちりと縛られてしまったら、ついでに、あたくしの口に猿ぐつわもはめてほしいございますわ」

青年「そうですか。では、日本手拭いをとってきましょう」

I子「あたくしは、こんなに括られてしまったのですもの。もう、なにもかも諦めております。どこへでもまいりますわ」

F子「あたくしだけが縛しめを受けていないなんて、なんだか申しわけない気がいたしますわ。でも、あたくしに縄を打ってくださいる方がいらっしやらないのだから仕方がありませんわ」

青年「さあ、それでは、八人のみなさんに、今から縄抜け競争をでもしてもらいましょうかな。どのお嬢さんがいちばん早くご自分の縛しめを解くことができるかしら。優勝者には、F子さんを縛る権利を付与いたします」

A子「まあ素敵、じゃ、あたくしが一番早く縄を解いて、F子さんを縛っちゃおうと……」

B子「いやA子さんったら、あたくしですよ、一番は」

青年「さあ、早く早く、誰が縄抜け競争の優勝者になりますでしょうかね。アハハハ」

(昭和39・1・25しるす)

「切腹幻想」から三月号を見る

森田敬三

「奇ク」三月号頂きました。悪書追放とやらの不利な条件にもめげず、刊行を続行される由、深く感謝します。

久々に畔亭数久氏の女体切腹画に接し、全く心暖まる思いです。一点の非もなく、よくもペン先一本であれほどの表現力をもつものと感に堪えます。写真ではあの息もつまるほどの迫力は出せません。

可能な限り（所有者のものを借受けてでも）昔貴誌に載った「切腹幻想」その他、同氏のものを再現して頂けませんか、まさに珠玉の名作であり、全切腹マニヤの満足するところでしょう。いや、切腹記事の方も、十年近くを経た今日、再録しても差支えはないと思います。殊に、刺青姐御の切腹は是非もう一度お願いしたいものです。あの時、同時に従軍看護婦の切腹と、切支丹娘の立腹と、もう一人正装のままで短力の柄を握って切腹覚悟の腰元と合計四人でした。何とか再現できないものでしょうか。

か。

中屋敷氏の「女の斬られる時」心臓を刺されて崩折れる姿勢は良いが、どうも不鮮明で、どこが頭やら手やらわからず残念でした。

36頁の縛られた女も、大層よく描けています。長襦袢一枚の日本髪的美女、乳房もあらわに後手に縛られて、乱れた裾に緋縮緬の腰巻、白い内股を見せ、恥かしそうに身をよじる姿は、和服ならではの妖艶さ……恐らく世界のどの民族の服装だって、これほどの艶かしさは出せません。

最近の「奇ク」には珍らしい型の縛り写真大層気に入りました。どうも従来のは、あまりにも大胆に裸身を曝し過ぎて返って色気がなく、着衣でも洋装では、嗜虐性は感じて和装ほどのエロチシズムを感じないのは、モデル嬢そのものに和装に赤い腰巻ほどの羞恥心が湧かないからです。絹川嬢の「濃艶裾乱れ縛り」「浴衣のもたえ」上品な裾の乱れと白足袋が印象的です。梨花嬢の「逆さ吊りの



準備」まさにずり落ちようとする赤い腰巻の、危機一髪のところを激しい情感をそそります。館嬢の「長襦袢足むきだし」は特に傑作です。慎ましく、固く合わせた白い双脚に、まつわる緋縮緬の腰巻は、まさに和服美の頂点です。

欲をいえば、切腹フォトも全裸に近い従来のもものと異って、今度豪華な和服で、苦痛に覚えず踏み開いた裾前に、情火のような緋の腰巻を燃やす濃艶な場面を是非お願いしたいものです。

大塚嬢は、切角の日本髪に長襦袢なのに、腰巻なしとは矛盾して

います。パンティの無かった日本髪の当時、腰巻をしない女性は一人もなかったもので、この赤い腰巻こそが、キモノの美の焦点なのです。貴女は和服に腰巻をしないため、何時も女性の生命である嬌羞が少しも見えません。洋の東西を問わず、嬌羞を失った女性は、女性としての価値がないことを、よく理解して下さい。単に凄愴惨烈の感を出すだけの切腹や縛りなら、男性でもこと足りるわけで、貴女のような美事な肢体の女性が用いられるのは、ただその嬌羞が欲しいからではないでしょうか。



△読後感▽

二、三月号の短評

佐渡耕作

【昭和三十九年二月号】

グラビヤ口絵は臀部乳房臍を隠蔽した影響が大きく、精彩を欠いている。例えば「椅子」では塚本氏の苦心が報われず「猿ぐつわ」では乳房をカットしたため効果が半減している。また「黒縄」では

絹川さんの美しい全身を撮れず、腕責め、乳房責めと限定された構図でもないため、中途半端な作品に終わっている。尚この写真は純のごとく光る美しい肌も表現されていない。反対に「磔」では剥き出しに締めつけられた乳房が女体の哀れさを表している。

他に「吊り」はせめて肩をあらわにすべきであり「雨具」は夏、湯上りの梨花さんの表情を汗の苦行として表わして頂きたい。尚、両足は揃えて縛り余分な縄は整理すべきである。「視線」は単純。

「膝小僧」は平凡なポーズだが魅力的。「鼻」は、自由を奪うため両手を縛る必要がある。「革拘束具」の企画は良いが革が薄手のため女体の要所要所を締め上げ、美しさを強調することが出来ない。

口絵は、いずれも嗜虐性が乏しい。小説「花と蛇」は新鮮な生贄美津子の登場で絢爛さが増し、今後四美女に対する苛虐の期待が大きい。

「奇クサロン」オヘソとおシリとおチチを出さず「悪書呼ばわりされた雑誌を悪書ならぬ雑誌にするための自肅行為」は無駄だと存じます。この問題は一般書店のポイコットを前提として処理されるべき。

きだと考えます。

【昭和三十九年三月号】

内容刷新（記念）特別号にふさわしく最近続いた低調ムードを突き破る気配を見せている。

読者通信が前にきているのも良く、編集部よりの回答が多くなったのも親切である。

「葉巻」は表情、腕のくびれが美しく迫力ある作品だが乳房をもう少し大きくすれば良かった。「脚線美」はマンネリで、「木馬」は思い切って全裸にすべきである。「最後の一人」の美しい表情と肢体に哀愁を感じる。

着物姿の美しい館さんを一度本格的に責めて下さい。反対に絹川さんのそれは、すっきりしない。彼女はやはり素裸に剥いた曲線美が身上である。「破れた」「美女のいたぶり」は素直に梨花さんの持つ美しさを表現している。「旅役者」「お妙」は奇クとは異質のもの。

大塚さん。「松の木」に比し、「足首」「海老」の素晴らしさ！各々表情も良く柔肌の美しさを十分描き出している。バックもすっきりしていて効果を上げている。特に「海老」上段の表情、下段の縄にくびれた腕、背面の美しさ。

変天古林短信

○TBSテレビの「女と足袋」で池内淳子がいいた足袋は、熱烈なファンが無断失敬していつてしまったそう。どこにでもフェチ・マニヤはいるもんだナ。

○可愛いおヘソの魅力でハリウッドへ招かれるという東宝の浜美枝。黒いショーツと黒いブラジャーだけで登場するという西独、フランス、オランダ、イタリヤ、日本の五カ国合作オムニバス映画、「世界詐欺師物語」は、きつとオヘソ・ファンから熱狂的な支持を受けることだろう。

○一月十六日のテレビ映画「三匹の侍」では、野盗に襲われる百姓の娘や妻たちのすざまじいロケションがあったそう。本誌の速報でも「三匹の侍」には縛り場面や責めシーンが多いということだったが、殺し場面ばかりでなく、たまにはマニヤにもサービスしてほしいものだ。

○一月二十八日の「スキー教室」なるフィルムを見てみると、スキーに出かけた十六、七才の女学生が民宿のオヤジの酌で盃に受けた日本酒をぐっとあふっているところが大写真で出た。テレビも最近



「女の晒し首」

水野 弘

「夫婦のSMプレイ」として先月号の「奇クサロン」に発表して好評を得ました「生首フォト」に引

続いて、今月号では再び「女の晒し首」と題した写真の提供を頂きました。ご高評を賜れば幸いです。

本号随一である。久々に私の好きな竹野さんの登場。然し期待はずれ。もっと近づいて美しい彼女を写して欲しい。「逆さ吊り」良い作品で小道具のムチも利いているがバックを整理すべきである。

小説「花と蛇」四人の美女を得てますます快調。長く続けて下さう風にも知れないが突如正義の味方が現れて、めでたしめでたしとしないで下さい。静子夫人は田所と森田の颯り者にされ、京子は地方の温泉街のヌード・モデルに。桂子は外国航路の船員の慰み者として貸し出される。美津子は評判の良い姉と共演させるため葉桜団のズベ公達に仕込まれるという風に苛め抜いて下さい。

「奇クサロン」46頁の絵は素晴らしい。「花と蛇」の挿絵に是非。「KK編集漫談」の覆面子の「減頁または値上げ」原則として賛成する。小説類は量より質をとり、S2M1その他1位に減らす。「奇クサロン」「読者通信」は増頁。グラビヤ、口絵は増頁し、カラーフォト、色刷口絵を掲載。

「読者へのお願ひ」

○投稿原稿に限らず読者通信においても、すべてタテ書きにして下さるよう、かねがねお願いしているのですが、未だにヨコ書きの原稿が混っていて処理に困っておりまます。殊に読者通信は便箋でもノートでも、すべてそのまま書き直さず印刷所へまわしておりますから余りくずさず、必ずタテ書きでお願いします。用紙は問いません。

○代理部の注文品は、すべて略号にてご希望品をお書き願います。品名はお書きにならなくとも結構です。略号をお書きにならないときは、対照に手間どり、どうしても発送が遅れがちになりますし、同名のものなどがあって、誤送の原因になりますから、よろしくお願い致します。

○切手をご送付になるとき、紙に

は民主的になったもんだなア、と中、老年は感心していた。

○外泊がちの夫をひとり寂しくじっと待っている貞淑な人妻が白昼暴行を受けるといふサジスチックなシーンを描く独立プロ「第七プロ」製作の「夜の魔性」に出演する広川真樹子。日大芸術科在学中の二十一才の学生だそうナ。

貼ってこられる方が非常に多いのですが、切手類は絶対に紙に貼らないように、また、一枚一枚切り離さないようにお願い致します。

一度紙に貼って剝したもののや、べったりと紙に貼りつけた切手類はお受取りいたしかねますからご諒承願います。目録請求のために十円切手一枚を同封される際も、便箋に貼りつけられるのは、一体どうした原因なのでしょう。

○郵便物の局留受取りご希望の方で、封筒の裏に仮空の住所を書かれたりする方がございますが、誤送の原因となりますから、何々郵便局留、受取人氏名、というぐあいにお書き願います。

○発送人の個人名発送をご希望の方はお申出次第、ご希望に応じます。但し第三種便の別名発送はいたしかねます。

フオト・マニア・アラカルト

緊縛フオトの蒐集

△ある友への便り▽

下野 はじめ



緊縛フオトと申しましたが、私の対象は女性に限ります。「縛られた男」は私にとってはナンセンスです。凡そ無意味なものです。どうしても女でなければ駄目なのです。女であれば娘、人妻、中年の女を問いません。ただ五十すぎ

の人は効果が半減するし、嬬さんとなつては、男の縛られたのを見るのと同じく、グロテスク以外の何物でもありません。ですから、私の集めているスクラップには「縛られた男」は一枚もありません。しかし「縛られた

女」となれば片っ端から購入してスクラップしております。

さて次に、対象の着衣についてですが、多くの人は全裸を好まれるということが想像されます。実は私も妻に行つたことがあります。が、個人の感興は全裸の時よりも薄い物一枚か、あるいは十二単衣とまでゆかないにしても、第一装の着物をつけて縛つた時の方により強い衝動を覚えました。もっとも、妻は必ずしも肉体的に魅力のある女ではありませんが、子供を生まぬ女なので乳房の小さかつたことも大きな影響があつたと思います。

着衣の区別ですが、私の場合は和服に限ります。しかもそれが派手な大柄の模様のあるものほどういのです。普段着よりも外出着、そしてそれよりも盛装の時用いる着物——、勿論帯にしろ扱帯にしろ第一装用をつけてのことです。

——により強く感じます。

これも妻に洋服の場合と比較して行つてみました。やはり和服の方が断然魅力的でした。私の日本趣味の性格がしからしめるのかも知れません。

「もっともシミーズ一枚とか、ズロース一枚とかつけて縛るなら全

裸の方が遙かにいいです。日本の女はシミーズにしろ、ズロースにしろ自分の物にしていないでしよう。腰巻礼讃はすたりそうにもありませんね。

伊藤晴雨氏は「貴の話」という本の中で、対象の女の髪について繊細な心づかいをしています。同氏の場合、勿論日本髪一本槍ですが、着衣もすべて和服でした。

私は髪については寧ろ洋髪の方に重きを置いています。当節の娘には日本髪に似合う面立ちは沢山ありません。瓜実顔の人が少なくなり丸顔か線の太い彫りの深い顔の人が多くなつたからかもしれせん。

縛りに用いる小道具については私もいろいろと使つてみましたが鎖だけはありません。目の大小にもよるでしょうが、鎖は縛りにくありません。私はむしろ針金の方がいいのではないかと思います。もっとも、うっかりすると縛られる方よりも縛る方が掌などを切る場合があります。私も妻に試みて強く締めつけようとした時、掌がすべて相当強く切つたことがあります。中々痛いですが、扱帯は手首を縛るには十分ですが、それでは余り苦痛がなくて満

足できませんし、男の帯は胸にかけて縛れますが、色が色ですから艶消しです。やはり相当の長さのロープか荷造縄などが恰好の小道具でしょうね。

伊藤晴雨なんか好んで荒縄を用いられたようですが、漁綱のようにとつともなく太いものは感心できません。余り細いのも見た目に緊縛感がないかもしれませんが、まるで象か虎でも縛るような太いのは興がそがれます。

妻にきいたのですが、針金が一番痛く、次がシュロ縄だったといっていました。ロープはすべすべしているのに緊縛されることによる苦痛は勿論あっても、絶えず火箸で突かれているような痛みは先ずありません。これがシュロ縄とくると動けば無論のこと、じっとしていても、ささくれだったシュロの尖端が絶えずチクチクと肌を刺すのですから、こたえると思います。

次に猿ぐつわですが、私はタオルは駄目なのです。やはり日本手拭でなければいけません。タオルよりは寧ろ布地の風呂敷の方がまだましです。日本手拭も温泉マークの入ったのや、何処かの会社や商店の贈答用でしかめつらしい文



す。これはやはり鼻もろとも蔽う方を私はとります。

妻にも実際にやってみましたが、やはり鼻から蔽った方がより多く満足を得ました。呼吸困難のため身体全体で息をしている感じで苦痛感も倍加され、非常に煽情的でした。

打つ道具としては鞭、バンド等が用いられるのでしようが残念ながら私は経験がありません。音がするのと肌に傷がつかないかという心配のため、したい気持は充分にありながら遂に実行出来ませんでした。その代り、音のせめ方法では、二、三試みました。

昔、岡ッ引がやった方法ですね。木刀を二の腕から背中にかけて突っ込んで持ち上げたり縄を木刀で捻るのがその方法です。この方法では苦痛は相当激しいのに、痕は残りませんでした。

『縛り方』については、やはり後手高手小手で姿体は普通のポーズがいいようです。少し足を曲げて縛られた手首を見せて横坐りになっているといったあたりふれたものが気に入りました。仰向きに寝かせて足をアグラをかけたように縛った姿体は、どうもピンときませんでした。両手首と両脚を後ろで縛った姿態は、いきのよい魚のはね上ったのを見ているようで爽快なエロチシズムを味わいました。

両手を上にのばして縛った姿体（佇立姿体）は妻にも試みましたが、これはやはり鞭などで打つ場合には絶好のポーズかも知れませんが、縛られた美しさは半減しました。

「お便り」

この頃、編集者に対するいろいろのお便りが沢山参っています。こんなに沢山のお便りを貰うのは本当に編集者冥利につきると思います。出来るだけ誌上又は直接お返事申し上げておりますが、どうか、何に限らず、どしどしお便りをお寄せ下さるよう、心からお待ちしております。読者と編集者の温かい心の通う雑誌にしたいと願っております。

(M生)

短信往来

△モデルへの通信△

遠藤百合子様へ

益原 駿夫

遠藤百合子様、お便り差上げる失礼を何卒おゆるし下さい。
私は遠藤様が始めて奇クのグラビヤに麗姿を現わされたのを拝見し、全くすばらしいの一語につきましました。そしてその後のグラビヤ写真にまた、記事により益々すばらしい感を深くしております。
私は貴女の住んでおられる同じ住吉区に住んでおりますこととて近親感を深くしております。十一月号の読者通信欄及び十二月号の「奇クサロン」に載せて頂きましたが、書きましたごとく妻を相手

に緊縛ポーズを研究し写真を撮しては緊縛作品を作っております。また、色々責めのアイデアを考えてはお仕置プレイも行い責めの写真も撮しては保存致しております。現在までに相当たまっております。現像焼付は皆自家製で行っております。

甚だ勝手なお願いですが、遠藤様に拙い写真ではございますが、三十枚程お譲り致し度く存じております。妻も同意し是非貴女に見て頂きたいといっております。

写真を少し述べますと色々な緊縛ポーズ、鼻輪装着、乳首のクリップ責め、戸板責め(板に縛りつけ逆さに立て掛ける)乳房の針責め、乳首の錘り責め、燭台(乳首にローソクを立てる)、鞭責め、鼻輪吊り、首枷そろばん責め、温湯浣腸による腹部膨満、全裸股間縛り等です。何卒ご保存下さいまして批判を賜わりたく存じます。

私は一流大会社の平凡なサラリーマンでございます。真面目な態度でお便りを差上げます。

緊縛作品も一度貴女様のすばらしい若さに張り切ったお体によりすばらしい作品を撮りたく、またお仕置等もして差し上げたく存じておりますがいかがでございますか

ようか。この事も合せてお願い致します。写真を是非お譲り致したく何卒よろしくお受取りの程お願い申し上げます。

三月四日午後四時より五時まで(六二二)―四八二三にお電話下さいますようお願いしております。またもしご都合が悪ければ次号にてご通信をお願い致します。
大阪市住吉区(益原駿夫)



△フェチ通信△

ネルの魅力

「里乃様そしてネルのお腰マニヤへ」

野 中 信 敏

読者の皆様、里乃様、一九六三年十一月号の私の告白、お読み下

さいましたか。

私はネルのお腰や肌襦袢等女性の和装肌着に異常なまでに魅せられるのです。そしてそれらの柔い布類を常時着用しておられる女性が無類の癖でやましくありません。

私は和服のよく着用せられた大正や昭和の初め頃がなつかしく思われます。その当時では今よりもっと多くのお腰が物干に干されていたことでしょう。また、十八、九才の娘さんでも寒くなると桃色や赤色のネルのお腰を着けていたようです。私はその頃にいたなら思うさま女の人の着たままのお腰でも手に入れることが出来ただろうと思ひ、大変なつかしく思ひます。

今でも大阪の難波や天王寺では料亭等の物干場に、ネルの桃色のお腰が乾かされているのを見かけます。きっと仲居さんの物なのでしょう。私は一度、私の気持を良く分ってくれる和服の好きな女性と交際を試みてみたいと思うのですがそのような人はおられないでしょうか。

先日のことですが、地下鉄の天王寺駅の階段の所で和服の二十八才の女の人が風に裾をまくられてメリンスの裾よけの内側に桃色

の柔らかいようなネルのお腰が見えたので、私は思わず、その人の後をついていくと、ある料理屋へ入ってゆきました。

私はその人に私の気持ちを告白しまたその人が快く自分のまといっているネルのお腰をゆずってくれたらなどと想像するのです。

私は真に女性的な人は、ネルのような柔い布地を好まれると思います。それは私が今まで見てきた人で、一見してやさしそうな人で和服を着た女の方では、大抵ネルのお腰をしてもらったからです。

また、私が去年ネル地を買った時も、ネルを買われる中年の女性は大抵が女らしい人でした。

私は今ではいつも夜はネルのお腰をしています。私は奇巧の女性読者の中で、私のような気持ちを分けていただける人がいたら、是非誌上にてお便りをしていただきたいと思っています。

本誌グラビヤのモデルに是非ネルのお腰をまわしたのをのせてください。私はもう今ではネルなしでは一日もすごすことが出来なほど、ネルのお腰がすきなのです。この一人のマニヤののぞみをかなえてください。



「モデル嬢への便り」

愛川、大塚、関谷、梨花、
絹川、東浦、遠藤、長野の諸
嬢並にその他奇巧モデルの皆
々様方へ

岡山市

門田弘志

前略

初めて皆様にお便り申し上げます。私は十年程前から、奇巧を愛読しておりますが、毎月のグラビヤ写真を見て本当に皆様様に心から苦勞様ですと申し上げます。唯生活のためだけではない事が長年見せて頂いている内に解る様になりました。貴女方の尊い奉仕

によって、私達は人生にうるおいを持ち、心を慰められ、そうしてまた将来の仕事に力強く立ち向っていきます。

何とか皆様にお会いしてお礼の一言も申し上げたいと思ひながらも、遠隔の地に加えて、その暇もなく、お会いも出来ないことは残念です。

当岡山地方も田舎の中小都市ですが国立公園の瀬戸内海もあり、果物、魚類は特に美味と称せられておりますので、もし皆様のご来岡の機会とか、岡山通過の際ご連絡頂ければ、出来得る限りのご案内をして差し上げ日頃のお礼の印にでもと思っております。

そんな機会が皆様方の中であります時は、心からお待ち申しております。

都会の目ぐるましいところに何時も生活しておられる皆様、一日いや半日でも田舎の都市の空気を吸われることもまた格別の味わいがあるかと存じます。

大阪、岡山も今は電化され、時間も非常に短縮され二時間半位でいけ、道路も整備されておるのでドライブもまた一興かと存じます。

余り岡山自慢を書くに田舎者の

くせにと笑われますので、この辺りで失礼します。

モデルの皆様、何卒充分ご健康に留意されて益々活躍されん事を祈ります。

大塚啓子さんまいる

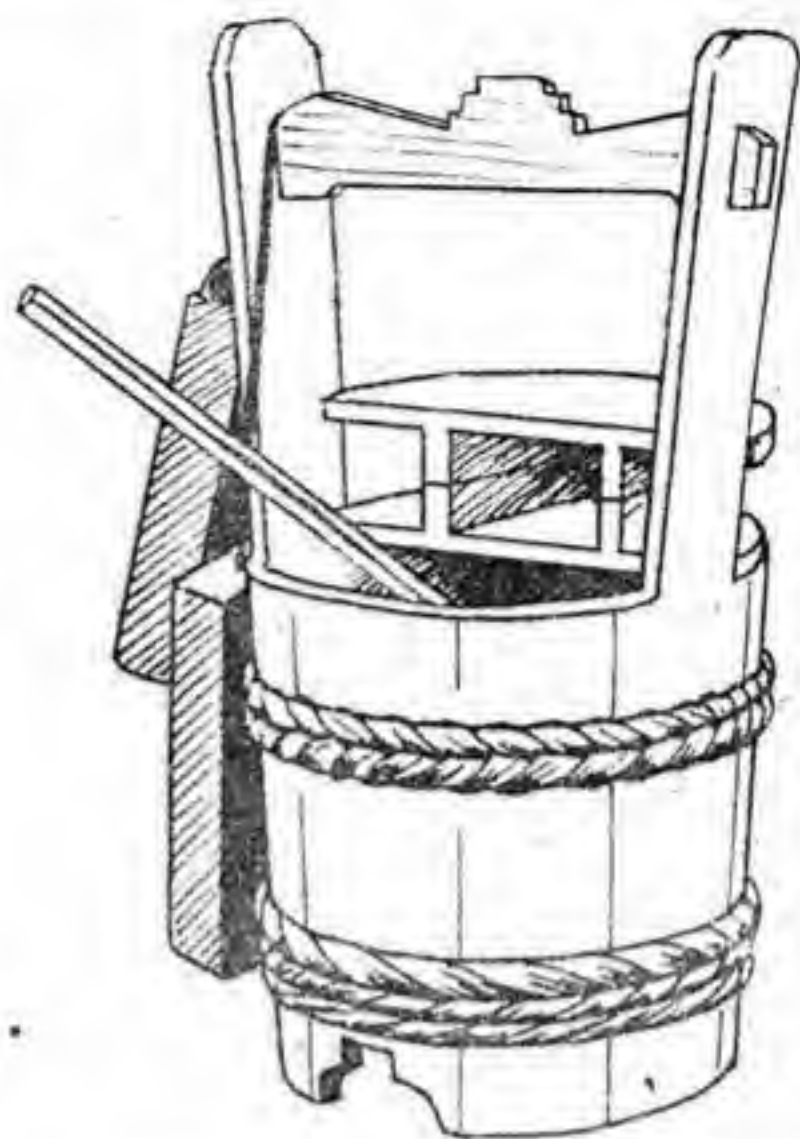
奈良文夫より

K誌にて貴女の麗姿を拝見してより、貴女は僕の心の恋人となりました。寝てもさめても、貴女のあの素晴らしい緊縛ポーズが僕の頭を離れないのです。

K誌の口絵に貴女の姿が見えないときは、僕は淋しくてならないのです。啓子さん、どうか僕のために、どうか毎号口絵に姿をあらわして下さい。僕は貴女の載っている雑誌を胸に抱いて寝ます。

大塚啓子さん、貴女は僕のマスコットです。どうか、いついつまでもお元気で、その若々しい緊縛姿態を見せて下さい。そして僕の眼を楽しませて下さい。

貴女の写真が僕の目にふれるかぎり、僕はいついつまでも貴女と一緒にいるのです。こんなファンもどうか、お忘れなく。



〈私のイメージ〉

ふんどし女の血斗図絵

北村 英一

その一

紫縮緬の褌を脂ののりきったひしまった身体にきりりとしめた年増の女（京マチ子扮）は、今や討ち取った相手の、緋縮緬の褌の同じ年頃の女（山本富士子扮）の生首を髪の毛を引っ掛けて目の前に下げて勝利を謳歌している。

先刻までの躍動も空しく、無惨な屍となり果て、首のない胴だけの屍は、見るも無惨な変わりようであつた。ふくよかな腹は、ふんどしの上あたりで真一文字に裂かれ血汐にまみれたはらわたをみせ、乳房の下も一抉りにされきりりとしめていた赤褌もゆるみ、前褌を染めていた。

勝った女は片足で屍の胸乳の上あたりをふみつけ、右手には血に染った生首を下げている。きりりとしめられた紫褌は女の臀部がいやが上にもなまめかしいものにし、返り血は玉の肌牡丹の花を散らせている。自分も格闘の際にうけた右腕の浅傷も、かえって、この凄艶さを高めている。

くずれかけた御守殿髷のみどりなす黒髪が肩のあたりにかかり、額の白鉢巻にも返り血がとび散っている。討たれた女の首は、無念そうに閉じた眼、整った鼻筋、あざやかな朱唇からは糸のような血をひき、美人であつただけに、余



計に凄艶な生首の相であつた。

その二

広々とした大奥の、美々しい庭園も今は血に狂い立つ裸女達の修羅場と化していた。

澄んでいた泉水の水の中にも、早や赤褌と紫褌をしめた女が、黒髪を水藻のように漂わせながら四辺の水を唐紅に染めてこと切れて

大の字なりのあられもない姿で浮かんでいる。

その泉水の岸辺では今しも赤褌もあざやかな乙女（鰐淵晴子扮）がやはり赤ふんどしの稍年上の女（池内淳子扮）の槍で乳房を突かれてのけぞりに泉水の中へ落ちんとしている。その表情は恍惚として声にならぬ悲鳴を咽喉につまら

せ、初々しく結った島田の髪も空しくくずれんとしている。
槍の女は、すでに二、三人の裸女を討ってきたのか、御守殿風の髪も少しくずれかけ、赤禪をしめたひきしまった体にも、二、三返り血がついている。その額には、してやったりと惨忍な笑をうかべている。

その三

美しかった大奥の数奇をこらした庭には、すでに数多のふんどし一つの裸女が、無惨な屍となり果てて累々と斃れ伏している。
一方では、年増盛りの脂ののりきった身体に、朱色の禪をしめた女（若尾文子扮）が体格のよい大

柄の黒禪の女（水谷良重扮）と、これも大柄の整った身体に赤禪をしめた女（中田康子扮）の二人の手に掛けて果てんとしている。
すでに太腿や脇腹には深傷を受け、最期の形相も凄まじく、この世のものと思えぬ悲鳴が口元から聞えそうである。

その四

前に朱色の禪の年増（若尾扮）を仕止めた二人の女（水谷、中田扮）は前後して江戸紫縮緬の禪をきりりとはりのある身体にしめた島田雷の女（有馬稲子扮）に討って掛ったが、小太刀にすぐれた彼女のため黒禪の女（水谷扮）は脇腹を鋭く抉ぐられ、倒れるところ

を馬乗りになられて咽喉笛をかき切られてこと切れ、首をかき落されてしまった。

赤禪の女（中田扮）は切り合う中に、禪を切られて思わず前をおさえるところを肩口を小太刀の一閃で割られて、前のめりに崩折れたところを首筋に止めの刃が加えられて果てた。

しかし、この紫禪の女（有馬稲子扮）も今度は同じ年頃の赤禪をしめた御守殿風の女（岡田茉莉子扮）とわたり合ったが、相手の難刀で小太刀をはね上げられ、鐙で当て身を喰わされて悶絶するところをむんずと馬乗りになられ、ヒ首で先ず脇腹を抉ぐられ、乳房を

たをみせ、首をかき落された。

二の腕と太股と頸

河又三蔵

肩先に接する位思いきり高々と吊り上げ縛り上げたものをまうしろから写したものに憧れを抱いています。縄のかけ方は手首を背中て十文字に交叉して水平以上に高々と首繩に連繫することが肝要です。太腿については、なるべく柔かくふとった持主を選んで、縛る位置は、腿の付根から五センチ乃至十五センチ位の間をきびしく縛ります。

内股の柔かい肌に縄目がぐっと喰い込んでいるのが、はっきりとわかるようなアップの写真が希望です。足は必ず曲げさせた方がよく、なお曲げた足は外の方へ開くようにして曲げると内股の肉がふくらんで縄目が一層きびしく肌に喰い込んだように見えます。

頸が丸くて豊かな女性で特に頸の下に肌がつくくらと柔かで肉づきのよいところを指先でぐっと突いたり、つまんだり、ひっぱったり、しやくりあげたりして、その肌の変化をキャッチしたものは、私の憧れのフォトです。



三

NS 十 戒



① いやというは好きに似たり

女の子たちが、「いや、いや」という言葉を真に受けて遠慮しては、蛇蜂とらずになることが多い。時には強引と押しの手が成功のカギとなること多し。

殊にMの女性に、この妙手を用いて思わぬ結果にタナボタ式の幸福を得ることあり。すべて女の子は自分がマニヤであればあるだけそのことに恥しがる傾向あり。

もし何とはなしに、そのことを話して彼女顔赤らむことあらば、大いに脈ありと心得うべし。

② せいては事を仕損じる。

脈ありと知れば、猪突猛進し、脈なしと存すれば、速かにホコをおさめるは、これ兵法の極意なれど、世の中に、破れたる網にて大魚を逸したる例少なからず。先ずは周到なる準備をなしたる上、行動を起すは肝要なり。

攻撃は正面からなして効果少く

側面または背面よりなして、予想外の戦果に驚くことあり。そのために、時には無駄石を捨てるの心がけも必要なり。

③ 愛情は解決のカギ

軍資金の多きはこれに越したることなけれども、MにしてもSにしても、相手処を選ばすというは少し。やはりパートナーには、少くとも好感の持てる者なること第一の要件なれば、人間的に魅力を具えることは、相手を得る近道と心得うべし。

MSの発散が、ある特定の人へのみ可能という状態に飼育するに至れば、これマニヤ道の最高の状態である。女の子の習性には、かかる情態の持主として多きものなる故、意外な掘り出し物に歓喜することあり。

④ 苦あれば楽あり

最も困難なるポジションばかりに狙いをつけて、思わぬ成功をお

さめることあり。殊にMの男性諸君は、苦痛の中に呻吟して、若き女性の同情を得ること妙なり。

万人の同情を求めなければ、割合簡単にシンパの発見に成功することあり。この際、第一級的美貌ナンバーワンの女性と醜女に大穴あり、十人並みは極力避けるを得策と知るべし。

⑤ 良妻はM女性に多し

昼は淑女のごとく、夜は娼婦のごとき良妻型がM女性に多きことは、世の識者の多くが証明済の事実である。もしM女性を生涯の伴侶として求めることが出来れば、一生の豊作とならん。逆もまた真なればたとえ、お古なりとも良妻のハンパものあらば、拾っておくに越したることなし。

⑥ 妖婦は夜ハッスルする

昼は淑女のごとく、夜は妖婦のごとく活躍する女性は、まことに得がたきS傾向と知るべし。もしかかる女性を配偶者にしたならば夜は尻に敷かれ、昼は鼻毛を抜かれ、失業すれば喰わしてくる有難き女神となる素質あり。

子供生れれば賢母となるも、夫に対しては悪妻となる可能性多分にあり、要注意女性。

⑦ 及ばざるは過ぎたるに勝る

腹八分目は健康上の鉄則。MSの世界においても、常に山の八合目にて停止し、頂上までのぞかざるべし。及ばざるは、無限の空想の花園に遊ぶ法悦が待っている。過ぎたれば、さくばくたる砂漠の無生物地帯に彷徨する味気なさに似たる思いを味う。いかなる場合も、及ばざるは過ぎたるに勝ること経験に照らして明らかなり。

⑧ 美と醜は紙一重

天才と狂人とは紙一重とよくいわれる言葉であるが、我々凡人には、天才も狂人も縁がない。凡人には、やはり美を求める心が熾烈である反面、醜に対しては、これを避けたい気持が強い。しかし、元来、本質的に美と醜とは対立しているものではなく、渾然として一体になっているものであることがMSプレイによって、体得されること多い。

⑨ 趣味は異なもの味なもの

MといいSといい、すべてこれを趣味性の問題である。ゴルフが上品でパチンコが下品であると思ふ人に、その理由を訊いてみても大した返事は得られない。

本来、趣味は各人の嗜好に発するものなる故、他人がとやかく容喙するは無意味にして一利なし。

巻煙草がいかに身体に害があるうとも、これを廃止する者少きがごとし。いわんや、他人にも自身も迷惑も害もなき趣味においておや。

④複雑は文明の母

単純から複雑へ、複雑から更に高度の複雑へと移行するは、文明

発達への過程である。生物の世界においても、単純な単細胞の分裂による生殖から、現在の人類における高度の文明へと発達した。MとSのテクニクも、より複雑へと進化する単純化の排除であり、より文化的文明的といえる。

「口絵」 女相撲

「砂の足形」

このアイデアは、まだ完全に絵にならないのであるが、一種の遺恨相撲で、美女力士を投げ倒した一方の女が、日頃のうっぶんをはらすのは、この時とばかり真白い豊満な臀部を足蹴にして、砂の足形をつけたところ。

諸岡堅雄氏の「女武勇列伝」は女子の柔道家が男性をやっつける話だが、女豪が禪一つの裸で男性と相撲をとって、こっぴどく投げ

△解説▽ 雪崎京人

倒す場合をE君に頼んであるのだが、まだ完成しない。

「禪を締め直す」

昭和37年10月号、雄松比良彦氏の高校女子相撲のルールブック抜萃からのシリーズ。

「試合中、禪がゆるんだ時は、審判員は試合を中止させて、締め直すこと」、四つに組んだままで、審判員が締め直してやっている場面。やがて試合再開、激しい攻防戦が展開される。

奇クサロン向原稿募集

○皆さまの共通の広場としてのこのサロンを、より楽しく、より皆さまの身近かなものにして頂くため、文章、絵、写真など

何んでも結構ですから、どしどしお寄せ下さい。採用篇には、編集部保有の写真あるいは、雑誌を贈呈いたします。ご投稿をお待ちします。

△告白▽ M への捕虜 M七〇生

私は昭和二十三年頃の貴誌創刊当時から読者ですが、その頃は多数の同類誌が店頭を飾っていました。しかし暫くすると泡沫のように消え去り、結局はその頃から続いているのは、K誌だけという有様です。

少し経ってK誌の挿画に色刷りが現れましたが、数年してなくなり現在のモノクロになりました。したことは残念でした。

飛躍した反面に、あの頃はモデルさんも今程ではなく、只々目新しい縛りが目立つ程でした。当時私は縛りに興味を抱きました。短期間でしたが、購読を中止したことがあります。

昭和三十五年頃と思いますが読者の投稿に、鼻の障子に穴をあける方法と、責めが載りました。

それから鼻責めに憧れるようになりまして。私の実施方法を述べてみましょう。

最初は木綿針で障子に穴を開けマツチ軸を差し込み、次いで製本綴り針、製本穴明け針とだんだんと太くし、それぞれの同径器具を差し込み、穴の縮小を防ぎました。勿論化膿防止にペニシリンを使用しました。

材料はビニール被覆の電線を穴に差し込んだりして、次いで鍍金針を根本まで少し焼いて差し穴を拡大し、ボールペン軸が通る様になりました。

4ミリぐらいの時に、会社で「君の鼻に光が見える」といわれて内心ドキリとしまして差し込んだ器具に何を詰めて光が通らぬ様にするかと考え、マツチの軸を折って詰め込みましたが目立ち、結局ゴムの栓を細工して成功しました。

今では万年筆の軸が通るくらいになり、この穴へ縄を通して手綱とすることが出来ます。Mとしての資格が、これで一つ完成したと喜んでおります。

△M男の手記▽

女性崇拜十二箇条

服部耕三

一 私の家の隣りに飲食店があり三人の娘があった。長女は十六才、次女は十四才、三女は十二才で私は三女と同じ年の六年生になった春のことであった。

私は彼女達三人に誘われるまま彼女の家の二階へ遊びに行つて、生れて初めて異性の脚に関心を持つ自分を知った。今から思えば、これが私の春の目覚めであった。

二 女の白い足によって目覚めた私の春は、高等小学校を卒業して住



込みの鑄物工場の工員になつてから、年上の同僚に誘われて赤線地帯へ出入りするようになって、一層はつきりした色彩を濃厚を شدした。時に十六才。

酒の全然飲めない私は、バーや飲み屋へ行くすべもなく、月二回の休日は専ら、女の足を求めて赤線地帯を彷徨した。

三 二十才、身内に宿るSMに対する情欲が炎のように燃えるのを静めるすべを知らなかった。自分より年上の女王様が現れた

ら何物も打ちすて、その人の前にひれ伏したい気持ちをもちながら、その望みは遠い高嶺の花でしかなかった。

四 漲る青春——。しかし、私にとつ

ては、それは暗い谷間の湿地でしかなかった。当然のことながら私は若い女性の裸体美に憧れたが、女性の身体の中で特に足は私にとって絶対的な魅力をもつ個所であった。

五 一度でも良いから、私は美しい女性の足を気のすむまで思いきり舐めてみたいと想う願望にとりつかれてしまった。

工場主の美しい奥さんは、私の憧懐する理想の女性で、時折見かける外出姿に、私はその前にひれ伏して、全身を投げだしたい気持ちになるが、所詮はかない空想にすぎなかった。

六 赤線地帯の灯は消えて、私の月二回の僅かな楽しみもついでにしまった。

二十六才。私は故郷である鳥取から嫁を迎えた。従順で健康で、骨太な田舎娘であった。

当然のことながら、新婚当初は私の歪んだ性情も正常に戻ったかに見えた。しかし、私にとって水が目の前にありながら、渴えに悶える苦しみは、意外に早くきた。

七 昼は仕事熱心で酒も煙草もたし

なまなまい真面目一方の私も、一度家へ帰って夜を迎えようと、独身時代以上に苦痛が激しくなった。独身の頃は、まだ自分ひとりの城廓にとじ籠る余裕があったが、狭い家に妻と二人きりで住んでみると、自分の匿かれた性情を秘すことだけでも、私の神経は痛ましくもすりへった。

八 三十才。私は毎日残業を続け、少しでも帰宅を遅らすように心掛けた。女の子が生れた。妻に似て丈夫で元気に育った。

十五年のキャリアがかわれて職長に昇進し、いくばくかの貯えも出来た。私の夢はまだ果し得ないが、あと十年辛抱して、ささやかながら自分の家を持ったら、そのときは、独立して事業をはじめたいと思つてゐる。

私のM男としての生活は、それから始まると考えてゐる。

私は今、三十二才である。私の女性崇拜十二箇条は、まだまだ緒についたところといつてよい。これから暇を見ては、寢床の中で考えた△M男の空想▽を手記にしよう。

それが空想ではなく体験となるまで——。

オムツマニアの女性から

松本 淑子

初めておたよりいたします。私は東北の郷里より東京へ出て五年になります。二年前より貴誌を知り、毎月発行日を待ちかねてまいりました。今年の三月で今までのS服装学院を出ますので郷里へ帰ります。

東京のアパート暮らしは本当にたのしい思い出となる事でしよう。これからは郷里で家族と一緒に生活いたしますので今身の整理をしておりますが貴重な私のコレクションを捨てるにしのびないので一部お送りします。内容は貴誌を始めとするいろいろな雑誌のオムツ小説のスクラップと私の外出用オムツカバーです。女の私がこのコレクションをいかに苦心して集めたか、また大事にしていたか、どうぞお察し下さいませ。

たった一人のアパート生活。たのしいがまた淋しい夜を救ってくれたのはオムツでした。「何故私はこんなものが好きなのだろうか」と、何度考えたかわかりません。とにかく昔からオムツを見ると胸がドキドキしました。多分妹

の影響ではないかと思うのですが妹は小学校の二、三年頃までオムツのくせがあり、毎晩母にオムツを当てられていました。

私はそれがうらやましくて仕方ありませんでした。ですから自由を得た私が最初にしたこと、当然のことながらオムツの着用でした。ユカタをほどき股に当てて私は夢中になりました。始めのうちはそれだけで充分満足していましたが、そのうちにそのなかに放尿したい欲望を押さえきれず、とうとう実行してしまつたのです。それからオムツカバーの製作や購入にあらゆる努力をほらい、今では八つも持っております。

オムツはかわかすのに困り、貸オムツ屋さんから古いのを分けてもらつて使ひすてております。五十枚入り三百円でおしげなく使えますので大助かりです。私は小柄なので、これでも充分間に合います。股に三枚、腰に二枚当て、カバーを着けた上からネルのズロースを着用しております。

朝の目覚めの時にも、めつたに

おふとんをよごすことはございません。このごろは外出する時もオムツのまま出かけます。お友達とコーヒーをのみながらとか、授業中とか、好きな時をたのしんでおります。

貴誌にはずいぶん浣腸マニアの方がいらつしやいますが、私も一度やってみました。なるほどすばらしいものでしたが、後の始末には困つてしまいました。やっぱり浣腸は頭の中で想像している方がよいようです。私は専らオムツ専門ですが、最近には本当にオムツをするようになってしまつてこまりました。今年になって三回ですが「オムツを当てた花嫁さん」にならないように注意します。

東京に住んで五年間の中には、オムツしておればよかったのに、と思つたことが何度かあります。いずれも若い女の方ですが、人前で粗相されたのです。汽車の中でまたボクシングを見ながら、また授業中に。殊に小、中学生で授業中に粗相する例はずい分ありますが、(私の通うS女学院の二十一才の方は例外としても)不安のある方はオムツの着用も真剣に考えていいのではないでしようか。世の中には、こんな便利ですて



きなものがあるのですから、もっとオムツを使いましょう。

(世田谷区赤堤町)

みゆき荘
松本 淑子



本誌一月号に対する勧告

本誌一月号に対する勧告が二月四日付(到着二月八日)にて出されましたので、左記へ読者の方々へご参考のため全文を掲げておきます。(尚、一月号は昨年十一月二十五日に発売になりましたのでもう書店には残っていないと思いますが、指定府県においては未成年者に対する販売は一切しないようにお願いします)

本誌は一月号の勧告を受ける前から、第一グラビヤ、巻頭口絵、第二グラビヤに対して自粛の線を打ち樹て二月号、三月号と刷新を加えてまいりましたが、それについて読者の反響も一、二別項に掲載しました通りです。それについて批評は差し控えておきますが、敢てここに勧告全文を掲げて自戒に資したいと思ひます。

尚、二、三月号編集に際して、グラビヤ並に口絵を全廃するという案も検討しましたことを申し述べておきます。次号五月号の口絵からは、従来のストックを総べて破棄し、新しく描き直したものにやります。グラビヤ写真も考慮中です。

昭和39年2月4日

天星社編集兼発行人

箕田京二殿

神奈川県児童福祉審議会

委員長 栗原直義

青少年に有害な図書の取扱いについて(勧告)

このことについて、神奈川県知事から諮問があった貴社発行の奇譚クラブ一月号については、審議会は慎重に審議したところですがグラビヤ写真、絵、記事、その他全般にわたって青少年への影響が好ましくないと認め、前月号に引きつづいて青少年保護育成条例第五条第一項の規定に基づき指定するよう答申しました。

特に第一グラビヤ、第二グラビヤ、巻頭絵などは被虐、加虐を強烈に描写し、問題があります。ついては、当審議会の意向を十分ご賢察の上、今後の編集につ

萩の咲く庭にて

畔亭数久画



て貴殿の一層のご配慮をお願いします。

以上、児童福祉法第八条第七項の規定により勧告します。

△以上、明らかに誤植と認められる二字を訂正した以外原文通り▽

本誌創刊号以来の定価の変転を願ってみても面白い。創刊号の定価が十八円。それからすぐ二十円になり、二十円で暫く続いて二十五円、三十円と値上りし、それから四十円、五十円と十円幅で上ってゆく。六十円、七十円、八十円から九十円になったところでB

5版からA5版に変更。

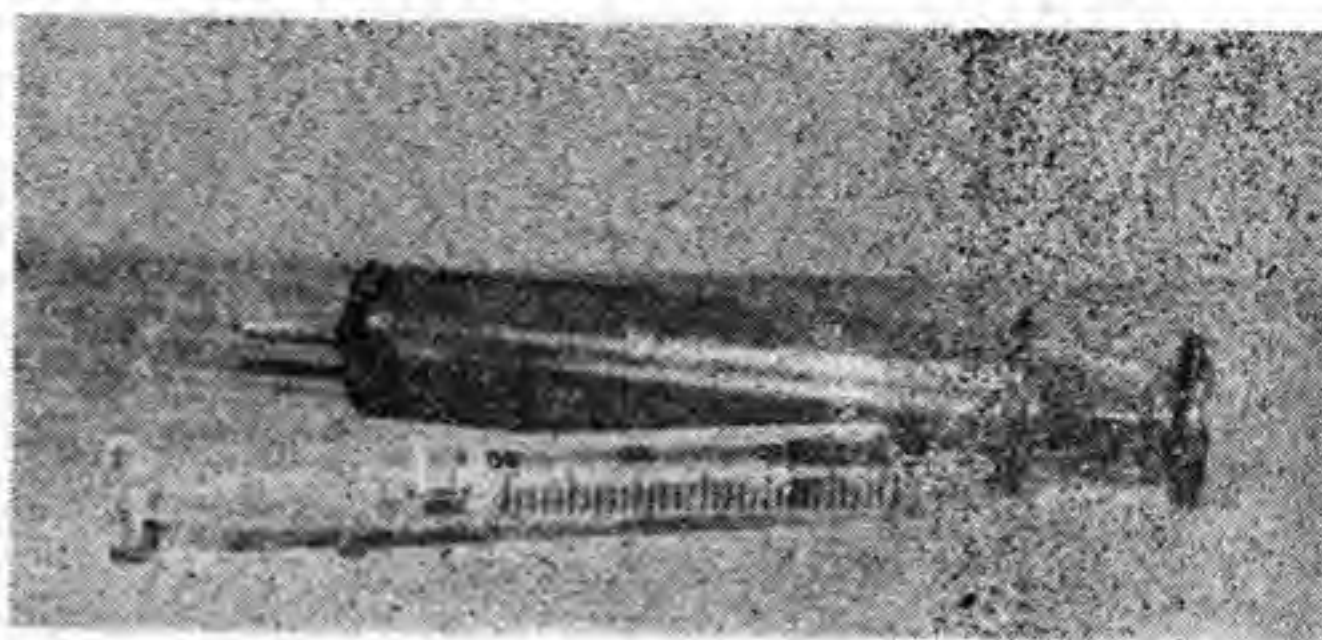
定価九十円で半年程して百円になり、増頁して定価百四十円になるまで、この百円という買いやすい値段が暫く続く。定価百四十円で特大号の連発は本誌の最も充実したときといえる。一時休刊ののち復刊号は定価二百円。これは白表紙で、市販しなかった。

市販再開の再出版は、定価百四十円から、百五十円になって間もなく二百円。十年前から見ると約二倍の定価になっている。

最近では二百五十円の定価になっているのは、ご存知の通り。以上は臨時増刊号は含んでいない。

足、足、足、テレビの画面一杯に若々しい潑刺たる女性の足、また足がクローズアップされる。

最近あまりみられなくなったが、あの、「アツギ、アツギ、アツギのタイツ」のコマーシャルソングで有名な、今や業界に確固たる地位を占めた、厚木ナイロンのコマーシャルの一場面であったことは、よくご存知のこと



△私のイメージ▽

浣腸

に関する妄想

栗瀬長

と思う。

恐らく厚木のシームレスをはいていると思われる若い女性の足、足、足が、恐らく数千人、カメラのアンクルよろしく、私にのしかかるように歩いてくる。

何と均斉のとれた足、足であろうか。街頭で、通勤電車の中で、私は先ず女性の足に眼をやる。そして、十人に一人も、いや百人に

一人も、ああ美しいと感じる足に出会わないうちいったら、女性にえらく叱られることだろう。

しかし、大部分は太く短い足、ふくらはぎがコブラの頭よろしくふくれ、而も、ちんちくりんな背を少しでも高くみせようと、不都合なハイヒールをはくものだから、そうでなくてさえ太いふくらはぎの筋肉が異様に張りつめて、その醜さをふりかえってみたことがあるのだろうか。

たまに細いのお目にかかる、今度は鶴の足か、鶴ならば鶴としての上品さがあるものののだが、これは栄養失調かと思われるばかり、骨の上に皮がのついているといった風情、これも興ざめである。

たまに均整がとれているなと近よってみれば、あの朝潮を思わせるような毛むくじやらが、ナイロン靴下の下に押しひしがれてあえいでいる態、これも幻滅である。

翻って、アツギのコマーシャルをみよう。

よくもまあ、これだけの均整のとれた足を集めたものと、つくづく感心させられる。一時は美人の足を写し、トリックを用いたものかと思っただが、よくみれば漫画ではあるまいし確かに集団を写したものに相違ない。ファッ

シヨンモデルか何かのグループではあるが私達マニアにとっては傑作の一つに数えられるコマーシャルではあった。

このテレビ画面を見ながら、私の妄想は発展するのであった。コマーシャルソングのリズムに合わせて、画面一杯に進んでくる素晴らしい均整のとれた若い女性の足、その足、足が、そのまま画面からとび出して、私の頭といわず肩といわず、顔も胸にも、そして腹をも踏みつけてくれたら、おお、どんなに素晴らしい事だろう。

だがさてよ、踏みつけられるだけではつまらない。あの美しい足をした何十人かの若い女性の中には、きっと何人かは便秘で悩んでいるに相違ない。その何人かをつかまえて、有無をいわさず、あの素晴らしい足を縛り上げ、浣腸してやたらどうだろう。誇らかな足も羞恥に悶え哀願するかも知れない。排便を我慢するあまり、可愛い足の拇指だけのけぞるかも知れない。

更に、その足の裏を羽毛でコチコチと擦ってやたらどうだろう。浣腸液の刺激をこらえにこらえていた神経作用は、擦りを耐える方に奪われ、思わず肛門括約筋が遅緩して失禁してしまうのではなからうか。

こんな怪しからぬ妄想が次から次へと私の脳裡をかすめてゆくのである。

商用で旅に出た。私がよく利用する夜行の二等車にはもったいないような美人が私の前に座って、一心に文学全集何かを読み耽っている。年の頃は二十二、三でもあろうか。

やや小柄すぎるが、よく通った鼻条、小さな口もと、切れ目の長いすんだ眼、白いうなじ先ず美人の部に属そうか。

だが薄暗い夜汽車の電灯の光に照らされてその美人の額には、はっきりとぶつぶつした吹出物が見られたのである。斜上からのほの暗い光は吹出物にはのかなる影を作って、その一つ一つが数え上げられるようであった。

この人は必ず便秘している。そう感じたのは私の妄想だろうか。膝の上に、ちょこんとのっている赤いハンドバッグには、あるいは人知れずイチジク浣腸が隠されているかも知れない。

「便秘はいけませんよ。直腸内で腐敗、醗酵した老廃物の毒素は、腸壁から血液の中に吸収され、めまい、のぼせ、そして吹出物の原因となるんですから。下剤または浣腸して、早く排泄しましょうね。何でしたら、私が上

手に浣腸してあげましょうか」

私は心の中で、いや声にならない口の中でこうその女性に話しかけたが、勿論聞える筈もなく、彼女は時々、額の吹出ものが気になるらしく、左手のハンケチを無意識に額にそっと当てながら、本を読み耽るのであった。

汽車はトンネルに入ったらしい。

友人の細君がお産をした。病院の産婦人科病棟へお祝いにゆく。

丁度面会時間に一寸早く、今回診中とのことで、待合室で待たされる。こんな機会でもなければ、我々男性が産婦人科の待合室の空気にふれるなんてことは凡そないだけに、異端者である私一人、隅の方に小さくなって、わざと新聞を拡げながら――但し、活字など眼に入らない――その辺の異様な光景を盗み見るのに精一杯であった。

さすが大総合病院のことだけはある。とは外来患者の多いこと、それである。ざっとながめてみよう。

第一のグループは、新生児を連れたグループ。ここで既にお産をすませた母親達である。例外なく我が子をだいて、それが猿のような児であろうと、おかちめんこであろうと

そこはそれ母性愛のおもむくままに、誇らしげに我が子の自慢話、相手の自慢話に相づちは打つがうわの空、チャンスを掴んで早く自分の話がしたくてたまらない、新生児健康診断のグループである。

次は、せり出した大きなお腹をかかえて、一面では女性のみ与えられた特権を誇らしげに誇示しつつも、また一面では近く来るべき産みの苦しみに対する不安を織り交ぜた、妊婦のグループ、これは分娩前の定期診察のグループである。

概して、唯一人静かに順番のくるのをまっているか、あるいはひかえめに、経産婦の経験談——それは、概して誇張が多いらしいが——をかしこまって拝聴している。

この外に、最も深刻なグループがある。それは、はじめて、はじめてではないかも知れないが、何れにせよ、妊娠の有無を確かめに来ているグループだ。

新婚早々らしい花恥しい若妻もあれば何とか理由をつけて、またもや下してしまおうとする不逞の輩もいるらしい。しかし、やがてあの恐るべき産婦人科独特のいまわしい診察台にのぼるべき恐怖に、隅の方に固くなって黙ってうつむいている一団である。

こうした様々のグループを新聞の蔭から観察していた私の眼に、向うの廊下をススッと通り過ぎる白衣の看護婦さんの姿が映じたのは、正にショックキングであった。

即ち、彼女は右手に真白な石鹼液の入ったイルリガートルを捧げ、左手にはその嘴管を連通管の原理によって、石鹼液があふれないように、液面と同じ高さに保ちつつ、分娩予備室と書かれた小部屋に、足早に吸い込まれていったのである。

あの予備室には、陣痛のはじまった産婦が横たわっているに違いない。そして今のイルリガートルの嘴管は、陣痛促進のための排便を強制すべく、否も応もなく、今頃は挿入されていることだろう。あつ、可哀そうに、いや、いい気味だといった方がいいのかも知れない。

ところで、と私はまたもや新聞の蔭から、ここ待合室の一団の女性達を見廻すのだった。

赤児を抱いた母親達、貴女達は皆、今のようないるりガートルで浣腸されたんですね。どうでした、その時の感想は。そう、観念はしていたでしょうね。でも、さあやって、とばかりお尻を突き出したのではムードがあり

ませすね。やはり、もじもじと、そして朱を差したように、恥らしいの色を染めて身をくねらしたのでしょいか。

おっと、それから、他のグループの方方、そう、これからやがて分娩の苦痛に耐えてゆかねばならない方達、そこにはあのいまわしい浣腸が待っているのですよ。どうです、決心はついていますね。「自分で、イチジク浣腸をします」なんていったって、許されっこないのですから。看護婦さんの手で、浣腸、排便全部お世話になる決心を今からつけておいた方がよいと思いますね。

こんな妄想をたくましくしているうちに、看護婦さん数人を従えた白衣の老人が悠然と二階から下りて来た。医長の回診は終わっらしい。

私は病室へと持参の果物を持って上っていった。

「やあ、奥さん、お目出とうございました。まあ、よく太った、可愛らしいお嬢ちゃんですな」

お世辞の一つもいいながら、私の頭の中には、この奥さん浣腸された時には、どんな顔をしたんだろうと、怪しからぬ想像をするのであった。

「雑記」

南方佳男

映画・女優・臍

蒐集癖というには少しおかしいが、私には奇妙に興味を持つと一連の資料や統計を集めたい癖がある。

以前に書いていた「女優緊縛」の速報や回顧もこの類だが、このごろは女優の「お臍」にこっている。といっても、以前のように邦画ならその年の作品の半分近くも観ていたころと違って、最近は一カ月に二、三回でいどしか観ないから充分な資料は集まらない。ただ幸いなことに、各撮影所の宣伝スチールとパンフレットが全部手にはいる友人がいて、彼を通じて私の手元に集めることが出来るのが、せめてもの救いだ。

前書きはこのくらいにして、いま私の手元にある昨年一カ年間の資料をのぞいてみる。

昨年前半は比較的、女優さんたちのお臍を

拝見する機会が少なかったことは、以前に私がお臍で書いたようだ。一寸、例をあげてみる。

▽暗黒街の顔役（東映）・十三人のギャング（東映）〓瞳麗子

▽海道一の鬼紳士（東映）〓宮園純子

▽スター誕生（松竹）〓瞳麗子

ていどしかない。もちろん私が観てなくて知らないのや、確認していないものもあるだろう。

▽素晴らしき悪女（東宝）〓団令子

などはスチール写真では彼女の上半身のヌードが出ており、あるいはという期待もあるが、ご存知の方は何かのときに教えていただきたい。

▽ローマに咲く花（松竹）〓瞳麗子

この映画ではヌードモデル役。これも私は観ていないので、確かなことはいえないが。

前半はこのように不振？だが、こういうことか後半には逆に女優さんのセミ・ヌード・シーンがふえた。とくに新しい人の進出が目立った。

例の洋画のサンライト・ルックとかいうスタイルに刺激された影響かも知れないが……

▽ギャング同盟（東映）〓矢島由紀子、大緑加根子、安城百合子

▽あらくれ荒野（松竹）〓江美しのぶ

▽温泉巡査（大映）〓浜田ゆう子

▽黒の商標（大映）〓江波杏子

▽太陽は呼んでいる（東宝）〓中川ゆき

▽陽のあたる椅子（東宝）〓北あけみ

▽悪名波止場（大映）〓滝瑛子

大映 「温泉巡査」

浜田ゆう子



スチールを同封しておこう。

肉体派ではないが、セミ・グラマーで、同じ大映にいる万里昌代の新東宝時代が、こんな体だった。

少し縦長で深い大きなお臍の型もよい。といっても浜田ゆう子の場合もう二度とこんなシーンは見られないかも知れない。

大映の温泉シリーズの前作「温泉

見落しても、いつかはご対面出来るだろうという気になる。

同封のスチールのように、体は実にきれいだ。が一寸、下腹の肉付きがまだ足りないせいか、せっかく格好いいお臍をしているのに見ばえが悪い。まだ十九歳だからこれからよくなるう。

また例を出すようだが、いまではすっかり体をみせなくなっている三条江梨子（大映）が新東宝でシークレット・フェイスの芸名から三条魔子と改名したごく新人のころ、何かの雑誌にビキニスタイルをご披露していたことがあった。彼女の体がちょうど滝瑛子と同型だ。あのころの三条江梨子は十六、七歳だったから、もちろん下腹の肉付きも浅く、おまけにお臍も小さく浅いので貧弱だった。いまだったらきつと良い体付きだろうが。

女中」は完全に裏切られた。滝瑛子がスチールではちゃんとビキニスタイルになっているのに、画面には最後までみせてくれなかった。彼女は第一回作品の「嘘」Ⅱ大映Ⅱでもパンティとブラジャーだけの下着姿にはなったが、お臍は出さなかった。しかし、こういった生きのよい役専門だから、次から次へとセミ・ヌード出演をしているので一つや二つ

ついでに温泉シリーズのもう一つ前作「温泉あんな」にふれてみる。この作品は、私は全く見ていないのだが、最近になって同封のスチールの高千穂ひづるをよく見ると、ビキニ水着のパンティの上の方に、お臍がのぞきかけている。という発見から「しまった」と思っている。もしこのスタイルで実際に出演しているのなら、活動しているうちにパンテ

▽私を深く埋めて（大映）Ⅱ紺野ユカ
▽クレージー作戦（東宝）・くたばれ無責任（東宝）Ⅱ北あけみ

▽なんじゃもんじゃ物語（松竹）Ⅱ松井康子

▽やぶにらみニッポン（東宝）Ⅱ北あけみ
などだ。エレガンス派女優の浜田ゆう子が大決心をしているのが目立つ。ご参考までに

大映 「温泉女中」

滝 瑛子



▽モンローのような女
(松竹) 〓千之赫子、宝み
つ子、国景子、松井康子
▽騙し屋(大映) 〓弓恵
子

▽温泉女医(大映) 〓十
和田翠

▽土曜日のユカ(日活)
〓加賀まりこ

▽二匹の牝犬(東映) 〓
緑魔子

などは期待できそう。

浜美枝は昨年中、外国と
合作の「世界詐欺師物語」
でセミ・ヌードになってか
ら、ブリジット・バルドー
と同サイズの体に自信を持
ったかのように。たしかにスタイルはいいが
さとお臍は浅い横広の外人型であまり関心し
ない。といってもまだ若いから、こんどの肉
付きしだいでもよくなるかも知れない。

次ぎに正月以後の作品にも一寸ふれよう。
といっても、多くは予告めいてくるのだが、
▽香港クレージー作戦(東宝) 〓浜美枝
▽海底軍艦(東宝) 〓北あけみ

松竹が大宣伝し、われわれの期待も大きか
った「モンローのような女」 〓第一部 〓は、
新人、真理明美はついにお臍をみせてくれな
い。ビキニ水着にはなるのだが、お臍の線ス

レスレまでパンツを上げており、二カットて
いだから多少動いても下がってくれない。
しかし続編があるはずだから第二部以後の興
味ともいえる。

この作品の収獲は、脇役で演技派の千之赫
子が大胆なシーンをたびたび見せてくれる。
もちろんグラマーでもないし、年齢も二十
五、六歳の役と同年配でいどだと思いが、意
外に肉体美だったという感じがする。

お臍もほどほどでマン丸くて可愛い。
この作品で中原早苗が久しぶりに出演し、N
O1モデルの役をしているが、お臍は見せな
い。日活時代にはよく見せていたのに、どう
してか。

宝みつ子についてはいまさら書くこともな
かるうが、彼女がこの作品の中で「蟻がお臍
の中にはいった」と騒いで、お臍を開いてみ
せるのが面白い。

弓恵子はいろいろ幅広い役をこなせる女優
だが、何分小柄なので……と思っていれば、
やはり三枚目的な役で、ネグリジェ・スタイ
ルの出演。といってもこの映画はまだ見てい
ないから予告である。どなたか見た方は感想
をどうぞ。

加賀まりこは、すでにビキニ水着は雑誌な

どでさんざん披露済み。自ら「私のお臍は恰好がいい」と自慢している品。

さてこの「月曜日のユカ」は自薦の作品でシナリオを読むとヌードシーンもあるはずなので、彼女のお臍をいろいろの角度から見ることができそう。

○

これから私のスクラップ帖をもう一度前に戻して、これまで何らかの形でお臍を見せてくれた女優さんたちを数えてみる。

▽大映Ⅱ江波杏子、中田康子、毛利郁子、紺野ユカ、滝瑛子、浜田ゆう子、弓恵子、十和田翠、万里昌代、三条江梨子

▽東宝Ⅱ若林映子、北あけみ、中島そのみ、中川ゆき、重山規子、浜美枝、原知佐子、園あゆみ

▽松竹Ⅱ瞳麗子、加賀まりこ、千之赫子、江美しのぶ、初音美佐子、国景子、真理明美、松井康子

▽東映Ⅱ宮園純子、安城百合子、矢島由紀子、大緑加根子、緑魔子

▽日活Ⅱ星ナオミ、小園蓉子

▽フリーⅡ中原早苗、宝みつ子、岸田今日子、高千穂ひずる、浜田百合子、泉京子、浦里はるみ、芳村真理、三原葉子、三ツ矢歌子

左京路子、扇町京子、前田通子、江口美沙、魚住純子

▽その他Ⅱ小浜奈々子、奈良あけみ（以上ストリップパー）森山加代子、渚エリ、五月女マリ、小川真由美（以上歌手、TVタレント）

▽引退者Ⅱ叶順子、市田ひろみ、筑波久子、

以上で五十七人。

このほか私の知らない者も多いはず。「婚期」の若尾文子もどなたかご紹介があったが、私は加えていない。団令子も何か一作あるような気がする。このほかスレスレのスタイルをみせたものには、日活の白木マリ、香月美奈子、東宝の水野久美、八代美紀、松竹の鰐淵晴子……など多い。どなたかのお知らせを期待したい。

また一月号で女優さんのお臍をとりあげた作品があったらしい。どういうことか、あいにく一月号だけ私は入手していない。すぐに

大映 「温泉あんな」

高千穂ひずる



手に入れて読ませて戴こうと思っている。したがって今作品の中に、一月号の作品を書かれた方と同じものを重複させるような結果があっても、悪しからずご了承して戴きたい。とりとめのない事をならべたが、久しぶりのペンでどうも思うように滑らない。次にはもっと慎重なものを書こうと思うので、それまでご容赦下さい。

「奇譚三十九夜」物語

第三十四夜

辻村 隆

ブラボー、一九六四年ノ・
ナイロン氏とステッキ氏の二台の車に分乗した退屈男達は、清澄の空気を割いて、一路阪奈道路を奈良へと走りました。

唐招提寺、薬師寺、法隆寺を訪れ、車を翻がえして国道二四号線をひた走りに、秋篠寺へと回り、京都街道へと出て、三笠温泉郷を右手に眺め、東里町から笠置へ通じる山道を昇り、浄瑠璃寺を訪れて、古寺の静寂さを満喫して、黄昏迫る頃、再び山間の道を降って三笠温泉郷へと辿りついたのです。

古刹めぐりのほこりを、山麓のいで湯で洗い落とし、一九六四年の新年を祝して、一同は乾盃し、『大仏の脛』なる鍋もので宴を張ったあと、スバル氏が一同を制して口を切りました。

「さて、皆さん、私達の例会も今宵迎えて三十四夜を数えました。

私達の物語の発表誌である『奇ク』も現在の困難な時代を必死に乗り越え、生き抜こうと努力しておられます。私達の物語が、昭和三十六年（一九六一年）一月号に掲載されて、すでに三年有余の年月を過ぎて来ましたが、昭和三十九年三月号の、前月号迄の、皆様方の物語回数は次のようではありますが、ここにご参考までに申し上げます。

ナイロン氏	十一話
スバル氏	十一話
ゴルフ氏	十話
ワイン氏	九話
ドクター氏	九話
ステッキ氏	九話

ライカ氏

九話

パイプ氏

八話

の、合計七十六話を消化してきたのです。今宵含めて第三十四夜から最終回の第三十九夜まで、あと六回の会合に、私達はあと、十七話を語り合って、三十九夜の物語にふさわしく、九十三話をもって終りたいと思います。物語回数が少ない方から、どしどし発表していただきたいと思うのです——」

スバル氏のデーターに、人々は今更の如く、過ぎ来しかたの年月と、一人の欠員もなかったお互いの健康を祝福し合うのでした。

「じゃあ、回数の少ない、パイプ氏から、今夜の口火を切ってもらいましょうや……」

十一話語ったナイロン氏は、ニヤニヤ笑いながら、パイプ氏に催促したのです。

「どうも困ったネ——。今日はとんでもない発表をされて。聞き手に回る筈だったのに、それも行かないね。じゃあ……」

そういつて、パイプ氏は丹前の前を合わせ、仲居達に引下るよう命じてから、ややあって語り始めました。

第七十七話 奇譚百人一首

「正月、子供や孫と百人一首をとりましたが、これをSMプレイの唄に替えたならと、フト心に浮ぶままにつくり替えて見ました。註釈を加えながら喋ってみたいと思います。」

一、『玉の肌 絶えなば絶えね ながらえば

縛るる身をの よわりもぞする』

(玉のをよ 絶えなば絶えね ながらへば

しのぶることの よわりもぞする)

緊縛に絶えに絶えぬいた玉の肌も、時間が長びけば、やがて痛々しく弱つてくると説いたのであります。

二、『短か夜の 縛る湯文字も誰ゆえに

乱れそめにし 我れならなくに』

(みちのくの しのぶもち摺り誰ゆえに

乱れそめにし 我ならなくに)

夏の短か夜、湯上りの湯文字の上から縛るのも誰のためであろうか。つまり、被虐に快こぶ新妻の、忘我の境地をうたいあげたもので、げに新妻の快楽の気持がよく出ております。

三、『ぎりぎりと縛り 霜夜の さむしろに

衣はぎとり ひたとねかさむ』

(きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに

衣かたしき ひとりかも寝む)

さむしろのさは、庭の枕言葉で、小さい庭とても申しましようか寒さと両方にかけてところにウンチクがあります。霜の降る冷めたい夜、女を轟々と縛り上げて小庭の上に、衣類をはぎとって、ねかしつけたという、SMプレイでも、高度に属する奴隷式のプレイを詠んだのであります。

四、『かの肌に いまや伊吹の さし艾

さても 知らじな 燃ゆる想いを』

(かくとだに えやは 伊吹のさしも草

さしも しらじな もゆるおもひを)

彼女の柔肌に、今や艾をさそうとしている。熱さにのたうつ姿を

見ようとする、我が燃ゆる想いを知らないのであらうか——。燃ゆるは柔肌の燃ゆるにかかっているのでありまして、お灸の愛好者にはタマラない一句でもありましようか——。

五、『縛らるる身とて 思はず誓いてし』

人の命の 惜しくもあるかな」

(忘らるる 身をば思はず誓いてし)

人の命の 惜しくもあるかな)

忘らるる身をば一寸変えるだけで、実に意味深長な句になるのでありまして、緊縛された身に、刃をつきつけられると、思わず奴隸になる事を誓った。命が惜しかったせいもありましようが、あるいは彼女は被虐願望者であつたのかも知れません。

六、『君がため 春の野に出で 樹に吊らる』

我が後手に ゆきはふりつつ』

(君がため 春の野に出でて若菜つむ)

わが衣手に ゆきはふりつつ)

春はここでは初春、すなわち新春をさします。嗜虐的な彼の願望に応えるため、このけなげなる彼女は、野外に出て、高々と樹に吊り下げられた。縛られた後手に、折から降り出した粉雪が吹きかかり、雪中縛女の妖しい美しさを描いて見事です。

七、『うかつにも 彼を腹だて むちあらし』

はげしかれとも いとわぬものを』

(うかりける 人をはつせの 山おろし)

はげしかれとは いのらぬものを)

ヒョんな事から彼に腹を立てさせたため、鞭の嵐が彼女の肌に襲いかかったが、愛しい彼のことなら、例えそれが激しくとも、何で

いといましようか——という、げにも献身的な、健気な彼女の心境を詠んだものであります。

八、『服ぬげば くくるものとは知りながら』

なおすひまなき あさましさかな』

(明ぬれば 暮るるものとは 知りながら)

なほうらめしき あさましさかな)

温泉ホテルの一室——意馬心猿の彼は、私が服を脱ぐ間もどかしく、括り(縛り)始めた。下着類を片付ける間もない慌ただしさに、自嘲が浅ましいという最後の句になってよく現われている。チヨンの間のSMプレイのさまが手にとるようであります。

九、『ながからむ 心もしらず 黒髪の』

みだれてけさは 物をこそおもえ』

(ながからむ 心もしらず 黒髪の)

みだれてけさは 物をこそ思へ)

一点の添削なく、被虐を願う人妻の心境を心憎いまでは詠い上げています。少しでも長く責めてほしいという、人の心も知らないでプレイで黒髪の乱れた今朝は、昨夜の夫への、プレイの物足りなさを泌々と噛みしめているのであります。

十、『あわれとも いうべき今は 傷まみれ』

身のいたづらに なりぬべきかな』

(あはれとも いふべき人は 思ほえで)

身のいたづらに なりぬべきかな)

被虐を売物にするコルガトルが悲しくも歌った句であります。SMプレイの粹人のいたづらの対象となり果て、今はいとおしい柔肌も傷まみれになった。ああ悲しいことよと嘆いたのがこの句なの

です。

十一、『詫びぬれど 今は許さじ 縄をかけ

責めつくしても 吐かさんとぞ思う』

(わびぬれば 今はたおなじ なにはなる

身をつくしても 逢はむとぞ思ふ)

不貞の妻を責める夫、嚇々たる激怒を、心おきなく現わし得て妙であります。

十二、『忍ぶれど 音に出でにけり わが責めは

物音おかしと 人のとうまで』

(忍ぶれど 色に出でにけり わが恋は

物やおもふと 人のとふまで)

鞭音を忍ばせても、興趣尽きる処を知らず、つい音が隣家に洩れてしまう。一体何事ですと隣人にきかれて辟易するさまが遺憾なくよまれています。

十三、『今もないと いいし許りに 長々と

くださし込まれ もれいづるかな』

(今こむと いひしばかりに 長月の

有明の月を 待出でつるかな)

夫に便秘を告げたばかりに、長々とイルリガートルを、待っていましたと許り挿入され、多量の液体が溢れて、臀部に洩れるさまを婉曲に詠った句であります。

十四、『久々に 光のどけき 春の日に

しづ心なく 責めさいなまむ』

(久かたの 光のどけき 春の日に

しづ心なく 花のちるらむ)

春うららの日曜日、久し振りに無我の境地で、妻とSMプレイと楽しもうとする、善良なる夫の心境が、心おきなく描写されています。

十五、『泣く娘をば さるぐつわはめ 逆さ吊り

人に知られで 撮るよしもがな』

(名にしおはば 逢阪山の さねかづら

人にしられで くるよしもがな)

京と近江の境の逢阪山の奥深く、幸い通る人もない。厭がり泣くモデルに猿轡をはめて、樹木に逆さ吊りにし、人の来ぬ間にカメラでとろうとする、奇巧編集部の努力のさまをソコハカとなく詠みこんだ句であります。

十六、『わが袖は 縄目にみえず 置石の

責めこそ辛かれ 休むまもなし』

(わが袖は 潮干にみえぬ 沖のいしの

人こそしらね かはくまもなし)

SMプレイのうちでも、拷問責めの、膝へ置き石の刑は辛いものだ。次々と責めさいなまれるので体のやすむ間もないと、涙にくれてうたったものであります。元句の人こそしらねかはくまもなしとは、涙であるか何か、これ又、誠にうんちくの深い文句であります。

十七、『君がため 惜しからざりし 命さえ

長き責めには つらきものかな』

(君が為め 惜しからざりし 命さへ

長くもがなと おもひけるかな)

貴方の為なら、例え一命を捨てても惜しくはないとは思いつつも



矢張り長々と責め続けられると、辛いものであるという、これは貞淑な奴隷妻の、偽らざる心境なのであります。

十八、『鼻責めは あわれな妻の 肌ならで

嵌めゆくものは 鉄輪なりけり』

(花さそふ 嵐の庭の 雪ならで
ふりゆくものは わが身なりけり)
いつもは妻の肌を責め抜くが、鼻責めに到っては
その肌にあらず、黒く光る鋼鉄の輪を、鼻孔に貫通
させようとする、鼻責めの極地をサラリと唄ったも
のであります。

十九、『縛りおきし 逆木が露にぬれ立ちて

あわれ娘の 魂たまもいぬめり』

(契りおきし させもが露を 命にて

あはれことしの 秋もいぬめり)

切支丹弾圧によって、処刑された娘が、逆さはり
つけにかけられ、朝露に逆木がぬれそぼる頃、娘の
魂はすでに昇天していた——そんな光景を物悲しく
詠んだ句であります。

二〇、『墨を刺す 肌波打たせ よろばいて

夢のうつつ路 素裸さらさむ』

(住の江の 岸による波 よるさへや

夢のかよい路 人目よくらむ)

被虐の果ての刺青刑に、肌を波打たせて、夢うつ
つの間に、彼女は露わな素裸を人目にさらしていた
という、残酷ムードを盛り上げた句であります。

二一、『誰をかも 知る人にせむ 逆吊りの

松も縛りの 友ならなくに』

(誰をかも 知る人にせむ 高砂の

松もむかしの 友ならなくに)

庭の枝ぶりのよい松の樹が、知る人ぞ知る、逆吊りの最もよき小道具であつたとは……

二二、『田子の浦に うち入れてみれば 白砂の

富士の高嶺は ゆるく振りつつ』

(田子の浦に 打出でて見れば 白砂の

富士の高嶺に 雪は降りつつ)

元句のままでも通用する句であるが、この難解な句をよくよく玩味すると誠に味わいがあります。田吾作というと肥と男の俗称であり、汲取桶の事を地方によってコエタンゴと呼ばれます。すなわち、そのタンゴの裏というところはアヌス以外の何ものでもないわけです。その浦へ浣腸器を打ち入れる、つまり挿し込んで見れば白い肌の、双つの豊臀はゆるやかに振り動いていたという、げに、クリスマニアには垂涎の一句でもあるわけです。富士の頂上は、絵で見られる通り山形に二つに分れています。その雪のつもるさまはいわずとした、双つのおしりを、婉曲にいい現わしているわけです。どうです皆さん――。

二三、『背を打たれ 口にせかるる 猿ぐつわ

吊られて末に のまんとぞ思う』

(瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の

われても末は 逢はむとぞ思ふ)

マゾの男性の、これは願望でもありましょう。美女の前にひれ伏して奴隷となった男性が、背を打たれ、猿轡をはめられ、吊られ、遂には、美女のものを嘔下しようと決心するその心構えをうたったものであります。

二四、『妊み女を 吊りさげ見れば かすかなる

うごめく腹に 呻めく声かも』

(天の原 ふりさきみれば 春日なる

みかさの山に 出でし月かも)

伊藤晴雨ばりに、妊婦逆吊りシーンを、ありのままに読んだところがミソであります。かすかにうごめく腹と詠んだところが、芸の細かいところでもあります。

二五、『柔肌に ひしと掛けたる 縄がらみ

身動きならぬ 海老責めなりけり』

(山河に 風のかけたる しがらみは

流れもさへぬ もみちなりけり)

柔肌をひしひしと縛り上げた海老責めに、身動きもならぬ美女が苦悶している様子をスツキリと唄ったものであります。

二六、『秋風に 曝せる首の 髪まより

もれ出づる顔の かげのおぞけさ』

(秋風に なびく雲の たえまより

もれ出づる月の かげのさやけさ)

何とも身の毛のよだつ、おぞましい一句であります。乱れ髪の際間より洩れた蒼褪めた顔がホーフツとして読む人の心を打つ事でしょう。

二七、『腹のわた はみ出でて見れば 腹切りの

苦悶にのたうつ 女白浪』

(わたの原 こぎ出でて見れば 久かたの

雲いにまがふ おきのしらなみ)

今はこれ迄と、観念した女白浪の女賊が、捕方を前に置いて立腹きって、はらわたがはみ出して苦悶にのたうつ様を、詠者はいきい

きと読んだ句であります。

二八、『火をともし 蠟も恨めし ポタポタと

責められるゆえに 滴^{しずく}ちる身は』

(人も惜し 人も恨めし 味気なく

世を思ふゆゑに ものおもふ身は)

蠟涙が肌に熱滴を落してゆくさまを詠んだもので、ろう責めの様子がありあろうかがわれて面白い一句であります。

二九、『心にも あらで夫に したかえど

たのしかるべき 夜半の責めかな』

(心にも あらで浮世に ながらへば

恋しかるべき 夜半の月かな)

最初は心ならずも、夫のいうままに縛られたけれど、近頃では愉しくてたまらない、夜のプレイのお時間であると詠んでいます。妻の心構えはかようでなくてはいけないという模範的な一句であります。

三〇、『ありったけ つかった縄の 縛りより

緊縛ばかり よきものはなし』

(有明の つれなくみえし 別れより

あかつきばかり うきものはなし)

家中の縄や紐類一切を動員して、身動きもならずひしひしと縛り上げられてからというものの、そのしまり心地に陶醉して、緊縛ほどよいものはないと、はつきりいい切った新妻の心ばえが躍動している句であります。

三一、『ちからつな かたみに腕を しぼりつつ

駿河責めまつ 妻吊らじとは』

(ちぎりきな かたみに袖を しぼりつつ

末のまつ山 波こさじとは)

何しろ両手両足を後で縛り上げた、駿河責めにした妻を吊り上げようとするのだから、並大抵ではない。力綱を互いの腕に力を入れて引絞るのだが容易な業でない。一人で必死になって吊り上げようとする夫の涙ぐましいプレイのさまが手にとるよううかがえる好句ではないでしょうか。

三二、『腹わたを やおら目掛けて 投げかけぬと

人には告げよ あまのはらきり』

(わたのはら 八十島かけて こぎ出ぬと

人には告げよ あまのつり舟)

この場合のあまとは尼でもなく海女でもない。通称「このアマツ太てえ女だ」と使われる女の総称である。勇ましい女が、己がはらわたを掴み出し、相手の憎い男目掛けて投げつけたと、どうか伝えてほしいという、悲壮な女はらきりのワンカットをよみとったものであります。

三三、『枷でいため 鞭うつ責めの おのれみよ

くだけてものを 吐かす牢かな』

(風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ

くだけて物を おもふ頃かな)

牢内の拷問の凄まじさを描いた絶句でありましょう。手枷、首枷足枷で散々痛めつけ、鞭打ちに責め抜き、おのれ見ておれ、例え骨がくだけようと、泥を吐かさずにはおかぬぞという、牢屋同心の苛酷の心境が歴然と読み込まれているのであります。

三四、『ふぐ腹に 飽きの来るまで 押し入れば

むごし 則は あらしというらむ』

(吹からに 秋の草木の しをるれば

むべ山風を あらしといふらむ)

高圧浣腸で、ふぐのように腹が膨れるまでに注入しつづけて、浣腸が飽いてしまう程つづけたのはよいが、便所はむごいことに、そのとばかりをうけて、走り込んだ彼女から放射される液体は、さながら嵐のように飛散したことであろう——。と、羽村京子さん好みの一句であります。

三五、『あらししく 三筋の縄を かけおわり

吊った彼女に はりきしみけり』

(あらしふく 三室の山の もみじ葉は

龍田の川の にしきなりけり)

ポリウムのある彼女の、激しい抵抗をうけ、ついにはあらあらしく三本の縄で、胸と手足を縛り終ったが、彼女をはりに吊り下げた処、重みではりがミシミシときしんだ光景を謳ったものであります。暴力はイケマセン。

三六、『さかさまに 吊せる枝に おく霜の

白きを見れば 夜ぞ更けにける』

(かささぎの 渡せる橋に おく霜の

白きを見れば 夜ぞ更けにける)

寝静まった頃を見計らって、庭のプレイと洒落たが、夜寒が身にしみわたり、逆吊りの女房の慄えるのに、フト枝を見ると、うっすらと白い霜がおりていたというシーン。つまりは寒さを忘れて、プレイに忘我の境地にあった嗜縛亭主の感懐を謳い上げたものであります。

三七、『あきれたの 借保のかたに 泊らせて

わが身この手は 唾にぬれつつ』

(秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ

我ころも手は 露にぬれつつ)

部長ったらヘンよ。借りたお金の担保代りに私をホテルへ泊らせて、どうするかと思ったら、膝まづいて、私の身体や手足をベロベロと舐めるの。唾でベトついて気味悪いったらありやしない。お風呂でザブザブ洗って帰っちゃったけど、あれで借金が帳消しになるのなら悪くないナ。——というBGの一句であります。

三八、『血にはやる 彼氏はきかず たつた今

からくれないの 水かけるとは』

(千早ぶる 神代もきかず 竜田川

からくれないに 水くぐるとは)

私を柱に犂々と緊縛した彼氏は、気持が昂まってくるのか、ナイフでチクチク。私が必死に拒んだ結果、血を見ずにはおられなくなった彼氏は、待てしばしなく、油絵具の赤をドロドロと水でとくと真紅な血汐のようなそれを、いきなりさっさと私に浴せかけた。真紅に染った緊縛の女体——、げにや見ものあったでしょうと思うのが、この一句であります。

三九、『何はとあれ 悪しきかりねの 一夜ゆえ

責めつくしてや 恋いわたるべき』

(難波江の 岸のかりねの 一夜ゆえ

身をつくしてや 恋ひわたるべき)

亭主が出張中の忍び逢いなれば、何はさておいても、この仮寝の一夜を、責めつくして、充分にSMプレイを満喫してこそ、恋しい

女と一夜さを過した甲斐があるってものだ。とよんだ、このてのプレイボーイが、最近多くなったから、善良なる夫は大いに御用心御用心。一大警鐘的な一句であけます。

四〇、『許されば 貴女の家をば おとずれて

脚まろやかに 舌にてぞ拭く』

(夕されば 門田の稲葉 おとづれて

あしのまろやかに あき風ぞふく)

奴隷願望の私であります。若しお許しが出たなら、貴女のお住居を訪問して、おみあしをやわらかしくやわらかしくまろやかに舌でなめり、拭いてあげますという、マゾ氏の一句であります。

四一、『あわせ鏡 着物かつらに ふきだすな

乙女のすがた しばしとどめむ』

(天つ風 雲のかよひ路 ふきとちよ

乙女のすがた しばしとどめむ)

年配の好紳士が、合せ鏡で懸命に化粧し、着物、島田のかつらをつけて悦に入っているのを見て吹き出したり、笑ってはいけない。何故なれば、女装に生き甲斐を覚える彼等は、乙女のすがたをしばしとどめる事に汲々とし、真剣そのものであるのだからです。これはその模様を詠った好一句であります。

「駄作ばかりを立て続けに並べて見ましたが、四十句を越すと、流石に皆様も御退屈されたかに見受けられますので、この辺りでお茶を濁しておきたいと思ひます……さてバトンはステツキ氏へでもお譲りするとしますか——」

こういって、パイプ氏は喉の渴きを癒やすかのように、泡の消え

たビールを一気にのみほしました。

指名されたステツキ氏は、さればと丹前の襟を合わせて、やおら座り直すと、改たまった調子で口を切ったのです。

第七十八話 柳倉の石子詰め

「パイプ氏苦心の作による、百人一首の替唄は、仲々面白く拝聴しました。事実、百人一首の替歌として、天明の頃に京阪地方では、小野小町の『花の色は』をもじった狂歌が、巷間に流布されていた様で……」

『夷曲集絵抄』によると、姦夫姦婦の私刑として、鼻を削ぐということが、一般に行なわれていたらしく、

『鼻のさきは そがれにけりな いたずらに

わが間男と 長寝せし間に』

と、しるされています。殺してしまったのでは、苦しみようが少ないというので、こうした残酷な私刑が、半ば公然と黙認されていたのでしうか——。

長堀橋たもとの油揚屋の若女房が、手代と姦通したのが夫の知るところとなり、近所の人達も手伝って、寄ってたかつて、この二人を裸にして縛り上げ、豆腐を切る庖丁で、姦夫、姦婦の鼻をそぎ、ついで、二人の下半身に、油揚げをあげる熱い油を浴せかけて、私刑にしたということです。お咎めはなかったとの話です。

姦通といえは『因幡誌』にこんな姦通のお話が出ていました。

因幡国は鳥取の柳倉に、天正年間三劫院という山伏の寺がありましたが、その山伏の妻が、夫の目をかすめて、ある若い男と道なら

ぬ恋に耽り、遂には共謀して夫の山伏を毒殺したのです。やがて、それが露見して、二人は捕えられ、山伏達に引渡され、山伏の掟に従って石子詰め刑に処されました。石で埋められ、息絶えた上に土を覆いかけ、二本の柳をさして印としましたが、柳は年々大きく繁茂し、そしてこの地を柳倉と称したとあります。先年関金温泉のある宿で土地の妓を招いてこの話をする、因幡の老妓は、この話を噛み砕いて、事實はかくやも知れずと語ってくれました。

以下は老妓の話です。」

鹿野城の牛尾春重と密談しての戻り道、三劫院の山伏、勝岩坊は路上に行倒れている若い女にふと足を留めた。若い娘であった。

娘は顔面蒼白、息も絶え絶えに呻いて脇腹を押えて、かがみ込んでいる。

近寄って抱き起して見ると、激しい癪の苦しみだった。勝岩は己れの重大な使命もフト忘れて、この娘を助ける気になった。蒼腿めてはいるが、鄙には稀な美人で年は二十才足らずであろうか――。

もともと好色の勝岩の事である。娘の腹を押えてやり、かつぐ様にして三劫院へと運び込んだ。

その夜、介抱にかこつけて、勝岩は娘を無理矢理、自分のものにしてしまった。

娘は綾といった。但馬の出石で農業に従事していたが、山名宗詮の家来達に荒され、兄と二人で、米子の叔父の許を頼るところであったが、兄ともはぐれ、一人になって道に迷っていて、癪を起したのだと、泣き乍ら語った。

勝岩は、折しも、鳥取城主大蔵大輔豊国に取り入る為、女房のま

つ女を側女に差し出した許りで、空聞をかこっていた時であったから、この美しい綾を、早速強引に女房にしてしまった。

天正八年――、毛利勢の麾下に属する大蔵豊国は、信長の輩下、羽柴秀吉の、因州攻めの報に戦々競々としていた頃である。

山伏勝岩は、鹿野城と鳥取城を頻々と往復して、牛尾と大蔵の彼我の連絡の密使の役を果していた。

鳥取城主、大蔵豊国は、城主に有り勝ちな淫蕩残酷な男であった。時あたかも戦国時代で、血で血を洗う世代とはいえ、豊国は、血を殊更に見るのが好きで、召し出した女に飽きると、これを鬭り殺しにして愉しんでいた。数多の側室と雖どもオチオチと安心はしていられない。気嫌が変わると、いつ何時、殺されるかもしれないから、針の筵に坐る様な女群の心境である。

勝岩が、特に豊国の氣に入って、牛尾春重との重大な密使に使われるようになったのは、勝岩が女献上術にたけていたからに外ならない。彼は山伏の呪術を悪用し、みめよき女を見掛けると、これを掠奪し、彼に靡くまでは、トコトン迄責めつけた。

三劫院の裏の庫裡は、さながら地獄部屋そっくりに、凡ゆる責道具が所狭ましと置かれてあり、勝岩の輩下の悪山伏共にも、あちこちから女を掠わせて来ては、ここで痛めつけ、わがものにしていった。

城主の息がかかっているから、誰もこの悪業に手が出ない。

大抵の娘や若女房は、庫裡の天井から逆さに吊されて、弓折れで擲られると参ってしまうのである。

散々痛めつけ、山伏達の間をたらい廻しされた女は、献上物として、美しい女は城主に、その他、重臣の中村対馬、森下出羽入道辺



りから、城主気に入りの家臣、志妻源兵衛、福光小弥太、奈佐孫吉郎など、好色の家臣へのなぐさみものとして送り込まれて行くのである。明日の命すら判らぬ、戦国の世であつたせいもあるうか——刹那の快楽と、淫蕩に、鳥取城内は、酒池肉林の状態にあり、流石に、本拠の吉川元春や、山名宗詮（豊国は山名の娘婿）は、眉をひそめ、苦々しく思っていた。

豊国の横暴さは、秀吉因幡攻めの声をきくようになってから、特に非道くなつて来た。

彼はとある日、驚狩りの帰途、一人の村娘を見染め、早速妾にしようと思つた処、意外に抵抗された為、怒り心頭に発し、女の足を縄で縛り、己の乗馬で茨道を疾駆して引曳つた。城内に帰りついた時、娘の体は全身血まみれになって、ポロ肩のように転がっていた。

又、一家臣の妻の美しさに眼が眩み、彼女を妾にしようとした処、貞女二夫にまみえずと断わられたので、カンカンになり、夫を櫓の柱に縛りつけた眼前で、妻女の衣類をはぎとり、真赤に焼けた鉄棒を臍から突き通して、背中に貫通させ、焼け焦げる悪臭の中で、更に狂つたように、妻女の首を打落して、その黒髪で、夫の首に結えつけ、高々と哄笑するのであった。

話は戻つて勝岩坊も、この綾を、何れは城主に差し出すつもりで、それ迄の間、女房にして、ゆつくり、虐めて可愛がるつもりであつた。

明けて天正九年になった。秀吉は足掛りとして姫路に城を築いているとの報が、次々と流れて来た。

綾女は横暴なる勝岩坊に、まめまめしく、気に入るよう努め、懸命に仕えた。彼もその情にはだされ、綾には、城での出来事や、毛利家の動静、鳥取城の計画を寝物語に話す様になった。

一方では、勝岩の女漁りは相変らず続き、なびかぬ女であるとき

は、勝岩は、わざと、綾に女の責めをやらせて、自分は傍らで、楽しみに高見の見物を洒落こんでいた。

綾は全然しつとめいた素振りも見せず、いわれる儘に、女に鞭を振り、女らしいやり方で、小柄でチクチク責めたりしては、なびいた女が勝岩に抱かれるのを見て、さりげなく微笑んでいた。

綾は、見張りの山伏や勝岩の許しがなくとも、チョコチョコ町へ出て買物をしたり、所用で三劫院を出たりする様になっていた。

その綾が、町外れで、若い男と立話をし、やがて辺りの納屋へ二人で出るのを、運悪く、輩下の山伏の一人に見つかってしまった。

その若い山伏は、その事を勝岩坊に、すぐ報告しようと思ったが綾の余りの美しさについてフラフラと、妙な根性を起してしまった。

何喰わぬ顔で、二人は辻で別れ、綾はスタスタと三劫院に戻っていった。あとをつけていた若い山伏は、幸い師の勝岩の不在をいいことに、綾に、情事を楯にいい寄ったのである。

綾は思わず顔色を変えたが、さりげない笑顔に返って媚を見せ、深更、勝岩に気付かれぬよう、三劫院の裏の竹藪で密会する事を約した。若い山伏の逸り切った行動を避けもせず、綾女は、頬をなぶらせ、抱きすくめられる儘になっていた。

若い山伏は、下ッ端の自分に、一向に女のお余りの廻ってこない不遇をかこっていたが、今、ここに綾の秘密を握り、勝岩坊のおもいものを掌中に出来る歓びに、有頂天になっていた。

綾は何か心に決する処があった。

その夜も勝岩は、今日かどわかしてきた、十六、七の小娘を膝元近く抱きよせ、綾に酒をつがせていた。

「もうすぐいくさじゃ。それ迄の愉しみ……存分に過ごさしておくべ

きや……」

綾は勝岩の酔顔を、いつになく鋭い眼で見つめていた。

勝岩は、この痛めつけた小雀への愛撫が、何時になく尋常でなかった。

「どうじゃ、僕の女房になるか——。よしよし可愛い女子じゃ。なに、心配いらぬ。この女などは、すぐ明日にでも放り出してやるからの。そろそろハナについて来た折じゃ。領主の餌じきにくれてやるか、それとも、城代様にでも押しつけてやるわ、ワッハッハ……」

綾はその暴言を黙々と聞いていた。浮草のような戦国時代の女の半生である。何処をさすらっても、女の幸福は見出せそうもない現世であった。名ある城主の姫が、人質となり、政略結婚によって否応なくとつがせられて行く時代に、市井の一人の女の生死は、ほんの一束の挿し花にも等しい存在であった。

酒をとりに行く為に、綾は座を立った。そして彼女は一包みの粉末を、酒瓶にサラサラと流し込んだ。今日若者から預かった毒薬である。

半刻後に、勝岩坊は四十六才を生の名残りに血嘔吐をまいて死んでいた。

綾の手に懐剣が握られ、片隅で震える小娘に、彼女はじりじりと近寄っていった。

この儘、逃がしてやり度い気と、秘密を知られた懼れと、女の嫉妬心とが入り乱れていた。計略で近づいた勝岩ではあるが、小娘に見返られたという嫉妬心は、又別のものではあった。

綾の正体——。彼女は羽柴秀吉の部下、蜂須賀小六から、厳命を

受けて、因幡に潜入した女細作（隠密）であつた。

女細作は肌身を提供し、体を投げ出して秘密を探ることにある。

山伏勝岩が、毛利の重臣牛尾春重と、鳥取城主大蔵豊国の密命配達人である事を、承知で、綾は醬油をのみ、頬をよそおい、うまく彼の思い者に納まつた。

肌身を許すのに鳥肌立つ想いであるのも、必死にこらえ、心は絶えず、毛利家や、大蔵大輔、又、鹿野城の動作を探知していた。

数カ月辛抱して、勝岩の警戒心がゆるむのを待って、綾は町に出秘かに同僚の若い細作に密書を手渡していた。

若い細作は蜂須賀小六の輩下で、坂越仁三郎といつて、綾とは恋人である。

坂越は、自分のお館の命令の為、心ならずも愛している綾が、日夜、好色山伏にもてあそばれていると思うと、腸の煮えくり返る想いであるが、主命とあれば致し方ない。

町外れの納屋の一隅で、使命の交歓と共に、切ないひとときの愛情の交歓を交し、互いの愛情を確かめ合っていた。

綾のこれからの動きは重要であつた。だからして彼女は、今、眼前に打震える小娘の処置に迷っていたのである。

そして綾は遂に人情に負けた。

懐刀を鞘に納めると、綾は小娘にいった。

「早くここを逃げてお行き。生娘の儘で居られて、本当に幸せな娘だよ……。さあ、どこへでもお行き。逃がして上げる代り、ここで見たことを滅多に喋べっちゃいけないよ——」

綾は身をひるがえして、身支度を整え終り、素早く短けいの灯をかき立て、手早に何かしたためると、それを懐深く入れて、小娘の

手をとると表へと出た。輩下の山伏達はこの椿事を未だ誰一人気付いていない。

三劫院の門前で小娘は闇に紛れ、綾は数歩歩いて、山門の築地の土塀の割れ目に、そつと結び文を入れた。

「もう一人抹殺せねばならぬ——、あいつだ」

そのあいつに逢う為、綾は山門添いに、築地の土塀を廻り、スタスタと足早に、裏の藪に消えた。

案の定、若い山伏某は、首を長くして綾の来るのを待っていた。

四月半ばの風は、未だ冷めたかったが、カツカツと燃えている山伏にとって、それは快よかったに違いない。ムズと綾を抱くと、竹藪に押し倒した。

もそもぞと帯を解く手、そして武骨な手が、綾のなめらかな肌に這いづり廻った。

激しい息遣いが、綾の頬をかすめた時、ギャツと一声、若い山伏はのけぞった。

結び文で急を知った、坂越仁三郎の刃が、深々と山伏の背から脇腹を割っていた。

既にその頃、秀吉の出陣を裏書するように、見馴れぬ兵船が、播磨灘を東から西へと、魔物の如く疾走していた。

× × ×

蜂須賀小六の顔は暗かった。坂越仁三郎が今少し、毒薬を手渡すのを遅くしておれば、或いは綾は、勝岩坊の手を離れて、鳥取城主大蔵豊国か、或いは重臣の手に移っていたかも知れないのである。

恋する男は、いとしい女の状態を見るに見かね、少し早く渡しすぎた嫌いがあつた。山伏勝岩坊の一人の死は、因州攻めの大望から見

れば、ほんのチンピラ一人の殺しにも等しい——と小六は思った。

「急拠、大蔵に近づけ——」

岡山で使命を受けて、二人は再び、鳥取へと帰した。戦乱は、若い男女の愛情も、まるで虫けらの様にふみにじってしまうものであろうか——。

しかし事態は、三劫院勝岩坊の毒殺、それに竹籤での、若い山伏の死によって、二人にとっては極度に悪化していた。

姿を変えて別々に入国したが、二人は同じ日に、山伏によって捕えられてしまった。

毛利側の細作が、街道筋を網の目のように張っていたのである。

大蔵大輔豊国は、憎悪に血走った眼で、引き据えられた二人をにらみつけた。

「こやつらの、舌の根を引き抜いてでも、有体に吐かせよ——。一寸だめし五分刻みに鬨り殺してくるわ……」

坂越仁三郎と綾は、舌噛み切られぬように、舌の根を棒で挟まされて口に縄をうけた。

城内の仕置蔵で、二人は代る代る言語に絶する拷問を受けた。殺さぬ程度に、幾ら責めてもよいといわれているから、敵方の間者奴と許り、二人は残虐きわまる責めに昼夜を問わず、さいなまれた。

坂越仁三郎の両眼は既にえぐりとられて、白い骨が血膿に交って覗いていた。鬻逆りにされて、引きちぎられた毛痕から吹き出すとす黒い血が、点々とこびりついて、手足の十指は、切りとられて既になかった。辛うじて息をするだけの状態に変わり果てていたのである。

綾女の方は、女の恥かしめを重点に拷問は加えられていた。

城の大手門の真中に杭を打ち、素肌を荒縄で犂々と縛り上げて杭につなぎ、無惨にも、股一杯に開かされた両足首は五寸釘でつらぬかれて地面に打ちつけてあった。

馬糞を顔に投げつける者、小便を頭からひっかける者、黒髪を引きちぎって行く者、砂や石ころを投げてゆく者等々……。

綾を激昂した連中が殺さないように、見張りの雑兵はついているが、これらの残酷きわまりない私刑を、ニヤニヤ笑って止めようとしなかった。

更に綾女は、櫓から堀へ向って空に高々と逆吊りにされていた。

その逆吊りを仰いで、山伏の一群が、豊国侯の前に伺候した。

「山伏の作法によりまして、両名の息あるうちに処刑致したく存じますので、何卒御下げ渡し下されたく……」

城主は処刑の方法をきいてうなづき、これを諒承した。あと幾許もない余命としたからである。二人は共に遂に一言も白状しなかった。何れにしても、仁三郎と綾の身には、死が大きな口を開けて待ち構えていた。

山伏は作法通り、二人を石子詰め刑に処することになった。因州全国に召集して、山伏は三劫院に続々集った。

作法通り、血塗みれの二人を井戸の側で洗い終ると、二人を後手に荒縄で縛り上げて、三劫院の前庭に引き立てて来た。

庭には大きな二つの穴が掘られてある。

山伏の頭領が罪状を読み上げる。

女は夫を毒殺した上、男と情を通じた姦婦であり、男は夫あるを知ってその妻と通じた姦夫であるとして、掟通り石子詰め刑に処すというのである。特種階級である、山伏の私刑が、世上に公然と

通用していた時代であったから、私刑を見に集った老若男女も、誰一人として、これを理不尽と感ずる者もなく、一様に、珍らしい石子詰め模様の息をつめて見守っていた。

縄尻をとった山伏が、二つの大きな穴の端へ、それぞれを立たせると、更に体の入る穴へ入れる。先ず最初は男は肩、女は乳房から上だけ出して、その下は石で埋めるのである。

綾は石で埋められた下半身が、徐々に凝血し、シンシンと冷えて行くのを、乱れた心に感じとった。短かい二十一才の女の半生の、余りにも数奇だった事を、反芻していた。

やがて、この頭は打砕かれ、乳房は血にまみれて石に埋まってゆく事だろう。

仁三郎と、ほんのひととき、藁小屋で逢瀬の、あの身も心も焼けつくす女の悦びが、きれぎれに綾の脳裡をかすめた。その恋しい人と数歩離れて、今、二人は同時に息絶えようとしているのだ。それでいいのだ。これが女細作として与えられた最後の運命なのだ——綾は涙が頬に糸を引くのを覚えた。

三劫院の釣鐘が大きく鳴り響いた。

処刑の時が来たのだ——。一瞬場内はざわめいて、穴をとりまく多数の山伏の手に手に、大小の石が握られた。

二つめの鐘と同時に、石は雨あられとなって穴にふりそそいだ。最初の数個を、綾は頭にうけて意識を失っていた。恐らく仁三郎とて同じ事であろう。

見る見るうちに顔も肩も、乳房も、形がなくなるまでに打ち砕かれ、最後の呻吟が止まって、やがて、綾の髪の毛までが、石の中に完全に没し去ってしまった。

山伏達は、大きな穴が殆んど石で埋まった上に、更に土を覆いかけ、二個の土饅頭をつくり上げた。目印に山伏の一人が冥想したあと、柳の小枝を一本づつ差した。

後年柳は太木となり、この地を柳倉と称することになった。

蛇足乍ら、この天正九年の八月、大蔵豊国は秀吉に降参を申し込み、進んで人質となって出た。鳥取城には直ちに、毛利直系の吉川経家が入り、寄手を散々悩ませ、最後は兵糧攻めにあつて、馬畜はおろか、遂には人間同志共喰いまでして頑張りつづけ、立派に切腹して果てた。豊国は降参後、不遇が続く狂い死にしたといわれる。

「……と、『因幡志』の、姦夫姦婦の石子詰め姦通の処刑談を、老妓は盛り沢山に精しく話してくれたのです。奈良にも、鹿を殺した刑として石子詰め遺跡がありますが、どの地が発祥か知りませんが、兎も角、こうした、凄惨な私刑が、あちこちで行なわれていた事は事実です。ではバトンをワイン氏に渡す事にしましょう」ステッキ氏の話は終って、今宵最後の語り手ワイン氏におハチが廻ったのです。

奈良の元林院から出張した芸妓は既に山を降りて、ひっそりと静まった三笠温泉郷の、大きな硝子障子窓越しに、春日の山の中天高く輝やく、月の姿が冷めたく迫って来ます。

では、と心持ち姿勢を正して瞑目のあと、ワイン氏はこう語り始めたのでした。

第七十九話 奴隷販売株式会社

デルクスバー「リヨン」——

静かな雰囲気、洗練されたホステス、マダム桜子の端麗にして魅惑的な物腰し、そして尚、一風変っているのは、女性客の多いことである。

私はボックスに腰を埋める。ウエストミンスターの楕円型タバコをくわえる。間髪を入れず、桜子の舶来ガスライターの炎が鼻先に赤く光る。

ルックスの最低——、マダム桜子の灰白い顔が、夕闇に浮んで見える。

きびきびした才気となまめかしさがミックスしリヨンに通う客の半数以上は、桜子の魅力に吸いよせられるのだといわれている。

「わたし、こんなショーバイ始めたのよ——興味あり？」

さりげなく、桜子は一枚の名刺を私に差出した。

(スレープ・コンサルタント)

「何？ これ……」

「ドレイ……ふふ、分らない？ つまりね、下級な召使い——分ったでしょ。ゼントルマンであれ、レディであれ、お望みとあれば御相談に応じますわ——」

「へえー驚いたね……お手伝ええ仲々なり手のない時代にネ。もう少し精しく説明願いたいね——」

「お店のお客の中にだって、スレープ志願は随分というわ。立派な紳士なのよ。だけど、このお話内緒よ。余り公表しないでネ。興味ある様だったら、スレープの報告書があるわ。二、三読んでいらっしゃいよ——」

桜子はそっとボックスを離れて、眼で二階を指した。私は何気な

い様子で立上ると、手洗の横のカーテンに消え、急傾斜の細い階段を上る。

あたかも私を待つ様に、二階のソファアの机の上に、ホッチキスで綴じた薄っぺらな書類が散らばっている。

私はその薄っぺらな一冊をとり上げる。

「稼働期日、〇月×日より一週間。

希望者 N夫人(三九) 奉仕者 U(三七)

(宣誓)

奴隷R8号の私、Uは人間として勤務致しまするK染織工業KK取締役の職を一切忘却し、一週間旅行と称して、N夫人の奴隷として奉仕致すことを茲に誓います。

週間報告

私のデューティとして課せられたリポートを、赤裸々に報告致します。

第一日、女王様は召使全員に一週間の休暇を与えられ、広い屋敷は女王様と私の二人切りとなり、炊事一切及風呂焚、洗濯、掃除を御用命になりました。

一、私は電気釜の使用方法を間違った罰に、三十回の鞭打を頂戴しました。

二、私は風呂を五六度に湧かし過ぎ、熱すぎた罰に、風呂場において女王様のおしりをのせる腰掛けとなり、一時間マッサージを仰せつけられました。

三、私は女王様の下着の洗いが粗雑であるとお叱りをうけ、その罰に、爾後サポーター着用のみ姿で終日おる様にと命じられました。

四、就寝の際、ベッドの支柱に後手に手錠をはめられました。座地で睡眠をとりました。

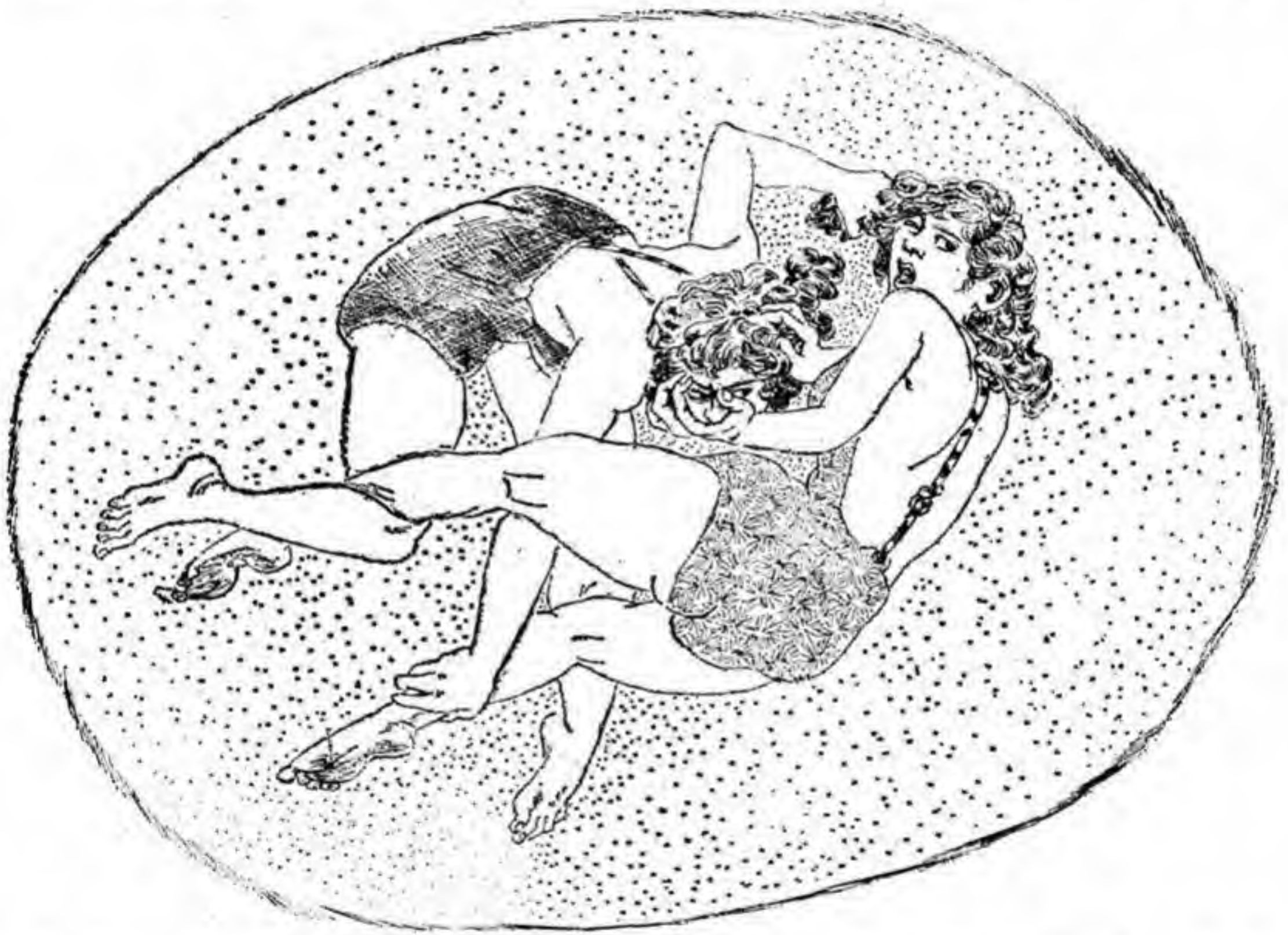
第二日、女王様は朝のお散歩に、庭で私の首に、とげ付首輪をはめられ、犬のジョン様の替りに、鎖で引曳られ乍ら、四つ這いでお供致しました。

一、私は朝食のトーストパンを焦がしました罰に、犬になって、女王様のお投げになるビスケットを口で受け、受け損なう度に女王様は三度、私のおしりを鞭打ちされました。

二、私は女王様のお昼寝の時間中、全身をマッサージさせて頂きました。

三、お便所の掃除がお気に召さず、小用は私を便器代りにお使いになる事に定められました。

四、就寝前、私を荷物の様



にお縛りになり、凡ゆる角度からカメラにおとりになりました。

第三日——私が人間並に洋式便所にて排泄致しましたので、非常にお怒りになり、鞭打ち六十回をなさいました。向後は缶詰の空缶二コをブラ下げる様御命令なさいました。

一、私が不潔で臭いと仰有いまして、昨夜の使い残りの風呂水を頂戴し、洗わせて頂きました。

二、鼻紙をお下げ渡しになり、私はチューインガムの代りにそれを噛みしめました。

三、夕食の和食のおかずがカライと仰有いましてその罰に、一リットルの塩水をのませて頂きました。

四、私は一晩中玄関のタタキで、犬のジョン様の代りに夜番を仰せつかり、冷えて大変床をよごしました。

第四日、朝から私の汚物の清掃を命ぜられ、一切口でする様、仰せつかりました。

一、私が居眠りしました罰に、おしりに三カ所、大きい灸を据えられ、その跡に女王様の唾を塗って頂きました。

二、私がのろいとお叱りになり、十数回尖った靴で、下腹をお蹴りになりました。

三、夜は女王様の奉仕を仰せつかり、午前三時、快くおやすみになりました。

第五日——朝より女王様のお気分勝れ、私をカンパスにお使いになって、体にたっぷり絵具をなすりつけられて、面白き絵をお描きになり、終日その儘でいる様申されました。

一、おひる前頃、毛穴塞がりたる為、身体の異常を恐る恐る申述べますと、私をガレージの前へお連れになって、洗車用の太いホースで全身に水を浴びせられました。

二、下腹が痛むので、腹痛を訴えましたる処、高圧浣腸をなさいますして、腸内をすっかり洗滌なされました。私の腹が、蛙の様に膨張するのを御覧になり、大変お笑いになりました。

三、始めて午前九時に休ませてもらいました。私は犬小屋で休み、代りにジョン様が、邸内で女王様と一緒に休まりました。

第六日——午前九時から午後三時二十分まで、女王様は昼食抜きで、私をよき奴隷になる様飼育されました。暖い芝生の上で、蹴られ、鞭打たれ、松の樹より吊され、いろいろとお責めなさいました。

一、女王様は私の腹に五重丸を、墨黒々とおかきになり、数米離れて、粘土の銀玉のとび出す玩具拳銃で、ピシンピシンと私の胸や腹を射的目標としてお使いになって撃たれました。

二、夕食に私の焼いた部厚いピフテキをお召し上りになり、私は一昨日の食べのこしのスパゲッティを、犬のジョン様の皿で戴きました。

三、夜中しきりに咳をなさりまして、私の口を痰壺代りに御使用になりました。眠れないと申されまして、羽根の先に木綿針を差し込んだものをおつくりになり、私目がけて投げられ、私の体のあちこちに突きささるのを見て、遂々夜明け近くまで輪しました。

第七日——、いかもの料理をおつくらせになり、私はそれを頂戴することになりました。

蟻の佃煮、みみずの照り焼、みの虫の炒め煮、二十日鼠の天婦羅……。

女王様の命令に背いて、私は食しませんでしたので、大変お怒りになり、絶食の刑をいい渡され、今日一日四ツ這いでおる様に命じられました。

夜、奴隷披露パーティをお聞きになり、五人の、女王様の女友達が参集せられ、代る代るに私に鞭を振われ、皆様からまんべんなくネクタールを頂戴しました。

二カ月後に、再びN夫人に女王様としてお仕えする事を約して、私は翌規定時間に解放せられました。

奴隷R8号は、N夫人に充分の御奉公出来なかった事をお詫びしております。」

私は狐につままれた思いで読み終り、別の一冊を採り上げた。

「稼動期日〇月×日及び△月〇〇日の二日

希望者 H(六三) 奉仕者 S(二九)

(お誓い)

奴隷K12号の私Sは、ファッションモデルの仕事をする右の二日間放擲し、H氏の奴隷となりまして奉仕することをお誓いします。

報 告

第一日、H氏の家僕で、屈強なY様が、奴隷飼育係として私を飼育なされました。H様は終始、Y様の飼育振りを興深げに見ておられました。

邸内には私の外、三人の女奴隷が各三年から五年の契約でお飼いなされておりましたが、広い邸内の何処におるか存じません。私は他の奴隷の様に、家事や賤業につかされず、専ら観賞用に供せられました。

勿体ない程大切にされて戴きまして、香水風呂でH様みずから私をお洗いにし、上ると家僕のY様が、私の背に、赤のマジックで、何か記入せられました。

私のトイレは、部厚いプラスチックの透明な楕円型の容器で、テラスにおいてあり、用がすめば蓋をする様になっております。

Y様はH様を御前様と呼ぶ様に申されました。昼食後御前様はテラスにチェアを据えられ、私に庭内の、滑り台、ブランコ、シーソーで遊ぶ様申され、私のお相手はY様でした。御前様はその模様をにこやかに御覧になっておられました。

私が滑り台で下降して尻持ちをつきましたので、御前様はY様に合図なされ、いきなりお尻に鞭打ちを五回頂戴しました。ブランコは幅の広いもので、私は両足を広く左右にふんばり、Y様が強く幾度も後ろから押されて、高々と宇宙に遊べしました。

シーソーはY様が一方に乗られ、私の方には錘りをつけられて、相手の重量を平均にしました。シーソーはなめらかな三角形になっておりまして、Y様が弾みをつけて下降される度に、私は痛みをこらえて、必死にシーソーの把手に噛りつき、思わずドスンと落ちる時に

はお尻を浮かしました。

鉄棒は私の苦手でしたが、Y様は何度もやり直しを命じられまして、とうとう足掛け、尻上り、懸垂をやるようになりました。

御前様は、私の白い肌が汗ばんで、桃色に色づき、全身の筋肉を必死に活動させるさまを、眼を細めて御覧になっておられました。

このお遊びは大変御満足の御様子でした。

第二日——、恰度第一日目から十日後になりますが、私は第一日と同じ様に、御前様のお気に入られてか、夕方まで、庭園で遊戯に熱中しました。奴隷の束縛というよりも、むしろ、外国のヌーディストクラブへでも来て遊んでいる様です。というのは、御前様始めY様も、一様にヌードであつたからです。私はその日も用便を致しません為、御前様は私の排便の様子を見たいと仰せられ、Y様が私を沓腸室へ連れて行き、私はそこで、各種の沓腸を数回にわたって御前様に御覧に供しました。

私のおなかには清々しくカラッポになった感じで、夕食はとても美味しく頂戴しました。

夕食の時、女奴隷三人が御給仕に出まして、彼女達が、一様に美しく、グラマーなので吃驚しました。

食後、広間で、Y氏が女奴隷の飼育振りを御前様にお目にかかけられました。私も陪席する事を許されました。

二人の女が広間中央の丸いジュータンの上に立ち、女相撲、女斗美を致しまして、負けた方が罰を受けることになりました。女達は必死に掴み合い、殴り合い、押えつけて、それこそ爪を立て、髪をちぎり、血斗致しました結果、若い女の方が負けました。

ぐったりと打伏している負けた女の側にY様は近付き、片足に、

輪にした太繩をかけて天井の滑車に繩を通して、ギリギリと引っ張りました。片脚で吊られた女は、宙吊りになって空を掴んでもがきました。

御前様はじきじきに太い革鞭を握られ、吊られた女を二、三十回も強く鞭打ちされました。

許されて、女が床にのびると、勝った女ともう一人の女が、再び激しい女斗美を演じ、この時も、先刻勝った女が再び勝を占めました。

負けた方の女はY様によって、広間の隅と隅に、両手両足を縛られて、空宙に背を上にしてピンと強く引っ張られて吊られました。体が弓なりになって、女は縛られた両手で必死に繩を握ってあえいでいました。

御前様はその体を左右に激しくゆすぶられ、宙に揺れる体を激しく鞭でお叩きになりました。

私がブルブル震えておりますと、御前様は私を振返られ、勝った女を馬にして、広間を乗り廻す様仰せられました。

反抗出来ませんので、汗にぬめぬめした、勝った女の背に跨がり私は御前様がよしと仰有るまで、二度、三度広間を堂々めぐりし、いわれる儘に、鞭を持たされて馬になった女の馬力が鈍ると、お尻を鞭で叩きました。

私は奴隷としてより、客分としてH氏邸を訪問した様に思えます。再びH氏の御用命を期してお待ち致します。」

マダム桜子がいつの間にか、足音もなく私のうしろに佇んでいました。

「どう、御氣に召しまして……」

私は呀々と振返った。

「夢中だったもので気がつかなかったよ——まるで夢物語見たいで……」

「せちがらい憂き世に、こんな夢の様なお話、あってもいいでしょう。でもお互いに条件が揃わないとね。広い邸宅、許される自由、余ったお金……と、こう考えると、仲々条件が揃わないのよ。」

さあ、下へ降りて呑み直しましょう。これからのワインは私の奢りにしますわ……」

急に氣を変えた様に、マダム桜子は私の手をとると、艶ながし目で、ぐっと私の横腹をつついた。脈がないと逸早くにらんだのであろう。ネットと粘りつく様なマダムのしなやかな指を絡まされて私はよろめくように、急傾斜の階段を降り乍ら、刹那、何の関連もなく、先日見た「日本昆虫記」の女主人公を脳裡に浮べたのであった。

こうして、私はアヴァンチュールへ跳び込み損ねた。

マダム桜子は二度と私にこの話をしなかった。その後どうなったのであろうか——。

話し終って、ワイン氏は、膳の上のビールを一気に呑み乾しました。

暖冬とはいえ、三笠の山の冷氣は流石に肌をさす様に、開いた障子窓から流れ込みます。一同は生欠伸をして、今更気付いた様に、あちこちで腕時計を覗き込みます。

寒夜の月は愈々冴え、遙か見はるかす彼方に、東大寺の大仏殿の覺が黒々と、重く大きく沈んでいました。

「女性切腹」についての考察

腹を切る女と腰巻

森 田 敬 三

思いもかけず、奇ク一月号に私の『斬られる女と腰巻』を、二月号には『腰元の切腹』の拙い絵を、発表して下さい、真に光榮に存じます。御一興までに、切腹した女性の絵の写真を、天然色ではありませんが、ネガのまま御送りします。

現実の切腹は、中康弘通先生の御説の通り厳肅かつ悽愴なものでありましょう。然し此処では、単に頭の中にえがく麗わしの像として扱いたいのです。

今しも、女賊に扮して短刀片手に舞台一杯に暴れ廻っているのは、女剣劇の座長水島早

苗、やせぎすの美事な裸身に真紅の腰巻一枚です。やがての程に、その短刀を、腰巻の上から下腹へグサリ

「ああ……」

と悲鳴、硬直して立つことしばし、短刀をグイと抉って再び

「ああ、ああ……つつつ……」

長く尾を引く悲鳴、身をもんで仆れると呻きながら右に左に転がって、赤い腰巻の間から見せた白い双膝を、恥かしそうにぴっちり合わせたまま、刺さった短刀の柄をしっかりと握って絶命の風情――。

もう一人、切腹ではないが、操守るため上役の武士を刺殺して多勢の武士に囲まれた武家の妻が、今はこれまでと手にした短刀を左乳下深く刺すと、悲鳴と共に倒れ、一転して仰向けになり、片膝を立てたため忽ち裾が開き、ばあっと四辺一面に火がついたように真赤な腰巻が、燃えて、そのままこと切れる様子です。

追い詰められての自害という悲惨な場面なのに、何という美しき艶かしさ。幾年を経た今日も忘れませんが、この艶かしさは、実にその赤い腰巻の為せる業なのです。これがマ

ンボズボンか、或いは和服でも、ラクダ色の裾除けだったら、別に艶かしくもなかった筈です。

女性の切腹は小説にも甚だ少なく、演劇でも、切腹はおろか、自害そのものを見せるこ



とが殆どありません。僅かに「奇ク」か「裏窓」が取扱っているに止まり、それだけに稀少価値の高いものでしょう。ただ、少し変に思うのは、そこに扱われる切腹女性に洋装が多いことです。切腹が日本人独特のものである限り和装が当然であり、第一、服装の美術的価値から見ても、洋装と和装とは問題になりません。美しいことを最高の名誉とする女性がその「死」にあたって、最も美しいキモノ姿を選ぶのも当然でしょう。

そして和服には赤い腰巻が最も適当です。私は切腹の経験は未だないが、手術の時メスが肉を切る傷は、恰度厚いテントを切れない鉄を押切るような音でした。あのような音を立てて、死を急いで自分の愛しい下腹部を切り裂く女性の、恥かし気に縛った膝前に、チラリ覗かせた赤い腰巻こそが、彼女に色気を充溢させ、真に女性らしく見せます。つまり、切腹という殺伐な自虐にも、赤い腰巻の色気が加わってこそ、彼女は美しいのです。切り終えて急所を刺し、倒れて悶える白い脚にも、緋の腰巻が終ります。そして絶命。流れ出る鮮血は凄愴な割腹の苦痛を象徴し、乱れる赤い腰巻、白い脚は、女性の羞らいを象徴します。艶か

しい限りです。

私の「腰元の切腹」も、この心算で描いたので、御殿女中の腰巻は、史実の通り白くは色気がないので、ここでは赤くしました。

写真が甚だ不鮮明な上に、天然色でなくて残念でしたが、一人は脇差で腹かき切って腸を露出し心臓を刺し、仰向けに倒れ、裾踏み開いて緋の腰巻に包んだ双脚を、羞かしそうに固く合わせ、口から血を出して絶命。いま一人は自分がそんな姿にならないように、膝を固く縛って大刀を下腹にグサと刺し、

「あうっ……」

と声をあげた瞬間で、やはり膝前に見せた赤い腰巻が、緑色の矢がすり模様映えて、実に鮮やかで、自分で眺めては満足しています。勿論これは、滝れい子先生の「腰元の切腹」を真似たものです。

赤い裾を乱し、身をもんで居る切腹の姿勢に変えて見ると、何とまあ美事な、苦痛と羞恥で一杯の女体切腹になります。日本人ならでは味わえない、キモノならでは表現できないエロチシズムです。

滝れい子先生に深く感謝します。先生の女体切腹画は、死の悲惨を補って余りある程の色気が、その赤い腰巻を通じて、全画面に漲

っているからです。「さしむかい……」「武家娘の自害」「十五夜」「妊婦の切腹」等々みなそうです。挿画の方も、法谷四郎氏「切腹曼陀羅図絵」の十八才のまみ女、佐藤すみ子様の「春浅き日に」の文江、中康先生の「会津娘子軍」の十六才の少女等々。女性にとっては死ぬほど恥かしい、話にも見せてはならない赤い腰巻が、割腹の激痛に覚えず、乱される、それが、如何に彼女たちを美しく艶かしく見せているでしょう。以前「私の切腹」と題して、三度に亘って、実際に血を流す裸身に腰巻一枚の切腹写真を出された須賀綾女様、流石に腰巻は白色でしたが、ぐっと胸に迫るものがありました。同じ滝先生の筆でも、パンティ一枚の女の切腹は、どうも頂けません。女性としての嬌羞が足らず、また時には西洋人の感じをさえ受けるからです。

さて切腹写真ですが、これはまた不思議な程に、誌上にも、分譲写真にも、腰巻が殆ど見当りません。ただ例外として、愛川悦子嬢の三枚続きの写真が、長襦袢に桃色の腰巻の下に純白の褌という姿で、艶めいて見えた他は、東浦ひかる嬢の切腹が浴衣の下に腰巻、但し、この腰巻は碁盤模様で、赤ではなく、どうも色気が足りません。大塚嬢の和装切腹

は、悲愴感に充ちた傑作ながら、やはり色気が足りません、腰巻がないからです。実際の切腹には、自虐的な悲愴美だけで、色気は無いかも知りませんが、プレイとしては色気が充溢していないと面白くありません。梨花嬢の「連続血紅切腹」も、折角の和装なら、パンティでなく腰巻であるべきです。要するに、これら洋装、或いは裸身の切腹写真に共通な欠点は、余り大胆に裸体を露出し過ぎて、女性の美の根源である嬌羞が、甚だ欠けていることで、これでは女性の価値はありません。嬌羞を示す最良の方法は、着飾った和服の、赤い腰巻を乱すことです。

現代でも、和服女性が腰巻或いは裾除けを使用しないことは絶対になく、若しパンティの上に直接長襦袢や着物を着る女があったとしたら、それは婦人雑誌も読まず、誰の指導も受けない非常識者で、着付けは崩れてしまいます。況して時代物では、一切の衣服を脱ぐ場合でも、赤い腰巻だけは決して素肌から離しません。女優さんたちも、時代劇では、必らずノーパンティに赤湯文字でないと、嬌羞を含んだ愛らしさが出ず、演技にならないそうです。それに、ブロースの



無かった当時、腰巻なしで自害するような、だらしの無い女は居ません、恥かしくて、とても死ねない筈です。むしろ、素肌に赤い腰巻一枚でなら、切腹もできるでしょう。実際に雪白の肌に、真紅の腰巻一枚で腹を切った



という記録も読みましたが、惨烈、凄艶の限りでしょう。

日本女性以外は着ることの出来ない。世界一美しいキモノの美の焦点が、糸の仙人にさえ神通力を失わせた、その赤い腰巻にあるこ

とに、誰しも異論はないでしょう。豪華に着飾った姫君や芸者などが、赤い湯文字、白い足を乱して、切腹、苦悶で絶命する姿を、是非写真にして頂きたいものです。

田地厚規郎氏の「切腹実見記」、大竹武雄氏の「切腹心中体験記」などには、写真らしく、正直に腰巻が登場しますが、小説になると、腰巻という言葉が殆ど出ません。

特に女流作家は、これを避けて居られます。例えば瀬川泰子女史の「初夜の誓い」会津の某家に伝わる家憲で、初夜の床込りに先立って花嫁が、新郎の見守る前で腹巻の上から、紅絹糸一筋を残す程度に一文字に切る。これは、今までの生家に居た自分は死に、新たに婚家に生まれ変わるという意味ですが、同時に彼女は切腹プレイの味を知り異常に興奮します。そして、子のないままに、互に深く愛し愛されて悔いなく過ごした四年の後に、会津成辰の役（会津落城）となり、還らぬ夫の後を追って哀れ二十才の若妻は、初夜の誓いをそのままに身を焼く激痛に耐えて腹一文字に切り、左乳下を刺して見事な自害をとげますが、袴、腹巻、帯等々と詳細に説明されてゆく着衣の中に、腰巻は全然出来ません。膝も

縛らず裾の乱れもなく、要するに色気がないので。

藤村陵子様のプレイも、腰巻も用いず膝も縛らず、山田久仁子様の「切腹レポート」にいたっては、腰巻はおろか、和服が出て来ません。皆川波留子様に限って、素肌に腰巻、浴衣だけで実験されたお話があって、大変嬉しく感じました。なる程、皆川様の言われる通り、本当に深く切腹するには、形の美しさは期待できず、帯も腰巻もゆるめなくてはならないかも知れません。すでに羞恥は意識の中に無いかも知れませんが、赤い腰巻を羞じらう日頃の習性が、動作となって現われる筈です。

私が時々自己流に描く女体切腹の下手な絵も、一人残らず和装で赤色或いは桃色の腰巻を、必らず見せています。裸身の場合もパンティでなく腰巻です、女性の裸体は腰巻姿こそが、最も自然でしょう。熱帯地方の土人でさえ、男性はふんどし姿でも、女性は腰から下をスッポリと布で包んでいます。さて、この腰巻の扱い方が実は最も難かしいので、昔のように引き裾の着物なら座った膝前にチラと腰巻が見えても不思議ではなく、そのまま膝を縛った切腹の姿勢にできますが、現代の

短い着物では、膝を縛ると全く湯文字は見えません。その時は双肌脱いだ腰の処に、少し腰巻の上端を見せるか、倒れかかる瞬間、思わず踏み開いた裾前に、チラと赤い湯文字を見せるかでも、相当に艶かしさが出ます。男性の切腹では、膝前を開いて純白の褌を見せる方が色気があるようですが、女性の場合、余り大胆に立て膝になったり、膝前を大きく開いて、赤い湯文字の間から白い内股を見せるの切腹は、反って色気を失います。それは、女性が最も恥かしい部分を、恥じて居ないように見えるからで、赤い腰巻や白い脚はあく迄見せまいとする意志に反して見える処

に万斛の色気が漂うのです。実演の、立ったまま下腹をグサと刺し、悲鳴と共にもんどり打って倒れる瞬間に、ぱっと翻る真赤な腰巻などには、ゾクリとする程の色気を感じます。切腹し終えて倒れ伏し、七転八倒する場面、或いは、すでにこと切れている場面は、切っている場面よりも腰巻が大きく乱れます。この際、どんな気丈な人でも必ず悶えて裾は乱すものですから。然しここでもまた、膝を縛って居ると否にかかわらず、やはり内股を固く合わせて、女性の羞恥を表現しないと、折角の赤い腰巻、白い脚も、まるで色気を失ってしまいます。

切腹愛好者の皆様方の御意見は如何でしょうか。「切腹フォト評判記」の南方純氏は、「パンティをつけたままの切腹などはいただきかねる」と言い乍ら「長襦袢で前の乱れを両足でおさえるなどあぶな画じみて面白くない」との御意見です。然し、あぶな画に似た歌麿の画が、あれ程の人気を呼び、芸術品として高く評価されるのも、それが真実に人々の心理をよく表現して居たからでしょう。若しエロチシズムの必要が全然無いなら、女性切腹の写真や絵は無用であると思いますが如何でしょう。

(完)

倒錯の夫婦生活

交替日の私

西村 憲 一

机の上を片付けて私は煙草を吸い付けた。

退社間際の慌しい室内を見て居ると一つ向うの電話が鳴り出し、隣の加山が取り上げた。

「おい、啓さん電話だ」

と私を振返って電話器を引寄せて呉れた。

「もしもし」

受話器を取った私の耳に「どうぞ」という交換手の声に替って

「もしもし、貴方？」

妻の政子の声が流れて来た。

「なんだ、お前か」

「失礼ね、なんだなんて。まだ済まないの」

「済んだよ」

「直ぐお帰りになるの」

「昼食を食べてからだ、お前は」

「私ね、お友達と一しょなの。映画を見て帰ります」

「なんだ、それで電話したのか」

「ええ、でも晩迄には帰りますわよ」

「当り前だ」

「貴方、今日は交替日よ、忘れないでよ」

「あ、そうか」

「それ御覧なさい、だから電話したのよ」

「家には何かあるのか」

「別にないわ、お買物して帰ってね」

「はい、はい」

「お気の毒様、じゃお願いしますわよ」

受話器を置いたとたん正午のサイレンが響き亘った。

「おい何をにやにやして居るんだ、今晚付合わないか」

加山が牌を並べる手付をした。私は態よく断って食堂へ行った。食後、デパートへ回って買物をし、両手に買物包みを抱えて帰ったのは二時前であった。

私達の家は甲子園の住宅地に在る。小さい乍らブロックの塀を巡らした、庭もある自分の家であった。結婚祝いに九州の兄が親父の遺産で買って呉れ、東京に居る妻の父が娘の望む儘に改造した使い良い住いであった。私の名は佐伯啓三、三十一才。妻は政子二十八才。

結婚四年二人の間には未だ子供はない。一年目から妻は伯父の会社へ勤めて居る。昨年の始め、私達の間に倦怠期が訪れたが、お互の愛情と異例な遊戯に依って克服する事が出来たのである。

家に帰った私は表を閉め直ぐ風呂の準備をして掃除を始めた。電気掃除器をかけた後を雑巾で拭き、庭も綺麗に清掃して落葉を焼い

た。

掃除をして居る間に風呂は沸いて居た。裸になり脱ぎ棄てた衣類を所定の場所へ納めて買物包みを開いた。薬品売場で買って来た脱毛クリームを腕と脛へタツプリと塗り込む。硫黄臭い臭気が鼻孔を刺激する。手を洗って買物の品を台所へ運んだり戸棚へ納めたりして風呂へ入った。薬を洗い流すと女の手足の様に綺麗になって居る。湯に入って丹念に体を洗い、顔と衿首に剃刃を当て眉を整えた。髭の薄い私は一年前から毛抜で抜いて居る内に剃刃の必要がなくなつて居た。

小柄な色の白い私であった。子供の頃美少年の部へ入れられて居た位である私の膚は肌目が小さくなめらかでもあった。

浴槽の中で私は自分の肌を楽しんで居た。此れから私が行い又私に行われるであろう事を想像し、空想して……。

先程、妻が電話で、「貴方、今日は交替日よ、忘れないでね」といった時、私は忘れて居た様な返事をしたけれど決して忘れては居なかった。それ所か今日の日を期待して色々な準備をして居る私であった。私達の交替とは家事の交替ではなく夫婦男女の交替なのである。月二回土曜から日曜を妻は夫に、夫は

妻になつて生活するのである。家事は勿論の事、姿も言葉も凡ての行為を転換して暮すのである。

始めの間は照れ臭く恥かしく誇りを傷つけられる様な氣もしたが愛情を基幹とした夫婦双方の理解と信頼さえ忘れねば問題ではない事を、私達は知つて来た。私の場合、女装は兎も角、言葉には参つて了つたが今日では聲を変えざる事は出来ないが對話には困らない。

私がうろうろして居る時、妻は自分がいい出した丈あつて直ぐ男の態度、言語、仕草迄大胆に実行して私に君臨したものであった。第一と第三の土、日を交替日と定め昨年の四月から実行したのである。

元来私は女の和服に興味を持って居た。幾本かの紐や帯で形造られて行く数枚の美しい着物の着付の姿に。私は着物のよく似合う女



性を見れば強く惹かれるくせがあつた。

私の肌へ妻の衣類を付けた時、柔かい絹物の感触は私の心理を異様に攪乱した。始めの内、して貰つて居た着付も自分で出来る様になり、似合うという事より色彩を合せる為に小物など買集める楽しさも覺えた。

妻と私の身長は余り違わないのだが、男の肩巾がある為か着にくい事を知つて、私の寸

法に仕立てる様になり、私は私が必要する女物を、妻は妻の男物をそれぞれの小遣いで作つて来た。動作と言葉は私の場合特に具合が悪かつたが（人生は演技なり）と私流に割切つてから案外征服出来た氣がする。電車でも歩道でも無意識に女性に注意して研究する様になつたお蔭でもあろうか。当座は当然出費が続いたが一通りの物が揃つてからは、此の事を行う以前より小遣いが減つて居る事に私は氣付たものである。

私達は幸福であつた。

浴槽から上つた私は練白粉を解いて湯化粧した。水で洗つて余分の白粉を落とすと全身を拭いて浴場を出た。

入る迄して居たパンツはもう要らない。

私のものであるピンクのお腰をして鏡台を開き臉から頬へ紅を刷いた。パフにたっぷり粉白粉を含ませ顔、首、背と湯化粧の上を叩く。眉を画く、眼ぶちへ墨を入れる、口紅を小さ目に濃く付けてガーゼでならす、生下り

へ書き足して洋髪の髪をかむると鏡の中へ私でない無性格の美女が生れて居る。

湯上りとはいえず少し肌寒い、暑いといつてももう十月なのだ。

ブラジャーへパットを入れて付け乍ら時計を見れば三時五十分、陽は未だ高い。

藍の香の匂う浴衣へ手を通し、お腰をも一度締め直した。浴衣の襟を合せて腰紐をし八ツ口から両手を入れてからげを出すと共に衣紋を抜き衿を整える。腰紐を結んだ上へ伊達じめを締め、単帯を一寸折って二巻きし、帯揚げも帯じめも使わず無難作に結んでサロン前掛をした。

姿見の中へ美しい女の私が出現して居る。手拭で姉様かむり、腰紐で袖を襷に取って台所へ立つ。

買い置いてある物、買って来た物等私はこま目に立働いた。次々に出来上る物を或は戸棚へ、或は冷蔵庫へ、構わない品々は食卓へ並べて覆いを掛けた。裾を端折って紅いお腰を出した私をもし人が見たら何と思うだろうか、門から庭へ水を打った。風呂の加減を見る、もう帰って来る頃だ。

奥の間へ床を伸べる。シーツを替え枕を並べ、枕元へスタンド、灰皿、マッチ、煙草、

水差し、塵紙等私は色々と気を配った。

夫となる妻の身丈に仕立てた男物の浴衣へ単衣を重ね着にして衣桁に掛ける、足元の乱れ籠に兵児帯と三尺を揃えて。

私の心は浮々として夫の帰りを待つ妻のそれに違いなかった。私は立居に膝を割らず、臂を体から離さぬ様にした。そうすれば自然女らしい優しい動作になる事を知って居た。

つるべ落しという秋の陽は早や落ちかかり室内は薄暗い、電灯を付け乍ら仕残した事はないだろうかと思ふへ注意した。

夫は未だ帰らない。

一生懸命に動き廻ったせいか体が少し汗ばんで居る。姿見の前で襷を外し頭の手拭を脱いだ。顔にも脂が浮いて居る。

着て居るものを脱いで浴室へ入り肩から湯を浴びた。何杯か浴びてから丁寧に拭いて出ると、新しい薄紅の羽二重のお腰へえんじの縮緬のお腰を重ねてした。私は腰巻に紐をつけない、紐を付けると帯をした時邪魔になるからだ。

下の方に結び目は無い事が一番だ。付けなくても落ちる心配は絶対ない。

鏡に向って化粧を直す、手鏡で後を写し衿足と髪との調和を見乍ら耳の手入れも。

肌襦袢は着ず素肌に朱色無地の縞の長襦袢を着る。半衿は水色変り織り。腰紐を高目に締め結ばずに両方へ挟む、衣紋を大き目に抜いて襟は深く合せ同じ柄を二本縫いだ伊達巻を胴がくびれる程確りと巻き締めた。

幾ら粧って居ても一皮剥けば男なのだ。

その正体を現わさない為には長襦袢を着崩れさせてはいけけないのである。尚長襦袢のからは出してはいけけない、着物の形を崩すし不恰好でもある、伊達巻の下へ入れて了えば良い。腰紐も同様である。対丈に仕立てるに越した事はないが衣紋の深淺に應ずる為には伊達巻の下に締めるか、伊達巻をし乍ら引抜いて了うかである。

縹緲の後衿、胸、身八ツ口へ香水を振る。

同じ縹の青い着物に私は袖を通した。十月なのだから単衣か袷で良いのであるが此れから行われるであろう事は冬でも汗をかくのである。成可く薄着にして居たい私であった。又他人の前へ出る私でもなかった。

左の踵で背縫の端を踏み襟を合せる。下前の衽先を外へ折り腰骨の上へ当て上襟を引上げて腰紐を締めた。八ツ口から手を入れてからがを揃え姿見に写して後襟を合せる。胸元を整えて高目に腰紐を結んで伊達じめを締め

た。博多帯をお大鼓に品よく締める。帯揚げはピンクの絞り、帯じめは縁金の平打である。

白足袋を履いて脱ぎ散らした物、取り散らした物を片付け、鏡台の上を整理する。

時計が七時を打ったのに、今宵の夫は未だ帰って来ない。

私は再び姿見の前に立つ。立居に不自由はなく、全身に緊迫感が快い。絹物の感触、絹ずれの音、動く度に視野に入る色彩等が私に女である事を教えて呉れる。私の躰には一本も一枚も男を感じさせる物は付いて居ない。髪油の匂い、白粉の匂い、香水の匂い女性の香ならざる物はない。私は鏡の中の女性を眺めて飽きなかった。恍惚として痴呆の様に。時計は七時半を報じた。家の時計は三十分の時、一点打する。

夫は今頃迄何をして居るのであろう、まだ映画を見て居るのかしら。私は女の悲しみを感じて居る。しかし反面帰って来て私をどんなに扱うであろう、何んな暴君振りを発揮するだろう、私の心はその期待に妖しく疼いても居た。今夜から明日一日、夫の随使に服従する私なのだ。どんな命令にでも。

夫の胸から腹へ巻締める晒木綿を私は忘れて居る事に気付いた。簞笥から取り出すと締

良い様に巻き直して、衣桁にかけた夫の重ね着を袖畳みし乱れ籠に一しょに入れて脱衣場へ運んだ。ついでに湯加減を見、ガス栓を開く、夫は熱い方を好むから。時計は八時を報じた。

私は少し心配になって居た。何かあったのではないか、事故？誰かが、何処の妻もが感じるであろう不安に捉われて居た。万一の時斯んな恰好では、何うしよう、脱いで了おうかとおいつ案じ乍ら風呂のガス栓を閉じて居た。

でも何事もなかったら？ 私は再び居間の鏡の前に立った。鏡台の覆布を取り姿見と向き合わせてあわせ鏡にして写して見た。

前後の姿は慾目かも知れないけれど不自然とは思えない、だが衣紋を抜き過ぎて居り、化粧も濃過ぎる。でも夜だもの構わない。私は此儘で居よう。或いは私を心配させる為かも知れない。夫を待つ人妻の心を思い報らせる為に。

私は空腹を感じた。昼食丈でお茶も飲んで居ないのであった。何本もの紐や帯の圧迫で感じなかったのであろう。

夫は恐らくもう食べて居るであろう。自分が空腹でなかったら帰って来た時の心次第で

私は食べる事が出来ないかも知れない。

お酒でも強いられた時は直ぐ酔って了う。食卓の物ではなくその残り物で私は箸を取った。軽く二杯少しも美味しくはなかった、空腹を満たした丈であった。待てど帰らぬ夫を諦めて深夜一人箸を取る女の味気なさを味ったのである。抹茶を点て、喫し膝の上で茶碗を楽しんで居ると何とはなく淋しかった。

テレビも見る気は起らない。又しても鏡台の前に座った私は、パフで鼻の上を叩いて居た。練白粉の湯化粧はしつとりと落付いて陶器の様な肌に見せて居る。慾目ではなく美しいと思った。矢張り男の力なのか着付は聊かの乱れもない。八時半は早過ぎて居る。

世の妻達は此様な場合、どうするのであろう、繕い物が編物か、家事に際限はないであろうけれど、此の焦燥感に変わりはないであろう。

ふと思いついて私は日本製の髪を取り出した。昨年末のボーマスで作った物である。

箱から出すと髪付油特有のセクショナルな匂いが居間に拡がる。水色鹿の子の手柄が艶めかしい。私は襟をかけ膝にビニールを開いて一端を帯じめに挟んだ。前髪の元結を替えて差櫛で髪をふくらし乍ら刷子で油を塗って乱

れを直した。襟白粉で汚れ枕で崩れた髪は仲々手間が掛った。暫くの手入れの後、良質の練油をたっぷり吸い込んで、見違える様な色艶に変わって居た。私は洋髪の髪を脱いで冠り替えた。丸髻の艶やかな女房姿であった。暫くの間見惚れて居たが再び洋髪に替えた私はそれを片付けて了った。

手を洗いに立ったついでに居間の障子を開け放して夜気を入れた。庭に降り快い夜気を胸一杯に呼吸した私は広くはない庭を歩き廻った。時々門外を自動車が行き過ぎる。

歩く時膝と膝を離さぬ様にすれば自然内足に歩ける。内足の方が裾さばきも良く着付けも崩れない、膝を離さぬ為には足を少し曲げなければならぬが曲げる事に依って和服の線は非常に美しくなるのである。



聞いた、しかも誰かを連れ込もうとする。私は反射的に沓脱から戸袋の影に身を引いた。

「でも晩いから今度寄せて頂くわお休み」

相手も女性であった。でも今夜他人を連れ込もうとする心理が判らない。

「寄らないの、畜生」

「ほほは大変な御機嫌ね。旦那様に宜しく」

「旦那様はあたしよ、何言ってるんだ」

「はいはいじゃ奥様に宜しく、左様なら」

「ばいばい」

車は走り去った。夫は門に錠が下りて居る事を知ると鍵を出して差込んで居る。口程酔っては居な

い様子であった。私は台所のガスを付けて居た。

前でブレーキを軋ませて止った。私は直感的に夫の帰宅を感じて廊下へ上ろうとした。

其時自動車のドアが開いて人が降り、

「ねえ、寄って行きなさいよう」

という今宵の夫である妻の酒に酔った声を

玄関に入った夫は戸締りをしながら、

「おーい、旦那様のお帰りだぞ」

と喚いて居る。私は微笑して居た、何事もなく夫として帰って居るのだ。

「はい」

返事はしたが迎えには行かなかった。

「出迎えないな、ようし、後から酷いんだから」

足音も荒く廊下を居間に入った夫は何か抛り出す様な物音をさせて居たが直ぐ浴室へ廻った様子であった。暫くすると水の音が聞え始めた。脱衣場へ脱ぎ散らされた夫の衣服を一品も残らぬ様に片付けた私は鏡台に向って顔を直し、帯揚げと帯しめを締直して衣紋を正した。食卓の覆いを取り料理の器を並べて居ると、頭髮を日本手拭で鉢巻し、兵児帯を巻き付け湯上りの桜色に上氣した美しい夫の姿が眼の前に立った。

「お帰りなさい、遅かつたのね」

「付き合いだ、文句をいうな」

私が直した座蒲団へどっかと尻を落して大威張りの態度である。

「御免なさい」

私は素直に謝った。私は座蒲団を敷かず踵を開いて尻を落して座って居る。そうすれば夫の方が高くなるのだ。夫の視線が全身に注がれて居る事を意識し乍ら私は給仕をした。

食事は呆気なく終わったが洗い物をして居る時、十時半を打って居た。

手を拭いて茶の間に入ると待つて居た様に私を引寄せて唇を重ねた。酒と煙草の匂いを感じつつ私は眼を閉じた。私は妻となる時は煙草を止めて居る。妻の口がニコチン臭いとしたなら夫に取って幻滅に違いないから。

唇が離され私は眼を開いた。直ぐ上で彼の眸が笑って居る。恥し相な態度で身を起す私の襟足へ彼は襲い掛る様に接吻した。擦ったさに身悶えする私を彼は抱きしめて。

私の膝が割れて下着の紅がこぼれる。不図氣付くと彼は帯しめと帯揚げの結び目を解いて居るのである。私は氣付かない振りをして適当にもがき続けた。

夫の腕から解放された時、私の帯は取り去られて居た。乱れた膝元を直して

「まあ、ひどい人」

流し眼に睨む私に笑い乍ら

「邪魔だよ。それよりコーヒーでも入れないか、菓子を買って来た」

帰った時居間へ投げ出した菓子箱を私は此茶の間の茶簞笥へ乗せて置いた。

「ええ、一寸待つて頂戴」

私は伊達じめ姿でサイホンを運んだ。

「ミルクは？」

「いらない」

私達は静かな秋の夜更けを香り高いコーヒーの味を楽しんだ。此れで眠れない事も知らぬ人の様に。

其れから数時間の後、長綿絆一枚にされた私は後手に縛り上げられて廊下の柱へ繋れて居た。

胸を噛む縄目、高手小手に吊り上げられた後手、四分の糸綱は私の肌を苛なみ続けて少しの緩みもない。

乱れた膝の前に投げ出された皮鞭は、さつき迄夫の手に握られて立居の自由も許されぬ私の肌を容謝なく打据た恨みの鞭であり、その横に転ぶ三十粒位の塗料の剥けかけた木の棒はハンガーの横木であるが、一度夫の手に移れば私の縄目に差込んで締め上げる恐ろしい責道具であった。

其れ等に依って加えられた疼痛は今も尚続いて居る。さしもの衣紋も全く崩れて肩も露出し脛ものぞく膝の乱れは、私の跪きと悶えの劇しさを物語って居るのだ。

私は痛みに堪え乍ら柱にもたれた。此れより外動く事は出来ないのである。出来れば此縛しめの儘で良いから横になり度いけれど柱に結んだ綱がそれを許さない。

静かな深夜に悲鳴の洩れる事を憚った夫は

私の口にガーゼを押し込み手拭で固く猿轡を嚙ませて居る。私の意志は無視され自由は夫の手にしかないのである。

時計が一点打した。先刻も同じ一点打であったから一時かも知れない一時半かも知れない。責め打たれた時間は僅かな間であったのであるが、未だに緩みもしない縛しめは三時間近く、私の肌を責め続けて居るのである。

かりそめの縄の遊びが夫と私の心に妖しい影を投げたのは昨年の初夏であった。それから一年余、形式的な縛りは実質的に変化し、倒錯と被虐の悦びは夫と私の官能を徹底的に揺り乍ら耽溺せしめた。

私の肉体は苦痛にのたうちつつ、心は爆発する様な歓喜に喘いで居るのだ。

猿轡の下で私は息を整えて居た。鼻も口も覆われて大きな呼吸は出来なかった。

二の腕の縄目が殊に痛い、肩の根が疼く様だ、でも何うする事も出来ない。

手首を重ねて固く縛ってあるらしく指の感覚は全くない。けれど少しでも動くと縄目は皮肉を噛んで来る。柱の結び目と私の体の結び目は後向きになれない事で十糶余りしかないらしく、立つ事も突伏す事も出来ない訳で

あり、身動きすら許されて居ない私であった。

伊達巻はゆるみ、長襦袢の襟は肩を迂り相だ、横坐りになった膝の上は縮緬と羽二重の二枚の腰巻で漸く隠されて居た。

夫は何うする考えなのであろう。猿轡の為訴える事も出来ないが、たとえ再び縛られて朝迄此処に置かれようと一度解いて貰って着付けを直したかった。

汗を流した夫が浴衣の腰へ三尺を締めて入った。私は無残な恥しさに面を伏せると、夫の手が頸にかけられて引起された。

「一寸、解いてやろうか」

と私の眼をのぞき込む。深く肯くと

「又縛る。服装も此儘、好いか？」

といった。恰も私の心を見通した様に。私は大きく何度も肯いて居た。そして縛しめは解かれたけれど指先は痺れて猿轡も外す事は出来なかった。上半身にまつわる綱も、その儘で痺れた痺先と掌でこの腕を揉んで居た。

そんな私を見下し乍ら、

「眠い？」

と聞く夫へ私は頭を振って見上げた。

「なら一風呂浴びて来いよ、茶の間に居る」
言い棄てて茶の間へ入って行った。漸く知

覚を取り戻した指で猿轡を外した時は口の辺りが一度に涼しい感じであった。座った儘で裾や衿を直し緩んだ伊達巻を締直した。柱から私の自由を奪った綱を解いて束ねると鞭や棒を一しよにして私は立上った。

オリブ油で化粧を落し、鞭打たれた跡を水で冷して浴槽に浸ったけれど、矢張り息を呑む位しみ亘る。洗い終って鏡の前で練白粉を少し掌に解き、衿足から伸ばして行った。

白粉がなじんで居る故か滑らかに伸びて、顔も背も綺麗に付いて居た。入る時持ってきた新しい二枚のお腰をして鏡台に向い湯上りの薄化粧に粧った。長襦袢を確り着た上へ着物を重ね、帯は付けず伊達じめ丈で茶の間へ行くと、自分が持って帰った寿司折を開いて夫はビールを飲んで居た。鯛の干物の付出しを持って座った私にコップを渡し、

「お前は何故他の女より色っぽいんだろう」といい乍ら注いで呉れるのであった。

「あら、後がこわいわ」

私はコップを傾けた。美味しかった。

「美味いだらう。飲めよ」

「ええ、頂くわ」

夫は私を待つ間に一本空けて居たが適当に私の相手をして二人でもう一本空にした。寿

司折を平らげ暫くお茶を楽んだ。

夫が煙草をくわえて居る間に卓上を片付け
思い付いて寢室の水差しの水を替えた。

時計は二時半に近い。

ふと伸びた夫の手は伊達しめを解き着物の
襟を掴んで引き剥いた。思わず両手で胸を抑
える私の手首を捻じ上げて後手に、

「待って、脱ぎます」

「綱を持って来い」

夫は手を放した。落ちた伊達しめを拾い取
り居間へ行って腰紐を解く、脱いだ着物を衣
桁にかけて先刻の綱を持って夫の前へ行くと
「もっと細いのが有るだろう」

と言う。私は夫の意を図り兼ねたが、押入
れから細引を出して渡した。夫の前へ背を向
けて座り両手を自ら後ろに廻す。

「そんなに神妙にされると括り難いよ、少し
は抵抗しなきゃ」

「どっちみち縛られるんでしょう、痛い目す
るばかりだわ」

そんな事をいい乍ら私は縛られた。

胸乳の上から背中へ三筋、犇々と縛って襟
の下で括り、両手首を重ねて吊上げる様に縛
られた。先刻程きつくなく手首も動く様だ。
前より楽であったが、綱が細い為喰込みは深

いのである。項垂れて胸に喰込む縄目を見て
居た。明るい光りの下で華やかな色彩の長襦
袢姿は恥しかったが縄目を受けると反って落
付く私であった。

「あれ」

私は思わず口走つてのめり相になった。夫
は不意に縄尻を吊上げたのである。私を引起
した夫は明りを消すと荒々しく引立て、居間
に入りそこへ私を突飛ばした。二足三足よろ
けて行ったが縛られた躰は踏止まる事が出来
ず、床の間の前で倒れ伏した。

裾を乱して倒れた私を置いた儘、夫は寢室
へ入りスタンドを点けると、間の襖を閉めて
しまったのである。私は仲々起上れない。明
りは点いて居たが、庭の障子は廊下の硝子戸
共、宵に私が開いた儘であった。そして先刻
も此部屋の廊下の柱に繋がれた私である。今日
ばかりではない、何時も此の十畳の間が私の
賣場であり、廊下も庭もそうであった。北側
の六畳が寢室、西側の四畳が化粧の間で廊下
伝いに浴室と手洗場がある。

私が漸く身を起こした時、

「柱に括ってやろうか」

と襖の向うで夫がいうのだ。

「いやよ、酷い人」

「淋しくなったら此方へ来い、入れてやる」

「行きますわ、解いて下さるの」

「うん、朝飯の時にな」

「えっ、縛った儘でなの、だって、このま
まじゃ眠れないわ」

「誰が眠れと言った」

立上った私は後ろ手で壁のスイッチを切り
同じ様にして寢室の襖を開いた。身を入れて
閉め、蒲団の横に膝をつく、夫は笑い乍ら、

「綺麗だ、女は縛るに限る」

「ねえ、どうすれば好いの」

私は膝を崩した。夫は腹這いになると煙草
をくわえて火をつける。

「寒くはないし、もう蚊も居ないから、久し
ぶりに庭の松に縛ってやろうかな」

「まあ、此んな夜中に、いやよ」

「直ぐ夜が明けるよ」

「今は勘忍して、ね、明日なら縛られるわ」

「一日放っとくよ」

「まあ、ひどい事」

「そんなら、打ってやる」

「さっき打たれたとこ、まだ痛いよ」

「ほんとに厭か」

「いやいや、そんな事を聞いては」

私は夫の胸へ顔をかくした。



〈S・F 偶談〉

パンティと死刑マニヤ

黒田

寿

美しい女性が身につけているものを、何でもいいからひとつあげるといわれたら、大多数の男性はパンティを希望するでしょう。これに次ぐものとしてブラジャー、ストッキングまでなら許せるが、手袋、指輪、イヤリングとなると偽善者じみてくる。

我が愛する奇クの読者にはそんな男はいな

いから、毎月の様にパンティ愛好者が登場している。私もその仲間に入れて下さい。

ところが私は読者通信にも三度ばかりあらわれた通り、S—O—Oの死刑マニヤである以上、目のつけどころが少々違います。昔いていることがどこまでが実話で、どこまでが空想かわからない。この点はあらかじめお含

みおき願いたい。

パンティ通信で面白かったのは、あの部分だけを切りぬいてゆく泥棒君の話。マスクにするのだろうとの意見には全く同感。案外奇クのファンかも知れないが、それならば代金か新品を置いてゆく様にしてもらいたい。盗みばなしだったら奇クを読む資格はありません。

新品といえ、ある美人女優がパンティを二十枚ばかりクリーニングにだしたら、すべて新品となって帰ってきたので驚ろいた話がある。着用済の方はさざかし高価に売れたことだろう。(しかもそのパンティに黒い糸くずみたいなのがついていたりしたら)奇クの女性ファンには下着をクリーニングに出す様な方はいないでしょうね。万一おりましたら私が安く買いとります。但し若く美しい人に限ります(失礼)

外国で大金持の令嬢が誘かいされた時、彼女は、このアドバンチュールが気に入ったのか、極めて世話がやけなかったそうだが、上等のパンティを一ダース買ってくれとねだった。そこで彼はパンティ、ブラジャー、ストッキングその他を買いに行ったのだが、残

念にもサイズを知らなかった。(私なら見本をもっていくのに)それにそんな上等品を買う身分とも思われなかったので、たちまち疑がわれど用となったそう。

ある会社で軽くて、はいているのがわからぬ程の肌ざわりのパンティを売りだした。美人モデル嬢がその宣伝のためパーティーに出席し、スカートをまくって見せてまわった。するとおびただしい男性が集ってきて(当り前だ)何度も見せてくれとせがむ。その要求をすべてかなえてやり、パーティーの人氣は独占するし、宣伝効果は満点だし、意気揚々と自分のアパートに帰ってきた彼女は、一歩室内に入るや否や卒倒した。何故だかわかりますか?(解答は最後にあります)

しかし私が最も希望するのは、若き美人死刑囚が最後の瞬間まではいていたパンティである。絞首刑の場合は、その執行に際して汚物の排泄がしばしばみられるため、身体がぶらさがる真下には、水を流す溝が堀られてある。パンティもまた当然ぬがなくてはならぬだろう。

以前D国がF国と戦っていた頃、たまたま六人の女性を捕えて、絞首刑に処すことにし

た。刑吏がパンティをぬぐ様に命じたのが即ち執行のしらせのわけ。どうせぬがなくてはならぬのなら、他人の手に触れられるよりはと、四人が自らの手でその命令に従い、あわれ絞首台の露と消えていった。四枚のパンティがどうなったかは誰も知らない。

残る二人はスラックスだったので弱った。パンティをぬいだけでは意味ないし、もしかしたら下半身裸で吊られるのかと心配していたが、刑吏の方も紳士だったらしく、特別の情でもって斬首刑にしてやったとか。首を斬られるのは案外喜ばれず、これ以来F国ではスラックスが影をひそめたという。

敗戦の憂目をみたI国では、M首相の愛人だったP嬢を戦犯としてリンチに処した。彼女が獄舎の窓からふと見ると、向いのバルコニーからロープが下げられている。これではつきり絞首刑になるものと早合点した彼女はパンティをぬいでまっていた。戦時中スパイの反逆者の処刑に立合った時、若い女性が思わぬ死恥をさらすのを見たことがあるので、二の舞をふまぬよう十分の注意をはらったのだ。ところが刑は銃殺で、死体はバルコニーから逆吊りにして晒すのだという。この宣告を聞いた彼女は、あわてて一度獄舎に帰して

くれと叫んだが、許されずにそのまま殺された。このパンティは現在もどこに残っている筈。とにかくぬぐのにおそすぎるということはありませんからご用心下さい。

「世界の夜の歴史」という映画で、ギロチンにかけられる美女が、最後の願としてストリップを演じ、パンティ一枚だけ残して首を斬り落される。刑死者の持物はすべて執行人の所得となった頃だから、衣類は血で汚さぬ方がよい。サンソン君が二つ返事で承知したのも当然か。死体となったばかりの、まだ四肢がピクピクしている身体からはぎとったパンティは、家宝としてのこすだけの価値がある。

ツワイクの「マリー・アントワネット」によれば、王妃は執行当時出血のため下着がみんな汚れており、ようやく若い女中の好意で着換えることができたが、この汚れものはベッドの蔭の壁のすき間に押しこんだと言われている。場所までわかっているのだから、これはマニヤの手に渡ったのだろう。王妃のパンティ「まさによだれのでる代物か」。

一方女中の方も王妃に対し余計な同情をしただけで、これまた首をチョン斬られ、

大きくひろげた両脚の間に投げすてられることになった。身分の低い悲しさ、彼女のパンティなど見むきもされなかったらう。

ここで絞首刑の好きな絹川文代に登場を願う。彼女はさすがに私の希望を知っていて、パンティひとつで絞首台をのぼる。

「ボタン」踏板がはずれ、文代の美しい身体が首にかけられたロープのため、ピンと激しい強直をおこす。それにつれてパンティがぬげて右の足首にひっかった。彼女は苦しい息の下から右足を私の方にむけてふる。ハ、ラリとおちるのを私がうけとめた時、文代の身体は最後の痙攣のためもだえていた。美女が死の瞬間まではいていたパンティは、千金万金を積まれても手放せるものではない。私は死体となった文代に感謝のまなざしをむけてザ・エンド。

パンティに次ぐものはブラジャーか、これも死刑マニヤにとっては、銃殺されて穴のあったものでなくてはならぬ。

梨花悠紀子を銃殺柱に縛りつけよう。目かくしなどはやらない。目標はブラジャーの二つのふくらみ。隊員は十二人だが、実弾の入

っているのは八人から十一人となっている。これと同数の穴がブラジャーと乳房にあくわけだ。銃声と共に、バツタリ倒れた悠紀子から、ぐっしよりと血汐にぬれたものをほぎとろう。

とどめを忘れていた。普通は隊長が後頭部に射ちこむのだが、彼女はそんな平凡なことでは満足しまいから、おヘソに一発射ちこむことにする。

大戦中の話。女性スパイを銃殺に処し、その死体を埋葬しようとしたら、コロリところがったものがある。それはオッパイ・パットで、十個の穴があいていた。これなどもマニヤにとっては面白いもの。

大塚啓子はハリツケか、これも脇腹でなくブラジャーの中心部を狙って、グサリ、グサリ。これまた十分に血を吸わせてからいたただくことにする。彼女が確実に息絶えてから、おヘソにとどめを刺してやろう。

ストッキングとなると前二者にくらべかなりおちる。しかし私はこんな殺しを考えている。

お富士は今やブラジャー、パンティ、スト

ッキングをつけているだけ。私はブラジャーをはずして、それでもって彼女の手を後にまわし縛りあげる。次いでパンティをぬがしてまるめて口の中に押しこみ声をたてるのを防ぐ。ここで鼻をつまんで殺す手もあるが、恐怖を長びかせるためストッキングを静かにぬがし、それを首のまわりにまいていく。

両端を引けば日本一の美女といえどもキュウ。これではあっけなく死んでしまつてつまらないから、そろりそろりと文字通り真綿で首を締めるように、私の腕のなかである世に送るのである。全く抵抗を失った身体は十三本のストッキングで作った絞首刑用ロープでぶらさげ、ゆっくりと鑑賞することとなる。

パンティマニヤの皆さん。死刑マニヤでも少しは共通点があるとは思いませんか。今後の通信を期待します。

(解答)

軽くて、はいているのがわからぬ程の肌ざわりのパンティは、彼女の部屋にはき忘れられてありました。

姫

小

姓

奇

聞

……悦虐絵灯笼 その五……

万田不仁

……功をかまへ、柵の木ゆひて欺き敗北すれば、武田の猛兵敵はにぐるといふて追来り、柵の木に行きなづみたる処を、数千の鉄炮雨のふるがごとくうちかくれば、空矢なく中りて、討るる者数をしらず、引退かんとすれば、柵より出て付けしたふ。戦をいどめば柵の中に入りてうちしります。勝頼の士六将勇気余り有といへども、打

破るべき様なく皆的になりて討死しけり。
(常山紀談)

甲

城は、山の中腹に白く据わっている。晴切った山国の冬空の下で、城は山を巨きな獣に譬えれば、その鋭い牙のようにも見えた。

雪王丸は葦毛の馬に跨り、彼の荷物を担った小者二人を従えて、冷たい風の真向から吹下す山路を急いでいた。

雪王丸。当年十二歳、児前髪の瑞々しい、少女のように睫の長い、やがてこのあたりを深々と蔽う雪のように、膚の白い美童であった。彼は山麓の旧家藤並の末子で、城主の息女虹姫の小姓に召されたのである。

「寒いなア……」

馬上で、少年は手綱を持つ手に代る代る白息を吐きかけた。城勤めの門出に、労咳で床についている父の枕頭で祝われた苦い酒の所為か顫顫が少し痛んだ。

ダ、ダァーン——尾根の方で大きな銃音がした。銃音が消えた後も頭の上の空気がしわしわと鳴っている、ひどい音だった。

(誰か鉄砲の稽古をしているか、あぶないぞ)

雪王丸は身が緊った。城に鉄砲が入ってから既に何人も山仕事の村人の間に死傷者が出ていた。つい先日木樵が射たれて死んだ。

「お姫様は鉄砲がお上手だそうですよ」

小者の源太が後からいった。雪王丸はそれには答えず、自分が今日から仕えねばならぬ虹姫がその容姿の美しいごく気立の優しいひとであつたら……と、抑えがたく頭を拾げる不安の念に些か心沈むのであつた。

へ虹姫さまは五人力 牛の冠者もひとねじり
虹姫さまはお酒飲み 朱ケのどくろのお盃
虹姫さまは鬼姫さまか 可愛いお小姓の首も斬る ヤンレサアおそろしや
ヤンレヤンレ

こんな戯唄が山麓に密かに広がっている。虹姫十八歳の春、不意に城攻めに寄せ来たった魚住氏の軍兵の中に、猛牛と異名された鯛中冠者繁久と一騎打して、見事その首級を挙げた武者振りは今様板額の名を近隣に轟かせていた。美しく、而も荒武者の首も取る勇

武のひと、それは雪王丸の憧憬するところであつた。しかし、戯唄に「可愛いお小姓の首も斬る」と誇られている。姫の恐ろしい乱業の噂は、少年の胸に暗い翳を投げかけずにはおかなかった。

去年の冬、丁度今頃だつた。狩猟帰りの虹姫の一行が藤並外記の邸に立寄つたのは。

雪王丸は虹姫の給仕に出た。紫地に千鳥を描いた綺麗な狩衣姿の姫は、仄かに酒気に染んだ白晳の顔を綻ばせて雪王丸を眺めた。猛牛に準えられた鯛中繁久を苦もなく討取つたひととは到底考えられぬ物静かな姫の様子だつた。

短かい休息の後、姫は侍女や小姓を引連れて、白馬に跑を踏ませて帰城した。

外記の許へ城から使いが来たのは、それから間もなかった。

「いまだ弱年、それに一向に氣の利かぬ子ゆえ……」

せめて一年の猶予を、と外記は労咳の咳を堪えつつ乞うた。使者が戻ると、外記は苦い顔をして寢所に入った。

ダ、ダァーン。また銃が鳴った。

雪王丸の行手に、雪王丸の妖しい運命を暗示する白い魔物のように城が段々巨きく見え

て来た。

乙

城の櫓の上の赤い吹貫が真夏の微風に物憂く泳いでいる。太鼓が続けざまにとおとと鳴り響く。わあッと氣負つた、その癖地底から湧き出るような陰にこもつた喚声があった。喚声を挙げた男どもは、皆粗布の下帯一本の裸体で、両足の踝の上に赤児の頭ほどの鉛玉の枷が付いている。彼等は孰れも肩に侍女か小姓を乗せて、広庭を縦横に駆け廻らねばならない。みんな領内の罪人か、合戦で得た雑兵の虜である。

紅白に侍女と小姓を分けた騎馬戦——この人間馬を用いた模擬騎馬戦は、狩猟や猿楽、若侍の相撲などと共に虹姫の好む遊びで、月に一度か二度、必ず催されたが、これは夏場は殊に熱氣を孕んだ異常な雰囲気を広庭いっぱいに醸し出した。夏季には紅軍の侍女たちはくれない下帯、白軍の小姓たちは純白の下帯をしただけの裸で勝負することになっていた。庭の縁を燃え立たす暑い日差の下、人間馬同様下帯一本の姿になった匂いやかな美女と美童とが激しく相搏つ争闘図を築山の傍に置いた床几に腰かけて虹姫は飽かず眺めるの



だった。

勝負は仮面の争奪にかかっていた。侍女たちは猿楽の優しい、或は猛き面（おもて）を模した仮面を、小姓たちは天狗や鳥獣の貌を象った仮面を被った。そしてこれ等の仮面の紐は容易に奪われぬよう固く頭と耳に纏き結

んである。

戦いは人間馬同士の体当りに始まる。紅白二十余名の侍女、小姓は、互に人間馬の上に伸び上がり、相手と組んで揉み合い、利き手に敵の仮面を押し上げよう、掃い除けようとす。無論そんなことで落ちる仮面は殆どな

い。双方の曳々声が次第に高まり、こここで組合った儘人間馬から転げ落ちて、組んずほぐれつ組討の光景が繰展げられる。早くも一人の体格のいい侍女の膝下に捩伏せられ、狐の仮面を剥がれようとしている小姓、その横で、大柄な色白の小姓に組敷かれて、紅色の下帯と対照的な青白い両足をあられもなくばたつかせる侍女、その向うでは天狗の仮面を奪い取られた未だ幼な顔の小姓の切なげに上気した顔がずっと年上の侍女の張切った、桜色の太腿の間に喘いでいる、またその傍に元服も近そうな小姓の引緊った浅黒い体の下になって必死に腕く侍女……落花狼藉、華やかにもまた惨憺たるうら若い男女争闘絵巻は、凄まじく続く――。

虹姫は、老女が後から差しかける、淡青の大きな日傘の影の中で、嗜虐的に輝く目を見張っている。

乗り手を失った人間馬たちは、直ちに庭隅へ退って、ひと固まりに蹲まっているが、日頃禁欲生活を強いられている彼等には、くれないの下帯だけの汗まみれの侍女たちの体、その体臭が堪らない刺戟であった。彼等の抑えんとして尚奔騰する情欲の潮は、彼等の突

然の反抗や狂態に備えて、姫の背後に控える三人の射手——銃の火繩は灯されてある——の存在をも無視しかねない高まりを感じさせる程、その熱い阿吽の息は見る見る苦しげになっっている……。

「雪王丸殿、見参、見参！」

猿楽の中將の面を模した仮面を被った小柄な侍女と人間馬の上で争っていた雪王丸は、いきなり横合いから挑まれた。相手は橋姫の面に似た仮面をつけた、小麦色のやや肥り肉の女で、肩車に慣れた、双の腿の圧力で人間馬を自在に走らせる仕方は、紅軍中の猛者と見えた。

（緋鶴だ。ちえッ、厭なやつ）

雪王丸は舌打した。大手を広げて迫る侍女緋鶴の前に彼はその被っている兎の仮面が象徴するように弱々しげだった。

緋鶴は虹姫のお気に入り、その並々ならぬ寵愛を恣にしている。従って姫に仕える侍女や小姓たちの間に幅を利かしている。雪王丸も新参の心細さ、誰より緋鶴をおそれた。

ところが、春の騎馬戦の頃からその都度彼は緋鶴に殊更に狙われるようになったのだ。開戦を告げる太鼓のどよみが消えやらぬ間に緋鶴は真直ぐ雪王丸に向かって来るのがまる

で極りのようになった。もう三たび雪王丸の兎の仮面は緋鶴の手に奪われていた。

——雪王丸のは、緋鶴さまに可愛がられている……。

——緋鶴さまの稚児になったら姫がお怒りになる……。

——いや、雪王丸のは何か緋鶴さまに憎まれているのだ、只では済むまいぞ……。

朋輩が無責任に播く噂話の種になった雪王丸は、漸く自分に向ける緋鶴の悪意に漠とした不安を覚えていた。

「雪王丸殿、勝負！」と叫ぶ緋鶴の胸元へ彼は我武者羅に頭をぶつけていった。小姓の中で最も年若な彼は、この騎馬戦で一度も敵の仮面を奪ったことはなかったものの常に滅茶苦茶に暴れ回る一人でもあった。が、相手が悪い。緋鶴はその春先にあった魚住方の砦攻めの際、兜首を挙げた勇猛な女武者、忽ち雪王丸を人間馬諸共庭土の上に投倒した力は寔に鐵袖一触、彼女はむんずと少年を馬乗りに組敷き、少年の跳返そうとする足掻きを愉しむかのように、ゆっくり兎の仮面の紐をほどきにかかる。紐はしかし仲々ほどけない。緋鶴の裸の匂いが少年の鼻を蔽う。

「ええい、めんどろなッ、きつい紐だこと」

彼女はじれる余り、両手で雪王丸の顔を抑え、その後頭部をこしこし地面にこすりつけた。

「緋鶴、緋鶴、面を取るがよい」

虹姫の甲高い声がかかった。雪王丸は胸の上に跨った女の重みと手荒い攻めに抵抗力を殺がれ、ぐったりした。彼は何故だか執拗に自分に挑戦して来る女が姫の制止の声を頗る不満に思ったらしい低い舌打を聞き逃さなかった。

こうして紅白両軍の組討は、最後の一人の仮面が除られる迄熱つぽく続く。

戦いは何時ものごとく侍女たち紅軍の勝利に終わった。彼女たちは皆二十歳前後の女盛り武芸に励んでいる上、緋鶴のように合戦の経験もある者も何人かまじっているのだから十六歳を頭とする年少者ばかりの白軍のよく立向かえるところではなかった。にもかかわらずこの始めに勝敗の帰趨の明らかな騎馬戦を敢て毎月催すのは、美女たちによる美童征服の図を欲ぶ虹姫の嗜虐の心がそれを求めるが為であろう。最後に勝残った侍女たちが輪を作って囃す中で、一人になった小姓が侍女の一人と戦う。侍女たちは二人掛りで、ひと揉みにこの少年を押倒してしまふような淡白な

扱いはしない。檻に入れた獣を存分にいたぶるように飽迄も一人対一人だ。そして遂に……こんな場合になると、虹姫は床几を立てて侍女の間に立入って、薄ッすら微笑を浮かべながらその小姓の死物狂いの足掻きをじっと見詰めるのであった。

終りの太鼓が鳴った。

虹姫の愉悦は未だ終わらない。姫は鞭を挙げて、小姓の一人と人間馬の一人を指した。

「海老丸、これへ出よ」

日傘の柄を持った老女が細く透る声で呼んだ。背の高い小姓が項垂れて庭の中央に進み出る。人間馬の方は片頬に火傷の痕のある領内の百姓だった。

その日、体の障りの故に騎馬戦に加わらなかった侍女二人が弓の折れを持って、小姓と人間馬の背後へ回る。凄烈な鞭打が始まった。

「うむッ、う、ううッ」

「ぎゃッ、げえ——ッ、ご、ごかんべんを……」

……うあッ、わ——ッ」

就中人間馬の悲鳴が物悲しく折柄広庭を退いていく侍女小姓たちの耳に貼付くよう。こうした鞭打刑は騎馬戦終了後必ず行なわれた。初めての時、雪王丸はあまりの惨さに

年嵩の朋輩にそっと訊いた。

「姫の仰有るには」と、その小姓は白い横顔に翳った笑みを湛えて答えた。

「合戦の絶え間のない今の世のこと、侍女組と小姓組の組討も唯の遊戯ではない、練武のひとつなのだ。だからなまくらな戦いぶりをした者はあのように鞭打たれる、姫はまたわざと勝を譲る、醜い組討を何より憎しまれる。手合は死ぬ程の鞭打に遭わねばならぬ。

雪王丸のも気を入れて戦うがいい……なに、あの馬になった奴か、あれは淫らな目付で組討を見ておったからじゃ。彼奴らはどれも同じだが取分けて淫らな思いを顔に現わした奴が打たれるのだ」

彼は尚言葉を継いでいった。

「侍女がわざとらしい負け方をした場合は、もっと厳しい。二の丸の石牢へ送られ、水責めに責め殺される」雪王丸は恐ろしさに身震いしたことであった。人間馬の哀れな悲鳴がひと際高く聞えた。

丙

秋深い山に鉄砲の音が轟いた。

雪王丸と蟹丸は落ちていく山鳥を追って走る。年下の蟹丸は足が早く、獲物の落ちた場

所を見極めるカンもよかった。

「蟹丸は素早い、雪王丸は今日はどうした？ 元気がない」

山麓の日溜りで、野兎の肉を焙って昼餉を認めた時、虹姫は笑って雪王丸を見た。姫は好んで男言葉を使う。黙って俯く雪王丸のうなじが自ずと赤らむのを姫は尻目に

「午からは鹿か猪を射とう。蟹丸よ、猪の牙にかけられるナ」

なぞと機嫌がいい。雪王丸は夜枷の重たい疲労の澁む五体を持余していた。彼は白日の下で、紺の狩衣に一層白蠟のように冴えて高い美貌の姫と、夜の闇で次ぎ次ぎに忌むし行ないを要求した挙句堪えがたい責めを加えて飽かぬ夜叉の姫と、同じひとであることが未だに信じられぬ思いであった。

今年の浅春の一夜遅く、雪王丸は姫の闇に呼ばれた。

控え間で、二人の老女が訝しむ彼に萌黄の寝衣を着せた。

「何事も姫のなされるが儘に……よいか」

老女はこう囁いた。

闇の灯の揺らめく明りに、香と酒の匂いが濃く漂い、白羽二重の寝衣をゆるやかに纏うた姫は、華やかな床の上に横臥して待っていた。

た。

……姫の白い豊満な体のむツと熱い重みに顔を押し塞がれた雪王丸は、思いもよらぬ姫の仕打に驚きおびえながらも、唇を固く噛んで意気地ない呻きを洩らすまいとした。

「ふふ、フフフ」

低く喉の奥で笑った姫が体をずらす……白絹の湯巻の間から緋綴子の下帯が血塗られた花びらのように雪王丸の目に映る、姫の右手の親指が少年の口を開ける……統のように滑らかな姫の腕と太腿がしなやかにきつく少年の喉を、胴を締めつける……

苦しみ、悶える雪王丸の頭に先頃城内に泊った猿楽一座が演じた道成寺の場面が浮かんだ。赤頭、般若の面を被った蛇体の女、愛欲の妄執凝って毒蛇と化した女は打杖を揮って荒狂う。かの蛇体の女にも似た姫の振舞に少年は恐れおののくばかり。

……少年の舌、喉、胃の腑は破廉恥な姫の賜物で爛れるように燃えるように疼いた……

死のような永い刻が少年の上に過ぎた。

控えの間で、老女の介抱を受けた雪王丸の背中や尻には、姫の寵童としての烙印——鞭打の痕が血汐の色も鮮かに、縦横に走っていた。

雪王丸は姫に特に目をかけられた。夜伽に繁く呼ばれた。彼は姫に惨く醜く責められる夜が厭わしかった。しかし、そんなはずかしめに堪える夜が重なり、体に姫の体臭のしみ込むにつれて、その汚辱と苦痛の刻を何か待ち望む吾れながら不思議な心理の動きを認めて深い惑いに沈んだ。苦痛と屈辱がしびれるような陶酔の裏打になる被虐愛の蕾は少年の発育盛りの体と共にあやしく脹んでいくのだった。彼は姫の寵愛が彼に傾いたことを嫉む朋輩や侍女の冷やかな目にも堪えねばならなかった。彼等は雪王丸の袖を捉えては、姫の過去の寵童の運命について、意地悪く冷たく囁いた。

「鮎丸どのはお湯殿で締殺され、湯の中にむくろが浮いていたそう。姫の忌わしいお戯れに堪えず、舌を噛んだという者もある」

「多聞丸どのはお月見の晩、二の丸の石垣から突落されたのですよ、ホホホ、どなたの仕業やら」

「伊十郎どのは表向きは討死、まことは姫が遠矢にかけられたそうじゃ」

「雉丸どのは生きながら鐵櫃へ押籠められ、餓え萎えて到頭……何とおそろしい……」

こんな虹姫の冷酷残忍な性格を物語る寵童

の末路、その事実を確める勇気が雪王丸にはなかった。清らかな凜とした昼間の姫、妖しく無慙な夜の姫、彼ははや姫に魂を奪われていたのだろう。

午後は獲物がなかった。虹姫は次第に不機嫌になった。雪王丸の肩に姫の鉄砲が重くなり、姫の前後を狩犬のように駆け回る蟹丸のはしゃぎ声も虚ろに聞える。

——この少年も何年か後に……。

そう思うと、雪王丸は夜伽の惨たらしさ、その妖しい欲びが俄に蘇って、朝からの山歩きの疲れも加わって、ふっと妖しい白日夢の淵に陥ろうとした。

「あッ、鹿だ。蟹丸、弓を」

姫が叫んだ。雪王丸の驚く目の隅を灌木の茂みを跳ね越えていく鹿の斑がよぎった。咄嗟の間に姫は蟹丸の手から重藤の弓を取り、矢をつがえるのもどかしく、ひょうつと射た。飛んでいく矢の先で鹿が大きく跳躍した。

「手応えがあったぞ、追え、雪王、必ず仕止めて来い」

雪王丸は、鉄砲を蟹丸に預けて、鹿の跳び込んだ暗い木立の中へ駆けつけた。

湿っぽい土の臭いのこもる木立の中をあち

こち探し、尚進んで熊笹の原を右往左往したが、手負いの鹿は見当らない。

「はずれたらしい……」

冷たい風の吹き出した熊笹の中に雪王丸は佇んだ。彼は暫く高い空を緩慢に流れる綿雲を仰いでから屈んで草鞋の紐を締直した。射そとなった口惜しさに姫が益々不興気になることを思うと、無駄を承知で雑木林の方へ探しにいく気になった。

林の中にぽっかりと短かい黄ばんだ草の生えた空地があった。弱い日差が白々と注いでそこは鳥羽僧正が描いた鳥獣の相撲が行なわれそうな処に見えた。

鉄砲の音がした。雪王丸はやむなく姫の許へ馳戻ろうとした。すると

「雪王丸、獲物はどうしました」

鋭い声に呼び止められた。ぎくツとして歩を止めた雪王丸の目に、松影から現れた上背のある、而も肉置きがいい女は、森閑とした山の中だけにまるで降って湧いたという感じだった。女は雪王丸が未だ父の邸にいた頃、領内を通ったくぐつの身形をしていた。

——緋鶴……雪王丸は驚いて、異様な緋鶴のなりに目を見張り、きらきら光る憎しみの眼差に射すくめられたように俯いた。

「鹿は逃げました。お前が如何に求めても捕らえられる筈がない。それよりも雪王丸、私はお前を狙っていたのです」

緋鶴は一步、雪王丸の前に進み、厳しい口調でいった。

「雪王は姫に取入った。私はお前の為に姫に飽かれた。ここで今その怨みを晴らして、私は他国へいく」

いい終ると同時に雪王丸の両肩は緋鶴の手にとらえられ、足を払われて脆くも少年はその場に俯伏した。寵童生活に押れかけた少年のひ弱な体は、武芸自慢の緋鶴に馬乗りに跨られ、忽ち後手に縛められてしまった。

「こうしてお前の愛らしい顔を押し拉いでやることも、この細首に刃を通すこともいと易いが……」

顔を土に押着けられた雪王丸の耳に緋鶴の低い声が恐ろしい私刑を予告する。少年は虚しく足掻き、跪く。女の尻は石臼のように重たい。

「でも命まで貰おうとは思わぬ、したたかに傷めて、姫がお前にしている夜のわざを、その儘私としてあげる」

緋鶴は雪王丸の刀を取った。そしてその白鯨の鞘で、少年を丁々と打据える丁丁……

「う、うう、あッ、ううう……」

思い切り横面を打ち、肩を打つ。投げ捨てた少年の刀を拾い、少年の袴の紐を断った。

尻の肉を打つ音が続いた。丁丁丁……

「少しはこたえたか雪王、本当に殺してしまいたい。私の情を恩に着なさい」

転げ回って痛がる少年の体が動かなくなり、俯てひたすら打擲に堪えている姿も緋鶴の憎悪を柔らげない。女は無抵抗の少年の脇腹を激しく蹴って仰向けにした。

「姫の遊びを私もする、フッフ命を取られるよりは忍びやすかろう。観念しなさい」

雪王丸の顔を跨いで、緋鶴はいった。女の頭の少し上を山鳩が白い胸毛を見せて飛んでいた。観念の目を閉じている雪王丸の苦境なぞ少しも知らぬ虹姫の鉄砲が大分遠くの方でまた鳴った。

散々に雪王丸をはずかしめて、緋鶴は走り去った。そしてその言葉通り城には戻らなかった。

「緋鶴は魚住方の回し者だったらしい」

「いやいや、雪王丸どのが姫に讒言したのだ。今度の合戦には緋鶴は姫様をつけ狙うだろう、閨の怨みはおそろしい……」
そんな噂が城内に流れた。

丁

森の上の空は夕焼に爛れていた。青ぐろく
黄昏の色のたゆとう森の中の湯に女が白く浮

いていた。女は虹姫で、浮身で泳いでいる。
森の湯は、白竜の湯といい、領内の村人は
昔から恐れて敢て近付く者がなかった。伝説
によれば延元の昔、ここに年経た白い大竜が

棲んでいて、その喜怒はこのあたりの天象を
支配したという。その赤く淀んだ湯水によく
浸ると矢傷、刀傷は速かに癒えた為、永享の
頃には湯治に来る武士が多かった。しかし、

それ等の武士たちは次の合戦で必ず討死
したから白竜のたたり、湯を侵した罰で
あるといわれ、その後ぱったり湯治に足
を運ぶ武士の姿も途絶えた。

虹姫は気味悪く赤濁した湯の中を大き
な白い鯉のようにゆったり泳いでいる。
姫の白馬と自分の茸毛の馬をつないだ栗
の木傍で、雪王丸は姫のあがるのを待
っていた。時偶出沒する獐猛な山狗に備
えて、小筒を持って――。

遠い山麓のどこかで鹿笛が鳴ったよう
な気がして、雪王丸は耳を敬てた。ほう
う――と、その鈍く円やかな音は確かに
風の中に聞えた。彼は不安な表情を浮か
べて姫を見た。姫は依然ゆるやかに泳い
でいる。ほうう、さっきの鹿笛とは別の
方向でも鳴った。それは風向きで明らか
に聞えて、不吉な予感に雪王丸は胸塞い
だ。

過ぐる五月、三河の長篠城攻略を計つ
た武田の精兵が設楽ヶ原で織田、徳川軍



の鉄砲隊の一斉射撃を受けて潰滅した。武田の一族に繋がる虹姫の父花貝将監満興は軍兵を率いて武田方に参じていたが、その敗れ戦いの乱軍の中で討死した。

花貝満興の死は、この山間地方に割拠する諸豪の勢力図の色分けに直ぐひびいた。かねて花貝氏打倒を策していた魚住飛騨守輝秀は近隣の相良、佐藤氏に檄を飛ばし、花貝氏と同盟を結んでいる越智、姻戚の星坂氏にも働きかけるなど活発に動き出した。飛騨守の策動は、謀者によって相次いで、今は亡父に代り女城主になった虹姫の許へ報告された。戦いに長じた満興亡き城内の空気は当然重苦しいものがあつた。加えて年来極端な強兵政策をとり、過重な年貢と加役に領民の怨嗟を買っていた満興が死んだと解って蠢動し出した土豪の動静、領内の何やら不穏な人心は、誰の胸にも黒い影を投げていた。

「鴉が群れている。戦さが始まるぞ」

虹姫は唯突立った儘、雪王丸に身体の間々まで丹念に拭かせながら空を仰いだ。

「鹿笛が鳴りました」

「雪王、おそろしいか？ 戦さがこわいであらう。敵に首を掻かれると、それ、あの空の色のような血がたとえ噴き出る。それともこ

の湯の色のような、フッフフ」

姫は白絹の下帯をしめ、緋綴子の下帯を重ねる。姫が巫山戯て手足を硬くしたりするの、男装の姫に馬乗袴をはかせるのに一寸手間取り、雪王丸はいらいらした。

「早くお城へ帰りましょう」

「弱虫、白竜など舞い下りて来ぬわ」

姫は少年をからかい、銀泥で青海波を描いた扇を使って容易に動かない。その時、ひゅんと矢が一本飛んで来た。

「あッ、危ない」

雪王丸は健気に姫の前に立った。姫は、しかし少しも騒かず、雪王丸の手から小筒を取り、素早く火繩に点火して白馬に飛び乗った。雪王丸も葦毛の傍へ走った。ひゅん、ひゅんと矢が飛んで来る。

ダーン、姫の小筒が鳴った。驚いて跳ねて後脚で立った葦毛の背から雪王丸は危うく落ちそうになった。矢は山路を疾走する姫と小姓に追いつき、その一本は姫の白小袖の袂を縫った。

戊

鹿笛は果して魚住飛騨守に示唆された土豪が軍兵を動かす合図であつた。

魚住勢が国境の砦を押潰して、紺地に金で半月を浮き出した旗を山麓に翻したのは、土豪の小隊が虹姫を白竜の湯で襲った二日後であつた。兵三千。ほかに相良、佐藤氏、土豪等が合力した一千余兵を加え、意気頗る旺盛。

「花貝を滅ぼすは今ぞ。淫虐の噂高き虹姫を虜にせよ」

飛騨守は業病の疑いのある、へんにてらてら光る顔を真夏の日に火照らせ、酒毒の蓄積に燭った目をかっと見開いて、銀の采配を打振った。一挙に力攻めに城を奪おうと激しく士卒を叱咤する彼の胸中には虜にした虹姫の手足を嚴重に縛った儘、凌辱する光景が生々しく明滅していた。

一方、虹姫は老いて梟のような風丰になつた軍師拝郷盛治と防戦の策を練り、味方と特む越智、星坂氏へ援助を乞う使いを急行させた。

壮烈な戦闘が始まった。城方は城主満興がその精鋭と共に長篠攻めに滅んでいる為、所詮劣勢で、総大将の虹姫は専ら奇襲作戦を用いる他なかった。朝駈け。夜襲。虹姫は常に兵の先頭に白馬を駆って、朱柄の槍を揮い、その都度寄手に妙なからぬ損害を与えた。

「見よ、雪王、この首は美しかろう」

虹姫は敵方の若武者の首級を文机の上に据えて、化粧をほどこし、愛玩する目付で見詰める。

「女のように美しかろう、このされこうべを盃にしたい……」

雪王丸は姫の指であやしく彩られた首級が今にも嫣然と笑いそうに見えて、気味悪かった。

魚住勢はじりじり城方を圧して来た。来援を期待している越智氏からも星坂氏からも何の連絡もない。虹姫の面に漸く焦慮の色が浮かんだ。

夜、雪王丸は姫の手傷の手当をした後、十五歳になったその青い果実のような体を姫にさいなまれた。汗臭く血腥い姫の体に押し拉がれる息苦しさのなかで、また姫の爪先で意の儘に体を開き、鞭打の嵐に堪える悶えのなかで、彼は曾て姫に愛され、慰まれた末、姫の手で殺された鮎丸、多聞丸、伊十郎などその倂も知らぬ寵童のことを想った。

姫は健気に傷口が膿む負傷者の手当に追われる雪王丸の体が腐ったような臭いがするといって怒り、一層ひしひしと鞭打った。

城は、攻め登って来る寄手の頭上へ矢玉を

浴びせられる地の利と、城兵の力戦とで尚持堪えられそうだったが、破局は意外に早く来た。

魚住方の一部隊が折柄吹き起った西風を利用して、夜半城内へ火矢を射込んだ、その払暁、鹿角の立物打った兜を著、白絲絨の鎧に身を固め、白馬に跨った虹姫は三百の手兵を率いて城を出た。その姫の部隊が暁暗にまぎれて、寄手の前線へわつと関の声をあげて斬り込んだ頃、魚住飛騨守に懐柔された拝郷盛治が越智氏の派遣した援兵のように偽装した魚住勢を間道伝いに城へ引入れたのだ。

朱柄の槍を揮って阿修羅の奮戦をする虹姫と、姫に忠誠を尽くす捨身の同勢の面も振らぬ突撃に魚住方の前衛も二陣も支える術なく打破られ、すわと驚く寝起きの寄手は、城方の命運を読んだ油断もあって一時大混乱に陥った。姫はその間隙を衝いて飛騨守の旗本へ斬込む心算だった。

「敵は寡兵じゃ、うろたえまいぞッ。押包んで討ち取れ！」

魚住方の老練な部将が声を囁らして叫ぶ。新手の部隊が乱戦の場に駆付けた。虹姫の勇戦も兵力の差は如何ともし難く、城方は漸く山腹の台地へと追い上げられていった。爽や

かな朝の山気に剣戟の音、雄叫び、馬の悲鳴、矢唸り、鉄砲の音がこだまする。

どっと魚住勢が歓声を上げた。

「あッ、城が燃える」

味方の誰かの悲痛な声に、前面の騎馬武者を突落した姫が振向くと

「ああ……」

遙か白壁の天守閣に紅蓮の炎が映えて、団々と名残りの西風に揺れている。愕然とした姫の鎧の袖に近距離から射た矢がぐさッと刺さった。

雪王丸は、この日初めて合戦に出た。

彼は小梨地の兜を被り、小豆色の身軽な革具足姿で姫から授けられた金作りの小太刀を背に負い、手鎧を右手に、例の葦毛の馬に乗って姫のすぐ後に続いた。

突撃の聲が起り、敵陣に味方が駆入ると、彼は馬の平首に顔を寄せて、自己流に手鎧を揮って戦った。馬は逸物、寄手を蹄にかけたから彼の勇敢な武者振りは暫く入乱れて戦う軍兵の間に抽んで見えた。が、一発の鉄砲玉が彼の兜を弾き飛ばした。

真逆様に乗馬から落ちた彼は小太刀を抜いて、手捕りにせんものと駆寄った魚住方の雑兵の足を薙ぎ払い、今一人の雑兵の高腿を刺

した。

虹姫は馬を射られ、徒立になっていた。槍も折れ、祐定の太刀を抜いて、一騎打を挑む敵の武士を次々に倒していた。姫の白絲織の鎧はさながら緋織のように見える程返り血に染まり、数箇所傷手を受けていた。

その姫の前に鮮かな緋織の鎧を着、栗毛の馬に跨った女武者が一騎駆け寄った。女武者は兜は被らず、額に天冠をきらめかせ、黒髪を朝風になぶらせて、薙刀を小腰にしている。去年の秋遅く、魚住氏へ走った虹姫の侍女緋鶴であった。

「やア、緋鶴か、推参なり」

もう城へは帰れぬ、ここを死場所にと思い決した虹姫の顔は寧ろ明るかった。

「姫のみ首級を頂きます」

ひらりと馬を降り、緋鶴も徒立になった。曾て虹姫の閨で、姫の愛撫に喜悅したこともある緋鶴の黒瞳勝ちの目は、憎しみに燃えている。

何人か城方の兵の首を刎ねたであろう朱ヶに染まった緋鶴の薙刀が忽ち切り上げ、逆襲、草薙ぎ、相突き、山廻りと風を起し、大車輪の回るがごとく虹姫の身に襲いかかった。心得たりと姫も太刀を打振り、蜘蛛手開

き、獅子の洞入り、虎乱入青眼に気を詰めて斬結び、曳々の声は甲高くあたりにひびく。

緋鶴は先刻よりの激闘に綿のごとく疲労して辛じて気力ひとつで立向かっている虹姫を段々に圧倒し、踏込み、踏込み斬りかかり、あわやという処まで度々姫を追い込んだが、姫も流石に今様板額の名に背かずここを先途と斬結ぶうち、如何なる隙を見たか、勢いに乗り、勝を急いだ緋鶴の技が何時か大まかになったか

「えーッ」

姫の裂帛の気合と共に緋鶴の薙刀は柄を斬落された。

「南無三！」

緋鶴は姫の太刀風を潜って、組付いた。望むところと姫も太刀を捨てる。

女武者同士、土煙をあげての組討になった。二人は懸声猛く捻じ合い、押し合い、同体我倒れ、金剛力を振り絞って上になり下になり勢気を凝らして戦った。

緋鶴は普通では虹姫の五人力といわれる力に一籌を輸したろうが、何分にも姫は渺ならず手傷を負っている。捻じ合う程に組討つ程に姫の息は漸く荒くなり、遂に緋鶴が姫の胸板に馬乗りに跨がる。緋鶴の右手に鎧通し

がひらめく。

「むむッ、無念なッ」

必死に跳返そうと腕く姫の喉を鎧通して刺そうとするが、喉鎧にさまたげられて果さない。両足で地を蹴り、姫は必死に跳返そうとのたうつ。

「ちいッ、虹姫覚悟ッ」

粘り強い姫の底力にいらって、緋鶴はその双の腿の間に紅潮し、切なく歪んだ姫の顔を突こうとした。その瞬間、姫もまた左手に腰刀を抜いて、稍浮腰になった緋鶴の鎧の草摺の下へ柄も拳も通れと刺し込んだ。

「うッ、ううーん」

さしもにたまらず、緋鶴は姫の上へ折重なる。どさッとその体を跳ねのけ、躍りかかって一気に緋鶴の首を掻切る虹姫の早業。緋鶴の優勢に気をゆるし、珍らしい女武者同士の組討を傍観していた魚住方の士が手出しするいとまもない束の間の変転だった。

虹姫は左手に緋鶴の首級をさげて立上り、魚住勢をじっと睨み、それから死闘に疲れ果てた五体に精気を注ぎ込む為か、緋鶴の首の切口に唇を押当てて、ごくごく滴る血汐を吸った。わあッと、狂ったような喚声を挙げて魚住方の士が一度に姫に襲いかかった。

その翌日、滅びた花見氏の城の焼落ちた城門の前に新しい礎柱が立った。

柱には虹姫の屍が逆さに吊された。緋緞子

の下帯ひとつに剝がれた虹姫の体は夥しい手

傷にいたましく、傷口のいくつかは赤黒く口

を開いていた。その柱の下に白綾の具足下の

胸を朱々に染めた前髪的美少年がくくりつけ

てあった。魚住方の雑兵に捕らわれ、惨たら

しく慰まれた果に討たれた雪玉丸であった。

蒸暑く曇った空に、死臭を慕う鴉が黒々と

むらがり翔けていた。

(完)

本誌既刊号に注文殺到！

増刊号の特価販売中止、定価にて分譲

売切号続出、在庫僅少、乞至急御申込、

本誌既刊号在庫案内

○本誌既刊号の総目次を誌上に発表して以来、注文が殺到しております。在庫も次第に減少して売切

れのものも大分出てきました。売切

切れになりますと補充しかねます

のでこの際、欠号はお揃え下さる

ようお願いいたします。

○左記に掲載しましたものは、只

今でしたら在庫しております。送

料は当方にて負担いたします。

○昭和35年5月号以前の号は全部

売切れとなりました。

○限定版特別号の第一弾から第四

弾まで、全部売切れしました。

○サディズム特集号、第一集から

第四集まで全部売切れです。

○「悦虐特集号」第五集(悦五)

は売切れしました。

従って、只今在庫の「悦虐特集

号」は(悦一) (悦二) (悦三)

(悦四)です。

○悦特(一) (二) (三) (四)

の特価販売は中止いたします。

定価三百円です。

○各月号の総目次は漸次誌上に掲

載いたしますが、既掲載の分は左

記の通りであります。

○昭和38年十一月号誌上に(38年

6月号、7月号、8月号)

○昭和39年一月号誌上に(38年9

月号、10月号、11月号、12月号)

(35年9月号、35年6月号)

○39年2月号誌上に(36年3月号

4月号、5月号、6月号)

○39年3月号誌上に(36年7月号

8月号、9月号、10月号)

○39年4月号誌上に(36年11月号

12月号、37年1月号、2月号)

○在庫品の定価、(送料共)

昭和35年6月号 (定価三〇〇円)

昭和35年7月号 (定価三〇〇円)

昭和35年8月号 (定価三〇〇円)

昭和35年9月号 (定価三〇〇円)

昭和35年10月号 (売切)

昭和35年11月号 (売切)

昭和35年12月号 (売切)

昭和36年1月号 (売切)

昭和36年2月号 (売切)

昭和36年3月号 (定価一五〇円)

昭和36年4月号 (定価一五〇円)

昭和36年5月号 (定価一五〇円)

昭和36年6月号 (定価一五〇円)

昭和36年7月号 (定価一五〇円)

昭和36年8月号 (定価一五〇円)

昭和36年9月号 (定価一五〇円)

昭和36年10月号 (定価一五〇円)

昭和36年11月号 (定価一五〇円)

昭和36年12月号 (定価一五〇円)

昭和37年新年号 (定価一五〇円)

昭和37年1月号 (定価一五〇円)

昭和37年2月号 (定価一五〇円)

昭和37年3月号 (定価一五〇円)

昭和37年4月号 (定価一五〇円)

悦特第一集	悦特第二集	悦特第三集	悦特第四集	昭和39年3月号	昭和39年2月号	昭和39年1月号	昭和38年12月号	昭和38年11月号	昭和38年10月号	昭和38年9月号	昭和38年8月号	昭和38年7月号	昭和38年6月号	昭和38年5月号	昭和38年4月号	昭和38年3月号	昭和38年2月号	昭和38年1月号	昭和37年12月号	昭和37年11月号	昭和37年10月号
(定価三〇〇円)	(定価三〇〇円)	(定価三〇〇円)	(定価三〇〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)

在庫が僅かです。ので、売切の際の第二希望品をお書き添え願います。



〔告白〕

クリスターマニア

その後の体験

北沢 操

この前に拙い文章を埋め草にして頂いてから、もう三年もたちました。その間、何度か

同性のマニアの方が、健筆をふるっていらっしゃるのをみて、とても心強く思ったもので

す。只本誌の性質上、保存できませんので、お名前は、ほとんど覚えておりませんけれども……。

切りぬいた浣腸記事もロック付の整理箱に一杯になってしまい、私自身にとっては、密度のうすいものは始末しなければならなくなりました。

今日、再び恥知らずなペンをとりましたのは、先程、思いがけない病氣から暫らく入院生活を体験したことで、マニアとしての傾向が少し変って来ましたので、客観的にふりかえて整理してみたかったからなのです。

秋もたけなわになって、とき折、エレベーターの中で結婚式場にむかう美しい花嫁姿をみる度に、両親の心配する二十五才という年齢が重荷となって身にこたえる十月のことでした。

あたしも誰かと一緒にしなければならぬ。それも近いうちに、と焦ってみてもデパート勤務のあたしには身のまわりには適当な人もみあたらないし、家にくる話はありませんに健全すぎて、こんな性癖を理解して頂ける方にめぐり会えるなんてまず夢。努めて快活を粧っていても、こんな事を考えますと、時としてゾッとする程悲しくなる毎日だったの

しなくては、コートが出さえすれば浣腸はさけられるのですから、とも角もトイレに行きました。併し意地悪く、かすかな便意はありながらいくら努力してもだめでした。激しい疲労に仕方なく部屋にもどりますと、同時に先刻の看護婦が浣腸器とグリセリン液を盆にのせ差込便器をもった見習いらしい少女を従えて入ってきました。全く事務的な口調で、「お浣腸しますから、あおむいて、膝をたてて下さい。」と、顔色ひとつ変えずに命じるのです。

「あの、下剤頂けませんか。」

「炎症のあるときは下剤はいけないんです。すぐすみすから。大丈夫ですよ。」

何が大丈夫なことがあるもんですか!!、ふとんのすそをサッとめくられたとき「アーもうだめ、いよいよ浣腸される。」と観念して目をつむりました。看護婦はあたしの下腹をおしながら見習いさんを、「ここ軽くおしてごらん下さい。」と呼びつけました。見習いさんの手がソッとあてられます。

「どう固いコロコロしたものがさわるでしょう。それが結腸につまってるコート。便秘がひどくて、十日も二十日もガマンしてる人はここが石みたいになまって大きくなってる

わ。そんなときは浣腸する前に、マッサージしないとよく出ないの。」

どうしてこんなことを、あたしの身体で教えなければならぬのでしょうか。早く済ませて呉れればいいのに……。

腰の下にビニールが敷かれて、いよいよ浣腸です。アルコール綿の冷たさに、思わず全身をこわばらせますと、「口をあいて楽に息して下さい。」と注意されました。そして見習いさんに、「こうして左手で充分に拡げながら、浣腸器をさし込むのよ。痛がらしたらだめ。」アア彼女は見習いさんに見学させながらあたしに浣腸しようというのです。人に見られながら受ける浣腸。あたしは恥かしさで息もつけない程でした。次の瞬間、嘴管が、金属的なひやかさですべり込みます。そうして下半身全体にひろがる灼熱感。

やがて激しく下腹部におしよせる疼痛。もうなじみ深い筈の浣腸のあとの作用が、ひとつの手で行われると、こう迄苦しいものでしょうか。一人プレイなら、どんな強い刺激でも堪え切れなければ、いつでも排泄できる安心感があります。でも今日こそそうはゆきません。許されるまでは、いやでも我慢しなければならぬのです。その時間の長いこと、恥

しいことといったら……。

五分位たったでしようか。一入はげしくよせてくる便意に思わずお尻を動かしますと、「もう少し我慢しましょうね。やっとながら効いてきたところですから。」看護婦が冷く答えます。「しっかりおさえてね。」と見習いさんに命じられ、また一段と力が加えられました。そして間もなく腰の下に便器がさし込まれたのです。「いやよ、トイレに行かせて」というあたしに「コートをとりましますから、ここでして下さい。」と、受けつけて呉れませんでした。あたしは恥かしさで毛布を頭迄かぶりました。

「させる前に、尿が散らない様にここへチリ紙をあてるの。忘れるとあとが大変よ。サア離していいね。」

相変らずのご親切な後輩の指導ぶり。そしてあたしに、「もういいですよ」いわれるより早くザーッと薬がほとぼしります。何という恥かしさでしょう。人間のもっともみにくい姿を、ひとの面前にさらけ出さねばならぬとは。

便意は、あたしのそんな感情には無関係にどんどん進行します。硬い便が、金属性の便器に当たる度にコトコトと音を立てるので

す。その音が一層あたしをみじめな立場に追いやります。「こんなに固まって、よく我慢したわね。苦しかったでしょう。」と話しかける看護婦の声がわざと意地悪をしている様に聞えました。彼女達が立去ってから、口惜しさで涙がとまりませんでした。やがて熱のせいか、宿便を排泄したためかコンコンと眠りに落ちてしまいました。

幸い、その夜から熱も下り快方に向いました。併しそれから退院迄の一週間、毎日見習さんに浣腸を続けられたのです。(但しトイレに行くことは許されましたけれど)そして退院のときも便秘を注意され、下剤よりも浣腸を使う様指示されました。なんと皮肉なことでしょう。マニアのあたしが浣腸を勧められるとは!!。ところが、なお皮肉なことは、どうしたことでしょう。それ以来、浣腸に前の様な感激を味えなくなりました。同姓とはいえ、自分以外の人の手で行われた浣腸が、一人プレイに比して余りに刺激が強すぎたためでしょうか。こんな目に二度とあいたくないと思った一週間も今となって何かたのしく思い出されるのです。

抛にその後、外来で通ったときも、自分から便秘を訴えた程ですもの。前には口に出すことも恥かしかつたこの言葉を。このとき予期に反して、帰ってから軽便浣腸を使うことを指示されたときは何だかがっかりした程でしたから。この経験をかきとして、便秘をひと前で話せる様になったのは大変な変化でした。浣腸に対する羞恥も少しうすらいだ様です。今あたしは一緒にプレイできる相手が欲しくてなりません。といっても本格的なサドの方にでもあつたら大変ですから、異性は矢張り怖いのでこんなことを考えています。

まず会員制のクラブがあると仮定しましょうか。会員数はせいぜい十人位。三十五、六才迄の女性で浣腸の体験者とします。月一回どこかに集って話し合う。各自の住所氏名は必要なく、出席するときは、なるべく素顔をかくす。もし外で合つて互いにわかつて言葉はかわさない。会合に要する費用は各自負担、会合はその都度、次回の期日をきめる。一度でも欠席したら次のチャンスはない。こんなクラブがどこかにないかしら。あつたらすぐに入会するんですけれど。

さて、このところ、あまり浣腸が続いたためか、自然便がつきにくくて困っています。

これを書いている現在、すでに宿便は四日間も体外に出ることを拒んでいます。四日間、九十六時間以上も!!。おおむいてお腹にさわると結腸は石の様な塊りで一杯。たえず便意が意識されて、それがA感覚を刺激します。でもあたしは浣腸の誘惑に堪えています。机のひきだしには軽便浣腸が、まだ半ダースも残っているのですけれども……。浣腸なしで、幾日目に排泄できるかということ、しきりにA感覚を刺激されることに、苦痛とまじった快感を味っているからです。

この前の投稿では、とても勇気がなくて、ある人名簿から適当なアドレスをとって記しました。今では病院での体験があたしに少し積極性をプラスした様です。マニアの方のお手紙を頂きたいと思います。もしこの拙文が掲載頂けたら、その翌月の十五日頃に届くように(本誌の発売が二十五日ですから)東京都江東区日本郵便局留置、

北 沢 操 あて

にお便り下さいませんか。今後、身のまわりのお友達にも働きかけてみたいので、体験された方のアドバイスが頂きたいのです。ではまた機会もあると思いますが一先ずペンをおきます。

△満州開拓団婦女子の自決▽

四人の女性の切腹見聞記

赤城 宗一郎

その頃私は、川一つへだててソ連領と相對する国境の町、黒河郊外のある療養所に入っておりましたが、戦況の悪化と共に、黒河から少し離れた地方に疎開しました。そこは開拓部落で、男達は殆んど現地召集を受けて戦線に出動しており、留守を守るのは女達ばかりでした。私が世話になった家は、その部落の開拓団長の家で、主人は勿論戦線に出ており、奥さんと一人娘の悦子さんは主人の安否を気遣いながらも、私にも非常に親切にしてくれました。

名前は忘れましたが、奥さんは二十五、六才位の背のすらりとした美人でした。悦子さんは一寸お転婆で、この春女学校を卒業し家事を手伝っておりましたが、そんなことより馬に乗って飛び歩くのが好きらしく、いつも奥さんに叱られていました。

戦況はいよいよ悪化し、遂に国境部隊は総崩れとなり、青く澄んだ北満の空にも、ソ連機が飛ぶようになって来ました。敗戦が確実となった八月十日、連隊本部から速かに新京以南に後退するようにとの命令があり、どの

家も大騒動をして家財の整理をしていました。私もまだ十分に快復しない健康状態でしたが、不安に駆られながら、僅かばかりの荷物をまとめて何時でも退去できる準備を整えておりました。

そうして八月十四日の夜でした。敵機が今迄にない低空がやって来たのですが、一発の爆弾も落さずに南の方に飛び去りました。

私達は不安な一夜をまんじりとせず過しましたが、あくる朝ソ連機の撒いた沢山のビラを拾ったときは、全く失望しました。それ

にはこんな意味が書かれてありました。

『日本は敗れた。天皇は無条件降伏を申し入れた。戦線の兵隊は皆全滅した。お前達も無駄な抵抗を止めよ』

軍の命令さえあれば何時でも出発出来る準備をして待っていた私達にとっては正に青天の霹靂でした。汽車の駅まで十里以上も離れているこの僻地の部落では、どうすることも出来ません。

私は諦めにも似た気持で奥さん達の住居の方に行ってみました。そこには近所の奥さん達が二人集っていました。入って来た私を見ると奥さんは、『もう日本も駄目ですね。この分では主人の命もどうなったかわかりませんわ』といていました。私は慰める言葉もないままに暫く合槌を打って少しばかり話した後、自分の部屋に戻って横になっていると悦子さんが私の部屋に入ってきて来て、『もう駄目よ。私達はどうすることも出来なくなったのよ』といいます。私は不審に思っ問返しますと、この先の五里ばかり離れた同じ開拓部落では満人に襲われ、婦女子は暴行を受け、家財は全部掠奪され、挙句の果てには家屋に火を放ったというのです。そしてその部落では幾人かの女性が自からの貞操を守る

ため自からの命を絶ったとのことでした。

悦子さんは、『私達もそうならない前に潔く自殺するわ』といい残して帰って行きました。

私はそうなった場合に衰弱している自分の体のことを考えて暗澹たる気持に襲われ、ついうとうとと寝込んでしまいました。ふと物音に目を覚ますと、奥さんが静かに入ってきて、私に来てほしいというのです。何事だろうと思ひながら身仕度をして奥さんのあとから入って行くと、先刻居合わせた近所の奥さん達二人と、悦子さんや奥さんが真新しいモンペ姿で車座になっていました。私が入って行くと奥さんは、私の坐るべき場所を示してくれました。座に着くと各々の前には、すめと酒が用意してあります。

私はハッと予感がしたので、四人の婦人達を眺めますと、先刻訪れたときの不安気な表情はすでに消えていましたが、顔を少し引きしめ、何か決意しているらしい様子が窺われました。

『いよいよやりますか』

私が問うと、四人ともこっくりうなづきました。そして奥さんが私に一丁の拳銃を渡した。『念のために五発入れました。これでもしも

の時は私達の止めを刺して下さい』

というのです。

私はズシリとした拳銃の重みに彼女達の悲壮な覚悟の程を知ると、何もいわずにただうなづきました。

そして奥さんは

『さあ、最後のお酒よ。皆さん、ゆっくり飲みましょう』といって盃を取りました。

皆黙ってそれにならない、乾杯の様に目の高さまで挙げ、一息に飲み干しました。

盃を置いてから

『どうやってやりますか』というと、一人の奥さん（仮りにCさんとしておきます）が『刃物よ。この際、私達も満人の慰めものにならないうちに、潔ぎよく日本の女らしく腹を切るのよ』といいながら手で切腹の真似をして見せました。私は、

『腹を切る？……』驚いて問返しますと、奥さんは、

『そうよ、私達は日本の女ですもの、女ながらも立派に腹を切るつもりよ。男に負けない様に見事に切腹したいわ』といいます。

私はまさか女が男の様に腹を切るとは思わなかったものですから、『腹を切るって大変ですよ。とても苦しいでしょう。それより……』

……』といいかけますと、今後は、悦子さんが傍から

『大丈夫よ。私だって腹を切るのよ。こうして』といって手真似をしながら、『でも切り損ったら、あなたがその拳銃で心臓を撃ってくればよいのよ』と私を励ますようにいうと奥さんも、

『私達は腹を切ったら介錯なしで自分で死ぬつもりですけど、若しやり損ったら此処を貫いて止めを刺して下さいね』と乳のあたりを指します。私はこの四人の女性達の健気にも悲壮な覚悟の前には逆に制止する言葉も出なくなり、しまいにはうなずかざるを得ませんでした。そして彼女達は明け方を期して女ながらも見事に腹を切る覚悟を決めていたのです。

こうした会話のやり取りの中に酒も終り、短い満州の夏の夜は少し白みはじめました。奥さんは酒席の器物を手早くかたづけると、一同を促して次の間に入りました。

其処には何時用意したのか古式通りの切腹の座が整えられていました。それは十畳程の座敷で、床には『天照皇大神宮』の軸が懸り芳しい香の匂いが部屋一杯に立ちこめていました。四人の座る切腹の座と私の坐るべき場

所以外は全部畳はずされており、私の座を除いて四つの腹切りの座には裏返しに畳に白布をまき、白い布をたらしした三宝を各々の前にすえ、その上には自からの命をたつ短刀や脇差がのせてありました。

そこで、これから四人の女性達の悲壮な切腹が行なわれる訳ですが、私は残念乍ら悦子さん以外の三人の女性については名前を知らなかったのだ、奥さんと悦子さん以外の二人の女性についてはBさん、Cさんと呼ぶことにいたします。Bさんは奥さんと同じ位の三十四、五才、Cさんは二十二、三才でした。十八才の悦子さんは、四人中最も若かったのです。

一同はそれぞれの席に着くと、私の坐るのを見守っていました。私は始めこれから行なわれる、彼女達の壮烈な女の腹切りを考える、不思議な興奮に襲われ、胸をドキドキさせ乍ら自分の座に着きました。しかし、先刻の酒の座で出された酒の大半を飲んでいたので、大分気も大きくなっており、腹を切ったあとの始末についての恐怖感は今もありませんでした。

私が坐ると、奥さんが

『ではこれから私達は女ながらも立派に腹を

切りましょう』と三人の顔を見廻して、さらに言葉を続けて、これから切腹を行なうについでにいろいろ具体的な説明や、立合の私に対する要求などを述べました。

(一) まず腹を切り損うといけないから、少し位恥づかしくても邪魔になる衣服は出来るだけ脱いで下腹を十分寛げてから切ること。

(二) 腹を切ってから出来れば介錯なしに自分の力で死ぬこと。そのためには腹を切り終ったら力の衰えぬ前にすぐ乳の下か咽喉を突きえぐるつもりだが、その場合立合人は胸なり咽喉なりを突き易いように体をまっすぐに支えていてほしいこと。

(三) それから私達は何といっても女だから最初の突っこみが不十分になった場合も考えられるから、刀を腹にあてたら手を添えて少くとも四纏位の深さまで突っ込んでほしいこと。それから自分の力で切って自決をするが、それまでに不覚を取る様なことがあった場合はすぐ拳銃で止めを刺してほしい。

ことなどでした。

私は奥さんの話を聞いているうちに、一人

や二人ならばよいが、四人とも私が介錯せねばならんことにでもなれば大変だと思いましたが、それでも先刻の酒がだんだん利いてきて神経が麻痺してくると、大胆になり、出来ないこともあるまいと思う様になり、奥さんの申し出にうなずきました。

私がコックリうなづくのを見てから、奥さんは、『それではしっかり頼むわ』といって三人を見廻し、

『さあもう夜が明けますから急ぎましょう。まず私から切ります』

といって、私に目で合図をしました。私は拳銃の安全装置をはずしてから、奥さんの後ろに廻りますと、奥さんは静かにモンペの紐を解きはじめましたが、何を思ったのかその手を止め、

『悦子、貴女も一緒に切りなさい。一人では切り損うかも知れないから』といいますと、

悦子さんはにっこりしながら

『大丈夫よ。私だって腹位切れるわ。安心してよ』といいます。悦子さんの言葉に安心したのか

『それでは私の切るのをよく見ているのですよ』といいながら、解いたモンペの紐をゆるめ、その場で膝立ちになって、モンペをずる

ずると膝のあたりまで引き下し、ゆるめてあった紐で膝が乱れないように両足を揃えて固く縛り再び腰を下すと、今度は帯をほどき、赤地に梅を散らした腰巻の膝の上で手早くそれを折たたんで右脇に置くと、上着の襟がはだけて、つややかな女の肌がちらっと覗きました。奥さんは一寸恥づかしそうにして、上着と肌襦袢の襟許を左右にグイと大きく引き開けふくよかな乳房を露わに見せると、今度は両手で腰巻の上の白い晒を腋のあたりまでグイと押し下げ、なおも十分に下腹のあたりを掻き払ってから、目を閉じてこれから切るべき腋のあたりを、ゆっくり撫で廻しております。

私は奥さんの白い肉感的な肌を眺めながら女の切腹の始められようとする息づまるような興奮のうちに、奥さんから一尺ばかり斜め後ろに控えておりました。

しかし奥さんはその位ではまだ不十分だと思ったのでしうか、暫くして目を開けると今度は肌着と上着を重ねたままグイと脱ぎ捨ててしまい、上半身素肌となったのです。そして脱いだものをたたんで帯と一緒に置くと、更に両手を後ろに廻して蹴出の上の白い晒のよしこみを外し腰骨のあたりから花の様

にとき揚げますと、その下にあていた真新しい桃色のネルの腰巻がすっかり露わになりました。奥さんはさらにそのネルの腰巻のよしこみも外して両手で最後の腰巻をも十分にゆるめて腰骨から下腹のあたりまで押し寛げると、

『私の介錯は要りませんわ。私始めから自分で切腹しますから最後まで見届けて下さい』というのです。そこで私は脇の方に移って奥さんの女腹切を見届けることにしました。

今や奥さんは腰骨のあたりから下腹まで十分に押し下げて左右に寛げたなまめかしい腰巻の上から、輝くばかりの女の肌を余すところもなくさらしたまま端然と坐っております。

奥さんは私から悦子さん始め一同に順々に目を移すと、誰にいうでもなく

『では』という右手をのばして白鞘の短刀を取り左手で三宝を左横に押しやり用意の杉原紙を切先五厘ばかり残して刀身にまきつけて右膝に構え、左手を突っ込むあたりに軽く添えました。そしてもう一度全部を見廻して『お先きに参ります』といい終るや、深呼吸を一つ、二つ、左手で下腹をつまみ上げて緊張させ、息をとめて腹をふくらますと、目を左の下腹のあたりに注ぎ、手前四、五寸位の

ところから、たたきつけるように右手突きで刀を突き立てました。プスとかすかな音とともに刃先が二纏ばかりも突き立ち、血がその廻りにポツンとにじみました。奥さんはその

まま肩で一息すると、今度は左手も一緒に添えて力一杯、左右にゆさぶりながら刀を押しました。プスプスという音がしたかと思うと刃先は大分深く突きささったと見え、真白い杉



原紙は、吹きだす血を吸い込んで見る見る真赤になりました。奥さんは顔を真青にして頬を引きつらせ唇をかみしめて苦痛に耐えていましたが、一瞬背筋を張り右手を更にしっかと握り左手を刀の背にあてると、ウーンとかすかな呻声と共にズブズブと臍の下約二纏位下のあたりを右脇腹まで、約二十五纏位の長さに一気に引き切ったのです。時間にすると約二十秒位だったでしょう。鋭利な刃先が奥さんの真白な下腹を裂くごとに、切れ目が白く見えると血が噴水の様に腰巻の膝前まで吹き出し、次に切口がブクツとふくらんで一本の太く赤い絹糸の様になりタラタラと白い下腹をつたって流れ出し、忽ち真赤な鮮血に染められて行きます。奥さんの下腹はもう真赤になり解きゆるめた桃色のネルも見える見るうちに赤く染まりところどころ血溜りさえ出来ています。

しかし奥さんは右脇腹まで切り終っても刀は腹に突き立てたまま、左手を膝について、背を丸めて肩で激しい息づかいをしておりましたが、やおら背を伸ばすと、またもや左手を刀に添え、自分の切腹をたしかめる様に、右の脇腹を引きえぐる様にして突きたて

ると、刃は更にまきつけた杉原紙もろとも、ズブリと入り、一文字に切った創口からは腸まではみ出てきました。奥さんは顔をゆがめて苦しそうにして刀を抜き取り、刃先を上に向けて、両手で持ち直すと、切先を左の乳のあたりに持ってゆき、かすれた様な声で「皆さんさようなら」といいも終らず、それこいままでの満身の力をこめて突きえぐる。バツタリ前向きになって血の海に倒れ伏してしまいました。それからピクピクと二、三度痙攣がありました。すぐ静かになって息絶えました。そして突つ伏した奥さんの体の重みで短刀が柄元まで貫かれたらしく、倒れた奥さんの白くなめらかな背中を突き抜けて、切先がちよつとのぞくと、其処から鮮血の滴りが一本の赤い線の線になって、皮膚をつたってお乳の方に流れはじめました。

この間の時間は刃を腹に突き立ててから完全に息絶えるまで約四分位でしたが、女ながらも実に立派な切腹でした。

奥さんの切腹の凄絶さに吐気を催した者もあった様でした。それはCさんです。

Bさんも真青になって黙ったまま息を呑んでいたようでした。こうして一瞬沈黙が流れましたが、今度はBさんが思い切ったように

「次に私が切りますわ」といい、私に「介錯をお願いします」というと、紐をゆるめて膝からお尻のあたりまで、モンペをずり下すと目も覚めるような濃い水色の薄物の腰巻と、その下にあてているらしい赤い腰巻が少しずけて見えました。それからBさんは奥さんがやったと同じように、胸高にしまっていた帯を解き、上着と肌着の襟を左右に開き、ふくやかな乳房と、そのすぐ下まできっちり巻かれた腰巻の白い晒をすっかり露わにして前を十分に大きく寛げました。それから肌着の脇の方から両手をさしこみ、水色の腰巻の晒のよしこみはずし、モンペと同じようにして前膝からお尻のあたりまでときどき広げると、案の定、燃えたつような真赤なネルの腰巻が大きく見えてきました。次にモンペの上着と肌着を重ねたまま、襟を両腕の付根のあたりまでさらに大きく寛げ、両手でネルの赤腰巻の上につけた白い晒を一寸ゆるめるようにして、思い切りよく臍の下四纏位まで押し下げ、なおも腹を切るとき邪魔にならぬよう左右の脇腹を十分に広く寛げ終ると、軽く一礼して、「お願いします」といい、三宝にのっていた脇差を右手で取り、左手で払った鞘を三宝に返し、三宝ごと左にずらします。

私はBさんのやや右後脇から杉原紙を差し出すと左に受け取り、それを口で二分して、半分はしゃつかと口に咥え、半分は刀身に巻きつけました。そして、私を振り向くのを合図に、右手の切先を十分に緊張させた左の下腹のあたりにしずかにあてがいます。私はBさんの刃をしゃつかと握った右手の上に自分の右手を添え、左手で左の肩をしゃつかと握んで苦痛のため体が倒れて切り損うことのないようにしました。「では」と、私が合図をする、と、Bさんはこっくり頷きました。私は刃を握ったBさんの右手の動きをリードするように下腹に当たった冷たい切先を、そのまま、まっすぐ十纏ほど離すと、「目を抜かないで」というが早い、真白な肌に思い切り刃を突きたてました。

「アッ」とBさんは叫んだようでした。刃はすでに杉原紙を巻きつけた部分まで柔かな腹部に没しています。Bさんは歯を喰いしばって肩で大きな息をしています。この分ではBさんは恐らく自分一人では一文字に切り割くことは難しいだろうと思った私は、声をはげまして、「切りますよ」といいつつ、そのままの深さでブスブスと臍の下約二纏位のところを右の下腹まで三十纏ちかく引き切ってし

まいりました。最初刀を突き立てたときは、杉原紙に血が滲む程度でしたが、切り割くに從つて白い脂肪層がチラッと見えたかと思うと忽ち鮮血がピューと膝前に拡げられた水色の腰巻のあたりまで、噴水の様に飛び出し、ついで真赤な太い絹糸があらわれる様に、血がドロリと出ると今度は下腹をつたって流れ出し、見る見るうちに腰巻の白い晒を赤く染めてしまいました。

私がBさんの右脇まで一気に切ると流石にBさんは胸をのけぞる様にして呻くと口に咥えていた杉原紙を膝の上に落し、右手の刃を腹に突きたてたまま、左手を畳の上に支える、がっくり首を前に垂れて、肩から背中にかけて波うたせながら大きな息をしておりましたが、一瞬気を取り直し、左手を支えに少しづつ体を起し始めました。するとBさんは先刻より一層激しく背中を波うたせて、『痛い……』とうめき始めました。私は若しや不覚を取るのではないかと思って、前に体を倒したときかぶさってしまった上着と肌着を両手で、かき上げる様にして捲り上げると、どうでしょう……。前にかがんだ時、腰巻の晒の部分が一文字に切った切口にがっくりはまり込んでいます。Bさんは『お腰を取って

……襦袢も……』と呻く様にいますので、私は上着と肌着を重ねたまま左の腕をスポツと脱がせてしまいました。

今やBさんは畳についた左腕を支えに体がかがめているので、奥さんの様に腸は出ませんが、着物がかかっている部分は膝前のところと、右脇に突っ込んだ刃をしっかりと握った右肋のあたりだけで、あとはすべて惜しげもなく露わして苦痛に堪えているのです。

私はBさんの耳許に口を寄せて『介錯しますよ』といったつづ左手で肩をもう一度グイと掴み、右手でBさんの拳もろとも、突っ込んでいた刃をグイと抜きとり、左の乳房の下にあてがい肋骨の間を抉る様に突き込むと、Bさんも最後の氣力を振りしぼって畳に支えていた左手を刃に添えてきました。骨が邪魔になつて仲々入りません。そこで私は肩を掴んでいた左手をはなし、骨と平行になる様に、血まみれの刃先を一寸斜めにする、とブスリと突きさります。今何の支えもなくなったBさんはそのままドツと血の海に突伏してしまいました。そして体の重みが全部のしかかつてピクピクとかすかに痙攣しながら刃先は少しずつ深く入り遂には心臓を貫いて血まみれの切先が少しずつBさんの背中中の皮膚を突き

破り、全く息絶えても体は少しずつ沈んで行き、暫くたつとBさんの胸許は脇差の鍔許まで貫かれてしまい、鮮血の滴る切先が約二十厘あまりも突き出て、その傷口から左右の脇下に真赤な絹糸が二、三本白い肌を彩り初めていました。

奥さんやBさんの凄じい腹切りを真青な顔で眺めていたCさんと悦子さんは黙って顔を見合わせて、無言でうなずき合いました。Cさんは奥さんが腹を切った時、すでに吐気を催し、更にBさんの切腹でその生臭い血の匂いのため、胸許から膝にかけて吐液のため大分汚れていました。

私はBさんの凄絶な腹切りの介錯で手が血まみれになつたので、手を洗いに行こうと思ひCさんも一緒に来るよう誘いました。

悦子さんはCさんが衣服の汚れに困っているのに気付くと『私のモンペの新しいのを出して上げるわ』といって一緒に立ちました。Cさんは顔を洗うと悦子さんと一緒に納戸に入り衣服を改めている様子でした。その間に私は手を洗い終り、座敷に戻り残り少い香をつぎ足して置きました。奥さんとBさんの屍は自からの血の海に突っ伏して、蠟人形の様になく艶のなくなった真白な背に突き出た切

先と、脇の方に流れ出た数条の血はすでに乾きかけておりました。部屋中はムツとする様な血腥い匂いが漂い、言語に絶した凄惨な状況を見せておりました。

間もなくCさんと悦子さんが一緒に入ってきて元の座につきました。

Cさんは少し落ちついた声で、Bさんが腹を切った時、苦しんだ様子を見て、自分は一切の衣服を脱ぎ腰巻一枚で、切腹する旨を告げ、私に介錯を依頼しました。そしてモンペの紐を解きゆるめてすつと立ち上るとモンペを完全に脱ぎ捨ててしまったのです。その下には絹物らしい真赤な腰巻が踵の白足袋のあたりまで届く長目の裾まで色あざやかに露れました。次にそのまま膝立ちとなり帯をシュルシュルと解いて手早く畳んでモンペの上に置き、今度は上着の襟を開き両手をすばめる様にして脱ぎ捨てると、真新しい桃色のネルの肌着が表れました。脱ぎ捨てた上着も片付けると、肌着の紐を解きそれも思い切りよく脱いだのです。

結婚したとはいえ、まだ半年ぐらか経っていないCさんの肌は輝くばかりに美しく、乳房は薄桃色に染まっていました。

それからまたスツと立ち上ると、絹の赤い

腰巻の紐（Cさんの腰巻はすべて晒のよしこみに更に紐を付けて前に結んでおりました）を解き外して足許に落すと、その下には、たつぷり長目の濃い桃色のネルがあらわれました。Cさんはそれも赤い腰巻と同じ様に足許に脱ぎ捨て一番下にあてた、矢張りネル仕立の赤と黄のやや太目の格子模様の腰巻一枚になりました。そして膝のあたりに散っている桃色や赤の腰巻をキチンとたたみモンペと一緒に置くと、両手で切り開くべき下腹のあたりをゆっくり撫でながら、私に最後の止めは自分で出来ないかも知れないからよろしく頼むとくれぐれも頼み、

『では』と私を振り向いて合図をすると同時に、三宝の上の黒い蠟帯の短刀を右手に取り払った鞘を三宝に返して、左脇に片付けました。

そして、左手で下腹の皮膚をつまみ上げて二、三度深呼吸をしながら気持を落ちつけている様でした。やや暫く経って右の後脇に控えた私に『思い切り深く突きたてて下さい。』

その後は自分で切りますから』といって、短刀を私に渡しました。私は左手でCさんの肩を掴み右手に持った短刀の切先を左の下腹にそつとあてがうとCさんは右手でその切先を

そつとつまみ上げ、自分でここぞと思うあたりに持っていく、左の掌で切先を囲む様にして突きたて易い様に皮膚をピンと張り、左の下腹を突き出す様にして呼吸を止め、『さあ』と声をかけました。私はその声に応ずる様に、刃先を右に向け腹部と直角位の角度で刃を心持ち右に引き切る様にしてグイと力をこめて突き立てると、ブスリという皮膚を貫く鈍い音と共に短刀は四種位突きたてられ、鮮血が少しずつ滲み始めました。それまで目を切先のあたりに据えて自分の腹に短刀が突き立つのを見届けていたCさんは、『あとは自分で切ります』といって、左手を腹につけたまま右手で短刀をしっかりと握り、もう一度深呼吸をして腹を大きくふくらますと、『ウーン』と小さなうめきの様なものを発すると同時にブリブリと脛の下約四種位のあたりをゆっくり自分で見届ける様にして切り割いて行きます。初めチラリと白い脂肪層が見えたかと思うと鮮血がシュツと噴き出して腰巻の前膝あたりまで飛び散り、次には血の塊りが奥の方からドロリと溢れて忽ち切口から真赤な絹糸の束を垂らす様にして晒のよしこみに吸いこまれて行きます。

そして切先が脛の下をすぎて切口の長さが

十五纏位になったときは、白い搦き立ての餅の様であった下腹はもう真赤に染まっておりました。二十秒ほどで右脇腹の肋骨にあたる位まで大きく一文字に掻き切ると、刃を突っ込んだままもう一度自分の切口をたしかめ、「痛いわ」と顔をゆがめて唇をかみしめ、点々と飛び散った血で染まった左手を畳について体を支えようと、息を抜く様にして肩を波打たせながら苦しそうに呼吸をしております。私はBさんの苦しみ方を思い出したので、「息を抜いてはいけない」と耳許で怒鳴る様にいますと、Cさんはかすかにうなづき小さな声で「体を起して」といいます。私は両肩を掴みグイと引き起すと、畳に支えていた左手で、体を起したときドロリとはみ出た腸をズルズルと掴み自分の膝の上に引きずり出しました。ドス黒い血にまみれた大腸は生物の様にくねりながら、崩れた膝前の腰巻の凹みに流れだしました。

今や顔面蒼白となり唇をワナワナ震えさせて苦痛に堪えています。

Cさんは今迄の三人のうちで最も深く切ったらしく出血は一番多量で、前に突つ伏した恰好もBさんや奥さんの様に端座したままでなく、あぐらをかいた様になっていました。

その顔には不思議にも苦痛のあとは少しも残りませんでした。奥さんもBさんも前に倒れるとき白目をむいて頬を引きつらせて苦痛の裡に息絶えましたが、Cさんだけは一文字に掻き切って短刀を腹中に突っ込んだまま、腸を掴み出す頃から苦痛の色がだんだん少なくなったのは、何としても理解できないことでした。こうしていよいよ最後に、女性としての腹切りを立派にやり遂げたのが悦子さんでした。悦子さんは顔色こそ青ざめてはおりましたが、Cさんの様に吐気も催さず、始終気丈夫にもグツと唇を噛んで三人の次々に腹を切った血の海に倒れていく有様を眺めていました。

私はCさんの介錯でBさんのときほどではありませんが、手が十分汚れたので、もう一度洗面所に行くことにしました。その間に悦子さんは床の間の香をつぎたしたらしく、さらに沢山の煙がユラユラと上っていました。戻ってくると、悦子さんは、

『いよいよ私の番ね。私は十文字に切るわ。一文字ではまだ完全じゃないもの。だから貴方も手を添えてね。……若しやり損ったらすぐ此処を刺して』と咽喉を指します。私は今迄三人の女性がそれぞれに切腹したけれども

一文字に掻き切るのが精一杯で、十文字に切れることは到底むづかしなろうと考えたので、悦子さんの十文字腹の申し出には強く反対しました。悦子さんは十文字腹を切ることについては一向に譲らず、何度も何度も私にいうので、仕方なく引受けることにしました。私はまだ十八才で一番年の若い悦子さんだからきつと十文字どころか、一文字でも若しかすると失敗するかも知れない。その時は苦しませないですぐ死ぬる様にして今迄一度も使わなかった拳銃を使おうと決心しました。

そこで私の背くのを見届けた悦子さんは『仕度を始めます』

というと、席を外して少し斜め後ろに下ると、立ったままモンペの紐をゆるめ一寸前かがみになって、それを脱ぎ捨てると、桃色の絹物らしい腰巻が足許まですっかりあらわになり、その下にまいていらしい腰巻の赤い色がところどころ透けて見えました。そして再び正座した悦子さんは、次に帯を解き捨て、モンペの上着を脱ぎ、それらを手早く片付け右脇に置いてから、袖だけ赤地の柄のついた白木綿仕立ての肌着の紐をほどき、その下に着ている、赤いネル仕立の襦袢を重ねた



まま、胸許を掻き払げました。腰巻の上につけた白い晒がお乳のすぐ下のあたりまできっちり巻かれ、これから自らの刃で掻き切るべき腹のあたりは桃色の腰巻の下から盛り上って見えた。

悦子さんは左手を脇腹にあて右手で切るべき下腹のあたりを、腰巻の上から何度も引き切る真似をしていましたが目を開いて『矢張り邪魔になるわ』という、二枚の肌着を脱ぎ捨てて胸から上をすっかり露わにしました。そして両手で下腹を押えて腹式呼吸をするように、お腹をふくらましたりへこましたりしておりましたが、『お腰もはずすわ。笑っちゃ嫌よ』という、スッと立ち上がり、両手を背中の方に廻して白い晒のよこみを外し、桃色の腰巻をハリリと足許に散らし、赤地に千羽鶴をあしらったモスリン地の裏付の腰巻を、裾までくっきり見せました。しかし悦子さんはまだ十分でないらしく、なお下腹を撫でたり、呼吸をとめてお腹をふくらましたりしておりましたが、遂に決心したらしく、その腰巻もはずしてしまいました。そしてその下にあてた真紅のネルの腰巻一枚となっていました。

胸高にきっちり巻かれた真赤なネルとその上につけた晒の白さとは対照的な美しさを見せて、いまなお私の記憶に残っているのです。今でも、時折町を歩いていて風の吹く日など、たしかに赤いネルの腰巻だと思われるものをひらめかせているのを見ると、私はあ

の時の、悦子さんをまざまざと思い出すのです。そして私が赤いネルの腰巻に魅せられる様になったのは、これが原因でないかと考えています。

こうして最後の腰巻一枚となった悦子さんは蹲踞の様な姿勢で、あとから脱ぎ捨てた二枚の腰巻と襦袢を片づけると、肌襦袢をしめていた紐だけ持って自分の席に戻りました。

『仕度は終わりました』といいながら悦子さんは、その細紐で両膝を揃えて後ろから、腰巻ごときっちり結びました。そして再び正座すると、手を後ろに廻して、最後の一枚である真紅のネルの腰巻のよしこみを外し、晒しの両端を大きくゆるめて、腰骨のあたりまで押し下げました。

むっちりした白い柔肌と、腰から下のあたりに押し寛げられた腰巻のネルの赤さが悲しくも美しい対照を見せて、端然と死の席に坐る悦子さんの姿は神々しくも見えました。

一切の準備を終えた悦子さんは

『では』と一寸首を向けて合図をすると、三宝の九寸五分を取り、左手で払った鞘ごと三宝を左脇に片づけますと、右脇に控えた私の差し出す杉原紙を全部口に咥えました。そして左手で切るべき下腹のあたりをなおも広く

掻き開けながら、赤いネルの上につけた晒の右端の部分を引き出し、それをくるくると刀身にまきつけ、右手でもう一度しっかり握り直して、右腕をのばしたり縮めたりして切る時の調子を整えておりました。

私は多分突き立てる時はCさんと同じように手助けが要るものと思い、一寸いざり寄って悦子さんの左肩を掴むと、

『支えてくれるだけで良いわ。自分で突っ込むから』といいます。そして切先をソッと自分の下腹にあてがい、左手でむっちりした皮膚をつまみ上げて腹部を緊張させました。

それから刃先を腹から二十糎ばかりはなして大きな深呼吸の後、息を止め目を宙にすると、下腹を突き出す様にして、片手突きで気合諸共突きたてましたが、乙女の柔肌は冷たい切先をはね返して刃先はツルと滑り、最初のネライは少し外れて、左手でツマミ上げた部分よりもっと左の方に、しかも刃先がやや斜下に向いたまま三糎位しか入りませんでした。

『駄目ね』と悦子さんは小さく呟くと、突っ込んだ刃はそのままにもう一度深呼吸の後、腹を大きくふくらませ背筋をピンとのばすと目を下腹に突っ込んだ刃先に注ぎ、更に左の

手も一緒に添えて、斜めになった刃先をこじ上げる様にして二、三度上下にゆすぶると、今度はブスリという鈍い音と共に切先は五糎ほどの深さで突き立てられ、刃先も真横に向き、えぐられた傷口からピューと太い鮮血が噴き出し、腰巻の膝前のあたりに点々と飛び散りました。刃身にまいた腰巻の晒も噴き出す鮮血を吸いこんで、見る見る真赤に染まってゆきます。悦子さんはフーと息を吐き出す様にすると、もう一度刀をゆすぶって突っ込んだ具合をたしかめると、下腹を前に突き出す様にして、左手を刀身の背にあてると、グーと一気に右脇の方に掻き切ってゆきます。一糎、二糎と切り割くに從って白い脂肪層がチラッと覗いた瞬間、切口からドロリと流れ出した血は下腹を染めはじめ、見る見るうち腰巻の白い晒は真赤になり、ネルと晒の縫目もわからなくなっていました。悦子さんは歯を喰いしばって顔を真青にして目を宙にすえたまま、右へ右へと力一杯掻き切って行きます。

刃が悦子さんの柔肌を切り開くごとにブリブリというかな音が聞え、そのたびごとに出血はひどくなり、腰巻は鮮血を十分に吸いこみ窪みには血溜りさえできました。

突き立ててから十三、四秒位で右の脇腹まで存分に掻き切った様でした。切り終ると宙に据えていた目を下腹の切口に注ぎ、今までこらえていた息を大きく抜くと、口に咥えていた杉原紙をパツタリ落し首をがっくり前に垂れ左手を畳に支えて肩で大きく呼吸しておりました。

そして一瞬『ム……』とうめくと今度は右手に握った腹中の刀を抜き取り膝に構えました。唇はもう真青です。一文字に切ったとき腹部動脈をも切ったらしく出血はいよいよ激しくなります。私はこれでは十文字どころではない、早く介錯せねばと思い、苦しい息づかいの悦子さんの耳許で『介錯しようか』といますと、悦子さんは勝気にも首を左右に振り私の申し出を断ると目をかっと見開いて小さな声で『十文字』といいます。そこで私は思い切つて、左の肩をグイと引き起しますと、悦子さんは左手で、掻き切るにつれてまくれた腰巻の、まだ血が染まっていけないネルの右端の部分で、血を拭きとり、右手で私に短刀を手渡しました。私は右手でその短刀を受け取り、ミゾオチのあたりに突込みますと『イタイ、』悦子さんは首をのけぞらしました。私は委細構わず、一寸刀を心持ち引抜く

様にして、臍のやや右を通つて、一文字の切口に適するまでまっすぐ切り下しました。しかし私が悦子さんの体を起したとき、一文字の切口がパツタリ開いて、腸がはみ出し、それから下が思う様に切れないので、私は一寸力をこめて短刀を押しあげようとすると、悦子さんは歯をくいしばり、頬を引きつらせながら短刀を握った私の右手に、自分の右手を添え、左手ではみ出た腸を押し込む様にして、パツタリ割れた切口を合わせようとし

ます。私はこれほどまでに十文字腹に執着する悦子さんの意志には、全く驚いてしまいました。これで悦子さんの初めの念願どおり、女ながらも十文字の腹切りをやった訳です。悦子さんは一文字の切口を断ち割ったとき、自分の手を添えたのが最後の力であつたらしく右手を血まみれの刀身に添え、左手ははみ出した腸を掴んだまま、白い首をのけぞらし、左肩を支える私の腕によりかかったまま息絶えていました。悦子さんの膝前は始めにゆわえた細紐のため乱れてはおりませんでしたが、血でビショビショになった赤いネル腰巻は膝前あたりまではだけて露わになった大腿まで点々と鮮血に染まり、足先はゆわえられた膝を中心に八字形に開かれ、その中心に

ベタリとお尻を落した恰好で、左肩を支える私の腕を一寸ゆるめると、そのまま私の胸の方に倒れてきそうな姿でした。

私は悦子さんの屍体をそつと前に倒すと、暫くは呆然と自分を失つて、その場にへたりこんでしまいました。

畳に巻いた白布は点々と鮮血が一面に飛びちり、血潮の中にうつぶせに倒れた四人の女性達の白い背中と腰から下に花の様にとき拡げられた、紅や桃色等の美しい腰巻の色、そして部屋一杯に立ちこめた何ともいえない生臭い血の匂いは私に不思議な陶醉感の様なものさえ誘いました。

今や完全に息絶えた四人の女性達は皆それぞれの思い通り、女ながらも自分で自分の腹を切ることによつて死を賭けた満足を得たのではないでしようか。……今にして思えば、拳銃と弾丸がありながらもなお最大の苦痛と無限の努力を要する切腹という、男すらなお困難な自殺の方法をか弱い女の身でありながら何故選んだのかを考えると、答はそこに到達する様な気がしてくるのです。

私は小さい頃、田舎では祭礼などによくドサ廻りの芝居を見たものですが、ある時女の立腹を切る場面を見たことを覚えています。

何でも男と一緒に自害するにあたって、男と同じように腹を切るのだといって男と向い合になり、臍のあたりまで双肌ぬぎになり赤い腰巻をのぞかせながら短刃を腹に突き立てようとするところで幕になるのです。

しかし、そんな事は所詮芝居の上であって事実としては、あり得ない事と置いていました。小学校四、五年位になって、当時家族の者が読んでいた講談社発行の『キング』……（この雑誌はもうない様ですが……）のある年の九月号を読んだとき『志士の妻』という熊本の神風連の乱で敗れた夫に殉ずる妻のこの書いた菊地寛？（作者は記憶不明瞭）の作品を読みました。その妻の残した遺書のあたりでは『夫と共に切腹し……』とあって、文中の説明は矢張り胸か咽喉を突いて死んで行くことになっていました。

そんな訳で、私は女とは到底腹など切れるものではないと思い、また歴史上にも史料としてはいく度もないから、巷説の芝居や物語等に女切腹とは単なる拡大的表現にすぎないと信じていました。中学を卒業して高校の文科から志を転じて大学では歌舞伎の研究もした私としては随分いろんな芝居も見ることがなりましたが、『長町女腹切』などの場面を見て

も、無論何の感動も催さず、寧ろ非現実的な演技はその芸術性を阻害するものだという論文さえ書く様になっていました。

けれども、昭和二十年のその月その日、私ははからずも、この手で介錯し、この目で見届けた彼女達四人の女性の女の腹切り。……それも下腹を十分に寛げ、そのためには最後の腰巻さえもゆるめて男も及ばないであろうほど、深く大きく自からの下腹を存分に掻き切って、満州の野に散っていった、生々しい現実を今なお忘れることが出来ないと同時にそれは今迄私が抱いていた『女性切腹』というこの虚構性を完全に打破してしまい、私をして一種の深い感動すら覚えさしめる様になりました。

人間が一切のペールとすべての虚構から脱して完全な本能的な欲求状態において、血を求め止まない野獣のごとく、全く放恣な姿態のまま、よろこびと苦痛という、質的には全く相反する要素が、一つの不思議な融和を見出して何の矛盾も感じない世界があるとすれば、それは私が見た女達の切腹によって示されるものではないでしょうか。いい換れば悲喜ということの対立する要素が一つの場所において融合できるのは、人間の本来的に持

つ自虐という行動的場面においては可能だといえるのではないのでしょうか。彼女達が血みどろの中で最大の苦痛を伴う切腹という行為を通過して、それぞれ満足を感じていたのは、まさに自虐的手段による、苦痛と快楽の融和的満足感だったといえたのではないのでしょうか。

私はこの目ではっきり認識させられたのです。そして奥さんに始まり、悦子さんに終る四人の女性の腹を切る行為は順を追うに従ってより一層露出的となり、より一層自虐的となっていてことに諸賢はお気づきのことでしよう。しかもそこには、素肌を曝し、肌着を脱ぎ、最後の一枚の腰巻さえもゆるめるといふ行為についての羞恥心という倫理虚構は一切影をひそめ、切腹という苦痛を伴う行為によって自からの命を絶ち切るという一点のみ行動の意識が集中していることに照らしても、はつきりと『女の腹切りは現実においてあり得る』という切れるのではないのでしょうか。

この拙文をものするにあたって、私は彼女達の血みどろの中に突っ伏した、背中だけ妙に白くなまめかしい屍体……そして自分の下腹を真赤に染めて、苦痛に堪えながらも自らの腹を切ることになお執着を捨てなかった

彼女達……私はこれらの状況をなおまざまざと記憶に残しているのです。

つまり極言すれば、女の切腹とは、男のそれとは異って、自虐性という本能の赴くままに血に夢たりながら、苦しみと喜びが完全に溶け合った刺激的感觉の昇華ではないかと思えます。

今にしてなお記憶の底にはつきり残る四人の女性の腹を切ったときの所作や表情等を思

い出すままに綴って、私の『女性切腹』について感想を述べて見ましたが、奇クの愛読者各位、ことに女性切腹に興味を持たれる方々の何かの資料にでもなれば、これにすぎる幸せはありません。

なお、私はその時以来、女の下着としての腰巻の美しさを忘れることが出来ません。四人の女性がことごとく息絶えた時、腰のあたりに花の様に拡げられていた赤や桃色の腰巻

はなお血生臭い記憶と共に脳裡に残っております。奇クではフェチシストの記録もある様ですが、それも何か自虐的本能の欲求と関連がある様な気もしております。さりとて私は特別に女性の下着に興味を持つ者でもなく、切腹の真似をすることにおいて満足感を味わう者でもありません。ただ、その時の衝動が私をして腰巻というものを通しての記憶に変化したのではないかと考えております。(終)

〔新版〕 女体悦虐フォト七十選

Z組七十集 大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付各組一枚一組 (送料共)

Z 1	ゴムの猿ぐつわ	(梨花)
Z 2	囚女第六十三号	(柳)
Z 3	猪型手足吊り	(梨花)
Z 4	逆エビ強烈縛り	(大塚)
Z 5	ローソク責め	(四浦)
Z 6	豊臀への珍責め	(絹川)
Z 7	淫らな変型縛り	(愛川)
Z 8	ザリガニしばり	(梨花)

Z 9	引き回しシーン	(東浦)
Z 10	全裸後手高小手	(加茂)
Z 11	豊満な肌の被虐	(大井)
Z 12	黒髪いたぶり	(大塚)
Z 13	足吊り媚態責め	(絹川)
Z 14	黒縄高小手縛り	(四方)
Z 15	強烈荒縄しばり	(梨花)
Z 16	肌の喰込む白い縄	(東浦)
Z 17	くの字の足指苦悶	(桜井)
Z 18	裸身にいどむ縄	(前本)
Z 19	無茶な猿ぐつわ	(竹野)
Z 20	ハリツケの女体	(梨花)
Z 21	おへソなぶり	(大塚)
Z 22	逆手足吊り	(竹野)
Z 23	美肌のいたぶり	(絹川)
Z 24	仰向きの鼻いじめ	(加茂)
Z 25	恐怖の表情一瞬間	(若原)
Z 26	火箸で責める乳房	(梨花)

Z 27	全裸の海老責め	(熱海)
Z 28	ベッド上の痴態	(絹川)
Z 29	足の裏の擦り責め	(大塚)
Z 30	闇の女体飾り縛り	(竹野)
Z 31	首絞め晒しもの	(大塚)
Z 32	鼻孔に加虐	(若原)
Z 33	悦虐責放心状態	(梨花)
Z 34	手枷足ぐさり	(四方)
Z 35	寝室でのプレイ	(花本)
Z 36	猿ぐつわの妙味	(梨花)
Z 37	首縄、柱しばり	(絹川)
Z 38	巻煙草責め	(大塚)
Z 39	尻立て縛りポーズ	(桜井)
Z 40	厳しきエビ責め	(東浦)
Z 41	ゴムのカバ縛り	(竹野)
Z 42	ワンピースの縛り	(花本)
Z 43	荒縄縛り竹棒責め	(梨花)
Z 44	尻を突つ立てて	(大塚)
Z 45	鏡に映す縛り裸像	(山路)
Z 46	苦悶に喘ぐ柔肌	(大塚)
Z 47	酔後の淫らしばり	(絹川)
Z 48	逆十字エビ縛り	(大塚)

Z 49	全裸縛り猿ぐつわ	(東浦)
Z 50	欄間に宙吊り	(梨花)
Z 51	全裸逆エビ縛り	(絹川)
Z 52	荒縄のお仕置室	(梨花)
Z 53	庭園の惨酷風景	(館)
Z 54	被虐の果て	(大塚)
Z 55	痛められた裸身	(大塚)
Z 56	鏡の中の全裸像	(愛川)
Z 57	セーラー服縛り	(梨花)
Z 58	檻の中の緊縛裸身	(愛川)
Z 59	全裸の股間縛り	(絹川)
Z 60	オムツ逆エビ責め	(田中)
Z 61	胴縄に膨らむ腹部	(桜井)
Z 62	ゴム人形の女	(竹野)
Z 63	荒縄のトゲ責め	(梨花)
Z 64	女子大生恥態責め	(田中)
Z 65	白肌露出の全裸縛	(絹川)
Z 66	強要する開股縛り	(絹川)
Z 67	強烈縛り全裸の晒	(愛川)
Z 68	亀甲縛り乳房責め	(梨花)
Z 69	ベッド上のもだえ	(愛川)
Z 70	恥しさに耐えて	(館)

犬の首輪

美 眉 野 芳



A

お手紙有難度う。まさか、あなたからお手紙をいただくなんて。字が少しふるえていてよ。息をはづませながら書いたのでしょうか。私の話、あなたにはちょっと刺激が強すぎたのかしら。

だけど、いけないわ、こんなお手紙を書いたりしちゃ。私、本気にするわよ。

ほんとに、私の便器にしちゃうわよ。

あ、あの話、お店のお客様にしたら、とうとう大変なことになっちゃったの。そう、今のあなたみたいだね。

今夜は、その人の話をするわね。さあ、オールドペアでも召し上がれ。

喫茶店やバーを手広く経営している人だけど、夜はひまなのね。同業である私のバーによく遊びに来る。美しい奥様もいらっしゃる。それがどうして私の便器になったか。面白いでしょう。私にもよくわからない。

あの話をした夜、閉店時間になって、その人から電話があった。

「二人きりで、あの話をしたい」

「あの話って？」

「あの話だよ」

「おかしいわよ、今夜のマスター」

「そりゃ、おかしいよ。あんな話をぼくに聞かせるんだから」

「私、何かお話をしたかしら？」

「そりゃ、ひどい。君がアパートで奉仕させている男の話さ」

「ああ、あれ」

「そう、そうだ。その男がどんな奉仕を君にしているのかと思うと――」

「殺してやりたい？」

「殺してやりたい」

「馬鹿ね」

「お願いだ」

「興味あるの、あの話」

「うむ」

「今夜はだめ。先約があるの。今度ね、約束するわ」

それからマスターのアプレターが始まったの。アブノーマルラブレターのことよ。といっても、簡単なメモ。お店の女の子に気がつかれたら大変だから、カウンター越しにそつと私に渡すの。

例えば、

「今夜も君はあの男に奉仕させるのだろう」とか

「あの男のかわりに君に奉仕したい」

はまだいいとして、

「君の便器になりたい」

とそのものずばりには困ってしまう。

「せめて、君の穿いているパンティでもほしい」

「奥様にいいつけるから」

マスターのメモを胸をあけて、ブラジャーにはさむ。捨てはしない。大切な証拠書類だから。

とうとう、

「君の犬になりたい」

だって。

そう、あなたのお手紙も証拠品だわ。あなたは、私の命令にそむくわけにはいかなくな

ったのだわ。よくて。

長い手紙ももらったわ。理屈っぽいけど読んでみましょうか。

『走り書きのメモを君に渡す。君はちらっと

眼を通すと、何もなかったようにそのメモを胸にはさむ。その毎日繰り返されている同じ動作がぼくをひきつける。メモに書いてある

ことは、君には理解出来ないかもしれない。そのメモを公開したところで、ぼくの社会的地位がどうなるわけでもない。酒の席のプレ

イだとぼくは黙殺してしまうだろう。

しかし、黙殺出来ないのは、メモに書いてあるのが、事実だということだ。ぼくはメモに書いたことを君に要求しているし、ぼくの

性欲の全てはそこに集中されている。

何故そうなったのか、ぼくにもよくわからない。

ぼくには、結婚したばかりの妻がいる。週刊紙にゴルフ未亡人という新語があるが、ぼ

くの妻は何と呼んだらいいのだろう。男の同性愛者にも、円満でない性生活をいとなんで

いる家庭が多いと聞く。夜の生活に嫌悪感ともなわけては、家庭不和の原因ともなりかねない。

ぼくの場合はそれほどでもない。しかし、いわゆるノーマルな性生活では満たされない

ぼくの性欲はどうなるのだろう。美人の妻が傍にいても、ぬぐうことの出来ない性の飢餓

感、ぼくにとりついて離れない。どうしようもないのだ。どういうわけか。

ぼくの書棚には、種々なSMに関する風俗雑誌、書籍、写真資料などが並んでいる。妻

は、それをぼくの趣味ぐらいに思っているのだろう。別に、なんの興味も起さない。

ぼくは、ぼくの性傾向を理解し、ぼくの欲

求不満をいやしてくれる人を求めている」

「それは君なのだ」

この手紙を読んで、

「奥様がかわいそうだわ」

といったら、

「妻は愛している。愛しているから結婚したんだ。別に押しつけられたわけではない」

「私に怒ったってしようがないでしょう」

「君に怒っているのじゃない？」

「おっかない顔」

「自分に怒っているんだ」

「メモのこと？」

「そうだ」

「どうしようもないの？」

「どうしようもない」

「かわいそうね」

「あわれむな」

「思い切って——」

「思い切って」

「思ひ切って」

「吞ませてあげようかな」

「うむ」

「ほんとうに、私の吞みたい」

「吞みたい」

「吞むばかりじゃいや」

「なんでもする」

「たべる。たべられる」

「たべる」

「じゃ、あとで」

B

とうとうマスターとデートしたわ。普通の

デートじゃないの。マスターとの約束をはた

すためのデート。どうなるものやら。私は純

白のサテンの中国服。からだにぴったりして

そのままなめらかな曲線をえがいている。真

紅のバラのシシュウ、長く切れあがったスリ

ットが周囲の視線を敏感に感じとる。

待ち合わせの喫茶店で、マスターは呆然と

して私を見つめていたわ。

「綺麗だ」

「馬鹿ね」

「まさか、君が——」

「驚いた？」

「びっくりした」

「下には何も着てないのよ」

「えっ」

私はわざと足を組んだ。

「よせよ。見えるじゃないか」

「穿いているわよ」

「おどかすな」

お店で中国服は着たことがない。少しでも
マスターを悩殺することが出来れば、マスタ
ーの願望を達せられるわけでしょう。本当は
自信が無かったのよ。

春から夏になろうという季節は、女が最も

美しく見える季節じゃないかしら。

「マスター、今日のスケジュールは」

「マスターはよしてくれ」

「じゃ、J」

「そのほうがいい」

「映画が見たいな」

「見ましよう」

「それから食事。ポリネシアン・テイドビッ

ツがたべたいな」

「なんだって？」

「ポリネシア料理よ」

「ポリネシア」

「いやね、タヒチのあるところよ。南太平洋

の群島」

「わかった」

「それから——」

「それから」

「あなたのお食事にしましょうね」

映画館は、二階の一番奥の席を選んで坐つ
た。外に二三のアベックが同じ様に奥の席に

散らばっていた。一階は八分満員だったけれど、二階は五分の入り。前の席の客が、たまにうしろを振り返る。アベックがベッティングしているとでも思っているのかしら。あらあのアベック接吻しているわ。見るんじゃない、J。

席に坐ろうとするJにいった。

「犬が座席に坐るなんて、おかしいわ」

「大きな声、出すなよ」

Jはあわてた。前の客が振り返っている。

「今日のデートは、私のいいなりになる約束だったわね」

「——」

「破ったら、お食事をあげないわよ」

Jを端の階段に坐らせた。しばらくして銀色のハイヒールをJの顔の前に突き出した。

「脱がせて」

「——」

「ストッキングも」

「見ている人がいるよ」

小声でJがいった。その口をハイヒールの尖った先でつついた。

「見られてもいいでしょう」

ストッキングをとらせると、ハイヒールをぬいだばかりのむれた異臭がかすかに感じら

れた。Jの唇に足の背を触れる。Jが私の足をつかんだ。

「舐めて」

足の爪は銀色に美しくペデキュアさせていたけれど、わざと洗ってこなかったから、指の間はうっすらと汚れていたし、足の裏の汚れがひどいことはわかっていたの。

「犬は映画を見てもわからないでしょう」

瞬間、Jが私を見上げた。その頭を、脱いでいない右足のハイヒールのままで踏みつけた。Jはかろうじて声を押し殺した。観客がいるのよ。声は出せないわ。犬の声そっくりだった。うう、ですって。

Jは足の指を一本一本口に含んで舌の上にころがした。やわらかく咬んだ。足の指の汚れを丁寧にくぐっていった。

足の指にも足の裏にも、性感帯があるってことを、いやおうなしに覚えさせられたわ。少しずつ興奮してきたの。フフ……。

左足が終って右足、疲れて舌の動きがにぶってくるのがよくわかったわ。唾液があとからあとから流れてくる。私はわざとJの口に足の指を押し込み、力を入れて口の中をこねくり廻し、足の裏でJの頭を踏みつけた。気が良かった。とても。

ストッキングとハイヒールをはかせ、Jの鼻をつまんで口を開けさせると、Jの口の中にベツとつばを吐いた。

明かるくなって廊下に出た。

「中国服はパンティを穿くとだめね」

とJにいった。

「パンティの線がうつっているでしょう」

「中国服が薄すぎるんだ」

「みつともないわね」

「そんなことはない」

「あら、みつともないわよ」

Jは私のいつている意味がなかなかのめこめなかったらしい。

「あなた、私の穿いているパンティはいいのでしょう」

「——」

「あげようか」

廊下にはタバコを吸っている客が私たちを見ていた。日本ナイズされたスリットの長い中国服は、まるで寝室用に考案されたみたいだもの。男は中国服に弱いわ。

「脱ぐわ」

「待ってくれ」

Jは私に返事をするのがやっと。タバコも満足にすってられないの。

「だって、ほしいんでしょ」

「そりゃほしい」

「だから、脱いであなたにあげるわよ」

「今じゃ困る」

「そんなことないわ」

私はちよつと前かがみになっただけで、ピンクのパンティを脱いだ。両脇を結んである小さい可愛いパンティだからすぐとれるの。わざわざ足から脱がなくてもね。ピンクは平凡だったけれど、汚れがよくめだつからこれにしたの。

脱いだパンティを、いきなりJの口に押し込んだ。

「吐き出しちゃだめよ」

「――」

「そのまま私と歩くのよ」

Jは口一杯に押し込まれた私のパンティを無理にかくすのがせい一杯で、盛んに呻き声を放ちながら口元を大きなハンカチで押さえていた。

「デートを申し込まれた日から穿いていたのよ」

Jのふくらんだ頬を指でこづいた。

「一週間前だったかしら」

「――」

「汚しすぎたかしら」

「――」

「どう、私の香水の味」

そのまま夜の雑踏の中をひきづりまわした。

「その手を離しなさい」

苦しくて開ける口元からパンティが顔を出す。あわててJは口元を手でかくす。おかしかった。

一軒の犬屋の前で私は止った。

「首輪を買いましょう」

Jにいった。

「犬に首輪は必要だわ」

店員にJの首を指しながら、

「あれぐらいの首輪を下さい」

驚いたJは内ポケットからお金を出す間、口の中の私のパンティを忘れていた。ピンクのパンティの端が口からはみ出しているのに気がつかなかった。ちょうど可愛いフレヤーがついているところが、Jの口から垂れていた。店員がまじまじとJの顔を見つめた。

Jの顔色がかわった。

びっくりしたわ。やりすぎた、と思った。

Jがパンティを口から吐き出した。

私は首輪を受け取ると、Jを振り向きもせ

ずだまって歩き出した。Jが怒ればそれでいいと思った。これからお店に出ようかと思つた。

ポリネシア料理店の前でJが声をかけた。

「ここに寄るんじゃないの」

「帰るわ」

私はJの顔も見なかった。見るのがこわかつたし、また、ここで甘やかしたらJが失望すると思ったから。へんな気持。

「君は残酷だ」

「そうかしら」

「君の命令を破ったのはあやまる」

「あやまってすむと思うの」

「これから絶体服従する」

「どうだか」

Jの怒ったような顔をふと見たら、もうだめ。

「赤ん坊」

テーブルに坐った。料理を注文する。

「怒って帰るのかと思った」

とJがいった。

「そのつもりだったのよ」

「帰らないでくれ」

「いいわ」

「有難い」

「そのかわり」

「――」

「もっと残酷になるわよ」

C

ホテルの部屋に入ると、Jの首に犬の首輪をはめ、鎖を短かくして床の柱につないだ。ベッドまではとどかない。

一人で湯に入り、Jに買わせたベビードールスタイルのネグリジェを羽織った。まるつきり透き通っているから裸と同じね。

「一人で寝るのつまらないから葉二に電話しようかな」

「葉二だって」

「あなたが興味を持っている男の子よ」

「君が奉仕をさせている男か」

「そうよ」

「それはひどい」

「葉二なら私のからだを抱かせてもいいの」

電話の受話器をはずした。

「待ってくれ」

「ビール、三本持って来て」

「――」

「安心した。だけど、女中さんが来るわ」

Jは柱にくつつき、鎖をかくすと、ハンカ

チを首にまいた。ビールを運んで来た女中は気がつかない。

「ビールはいかが」

ネグリジェも脱ぎ、Jの前を行ったり来たり、歩いた。

湯上りのビールはおいしいわ。テーブルに腰をかけて、Jの前に足を投げ出した。

「ビールを飲ませてあげるわ」

その足にビールをたらした。

Jはあわてて私の足の先に口を寄せた。鎖がぴんと張って、Jは勢よくうしろにひっくり返った。ビールが床にこぼれた。

「馬鹿ね。あわてるからよ」

Jの顔色が青ざめている。首をしめたらしい。足を近づけてやる。やっと足の先にとどいた。私のすべすべした真白な足を伝わってビールは、Jの胃の中に消えた。よく飲むこと。

おつまみのウインナのベーコン巻のたべかけを、足の指にはさんでJにたべさせた。

ビールを追加した。

「お約束のお食事にしましょうね」

Jを四つ這にさせて、鎖でひっぱってトイレに行った。便器の穴を包み紙でふさぎ、おつまみのサンドイッチを便器に置いた。

その上に、私は放尿した。

「さあ、おたべ」

Jの顔を便器に押し込んだ。それからどうしたって？ あら、あなたの顔真赤だわ。あらあら、オールドパア一本飲んじやったの。どうしましょう。大丈夫かしら。

Jは、柱につながれたまま一夜をあかしたわ。お湯にも入れず、背広を脱ぐことも許されずにね。

ネグリジェを頭からかぶされて、床の上にうずくまっていたわ。

魔法瓶のお湯を流して、私の神酒を入れてJにあてがっておいだから、それで満足したんでしよう。きつと。

朝になったら魔法瓶はきれいにからになっていたわ。驚いた。

えっ、なんですって、私も一人で寝たのかですって。お馬鹿ね。一流のホテルのベッドよ。もったいなくて一人で寝られるものですか。葉二が一緒だったわ。

ホテルのフロントから葉二には電話していただいたの。ホテルに入った時にね。

そういえば、Jに目かくしするの忘れていたわ。

「サジスチック・ストーリー・シリーズ」

絹子の休日

大 中 忠

「キヌちゃん」

窓の外を見るともなく見ながらぼんやりしていた絹子は、はっと我に帰った。

「キヌちゃん、何をぼんやりしていたの。」
声はもう彼女のすぐ後にきていた。

「あら、お姉さん。いつの間に？」

「いつの間にじゃないわよ。すぐそばへくる迄気がつかないなんて。」

満智子は手にカメラをぶら下げている。

「今日はキヌちゃん、何処へも行かないの」

「ええ、別に。」

今日は満智子の経営するこの美容院の公休日だ。満智子は二十八才、まだ独身。そして絹子は十七才になる住み込み店員だ。小柄ながら色白で愛くるしい彼女は、どのお客にも受けが良い。

「キヌちゃん暇だったら、一日私につきあってくれない。」

「構わないけど、何処へ行くの？」

「ううん、外へ行くんじゃないのよ、家の中で」

「あら、それで何につきあうの。」

「一寸いいにくいんだけど。」

「あら、お姉さんのいうことなら、何でもす



るわよ。」

絹子に自分をお姉さんと呼ばせている満智子は、実の妹と同じように絹子を可愛がっていた。

「それがねえ。写真のモデルになって欲しいの。」

いつもズバリと物をいう満智子にしては、めずらしい調子だ。

「写真のモデル位ならいつでもなるわ、何処で写すの。」

絹子は気軽に立ち上った。

「だけど、……ヌードなの。」

「えッ、ハダカ？」

「そうなの。なつてくれない。」

「恥しいわ。」

「だけど私だけよ。他に誰も見ないもの。」

「私、身体には自信ないわ。」

「そんなことないわ。絹ちゃん若いし、きれいだもの。」

「ほんとに家の中だけ。」

「約束するわ。」

絹子は——それが当然かもしれないが——

風呂屋以外で他人に肌をさらしたことがなかった。しかも一番羞恥心の強い年頃なのだ。平気で裸になれという方が、無理かもしれない

い。

「一日中？」

「多分。色々撮りたいの。」

姉妹同様の気持が羞恥心に打ち勝った。

「いいわ。」

「本当、嬉しいわ。じゃ、私の部屋にきて」

満智子の部屋は二階にあった。洋間で、六坪位の広さを持っていた。机や本箱の置かれた反対側にピアノが黒い光を放っていた。

「ここで撮すのよ。ぬいで。」

いざ決つてしまうと満智子の言葉はさっぱりしていた。そしてその気軽い言葉をきっかけに絹子は服のボタンに手をかけた。

ブラジャーをはずすと、今迄押えられていた固いふくらみが飛び出すように露わになった。満智子は絹子の方を見ないようにカメラを操作していたが、その態度は何となく不自然だった。そんな満智子を横目に見て、絹子は一寸ためらった挙句、思い切つて薄色のパンティをずり下げた。

「しばらくそのまま居て、ゴムの跡が取れるまで。」

今迄、見ないふりをしていた満智子が、最後の一枚を取ると同時に声をかけた。

一寸待つてといわれて絹子はとまどった。

それまでどんな恰好をして居れば良いのだろうか。止むを得ず、絹子は両腕で胸をかかえるようにしてしゃがんだ。若々しい肌だ。

絹子にとって、カメラの準備ができるのがとても長く感じられた。

「さあ良いわよ。そこね、最初にそこに座つて脚を伸ばして、そう、両手を後について」長く形の良い脚が伸ばされ、両手を後にくくと、丸い胸が露わにされた。

「キヌちゃんの体、とってもきれいよ。自慢して良いわ」

絹子の青味がかったすべすべした肌が薄く桃色に染った。ライトに照らされた腰と太ももが美しい輝きを見せている。シャッターの連続音。

「はい、今度は仰向けに寝て、手を頭の後で組んで。」

若い体の魅力が、むき出しになったポーズだ。カメラが近付く、全体、胸、腋……。

「絹ちゃんのここきれいな。」

満智子は指先で絹子の伸ばされた腋の下をつついた。

頬を染めて少女は手を下ろした。

「本当よ。適当に薄くて色気があるわ。」

今迄自分の腋の下にそれ程関心のなかった

絹子は、そういわれると満智子の目をぬすんで、そつと自分の腋の下に目をやった。

撮影は昼迄続いた。そして昼食も、紐の跡がつくという理由で絹子は下着もつけさせてもらえなかった。一休みした後で満智子は少女の体をしげしげとながめた。

「だけど絹ちゃん、良い体してるわねえ。」

「嫌、お姉さん、そんなに見つめちゃ。」

「本当よ。方もありそうだし。」

「駄目よ。」

「ねえ、一度私とお相撲とらない。」

「今？」

「そうよ。ね、良いでしょ。私も裸になる」

否応もなかった。満智子はさつさと服を脱ぎはじめた。絹子に比べると若々しさは少し落ちるかもしれないが、肌の艶と乳房と腰の張りがそれを補っていた。

「ねえ、このままするの。」

二人共裸なのに、絹子は一寸とまどったようだ。

「ああご免々々一寸待ってね。」

満智子は絹子をそこに待たせたまま部屋を出て行った。再び手持無沙汰な絹子。そつと目を落して自分の体を盗み見るようにして眺めた。処女特有の艶々した肌が若さと相まっ

て美しい。もつと乳房が大きければ、と自分でも思うのだが、かえってそれが絹子の体を清らかに見せていた。

「お待ち遠さま。」

満智子は手に白い布を持っていた。そして自分も股間にそれと同じ白い布を喰い込ませていた。

「それ……」

「したげるわ。」

満智子は羞恥に軽い抵抗を示すのを、いさい構わず絹子に裾をさせてしまった。

「ああ」

白い晒が喰い込むのに、絹子は思わず声をもらした。さらに布は腰のまわりにも巻きついていた。

「さあ、出来上り。」

「恥しいわ。」

白い布をしめ込んだ、絹子の若々しい裸体は、魅力的だ。

「こうしないと、相撲がとれないでしょ。」

満智子は恥しがる少女を部屋の中央に誘い出した。

「良い、普通のお相撲じゃ面白くないから、どっちかが降参するという迄するのよ。そして、負けた方は勝った方のいい成りになること」

「今日中？」

「そうよ、何をされても、何を命令されても逆らっちゃいけないの、良いわね、さあ始めるわよ。」

二人は両手を畳に下ろした。満智子の乳房が重そうに少し垂れる。

「ヨイショ」

満智子の声につられて絹子も立ち上った。

その胸に満智子の肩がぶつかってきた。思わず絹子は二、三步後退したが、辛くもふみ留って満智子の体を抱き止めた。満智子の手は絹子のまわしにかかる。双差しだ。絹子の手は空に浮いたままだ。直接ふれ合う肌と肌に、ややもすると絹子は恥しさで力が抜けそう。柔かくほっぺちりした満智子の体に比べて、絹子の体は全体にこりこりした固さを持っている。満智子のボリウムのある身体は絹子を圧倒しそうだ。

絹子は一步一步後退する。壁まで後退するか。その時絹子はどこにすきを見出したのか。右手を満智子の腕の内側にこじ入れ、満智子の左の乳房を握りしめた。豊満な乳房をしていても、まだ敏感なままだ。満智子は体中に電流が走るような感じで自然に力が抜けた。このチャンスに絹子が逃すはずがない。絹子

は一気に押し返した。と同時に右脚が満智子の脚にかかる。形勢は一気に逆転し、満智子は大きな音を立てて仰向けに倒れ、絹子が上からかぶさった。

逆転した……という気のゆるみが絹子にあった。その瞬間、絹子は横に投げ出され、満智子が胸の上に乗っていた。両腕を膝で押しつけられていた。固い乳房の上に満智子の重い体がのしかかっている。

「さあ、絹ちゃん、降参しなさい。」

絹子は浅ましい自分の姿に頬を染めたが、口を閉じたまま、はね返そうと力を入れた。

「まだ降参しないの。じゃ、こうするわよ。」

二の腕が膝の下でごりごり鳴り、固い乳房が満智子の禪の布でこすられた。

「ああ……あ……あ……」

絹子は声にならない声をあげる。

「まだ……？ まだ降参しない？」

満智子の動きは激しくなった。

「駄目、嫌、許して……」

絹子のときれときれの言葉に満智子は動きを止めた。

「じゃあ、降参するのね。」

満智子は念を押した。汗に光る絹子の丸い顔が大きく動いた。

「私の勝ちよ、さあ立って。」

二人の体は汗で光っている。肌の美しさが余計目立った。

「さあ、今から貴女は私のものよ。」

今や満智子の命令は絶対だった。

「手を後にまわして。」

「どうするの。」

「質問は許しません。逃げないように縛るのよ。」

「逃げないわ。」

「私のいう事きく約束よ。さあ。」

少女の両腕はゆっくり後にまわされた。何時の間に手にしたのか満智子は赤い腰紐を組み合わされた少女の細い手首にからませた。後手に縛られることの、何と無防備なこと。若々しい体をむき出しにした少女は、手首にからみつく紐に体を固くした。

手首を縛り終った満智子は別の紐を少女の胸にかけた。固い乳房の上と下に一筋ずつ、若い体に深い窪みを作った。胸を縛った紐は後にまわって手首につながれた。白い肌と赤い紐のコントラストは美しかった。絹子はうなだれたままだ。

「さあ、座って」

丸い肩を押されて、絹子は不自由な体をよろめかせながら床に横座りになった。シャッターの音が後で前で続けて聞える。

「絹ちゃん、そうしてると、とっても可愛いわよ。」

投げ出された足の小さな指が丸い。

「お姉さん。」

うつむいたままだ。

◎月極め予約直接申込み歓迎◎

○本誌の送料は全部当社にて負担いたします。雑誌代のみ御送金下さい。

○一部定価二五〇円ですが、三カ月予約前金御送金の時は三冊分七〇〇円、半年分予約六冊分一三〇〇円に割引いたします。

○最近二カ月位の間に、本誌の予約者は倍増いたしました。書店にて入手しにくいという点もありますが、予約者優遇の割引きが大いに影響した物と思います。只今毎日若干宛増加している状態です。二月号で

本誌のピンチに際し皆様へのお願い、に對して御同情下さった結果でしょうか。

○毎月一冊宛お申込み下さる方もございますが、この際は二五〇円宛御送金下さい。

○局留め御希望の方は、二十五日頃、局へお受取りにおいで下さい。お受取りに便利な局を御指定下さい。大体毎月二十日頃に発送いたします。

○外部から見えないよう厳重包装の上お送りいたしますから直接お申込み願います。

「何？」

「私の机の右の抽出し開けてみて。」

「右の抽出？何が入ってるの。」

「お願い。」

つきつめたような絹子の声だ。満智子は立って行った。部屋に残された絹子は姿勢を崩さない。部屋の真中に後手に縛られた少女の姿は小さく見えた。

「絹ちゃん、どうしたのこの写真」

満智子の手には一枚の手札型の写真が持たれていた。中には、少女が荒縄で縛り上げられていた。厳しく締め上げられた少女の体が苦しみに耐えかねてもだえている様が生々しく写っていた。

「高校の時、先輩の家から黙って持って来ちゃったの。沢山あったから。私って、一度、お姉さんに、そんなにされてみたかったの。だけど、何て女の子だろうって、お姉さんに思われなくなかったの。もう今ならいいわ、お姉さん、もっと縛って。」

絹子はうつ向いたままだが、声の調子は、はっきりしていた。

「そうだったの。今までに縛られたことはないの。」

「演劇部で、公演した時、劇の中で縛られた

わ。だけど服を着たままだし、縛り方もゆるかったからつまらなかった。」

「どんなに縛りたいの。」

「判らないわ。ただこの体をめっちゃめっちゃにしたいの。お姉さんのいう通り裸にもなったわ。こんなに縛られもしたわ。だから、恥しかったけど、本当のことをいったの。ねえ、お姉さん。」

絹子は丸い顔を上げた。

「お願い、私をもっといじめて。叩いてもよい、吊るしてもよい。どんな苦しいことでも恥しいことでも我慢する。お姉さんにされるなら。」

「本当に我慢する。」

「する。絶対に弱音をあげないわ。お姉さん知ってる？昔の拷問の仕方。水責めや火責め鞭打ち。キリシタンにされた拷問はすごかったらしいわ。」

「いいわ、したげる。絹ちゃんが泣き出すまでいじめたげる。一寸待ってね、縄を持ってくるから。」

絹子は美容室の一隅で、壁に向いて両腕を上へ伸ばした形で縛りつけられていた。その白い背中に満智子の手にした皮紐が音を立て

てからみつく。すでに背中は一面に赤く腫れ上っている。少女の口から洩れるのは喜びにおののくうめき声だけだった。若々しい肌が生汗に光り、両腕を上へ伸ばしているため、腕のつけ根がもり上り、柔い山を作っている。引き締った細腰、その下の丸いふくらみ、背中の中央を縦に走る凹み。

満智子の鞭は絹子の無防備な背中をくまなく責めた。太ももからふくらはぎ膝の後の凹みまで、赤く染っていた。

嵐が一吹き過ぎ去った後、二人の体は汗で光っていた。荒い息をつき、額の汗を手の中拭いながら満智子は絹子の姿を見た。むき出しになった背中一面に、赤く鞭跡が印されている。

一息ついた満智子は、絹子の手を縛るほどいた。手首に縄目がくつきりとついてるのが痛々しい。絹子は満智子に体をあずけたまま目を閉じていた。いくら喜びを感じても、初めて乙女の体を襲った嵐は、彼女にとって、激し過ぎる刺激だった。痛みに彼女は半ば意識を失っていた。そのぐったりとした少女の体を抱いて満智子は美容室の椅子に腰をかけた。両手を肘掛けの上に置き、しっかりと縛りつけると、椅子の背から縄をまわ

し、少女の乳房の上下を縛り上げた。固く締った乳房に縄が喰い込んで奇妙に歪んだ。丸いふくらみの上の小さな乳首が上を向いた。思わず唇を近づけたいような可愛さだ。胸を縛り終ると前にまわって、絹子の右足をとると肘掛けに縛りつけた。すんなりとした美しいふくらみは、適当に肉のついた太もも、さらに左足を握った時、絹子は気付いた。

「嫌、お姉さん」

しかし、満智子は手を止めようとはしな

った。抵抗する少女の左足をつかんだ手に力を入れたまま、思わず絹子の丸い頬に平手打ちを喰わせた。

「あっ」

汗に光る白い頬が見る見る赤くなった。

「お、ね、え、さん」

絹子の声は涙を含んでいた。

「何よ。自分から何でもしてくれて頼んだくせに、まだまだこれからよ。泣いたって、許したげないから。」

満智子は強引に絹子の左足を持ち上げ、左手と一緒に縛ってしまった。絹子はしっかり目を閉じていたが、まぶたの裏に熱い涙が溢れ、筋を引いて頬を伝うのが感じられた。今頃になって背中の中が痛くなって来た。無防備な姿にされた自分の姿が小さく感じられ、全く満智子の手中になった自分の運命を恐怖と喜びを持って考えてみるのだった。

椅子に架られた縄の少女。痛々しくも美しいものだった。

(完)

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙 (9×13 種) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 1	全裸エビ責仰向け (関谷)	B 17	尻突立てエビ責め (水本)	B 34	すべてをさらけて (関谷)
B 2	逆エビ責め全裸像 (水本)	B 18	椅子開股鼻責触手 (梨花)	B 35	ムチ打ち失神寸前 (関谷)
B 3	乳首ペンチ挟み (竹野)	B 19	息もつがせぬ狼轡 (竹野)	B 36	クリップ鼻挟み (絹川)
B 4	後手十字縛肩口上 (梨花)	B 20	投げ出した全裸 (関谷)	B 37	台上的マゾポーズ (大塚)
B 5	足の裏擦り責め (竹野)	B 21	美しき尻部の露出 (絹川)	B 38	吊られゆく美体 (絹川)
B 6	おへソいじめ大写 (関谷)	B 22	猿ぐつわ悦虐境 (竹野)	B 39	拷問に無惨な美貌 (梨花)
B 7	剃いだバタフライ (関谷)	B 23	後手柱縛り脚線美 (竹野)	B 40	マゾ女性の表情美 (東浦)
B 8	貴方に捧げた裸身 (大塚)	B 24	強制鼻挟水吞ませ (梨花)	B 41	喰い込む股間縄 (絹川)
B 9	乳房責め絶叫苦悶 (大塚)	B 25	苦悶にねじる裸身 (関谷)	B 42	灸責めに悶える (梨花)
B 10	無防備双手吊り (絹川)	B 26	責めに気を失って (関谷)	B 43	犠牲台の人身御供 (大塚)
B 11	豊満臀部エビ縛り (水本)	B 27	さアどうでもして (関谷)	B 44	美肌無茶苦茶縛り (絹川)
B 12	一糸纏わぬ股間縛 (水本)	B 28	豊麗乳房膨隆縛り (竹野)	B 45	裸身に立つ蠟燭 (大塚)
B 13	全裸亀甲股間縛り (関谷)	B 29	投げだされた女体 (竹野)	B 46	手枷足枷大写し (四方)
B 14	足踏付け二つ折り (大塚)	B 30	裸身をくびる麻縄 (梨花)	B 47	鎖に悶える足首美 (柳初)
B 15	尻突出しムチ打ち (関谷)	B 31	強烈縛りに悦ぶ (梨花)	B 48	蛇責めに柔肌栗然 (梨花)
B 16	手錠にもだえる (竹野)	B 32	全裸逆エビ片脚拳 (東浦)	B 49	鼻の玩弄恍惚境 (大塚)
		B 33	踏みつけマゾ境地 (東浦)	B 50	女囚菱縄さらし (絹川)



「長篇SM小説」

宇宙のどこかで

佐 治 麻 造

△或る混血老婦人の話▽

或る混血婦人の話 (十二)

次の証人は若い合州国の青年だった。彼は検事の質問にテキパキと元気よく答えた。

「当時私は合州国陸軍伍長として、第二三〇六部隊の通信下士官でした」

「此の録音テープに覚えがありますか？」

「ハイ。それは上官の命令で私が録音したものの一部であります」

「参考迄に所々掛けて見ましょう」

エヴァの甘い声が法廷に流れ、証人席の青年はエヴァの方を流し目でちらちら見て居たが、やがて体をエヴァの方に向けてじっと見詰め初めた。

「こちらを向いて下さい」

検事は苦々しそうに青年に注意した。

「一体何のために録音を命じられたのか知りませんか？ まさか本日此の法廷に提出するためではありませんまい」

「さあ、よくは知りません。しかし、録音してから暫らくすると私の部隊ではジャプー・ローズの放送は聴取禁止になりました。それで……」

「ちょっと待って下さい。何故聴取禁止になったのでしょうか？」
「ともかく、ローズの声を聞くと皆とてもホームシックになるので。それでだろうと思います。それで聴取を禁止すると皆が不平を云うだろうと幹部が判断して……ともかく放送時間になると歩哨迄こっそり聞きに來る有様だったんです。それで更に上級の司令部から一般的に広く聴取禁止の命令を出して貰うための資料にするつもりじゃなかったんでしょうか？」

「成程。しよつ中、男の溜息や唸り声の様なもの、口笛等も録音されてますね。あなたの戦友達の声なんですね」

陪審席の元空軍准将デヴィッド・ケンウェイは、後ろを振り向いて心なしか嘲けりをこめて肩をすくめて見せたが、元陸軍大佐ジョージ・ヘンダーソンは苦虫を噛みつぶした様な顔でエヴァと青年を半々に睨みつけて居た。エヴァの放送を聴取禁止にしたのは陸軍部隊の半ばと海軍の一部とであって、空軍部隊にはそんな必要のある腰抜けの将兵は居なかったのだった。

「では、もう一つ大切な事をお訊ねします。要するにジャプー・ローズの放送を聞くと遺憾乍らホームシックにかかって戦闘意欲を阻害されたとおっしゃるんですね。大きく云えば作戦に狂いを生じると云う様な……」

「そ、そんな大袈裟な事はありませんけど。ま、今だから云いますが、正直云って早く戦争が済んで故国に帰りたくなったのは事実ですね。私だけじゃありませんよ。皆……」

「いや、よく分って居ります。終ります」

グロリアの低いがよく透る声が反対側から聞えて來た。

「証人の属して居た部隊の戦歴を簡単に云って下さい」

日時と南泰平洋の島々の名、地名が羅列された。

「では、私が考える所によりますと、証人の属する部隊は比較の後方、とは云えませんが、少くとも激烈な第一線の連続ではなかったんですね」

「え、まあ……そうですね」

「調査によりますと、第二三〇六部隊は、編成以来、終戦迄解散する事なく、戦死傷者は約一・五%です。はっきり云えば暇だったんでしょう!! セブラ島の上陸作戦の時、後詰めとして一番うしろから上陸した時位のもんじゃないの? 弾丸の音を身近で聞いたのは!!」

「ええ、まあ……しかし、そんなことは私の知った事じゃありませんよ」

「それは、そうですわね」

グロリアは赤くなった青年を尻眼に、二冊の書籍を持ち出して書記の机上においた。

「裁判長。参考物件として此の書籍を提出致します。空軍大尉セドリック・ヒューズ氏の著書、及び海軍中佐ゲイリー・ネルソン氏の著書です。何れも泰平洋戦争の戦記物ですが、特にしおりを挟んである所をお読み下さい。陪審員の皆様も回覧して下さいる様希望致します。被告の放送如きで戦意が鈍る様な腰抜けな将兵はむしろ例外であった事がよくお分りになると存じます。若し証人の如き将兵ばかりであったなら、泰平洋戦争に勝利を収める事は出来なかったで

ありましょう。終ります」

打点を稼いで席に戻るグロリアを睨みつけて検事が立ち上った。「聰明なる裁判長には不要のことではありますが、一言申し上げます。当法廷で被告を裁く主眼点は、泰平洋戦争に於いて連合軍将兵がエヴァのために戦意を挫かれたか否かと云う点ではありません。戦意を鈍らせようとして被告が為した行為そのものが取り上げられて居るのであります。念の為申し上げておきます」

裁判長が槌を鳴らした。

「では休憩します。午後二時から再開します」

或る混血婦人の話 (十三)

独房に連れ帰られて昼食を与えられたエヴァは、一時半には既に法廷に再び曳き出されて被告席に坐らされた。

「今日中に済むかしら？ 無理ね」

「ま、どっちにしろ私達の勝ちらしいわね。フ、フ、フ」

二人の婦人看守は仲間達とエヴァの有罪無罪について賭けをして居るらしく、エヴァの背後で笑い合った。傍聴席を次第に埋めて行く人々の群れを必死のまなざしで探って居たエヴァは遂に求めるものを見出した。最前列から五、六段目の右端に愛する両親の姿、そして最愛の夫の姿、それらに挟まって何物にも代え難い愛し児の小さな体が白い幼児服から丸々した手足を出して無心に廷内を眺め回して居る。

エヴァの両眼は涙でかき曇り、胸がこみ上げて来た。彼等の傍へ飛んで行きたかった。

「何するの!! じっとしといで」

少しでも近付こうと思わず腰を浮かせて身を前にずらせたエヴァは、腰枷のうしろの金具についた革紐を強く引張られた。情けなさに新たな涙が溢れて来て、上体を前に深く折ったエヴァは手錠の鎖をガチャつかせ乍ら指先で涙を押えるのだった。涙を押えて顔を拳げると、愛しい人々は表情もさだかには見分けられない距離から、じっとこちらを見詰めて居る様子だった。無理に笑顔を見せようとしたがエヴァの頬は硬張って動かなかった。

一度でいいから愛し児を此の手で抱きしめたいと思うと、其の柔かい小さい体の感触と重さが全身に生々しく甦って来て矢も楯も堪らなかった。両手首に硬く重くがっちり嵌められた鋼鉄の手錠が悲しかった。腰を強く締めつける革の腰枷、そしてそれにつけられて看守の手に延びて握られて居る腰縄が怨めしかった。そして被告席の周囲を画する鉄柵の高さに打ちひしがれたエヴァは微かに嗚咽した。

「どうしたの? 泣いたりして見っともないわよ」

「ストッキングが曲ってるわね。直したげるからお立ち」

冷酷な婦人看守達はエヴァの心根を知ってか知らずしてか、口々にからかうのだった。

午後の再開後、最初に呼ばれたのはハーマン大佐夫人であった。

「ミセス・フローラ・ハーマン。あなたは被告を御存知ですね。知り合いになった時の事を云って下さいませんか」

検事は証人席の婦人の金髪の上に載った淡いピンク色の帽子を眺め乍ら鄭重に云った。

「私の夫陸軍大佐ドナルド・ハーマンは終戦後、占領軍司令部のD2の責任者になりました。私も直ぐジャプー国に参りまして現在も

一緒にジャブー国に居ります。被告は終戦後、夫の手で取調べを受けた様子でしたが、其の後合州国に帰ろうともせず、ホテルに住みついてブラブラして居りました」

「成程、それで……」

「占領軍の将校達にちやほやされていい気になって遊び回って居ましたわ。ドナルドとも時々会って食事したり……」

フローラ夫人は憎々しげにエヴァを見やって言葉を続ける。

「宅へも三、四回参りました。ドナルドが招くもんですから」

「成程。そうすると被告はあなたとも話をした事はある訳ですね。

ま、いろいろな話でしょうが、被告が戦時中にやって居た事つまり対連合軍向け謀略宣伝放送の件なんです、何か話がありませんでしたか？」

「そりゃもう。ジャブー・ローズって殿方の間で評判が高いのをとても鼻にかけてましたわ。私、お隣のライアン大佐夫人といつもこぼしてましたのよ、鼻持ちならない女だって」

「成程。そうすると、被告は戦時中の自分の行為について何等反省の色がなかったとお考えの様ですね」

「反省どころか!! 収容所の苦しみから自分だけうまく逃れて、一生懸命アナウンスして好いた男の成績を上げてやって、そして男と好きな事して毎日をぬくぬくと暮らしたって事を得々と吹聴してましたわ。あんな女なんか……」

「あ、いや、もう結構です。サンキュー」

検事はあわてて夫人の口を封じてニンマリと笑った。

「ミセス・フローラ・ハーマン」

グロリアが訝ね初めた。

「調査によりますと、あなたは御主人と被告との仲に関して私立探偵社に調査させて居られますね。失礼な事、申上げなくちゃならないので心苦しいのですけど……」

夫人の頬がサツと紅くなった。

「探偵社の調査によりますと、むしろ御主人の大佐の方が被告エヴァ・シマズの後を追いついて居られると云う事が分って、かなり激しい口論を御夫婦の間でなさったでしょう？」

「……」

「いえ、お答え下さらなくて結構です。つまり、あなたは女性として被告に嫉妬心を強く抱いておられた、そして現在も抱いて居られると考えてよろしいでしょうか？」

「……」

「終わります。私立探偵社に対する証人の依頼書の写し、及び報告書の写しを参考物件として提出致します。なお申請致して居ります証人ミスター・ドナルド・ハーマンは、其の申請を取下げます」

グロリアは法廷服の長い裾を翻えして自席に戻り、フローラ夫人は憤然と席を蹴ってツカツカと廷外に去って行った。

「これで検察側の証人調べを一応終る。では被告側証人。えーと、一名だけですな」

名を呼ばれて証人席に歩み寄る夫の姿を、エヴァは灼きつく様なまなざしで見守った。

グロリアの質問は遠く戦前の事から初まった。そのかみの楽しかった娘時代の思い出がエヴァの胸中を去来し、今もありありと瞼の裏に浮んでは消えた。通訳なしで証言しようと努力する夫の姿を見、其の声を聞いて居るとエヴァはうっとりとして現在の我が身の

境涯を危うく忘れる程だった。グロリアの質問は微に入り細を穿つて、エヴァと彼との純愛の深みを浮き彫りにして行つた。

「被判長。異議あり。被告代弁人の質問及び証人の証言は、本被判とは関係ない点に触れる事が余りに多い様であります。法廷はメロドラマの稽古場ではありません。被告側に警告を与えられる様望みます」

検事の異議申立てに、ジョージ・ヘンダーソンは陪審員席で我が意を得たりと頷き、デヴィッド・ケンウェイはさげすむ様に検事を眺めて頭を振った。

「検事の希望は充分諒とするが、証人は被告側の唯一人の証人であるから、慎重に扱い度い。被告代弁人、質問を続ける様に」

グロリアは嬉しそうに微笑を浮べると優雅な身のこなしで裁判長に会釈した。

「私が悪かったのです。エヴァにあんな事をさせようと思ったのがいけなかったのです」

「しかし、あなたは祖国に忠実であろうとして其の計画を推進したのでしょう？」

「それはそうです。しかし、ああ、エヴァに済まない事をしてしまいました」

傍聴席を埋める人々の中で若い女性達には特に深い感銘を与えてグロリアの質問は終つた。陪審席のマーサとドロシーは、傍聴席の幼児をはるかに見やってハンカチで眼頭を抑えた。

「ミスター・ジロー・シマズ」

余韻残る法廷に検事の太い声が響いた。

「君は、アナウンサーとして被告以外の女性を当ったか？」

「エヴァが断わつたので二、三探して見ました。しかし正直な所、落胆して居ましたので、おざなりな探し方だったかも知れません」

グロリアが軽く舌打ちして眉をひそめた。

「要するに君はだ、自分の成績を上げ且つ恋人を収容所から解放してやり、あわよくば自分達の享楽をも計りたいと云う一挙兩得の計画を立てた訳だ」

「……」

「いや、君を責めて居るのではないよ。所で最後に訊ねるが、被告と同様に対連合軍婦人部隊向けの謀略宣伝放送のアナウンサーをやつて居たフランク・シナールがどうなったか知ってるか？」

「反逆罪で終身刑に処されたと聞いて居りますが……」

「終る」

検事は怒つた様によつきら棒に打ち切つた。グロリアが間髪を入れず立ち上がる。

「再質問……」

グロリアはキラリと光る瞳で検事を見やって、其の恰好の良い唇を舌で湿らせた。

「証人はフランク・シナールがいわゆる謀略放送のアナウンサーになる以前、何をして居たか知って居ますか？」

「合州国陸軍の将校だったと聞いて居ます。開戦直後南方で捕虜になったと聞いていますが……」

「合州国の軍人であつた彼と、一民間人として抑留されて居た被告とは、祖国に対する忠誠を要求される度合いも自ら異ると思いませんか？」

「さあ、それは……まあ、そうですね」

「フランク・シナールは軍法会議で処断されたのでしたね？」

「そう云う風に聞いて居ります。しかし婦人部隊向け放送は余り聴き手もなかった様で……」

「終わります」

グロリアは、陪審員に念を押して教えるための訊問をあわてて打ち切った。

次郎は思い切った様子で数秒間、エヴァの方をじっと眺めた後、汗をふきふき自席に戻った。槌が鳴った。

「これで調べを終えるが、被告は何か云う事はないかね」

立ち上ったエヴァは豊かな胸を掻き抱く様にして叫んだ。

「お願いです。ほんの少しの間でいいんです、坊やを抱かせて下さい。あそこに居るんですの。お願い……」

裁判長は無表情にエヴァの哀願を無視して

「其の他には？」

「それだけです、お願いします!!」

陪審席のマーサとドロシーはもとより、リング・アムバー迄も同情の色を浮べたが許されはしなかった。

「では陪審員の評決をお願いします。別室に退いて下さい。評決が済む迄休廷します」

陪審員達はぞろぞろと別室に去って行き、大時計は四時十分を示して居た。

「さ、こっちに来るのよ。うしろ向いて」

エヴァには再び腰枷と手錠が施された。

「被告は、ここで起立して待つよ。ちゃんと真直ぐ立って……」

傍聴席の人々は三々五々廷外に去ったが、エヴァの肉親の四人は

傍聴席の最前列の木棚の所に坐ってじつとエヴァの方を見詰め、時々祈る様な表情を浮べるのだった。

彼等は木柵より出る事は許されないし、エヴァの方は一步たりとも動けはしないのだ。幼な児が時々無邪気に退屈してむずかると代る代る廷外に抱いて去る有様が被告席からよく見えた。彼等の中に帰って行きたかった。エヴァは幾重もの壁に遮ぎられた評決室の有様を胸に描き陪審員達の一人々々の顔を臉に浮べてひたすら祈り続けるだった。希望と不安、光明と絶望が交錯して胸をしめつけ苛んだ。

「エヴァ、悪いけど、ちょっと休んで来るわね」

グロリアが柵越しに声を掛けて立去ると、急に心細くなった。若し有罪に決ったら、と思うと膝がなえる思いだった。婦人看守の一人が

「今日終るとは思わなかったわね。持って来とこうかしら」

と呟いて立ち去ったが、やがて戻って来て

「ああ、重いわねえ」

と云い乍らエヴァの背後の床にガラガラと何かをおいた。

「鎖だわ」

音で悟ったエヴァは背筋が凍った。大時計が五時を指しやがて五時半になったが、陪審員席の扉は固く閉じたままで、シャンドリアの光が廷吏達しか居ないガラソとした法廷の広間の磨かれた床やデスクを肅然と照らして居るだけだった。エヴァの脚は棒の様になったが婦人看守達は座ることを許さない。それ所か、エヴァが少しでも両手を動かしたり身じろぎしたりする度に立って来てジロジロと調べるのだった。

或る混血婦人の話 (十四)

陪審員達は評決室に入ったら、評決を終える迄はいくら永くかかろうとも出る事は出来ない規定だった。大時計が六時を回った。グロリアが法廷服を脱いだまま法廷に戻って来てエヴァの前の鉄棚の向う側に立ち

「相当揉めてるらしいわ。ケンウェイ氏が頑張ってるらしいの、それにマーサさんも。永びけば永びく程有利だと思うわ。も少しの辛抱よ」

と片眼をつぶって見せた。どう踏み替えても痛くて堪らないハイヒールの爪先にエヴァは歯を噛みしめて耐え乍らうなずいた。

「看守さん。二時間経ったわよ。規則を忘れたの？」

グロリアに注意された婦人看守達は忌々しそうに立ち上って女囚の腰縄を引張った。

「おいで」

硬張った両脚をよろめかせて扉の外に連れ出されたエヴァは、被告通路の一隅にある被告用トイレットに連れられた。外して貰った手錠の痕を撫で乍ら、殺風景な小室の中央の床にむき出しの便器を見てエヴァは屈辱の思いで胸が詰った。独房内と違って、すぐ眼の前で二人の婦人看守が監視して居るのだ。しかも腰枷は外して貰えず、腰の革紐は短く握られたままであった。

「突立って居ないで早くお済ましよ。それともいいのかい？」

外した手錠をいじり乍ら婦人看守の一人が冷たくせき立てる。

「これ、外して貰えませんか？」

腰枷を指先でまさぐり乍らエヴァは悲しそうに去った。

「当り前じゃないの。さっさとおしよ」

「囚人の癖にコルセットやなんか迄つけてるからいけないのよ。馬鹿だね、ほんとに」

エヴァは諦らめてドレスの裾に手を触れ、やがて身を屈め、そして唇を噛み乍ら頬を染めて、おずおずと身を起して身を繕った。

「済んだかい？ 手をお出し」

婦人看守に右手を掴まれたエヴァは、それを振り払う仕草を微かにし乍ら

「ちょっと待ってよ、未だ……ストックキングが……」

腰縄を握った婦人看守がエヴァのお尻をポンポンと打ち乍ら嘲笑して

「もう、おしゃれしたって何にもならないわよ。いい加減にたくし込んでおいたらしいじゃないの」

位置がずった下着類が、腰枷にせかれて工合が悪かったがエヴァは諦らめて恨めしげに両手を揃えた。右手首に鋼鉄環が音を立てて喰い込み、腰枷の前部の鉄環を潜って更に左手首を捉えた鋼鉄環がガチャンと閉じ、ギリギリと喰い込む。

「何故、こんなにきびしくするんですの？ おとなしくしてますのに……」

「フ、フ、フ、規則なんだから仕方ないじゃないの。さ、おいで。又立ってるんだよ」

再び被告席に立ちすくんでうなだれたエヴァの眼に、未だ傍聴席の最前列に並んで居る肉親達の姿が映った。涙がこみ上げて来て、エヴァの両頬はしとど濡れた。上体を前に屈め、手錠の短い鎖を腰枷の鉄環にガチガチ触れさせて上に引張り乍ら顔を指先に近づけよ

うとするエヴァにグロリアが近寄って鉄柵越しに声を掛けた。

「こっちへおいでよ。もっと元気を出して」

グロリアはハンカチで女囚の顔の涙をやさしく拭いてやり、そして励まし慰めてやるのだった。七時二十分。法廷の外で微かにざわめきが聞え、急いでやって来た助手の青年に耳打ちされたグロリアがエヴァを、ちらと見て唇を引き締めて出て行った。傍聴席が急速にざわざわと埋まって行き検察官達も席に着き、黒いガウンを羽織ったグロリアも現われた。再開の予鈴のベルが低く鳴った。

「坐っていいよ」

漸く許されたエヴァは硬張った体を小椅子に腰掛けて溜息をついた。緊張と期待に包まれた法廷中の視線が入れ替り立ち代って被告席のエヴァに集中し、彼女の胸は不安と恐怖と、そして淡い希望に締めつけられて高鳴った。唇が乾き咽喉がカラカラになった。喘ぎ乍ら顔を挙げると正面の検察官席の検事がじっと見据えて居た。愛し児を膝に静かな両親の家の一室で父母や夫と語らう自分の姿を胸に描いてエヴァの眼は輝いた。其のイメージはすぐに消えて、鉄鎖と鉄枷を身にまとい鞭打たれ乍ら苦役する姿がありありと眼前に浮んだ。今日見た二人の女囚のおぞましい姿を思い浮べてエヴァは全身をおののかせた。

七時五十分、陪審員席の壁の扉が大きく開いて七人の男女が現われて席に着いた。論戦に疲れ果てた様な彼等の表情や動作を、じつと瞳をこらして観察して居たグロリアが微かに肩を落として顔を伏せ、そして憫れむ様なまなざしでエヴァを見やった。しかし被告席のエヴァには其の様な余裕等は勿論なかった。彼女は、自分の運命を決定して来た彼等陪審員、見ず知らずだった七名の男女の姿を、

むしろ不思議な思いで茫然と眺め続けて居たのだった。国旗の横手の黒い扉が重々しく開いて裁判官達が現われ全員起立の裡に着いた。エヴァの戒具が除かれた。

「では、陪審員の評決を述べる。陪審員は立って下さい。被告も起立」

評決の結果を悟られる様な表情や身振りをしない様にとの注意を陪審員達は受けては居たが、マーサとドロシーの顔は悲しそうに歪み、そしてリンダは顎を突き出し眼を細める様にしてエヴァを見据えて居た。男達は流石に無表情だった。咳払いして裁判長は口を開いた。

「第一に、被告が対連合軍向け戦時謀略宣伝放送員として旧敵国ジャブー国軍情報局に勤務したかどうかについては全員一致で認められた。第二。其の勤務が被告にとって強制されたものであったか否かについては、五対二で強制されたものと認められた。第三。其の強制は合州国々民としての忠誠心を以てしても克服出来ないものであったかどうかについては四対三で耐え得べきものと認められた……」

エヴァは思わず恨めしげに陪審席を見やった。

「鋼線入りの革鞭で裸の全身を失神する迄鞭打たれたのよ。そして枷と鎖で縛り上げられたままで真暗な懲罰房に何日間も入れられて苦しみ悶えたのよ。あなた方に想像がつくと思ってるの!!」

エヴァは唇を噛んで心の中で叫び訴えた。自分の運命が臍ろ氣に悟られて来た。被判長の言葉が続く。

「第四に被告の三年余に亘る放送員勤務の間、サボタージュ、即ち放送効果を減殺しようとした事があったかどうかについては、四対

一で存しないと認められた。なお此の決定に於いては本官が職権に基ずいて二名の陪審員の不参加を承認した」

エヴァは自責の念に駆られて肩を落してうなだれた。

「……だって、一生懸命にやれば次郎がとても喜んで呉れたんだもの。考え様によつては何とでも云えるけど……」

戦争の最中のホテルの一室、エヴァのアナウンス振りを讀える愛しい男の腕に抱かれて過した日々が暖かく胸中を立ち昇った。

「次に第五。被告の宣伝放送は連合国の対ジャプー戦遂行に妨害となり得たかどうかについては、二対二で決定せず。三名の不参加を本官は承認した。そして被告の行為が反逆罪を構成するか否かに就いての評決は……」

全法廷がさつと緊張し、エヴァの全身を戦慄が突き抜ける。

「——有罪四。無罪三——」

エヴァの膝がぐくりと音を立て眼の前が暗くなった。冷たい汗が全身に滲み心臓が驚愕みにされた様にギュッと縮んだ。

「当法廷陪審員は被告の有罪を評決した。なお三名の陪審員より情状に就いて充分酌量すべきであるとの意見が具申された」

石の様に身を固くしたグロリアの指から鉛筆がノートの上に落ちて少し転がって止まった。低い囁きと吐息が潮騒の様に傍聴席から流れ、裁判長は槌を鳴らした。

「以上、陪審員の評決とそれに盛られた意見に基き、法に照らして当法廷は被告に宣告を与える。被告は本官の前に出る様に……。陪審員は坐って下さい」

婦人看守がエヴァの肩を背後から摑んで引き寄せた。きつく腰枷が締められ錠が鳴った。今迄になく荒々しく手錠が嵌められた。床

に置かれた太い鎖を婦人看守が引き上げてエヴァに近寄る。鎖の一端についた鉄の環が開いたまま床に曳き摺られてガラガラ鳴った。鎖の端の錠金具が、エヴァの腰枷の右側の金具にカチリと結合された。他端の鉄環が右足首に嵌められ、重い鎖が右脚の外側に沿ってゆるく垂れた。

「こんな……もうこんなものをつけるんですの？」

「有罪の決定があつたら。当り前じゃないの、お前はもう罪人なんだよ。そら、次は左側だよ」

婦人看守はエヴァの腰や背を邪怪に小突き乍ら、もう一本の鎖を左脚の外側につけた。鉄鎖や鉄枷の音が静まり返った法廷に鳴り響いて、エヴァは屈辱で全身が熱くなった。

「いいかい？ 裁判長のデスクの真下に、床が三呎四方形少し凹んだ箇所があるだろう。あそこに行つて裁判長を向いて立つのよ。お行き!!」

腰の両側から両足首に垂れ下る鉄鎖がずっしりと重かった。こんな姿で被告席の鉄棚を出て、法廷の中央広間を横切つて裁判長の真下迄歩いて行かねばならないのだ。エヴァは喘いで恨めしげに二人の婦人看守の顔を見やったが所詮無駄だった。彼女は既に罪人なのだ。諦めて脚を踏み出すと、鎖がドレスの裾の両側と一緒に重々しく揺れ動き、足首のあたりで二重になった鎖のかたまりがお互いに触れ合い、そして足首の鉄枷に当って冷たく鳴った。両手首の手錠の硬さが一しお骨にこたえた。

「氣をつけないと転ぶわよ」

被告席の鉄棚の一部の出入口を鍵で開いた婦人看守が、女囚の歩き振りを見乍ら嘲ける様に注意を与えた。鉄柵を出ると、法廷中の

視線が更に強く感じられた。こんな姿を両親や夫達にも見られて居るのだと思うとエヴァは堪え切れない鳴咽を一声二声啜り上げて立ち止った。マースとドロシーが陪審席で顔をそむけて涙ぐんだ。

「そうだわ。有罪と決つても、執行猶予と云うのが未だあつた筈だわ」

エヴァは一縷の光明を見出して漸く裁判長の真下に辿り着き、必死の思いを籠めてじつと見上げたのだった。女囚を見下した裁判長は左右の補佐裁判官を交互に振り返り、やおら咳一咳した。エヴァの胸が大きく波打ち手錠の両手が固く握り締められ、法廷は再び静まり返った。

「被告エヴァ・ローレンスを反逆罪の廉により懲役三十年に処す」

エヴァの背筋を寒々とした絶望の思いが貫き走った。エヴァの両膝がガクリと折れて床に当り、足鎖がジャラジャラと鳴った。傍聴席から押え切れない囁きが波の様に湧き上る。

「なお被告の国籍は本日付を以て合州国に復帰せしめる。次に判決理由……」

跪ずいたままのエヴァには裁判長の声は最早耳に入らなかった。

頭が絶望と悲哀と恐怖でガンガン鳴る様だし全身が虚脱した様で体が宙に浮く感じだったが不思議に涙は出なかった。何か云わねばと思つたが咽喉が締めつけられた様で頭を挙げる事も出来ない。

「……以上で判決を終る。当法廷を閉廷する」

裁判官達が席を立ち、検察官達がそして陪審員達が立ち上った。興奮した声で話し合い乍ら傍聴者達もエヴァを振り返り乍ら廷外に消えて行った。エヴァの両眼から涙がこぼれて床に散った。氣を失つた様なエヴァの母を、その夫や次郎がだき抱えてエヴァを見返

り見返り力なく立ち去ると傍聴席には誰も居なくなつた。グロリアも悄然と足音を忍ばせて去つた。二人の婦人看守が靴を鳴らしてエヴァに近寄り、一人が、腰枷のうしろに革紐の金具をカチリとつけた。

「さ、来るのよ」

脚に力を込めて二、三度よろめいて女囚エヴァは、のろのろと立ち上った。

「……三十年……」

エヴァは茫然と呟いた。

「何をブツブツ云つてるの!! しっかりおしよ」

激しい平手打ちがエヴァの両頬に飛んだ。

「ヒーツ」

顔をそむけたエヴァの両手が顔を押えようと動くのを手錠と腰枷が非情に抑える。

「少しはシャンとしたかい? 撲られて口惜しいの? フ、フ、フ、もう駄目よ、お前は罪人なんだからね。ま、三十年かかってゆっくりと償いをしておいでよ」

「歩くのよ」

背後の婦人看守が左手で制帽の恰好を直し乍ら右手に握った革紐を鞭にして女囚の尻をピシッと打った。被告席を通り抜け、被告通路を追い立てられ乍らエヴァの脚は雲の上を踏む様だった。揺れ動く足鎖の歩き難さに歯ぎしりして身をもがくエヴァに被告通路の端からフラッシュが何度も何度も閃き、人々はエヴァの前方に群って押し合い乍ら覗き眺めるのだった。其の人々の中を曳かれなくても済むのはせめてもの慰さめだった。ゆっくり歩く女囚の右側の壁の

鉄格子扉がギィと開き、眼前に薄暗い、下通路に降りる階段が現われ、エヴァの姿は人々の眼から消えた。階段を降りたエヴァは右方への通路に連れられた。

「今度はこっちへ来るのよ。今迄みたいな訳にはもう行かないからね。フ、フ、フ」

エヴァの有罪に賭けて居たらしい婦人看守は愉快そうに笑って女囚の背を小突いた。コンクリートと石で囲まれた通路を少し行くと更に階段があった。

「今度の階段は急だよ。気をおつけ」

ハイヒールのままで長時間立たされた上、重い足鎖をつけられた両脚で其の急な階段を漸く降りると鉄格子が前方一杯に冷たく鈍く光って居た。内側に居た看守がエヴァをジロジロ見乍ら鍵で扉を開けた。

「凄く別嬪じゃないか。声は震い出す程だし……。何年だい？」

「三十年。あ、あんた無罪組だったわね。忘れずに賭金をお払いよ」

「分ってるよ。しかし勿体ない話だよ。全くの話が……」

二人の婦人看守に前後を挟まれて、うなだれ乍ら鉄格子の中に入るエヴァの胸のあたりを眺めた看守が頭を振り呟いた。

鉄格子の扉が背後でギーと軋んでガチャーンと閉じられる音を聞いたエヴァは絶望に胸も塞がる思いだった。ここは既決囚を収容する区画なのだ。叶うことなら逃げ出したくなったエヴァは思わず両腕を動かし悶えて手錠の痛さに呻いた。陰惨な感じの通路を曲って曳かれて行くエヴァは、少しでも歩き方が鈍ると容赦なく背を小突かれ腰縄で腿や尻を打たれるみじめさに涙ぐみ乍らかなり大きなガ

ランとした殺風景な室に突き入れられたのだった。

成る混血婦人の話 (十五)

室の一隅には数個のスチール机が並んで居て男女の係官が執務して居た。反対側の壁を眺めたエヴァは息を呑んで思わず悲鳴を洩らした。首環以外は糸をまとわぬ一人の女囚が、こちらに背を向け両腕を頭上で大きく開いて其の両手首を壁の鉄環に短かく繋がれ、壁にへばり着いて立って居るのだ。いや、立って居ると云うよりも両手首を壁に吊られて無理に立たされて居るのだ。頭はがっくりと前に垂れ、両脚は両腕と同様大きく開いて壁の床際の鉄環に繋がれて居る其の大柄な女囚の背や脇腹、尻や腿、そしてふくらはぎから腿の内側に至る迄、多数の赤い鞭痕がみみず腫れとなって長く短かく走って居る。

「あれをよく見とくがいいわ。あの女囚はね、反抗して口答えしたのよ。後ろ側が済んだ所らしいわね。暫くしたら前側もあの通り鞭打たれるのよ」

震え上ったエヴァは救いを求めて四方を見回したが無益なことだった。並んだデスクの背後の扉が開いて一人の婦人が出て来た。扉の向うは事務室らしく、低いざわめきや談笑の音が流れて来た。エヴァの傍に寄った婦人の制服の襟のバッジは一きわ大きい。デスクから離れた一人の男の看守から受取った書類に眼を走らせた其の婦人はエヴァを見据えて冷たくきびしく云った。

「エヴァ・ローレンスだね」

エヴァは唇をわななかせてうなずいた。

「返事をおし!!」

革紐の鞭がふくらはぎをピシッと打った。

「ヒーツ……。ハ、ハイ」

「フン。名前をよんで貰えるのも、これで最後なんだよ」

大きなバッジをつけた婦人が再び口を開いた。

「今後、お前は受刑者として取扱われることになるからね。性根を入れ替えて其のつもりでやらないとひどい目に会うよ。送り出る日と監獄が決ったら連れて行ってやるから、それ迄ここで刑に服しなさい。いいね？」

「ハイ」

「お前の番号は十六号よ」

奇しくもエヴァが嘗て抑留者として収容所でつけられて居た番号と同じだった。手錠、腰枷そして足鎖が音を立てて外された。

「脱いで」

辛い戒具を除かれてホッとしたエヴァに冷酷な命令が飛んだ。もはや女囚の身、この様なドレスを着、靴を穿く事は許される筈もないのだ。少しでもためらうと容赦なく平手打ちが与えられ、エヴァ

限定版 へ美しき縛しめⅤ 第三集

予約申込好調 申込順に発送開始！

限定版第一号として「美しき縛しめ」第三集アルバム一二〇 第お申込順に発送いたします。態の予告に対して、意外に多数 局留の方には、二十九日に御受の方々のお申込みを受け、感激 領頂けるよう発送いたします。しております。二月十日現在に お申込み略号は、「美3」で 製版完了しておりますから、す。

は最後の一枚を脱ぎ素足で床を踏んで悄然と立ちすくんで全身を震わせた。冷い風が下の方から体の中を吹き抜ける様だった。鉄の小箱に脱いだ衣服を始末して、納い乍らエヴァは涙をポロポロこぼした。これからの三十年間、この様な服を着る事は出来ないのだ。ドレスはおろか靴すら穿く事を許されはしないのだ。鉄箱の蓋を閉めて、悲しみに泣き崩れたエヴァの両腕を婦人看守が掴んで引き起した。

豊かな栗色の髪が短かく切り取られ、与えられたゴム紐で束ね乍らエヴァの指先は震えた。号泣したい思いだった。しかし女囚の彼女には更に骨身にこたえる屈辱が待って居た。白い額に番号と記号が黒々と刷られる。次は背と尻だ。四つ這いになって囚人番号をマークされ乍らエヴァは我を忘れて身を揉んで泣きに泣いた。

「次は鼻環ね。こっちへおいで」

穿孔器の方へ引摺られ乍らエヴァは床にしがみつく様にして哀願した。

「鼻、鼻環だけは……鼻環だけは堪忍して……」

「何を寝言云ってるの!! 云う事をきかないのかい」

反逆罪の容疑で逮捕されてから初めての革鞭がエヴァのふくよかな背に飛び、エヴァは脆くも床に腹這いになって其の痛さに悲鳴を絞った。更に痛烈な一撃が十字にクロスした。

「ヒーツ。行きます……。堪、堪忍して下さいまし」

エヴァは鞭の痛さから逃れようと額に脂汗を浮べ乍ら必死に穿孔器の下に這い寄り、身をよじって激痛の名残りを耐え忍んだ。

「お立ち。鼻をここに当てて……」

革バンドで頭部と胸を固定され後手錠を掛けられると、あっと云

う間にスイッチが押された。鼻から頭に抜ける鋭い疼痛、そして数秒間の肉の焦げる熱さの後、エヴァの鼻の壁には孔があいて居た。穿孔ヘッドが鼻から離され今度は隙間を残したステンレスの環が其の孔に通され接合ヘッドが回転して来て其の環を啣えた。再びスイッチが押されると環は少し縮まって隙間が消え、更に高周波で接合されて完全な環となった。器械から解かれたエヴァは鼻の先にぶら下った直径三センチ程の鼻環を感じ取って、それ迄固くつぶって居た両眼を見開いて号泣し百グラムにも足りない其の環はエヴァにとっては数トンもの重量に匹敵する屈辱の思いで彼女の胸を打ちひしんだのだった。しかし、見慣れて居る婦人看守達はエヴァが全身に悲哀を示して如何に泣き悲しもうと全く表情一つ変えない。

「じっとおし。馬鹿!! 腕を動かすんじゃないの」

エヴァの背後で、後手錠を外そうとして鍵を鍵穴に挿入しようとした婦人看守が眉をしかめて叱りつけた。蹴り転されて四つ這ったエヴァの尻に痛い注射が太い針で射たれた。生理中絶剤とノイロンだ。

「さ、これを着るのよ。柄もサイズもお好みには合わないだろうけどね」

与えられた囚衣を素肌の上にじかに着乍らエヴァは嘔り上げた。既に涙は涸れ果てて出なかった。薄く粗く織ったごわごわした布地で作られた其の囚衣は上下通しのコンビネーションの様なもので灰色と赤色のダンダラ縞が横に走って居た。両袖は肘まで届かず、両裾は膝迄なかった。ボタンも紐もなく、腰の周りを残して背筋と股とがチャックで割れる様になって居る。股引の様な部分に両腕を通し、短い袖に両腕を通したエヴァが股のチャックを前から後へ引い

て閉じると、細目に作られた腿の部分がエヴァの豊かな両腿をそれぞれギュッと締めつけた。背筋のチャックを漸くにして引き上げて囚衣の背を閉じるとごわごわした布が豊かな乳房を押えつけた。つい今しがた受けた鞭痕が摺れる痛さにエヴァは呻く。囚衣の首の前後は深くくられてあり、胸の前後に番号を黒く刷った四角な白布が縫いつけてある。囚衣を着終えた女囚エヴァは婦人看守達に取り囲まれてしょんぼりとうなだれた。伏せた眼の前の鼻先に忌む鼻環が垂れ下って鈍く光る。矢庭に膝の後ろ側を強く蹴られた。

「跪まずいて!!」

ひやりと冷たい鋼鉄の環の半分が首の右側にあてがわれ残りの半分が前から後へと首の左側を回って後ろでガチリと錠が嵌まった。首環の内側には四力所に弱い平ばねが取付けられてあって回転を防いで居る。じんわりとした首環の圧迫感に、女囚は唇を開いて喘いだ。

「お立ち」

黒い革の腰枷が強く締められた。前部と両側に頑丈な金具、そして後ろ側には手錠の環が二個短い鎖で取付けられてあった。腰枷の両側からそれぞれ両足首にかけて足鎖がつけられた。

「教えといて上げるけど、此の足鎖はそれぞれ十五封度よ。おとなしくしないともっと重いのをつけるからね。三十封度のをつけられたら大抵の女はネを上げて泣き出すわ」

両手を背後に回され両手首を手錠が捉えた。

「記念撮影をとって上げるわね」

十万の桁の数字を記した横長の札を紐で胸に吊るされたエヴァは前後左右から写真に撮られた。

「さ、おいで」

革紐の先の金具が鼻環をすくい上げてカチッと嵌まり、グイと引かれる。

我が身の浅間しい姿を想ってエヴァは身を揉んで嗚咽した。泣いたとて喚いたとて、もはや詮方ない事だった。エヴァは激しく頭を左右に振って見たが、鼻環についた革紐が除かれる筈もなかった。嵌められた手錠は、それ迄のものとは違って幅広く太く、ずっしりと重かった。素足の裏にコンクリートの床がザラザラと冷たく、腰の動かし方によっては足首の所で二重に折れ重なって垂れた鎖が床に触れて音を立てた。室を出ると、監房区画へ通ずる通路が灰色に

延びて居た。今出て来た室の中から、厚い扉を通して此の世のものとは思えない悲痛な喚きが洩れて来た。壁際に吊って立たされて居た女囚が体の前側を鞭打たれて居るのだ。戦慄したエヴァの足がすくんだ。

「さっさと歩くんだよ」

容赦なく鼻紐で我が身を曳く婦人看守の制服の背や、スカートを盛り上げた腰、腿のあたりを恨めしく眺め、そして陽の射さぬ陰惨な通路の前方を見やったエヴァは深い絶望を感じて身をよじりもたえた。これからの三十年間を、明けても暮れても此の様な姿で過さねばならないのだ。

(未完)

「最新版」 女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙 (9×13 種) 焼付

A 1	フミツケ汚辱縛り (新井)	一組一枚	一五〇円
A 2	手吊り乳房責め (五月)	五組五枚	五〇〇円
A 3	ハリツケ猿ぐつわ (新井)	十組十枚	九〇〇円
A 4	全裸正面柱しばり (遠藤)	二十組二十枚	一、七〇〇円
		三十組三十枚	二、五〇〇円
		四十組四十枚	三、二〇〇円
		五十組五十枚	四、〇〇〇円

A 5	亀甲強烈乳房縛り (遠藤)	全裸手吊りムチ打 (遠藤)
A 6	豊満乳房いじめ (遠藤)	乳房責め股間縛り (遠藤)
A 7	鼻責鼻染いたぶり (遠藤)	全裸後手高小手 (遠藤)
A 8	膨隆臀部さらし (長野)	全裸正面強烈縛り (長野)
A 9	うねる緊縛裸身 (長野)	色輝の開股しばり (長野)
A 10	正面縛蛙股ひらき (長野)	裸自慢縛りヌード (長野)
A 11		
A 12		
A 13		
A 14		
A 15		
A 16		

A 17	正面アグラしばり (長野)	正面大の字開股縛 (長野)
A 18	遅ましき裸しばり (長野)	荒縄縛豆絞り猿轡 (大塚)
A 19	両手前縛り髪首絞 (大塚)	両手吊り股間吊り (桜井)
A 20	両手膝下しばり (関谷)	淫れんする裸身像 (関谷)
A 21	両股縄掛け開股縛 (大塚)	正面裸身強烈本縄 (梨花)
A 22	乳房晒し肉体自慢 (長野)	責衣にはみ出る肌 (東浦)
A 23	投げ出した全裸縛 (長野)	捕われの全裸緊縛 (梨花)
A 24	羞らいの両股縛り (大塚)	猿轡乳房いたぶり (遠藤)
A 25	荒縄全身縛り豆絞 (大塚)	
A 26		
A 27		
A 28		
A 29		
A 30		
A 31		
A 32		
A 33		

A 34	盛り上る乳房縄目 (長野)	亀甲本縄鼻いじめ (大塚)
A 35	ムチ打悶えポーズ (関谷)	椅子またぎ汚辱責 (東浦)
A 36	縦縄股間縛り正面 (関谷)	ゴム猿ぐつわ全身 (大塚)
A 37	くさり乳房責め (長野)	強制片足挙げ責め (大塚)
A 38	正面乳房くびり縛 (関谷)	鴨居正面ハリツケ (梨花)
A 39	手吊りパンティ落 (絹川)	白バンド後手吊り (東浦)
A 40	豆絞り高小手呻 (絹川)	裸縛り鼻いじめ (梨花)
A 41	ガンジガラメ立縛 (愛川)	亀甲本縄股間縛り (絹川)
A 42	立木縛竹棒責め (桜井)	
A 43		
A 44		
A 45		
A 46		
A 47		
A 48		
A 49		
A 50		

十三人の女死刑囚

その六／＼地獄船の巻Ⅴ

佐 出 須 登

1

大西洋の赤道近くに『悪魔の島』と呼ばれる一孤島がある。この島は欧州のE国の女囚収容所となっていた。女囚は政治犯が大部分で本国では行なわれぬ女性の死刑も、この島ではしばしば見られた。その他のものも十年以上の重刑が大半で、しかも、気候の悪いこの島で刑期のすべてを生きのびるのは稀だった。女性に対しては極めて寛大といわれるこの国にも、実際にはこの様なものがあつただ。

さて、或る日一隻の船が本国の港を出航した。この船こそ通称『地獄への使者』号と呼ばれ女囚を悪魔の島に運びこむ囚人運搬船であつた。送るだけで、連れ帰ることは殆どない。

この日、乗せられている女囚は死刑が十三人、終身刑が八人、有期刑が二十五人で大半が二十才をわずかに越えたばかりの女子大生であり、時の政府に対する反逆の罪を問われたものである。反逆といっても別に暗殺などくわだてたわけではない、学生らしい情熱が

少々強く発散しただけである。しかし秘密警察に捕えられ、拷問の結果惨殺された仲間にくらべれば、死刑といつてもギロチンであつさり片付けられるのだから、幸せだと彼女らは話しあつていた。その前には果してどの様な運命がまちうけていたろうか、船はすべる様に目的地へと進んでいた。

2

ジャクリーヌは女囚中の最年少、まだ高校生にすぎなかった。従つて刑も最も軽い五年で、生きのびる可能性のある唯一人と思われ

ていた。だが彼女は船に乗って間もなく、その若さに目をつけた船長にもてあそばれそうになり、必死に抵抗しようやくのがれることが出来たが、その代償として死刑を宣告されてしまった。船長に対する反抗というのである。船長にこの場合刑を宣告し、執行する権利が与えられていた。但し船長に従えば死刑は取消すといわれたが、ジャクリーヌはこれよりも死を選んだ。

女囚中の最年長者、といつても三十にはかなり間があるのだが、デボラ、シルビア、エレオノラの三人がリーダー格とされていた。この三人はこれに対し堂々と抗議した。彼女の刑は十年位であり、この抗議は自殺行為になると止めるものもあつたが、恐れずに反対したのである。しかしこれに対し船長はたった一言だけ答えた。

「甲板を見る」

と甲板にはジャクリーヌが十七才の清純なままの姿をあらわしたところであつた。顔色はさすがに蒼ざめていたが、それでもとりみだすこともなく、落ちついて甲板に敷かれた白布の上に坐つた。かたい、ふたつの乳房が痛々しくあらわにされ、長い黒い髪が白い背中にたれて強く目を射る。刑吏が彼女の後に

まわつた。大刀をひきぬき二度三度とうちふつたのち高々とふりあげた。ジャクリーヌはけなげにも最後の勇気をだし、きちんと座り直すと美しい首をさしのべた。刑吏の狙いは定つた。電光石火大刀はキラリと斜め下方に風を切る。ジャクリーヌの開いた目がねむるように瞼をとじた。竹の葉が風にそよぐ様に長い黒睫毛がかすかにふるえ、小さい唇の間から白い歯なみがわずかにのぞかれる。刃が頸筋にふれた瞬間「あつ」と声ない叫びをあげようとして口をひらいたからだろう。刃は彼女の白い細頸に一筋の朱線をひいた。同時に「ざあつ」という不気味なものおと。

ああ、ここに若きジャクリーヌの首は胴体をはなれて前にころがりおちたのだ。斬口からは血汐が一条をなして噴きあげている。身体はがっくりと前にのめり、白布がみるみるうちに血汐に染まっていくな。刑吏は甲板にころがっている生首の髪の毛をつかんで、血の滴るのにかまわず高々とさししめした。その首に汲みあげた海水がざあざあかけられる。

血のりがおちてきれいになると、船のへさきに逆に打ちつけた太い釘にズブリとさしみ晒し首とした。幾度も幾度も頬の筋肉がけ

いれんをおこす。眼瞼もまだまだピクピクうごいていた。若アユを思わせたジャクリーヌの哀れな最期だった。

3

デボラたちは呆然と、この処刑をみつめていた。その背後から声かけられる。

「お前たちの処刑は明日まとめてやる、覚悟はしてるだろうな」

これが三人に対する死刑宣告というわけ、実に簡単なものだった。翌日デボラが真っ先に引きだされた。彼女の刑はまず胴体をしぼって船の左舷から投げこまれ、ロープによって船底をくぐって右舷へと引っぱりあげる、このくりかえしであつた。まるで海賊の私刑である、どんな丈夫な海の男でも五十回もくりかえされれば死ぬという、この刑を優雅なものといわれるデボラがうけるのだ。

刑が始められる。やっと反対側の水面に出たと思うとまた反対側へひきもどされる。しかも船底へ身体がこすりつけられ、突きだしている金具や釘などで傷だらけになってしまふ。二十往復すれば許すといわれたが十九回まで耐えしのびはつと一息ついた。あと一回だ。だがこの最終回はわざとゆっくりされ、しかも船底で止められたままだった。



「やっぱり殺されるのだ、これなら首を斬られた方がよかった」と無念の涙をのみながらデボラは死んでいった。

死体は甲板にあげられる。哀れ二目とみられぬ姿となっていた。確実に絶命をみて救助網に身体をはめこみ、マストから吊るして晒しものとした。誰からもしたわれ愛されたデボラの、あまりにも悲惨な最期であった。

シルビアは船尾の方から脚にロープをつけて投げこみ、そのままひっぱられた。船は十五ノットのスピードを出している。両手でけんめいに水をかき、辛うじて顔を水面に出すそれでも波をかぶりはげしく咳こんだ。早く死んだ方が楽だと知っていても、やはり顔をあげてしまう、僅かだが息はつけるので死ぬ

までに相当の時間がかかるわけだった。そのうち鱈が近よってきた。これは予想しなかったことだが、かえって興味をもたれそのままにすておかれた。恐怖の表情をうかべ必死で水をかく傍を、平行に泳ぐ巨大な鱈はじつと様子をうかがっている。遂にさっと身をひるがえす。ぱつと水煙が立ったと思うともうシルビアの姿は消えていた。不気味な口から二本の脚だけがはみでている。もうだめだ、口が閉じられる。「ギャッ」という悲鳴が聞えたようだ。どつと鮮血が噴きだしてくる、ロープの先に足首がのこっただけで、彼女の身体はこの世から消えうせた。海の色は早くももとの色にもどっていた。

エレオノラは簡単だった。マストから両脚を大きくひろげ逆吊りにされたのだ。これは女人禁制の海賊船に仲間が女性をつれこんだ場合、その女性はこのようなリンチをうけるという。一晚中吊り下げておけば十人中九人ま

では死んでいるし、たまたま生きていても大勢でゆさゆさゆすぶると、目鼻口から血を噴いて死ぬという。

しかし、彼女の場合は特に減刑され、逆吊りのまま頭からザブリと海に沈められた。腹部の中央にあるくぼみあたりまで水面下に没し、いくら身をくねらしてもがいてもどうしても頭は水面にでない。しかも絶命寸前になると引きあげて息をつかせる。このくりかえしであった。

やがて股のつけねを見つめていた一人が叫ぶ。「絶命しました」念のため更に十分も沈めておいてから、エレオノラの身体は甲板に投げだされ、確実に死んだことをみとめてから再び脚をひろげた。「ふためとみられる」姿でマストから逆吊りにされ、ブラリブラリとゆれていた。

4

突然嵐がやってきた。この地獄船も危険が迫って遂に退船命令がでた。船員や刑吏はさっさと逃げてゆく。女囚たちは沈没寸前の船に残るか、海に飛びこむしかない。この結果救われたのはただ一人で、皮肉なことに死刑の判決をうけているキムだった。このほか溺死体三体を発見したが、これは死を確認する

と再び海に放りこまれた。

一方悪魔の島では死刑の執行を待ちわびていたのに、唯一人しか着かなかったので失望した。それでも居ないよりは良い、早速広場で黒山の見物人を前にし、ギロチンによる死刑が行なわれる。

キムは二十三才で、その生涯を閉じることになったのだ。必死にもがきあばれても刑吏の手によって台上に投げだされ、ずるずると穴の方にひっぱられる。

首が半月型の板の上にのせられ、上からも逆半月の板がおりてきてびったりおさえつける。もう動くこともできず、前方には首が遠くまでころがらないようにバスケットがおかれている。キムは、けんめいに首をねじまげたが頭上には巨大なギロチンの刃が光っていた。絹を裂くような悲鳴があがる。一声、二声、そして三声……だが次の瞬間落下するギロチンの刃は彼女の美しい首を胴体から切断していた。首はたしかにバスケットの中にころがりおちた、だが台上の彼女の身体は反射的に、すつくと立ちあがったのだ。透きとおるような肢体、ふたつの乳房、股をひろげてふんばった恰好で。だが首はない、首のあるべき所からは激しく血汐を噴きだしながら、

ほんの一秒か二秒だったが、恐ろしい光景だった。そして身体は横ざまにどっと台上から落下した。まだ手足がヒクヒク動いている、驚いた刑吏がこの首を失った身体を槍でもってプスリと地上にさしとめた。まさかまだ生きていると思ったわけではないだろうが。

彼女の首は獄門に梃けられた。島では久しぶりの晒し首だというので、黒山の人はなかなかその前から立ち去らなかった。丸一日の晒しが終わるとアルコールの大ビンに漬けて長く保存されたという。

5

ほかの女囚はどうしたろう。海にとびこんだ女たちは空しく消え去ったが、あきらめて運を天にまかせ本船に残った連中は却って沈没をまぬかれ、とある無人島に漂着した。その数は十三人で死刑囚もそうでないものも同一条件となったわけである。

船には幸い衣類や食糧が相当あり、武器はナイフ位しかなかったが、島には水が湧いていたしヤシやその他の果物もなっていた。赤道に近く好環境とはいえないが、死刑囚にとっては天国のようなものだった。死刑囚といっても、外国では自分達に同情的なのだからどこかの国の船に救われれば、まさか送り帰

したりなどはせず、亡命の扱いをしてくれるだろう。そうなれば、明るい世界に帰れるのだ。ただ問題はそれまで乏しい食糧で、どのようにして仲良くやっていけるかであった。めいめい当番を決めなんとか生きぬこうと誓いあった。

6

クローとナタリーの二人は殺人による本物の死刑囚であり、外国船に救われたとしても生命は助かりそうもない。このため二人は恐ろしい計画をたてた。それは自分達のことを知っている他の十一人を全部殺そうということである。しかも食糧はずっと長くもつことになる、この計画は直ちに実行に移された。

二人はサンドラ、ザビーネをつれ食糧探しに出かけた。海に面した崖の上で四人はイチゴの様な草の実を摘んでいた。ナタリーの目が意味あり気にクローにささやいてから、彼女は崖のところで腹ばいになり下をのぞきこんだ。サンドラがそれにつられて自分も腹ばいになり下をながめる。その瞬間クローが走りよるとサンドラの脚をつかみ、ひよいと放り投げた。悲鳴をあげる間もなく、その身体は崖底へ吸いこまれていく。

ザビーネが血相を変えて走りよる。

「氣でもちがったの！」

これに対し二人は平然と答えた。

「正氣よ、氣の毒だけど、あなたも死んでもらうわ、お祈りでもしなさい」

ザビーネはあわてて抵抗したが2対1、おさえこまれ手と足とをつかまれて一二の三でサンドラのあとを追って落ちてゆく、悲鳴が長く尾をひき、ぴたりと絶えた。その時が彼女のこの世を去った瞬間であった。二人の殺し屋は波の打ちよせる崖下までおりていて自分達の仕事を確かめた。ザビーネは頭を強打して即死していたが、サンドラはまだかすかに息があった。クローはその身体をひきづって頭を波に沈め確実に殺す。

ザビーネ、サンドラの二人は誤って崖から足を踏みはずして落ちたと報告された。仲間は涙にくれたがクローらを疑うものはいなかった。

ある日、ナタリーの歩いているすぐ近くに、ヤシの実が落ちてきて驚かせたことがあった。もしこれが頭に命中したら、どうなつたろう、これにヒントを得てクラウデアを消してしまった。即ち彼女が一人にいるのを見はからい、後から鉄の棒で一撃したので

ある。死体はヤシの木の下にひきづって、傍に実を一個血をつけてころがしておいた。これを見破るような専門家は誰も居ない、クラウデアも事故死とされた。

この調子でいったらクローとナタリーの二人だけになったろうが、そうは問屋はおろさなかつた。次にメリーを襲ってその首を絞める、あとで適当なところに吊るしておけば、最近ノイローゼ気味の彼女だし、自殺と認めることができる計算だ。

二人でおさえつけて手を縛り、首にロープをひっかけ木の枝を通して吊り上げる。悲鳴はたちまちかき消され、二本の脚がバタバタともがいたが間もなく動かなくなった。下に足台をおけば出来上りだったが、この様子をピアとデビーに見されたのだ。

二人は捕えられた、しかしほかの仲間にはどうしても信じられぬことだった。だがメリーが死んだのは事実である。二人はメリーが自殺したがついていたから手を貸したのだ、と弁明した。ピアとデビーは悲鳴を聞いたし、ジタバタもがきながら吊られた様子は自殺希望とは思われぬという。

二人の処分をどうするか、死刑にするか無

罪にするかよりほかはない。残りの七人で投罪の結果四対三で無罪となった。

7

翌朝女達はテリーの悲鳴を聞いた、クローとナタリーが脱走したのだ。皆がかけつけた時テリーは紅に染まってこと切れていた。心臓を一突きにされたのだ。森の中に逃げこもうとする二人を追いかけて遂にナタリーは捕えたが、クローはとりにがしてしまった。

ナタリーは尚も猛烈に抵抗する、その手をおさえようとしたミレーヌは、下腹をかくしもったナイフで、ズブリと柄まで突き刺された。がつくり膝をつき傷をおさえ指の間から鮮血がみるみる噴きだしてくる。

ナタリーはとうとう嚴重に縛りあげられたが、ミレーヌは重傷だった。十分に治療を加えることが出来たとしても、恐らく絶望だろう。こうなつては苦しみを早くとめる事しかのこされていない。ピアがそつとミレーヌの傍による。早くも様子を察したミレーヌは必死で願った。

「いやいや、死ぬのはいやよ、助けて」

「だけどもミレーヌ、どうにもならないのよ、あきらめなさい。そのかわり仇はきつと討つてあげるわ。さあ、目をつぶって」

ピアはナイフをミレーヌの喉にあて、思いついてぐいとつきおろす。ミレーヌは鋭い刃先が自らの頸に沈んでゆくを感じ、悲鳴をあげようとしたが、あついものが横に走ると何かが激しい勢で身体からとびさり、最後の絶叫もそれと同時に空しく消えてしまった。ピアはミレーヌのブロンドの頭をかかえるようにして泣いた、二十二年の生涯である。

8

ナタリーの処分に対し、再び裁判が開かれた。前回は四対三だったが、こうなつては助かるわけではない。しかも殺されたテリーとミレーヌは前回は助命の方に投じていたのだ。ナタリーは完全にふてくされ、サンドラ以下の三人も自分とクローとで殺したことを白状し皆を驚かせた。判決は勿論五対〇で死刑である。

ピアがいいわたしに近づくのをみてナタリーは冷笑を浮かべながら

「今さら逃げもかくれもしないわ、さつさと吊るしたらどお」

これに対しピアは

「お馬鹿さんね、絞首刑にする程、軽い罪じゃないわ。さんざん苦しめてから地獄へ送つてあげるのよ」

どうやらナタリーは、とんだ計算違いをしたようだった。

ナタリーは海岸につれだされ、砂浜に首だけだして埋められた。満潮になるにつれ首が波の下になつて溺れ死ぬという、海賊が裏切者に対する刑である。さすがのナタリーもこんな目にあうとは思っていなかったのだ、恐怖の表情をうかべながら許しを乞うた。せめて首を絞めて殺してくれと願った。だが、怒りのため興奮しきっているピアたちの耳には入らない。

やがて潮が満ちてくる。早くも波に呼吸をあわしそこねて激しく咳こむ、波がひいた時にやっと息をつくのだ。だが遂に波が大きくひいた時でも鼻孔が水面にでない時がきた。顔をけんめいにねじまげようとするが、首まで埋まっているのだから、どうにもならぬ。再び波がぐんぐんともりあがつてきて彼女の顔をすっぱりのみこんでしまう。ぐうつと一番引いた時でもやはり鼻はかくれており、絶望の表情が明かに認められる。目だけがうらめしそうにひらかれている。そこへ又波が押しよせて……………

六時間後引潮となり、いちめんが平になつ

た砂浜にポツカリとまるいものがおかれている。ナタリーの首であつた。ピアがその傍により、ザツクリと刈りとつてくる。ミレーヌ以下の霊前にそなえるのである。こうしてナタリーはこの世に十九年の間生をうけただけで地獄へ帰っていった。

9

こうしてナタリーの処刑はすんだがクローがまだ残っている。必ずその首をとつて仇をうたなくてはと、五人は固く誓ひあつた。クローは森の奥深く逃げこんだのだ。冷静に考えれば生きぬくことは不可能であり、すてておいてもよかったのだが、興奮のあまり我を忘れて、そのあとを追いかける。あまりにも無暴な話である、行途に恐ろしい運命が待っているとも知らずに……。

森の奥をしばらく行くと川が流れていた。幅はそんなに広くない。鰐もいないだろう。

「クローもこの川を越したかも知れないわ、深いかどうかためしてみる」
泳ぎに自信のあるミッチイが服をぬい



で飛びこんだ、が中流まで行つた時恐ろしい悲鳴をあげ、激しく水しぶきをあげて逃げ帰ろうとする。しかも、血の輪が少しずつ彼女のまわりからひろがってゆく。

彼女は長さ三十センチ位の魚に食いつかれたのだ。これがピラニヤというのだろうか、鋭い歯で柔かい肉を食いちぎり血を流し、それにより多くの仲間を呼ぶのだ。岸に待っていた女たちは驚いて助けようとしたがその方法はない。早くも数十匹が集つて水しぶき、血しぶきをあげながらミッチイにとびかかっている。両手両脚、乳房にも下腹にも食いつかれ絶望の悲鳴と断末魔の激しいものがき、遂に彼女は途中の岩にはいあがりかけたただけで動かなくなった。水中にある部分は勿論水上の身体まで、とびついては尚も喰いちぎられる。水面から血の色が消え去るまで十五分位しかかからなかった。

ミッチイは白骨となつて水底に沈んだ、ほかにそれらしいものは見あたらず結局彼女の惨死によつて得たものは、クローがここを通らなかつたことがわかつただけだった。

10

ここで始めて四人は自分達の無暴に気がついた、この先どんなものがあるかもわからない。クローの追跡はあきらめ引返すことにしたが、もう夜が迫っていたので野宿せねばならぬ。興奮のさめた今となっては四人抱きあってふるえながら一夜をあかす……。

フランソアーズはふと恐怖感におそわれ目がさめた。月の光にてらされたなかを大木のようなものが地をはって近づいてくる。大蛇だと気がついた時は、もう目の前であった。あまりのことに悲鳴もあげ得ず、ただ呆然としていただけだった。さつととびつかれ、次の瞬間には、フランソアーズの身体はぎりぎりときまきこまれ、泣いてももがいてもおそかった。

巨大な蛇の胴からは彼女の首と脚しか出ていない。身体がしまり、骨がみしみしいう。苦悶と絶望の顔、脚の方で「ポキッ」と音がする。肋骨が砕けたのか口から血汐があふれる。彼女の首に蛇の胴がまきつき頸骨の折れる音が静かな森の中にひびく……。

いましめをほどくと彼女の身体はぐたぐたの肉塊と化していた。蛇はそれにどろどろのよだれをひっかけ、ゆっくり首をくわえると

しずかにのみこんでいった。哀れフランソアーズは蛇の餌食となったのだ。

この様子を三人は立ちすくんで眺めていたが、今度は自分達の番だと気がついて逃げだした。蛇が地上を走る早さは相当なものである。アンの身体にちよつと蛇の尾がふれたと思うとぐいと引きもどされ、あつというまに身体全部をまかれてしまう。ここでぐいと絞めればアンはフランソアーズ同様血を吐いて絶命する。恐怖におののく彼女を大蛇は絞め殺そうとせず、そのまま首をくわえようとした。驚いて上半身をそらしたが胴をしめられていてはのがれられず、バックリ首をくわえられ胴のいましめをはずされる。アンは手足をふるわせてもがいたが、首は蛇の口中に入り、次に来るものはまぎれもない死であった。そのまま徐々にのまれてゆく、蛇の口が大きくひろがり肩まで入った。乳房から腹部そして腰まで入った時、二本の脚がぐったりと力なくたれた。絶命したのだ、いやこの時まで生きていたのだ。丸のみにされたアン、その時の気持はどんなだったろう。さすがの大蛇も小柄というものの、二人も呑んで満腹したのか、のこる二人のあとを追おうとは

しなかった。

11

生き残ったピアとデビーは抱きあって泣いた。あまりにも悲惨な話である。やっぱり自分達は生きられぬ運命なのだろうか。こんな目にあう位ならギロチンで処刑された方がよかった。しかし運命はまだまだ彼女らに対し惨酷であった。

デビーは突然、後から強い力で押し倒された。ピアの悲鳴を聞いた時には自分は首すじをくわえられ、地上をすばらしい早さで引きずられていた。彼女が虎におそわれたのだと気がつくまでにはかなり時間がかかった。くわえられている首すじには、少しも苦痛がない。それにしても失神しないのが自分でも不思議だった。気を失っているうちに食われた方が幸いなのだが。恐らくこの虎は満腹なのだろう。巣にもち帰って食うつもりなのか、それにしてもピアはどうなったのか……デビーは自分の運命をよそに、こんなことをぼんやりと考えていた。

やがて洞のところでデビーの身体はおろされた。逃げようとしたがたちまち組みしかれる。その鋭い爪が喉を引いたのならすぐに死んだのに、あてられたのは下腹だった。悲鳴

をあげても誰も助けにくるものはない。それどころか仔虎が三頭とびかかった。乳房や大股に爪と歯が食いこむ、這う様にして逃げても親虎が足首をくわえて引きもどす。

やがて腹部はズタズタに食い破られ片方の脚もちぎれた。首はとつくに胴をはなれゴロゴロころがされておもちゃになっている……。二十才のデビーは、こうして生命のみかその形さえとどめることはできなかった。

12

ピアは呆然とデビーのつれ去られた方を見つめていた。その顔色はもうこの世の人ではない。あいつく恐怖は彼女の神経を正常から遠ざけていた。

彼女はふらふらとあてもなく歩きだした。その前方に土が小高く盛り上った塔のようなものがあつた。高さは二メートル位だろう。何気なくその根本を脚でける。土くれがバラバラとくずれおちた。

とたんに底の方から黒いものがぞろぞろとあらわれ、彼女の身体にはいあがつた。蟻である。それもただの蟻でなく恐ろしいスُمَّツと呼ぶ人食い蟻であつた。

ピアの美しい身体はみるみるうちに黒く変つていった。激痛が全身をつらぬく、どうや

ら、ここで始めて意識が正常にもどつたらしい。悲鳴をあげながら全手ではらいおとしたき潰そうとするが、そんなことで間に合う筈がない、その手にも食いつかれ数はますます増えてくる。これからのがれるには火か水しかない。河にとびこもうにも、その河ではミッチイが無惨な最期をとげているし、火は今さらおこしても間に合わぬ。首を乳房をそして四肢のいたるところに鋭い刺すような痛みがひびく。やがてピアの身体は地上にたおれのたうちまわつた。こうなつては万事体す黒い塊が尚ももぞもぞ動いていたが長くはなかつた。

蟻がすべて巢に帰つた時、あとにのこされたものは生々しい完全な白骨だけだつた。血も肉も何一つとどめておらず、頭髮だけが長くのこつていた。

こうして仇を討ちに向つた五人の女は、その誓を果せず、ことごとく悲惨な最期をとげてしまった。

13

首刈族に捕えられ九死に一生を得て救出された

女流探検家オードリイ嬢の話

KK誌 佐出特派員

……この様なわけで、わたしは自分の不注意を嘆いたのですが、すでにおそく土人に捕えられてしまつたのです。敵の首をとつて干首にするという、その事実の有無を調査にきた私が干首にされるなんて、全く皮肉だと思つたものでした。なんでも彼等の間では男の首より女の首の方が倍も値うちがあり、これが白人男の場合には土人の百倍、白人女の時には千倍だというのですから、土人たちが喜ぶのも当然でしょう。

わたしは獄舎のような建物の中に投げこまれました。意外なことに先客が一人いてやはり白人女性なのですが、彼女はクローと名のつたきり、どうしても自分のことを話そうともしませんでした。

彼女の話では干首製造の儀式は満月の晩に行なわれるとのこと、捕えられてから二カ月になるが、先月はロンダという女が殺されて干首になつたとのことでした。

ロンダ！ それはわたしの仲間で行方不明になつていた女性です。思いがけぬところで友の消息がわかつたのですが、それを他人に知らすこともできず自分もそのあとを追うのだと思うと暗然たるものがありました。

ロンダがどんな殺され方をしたのか、クロ

「は話をしませんが、その態度からみて決して楽な最期ではないことはわかりました。干首製造も見たそうですが、わたしが次の番だからその時によく見なさい」といつてさびしく笑ったのでした。

いよいよ満月の晩。クローの死ぬ日です。この時彼女のささやいた言葉は忘れません。「わたしは非常に悪い女よ、こうなるのも天罰だわ。きつとひどい死に方でしょうね」それからこうもいいました。「オードリー、もしあなたが助かったらロンダの首は埋葬してやってね、だけどわたしの首は標本として博物館でもどこにでも、人目のつくところにかざってね、それがわたしの罪ほろぼしよ」いよいよ土人がつれだしに來た時には「わたしは死刑囚なの、国で処刑された方がよかったわ」これがクローの最後の言葉でした。

クローの死に方はあまりにも悲惨でした。彼女は二本の木を大きくまげて脚を一本ずつ縛りつけられました、この木を支えている綱を切れば身体は真二つに裂けるのです。

「ギャァ！」ものすごい悲鳴があり、あたりいちめんに血の霧が月光のなか黒くふり、バラバラと内臓が散らばりました。一方高い枝

からは二つに裂けた身体が逆さにぶら下つています。その一つ、首のついている方に土人が近づくとバツサリとたたきおとし、地上にころがった生首をわしづかみにして高くかかげました、血の滴るのもかまわずに。

次いで干首にする儀式です。今まで作られた干首がズラリ並べられ、その一つはたしかにロンダです。クローもわたしもあんなになつてしまふのか、涙が流れるのをとめようもありません。

クローの生首はぐらぐら煮える釜の中に投げこまれゴトゴト音をたてました。異臭がたちこめるなか三十分も煮られたでしょうか、首はとりだされ草の上におかれました。皮膚はもう白ちゃけており、目はとじ、唇がわずかにひらいて白い歯がチラリと見えたのが印象的でした。

やがて首が冷えてくると後頭部に切こみを入れ、少しずつ皮膚を頭蓋骨からはがすのですが、これにはかなり時間がかかりました。それでも全く表面を傷つけることなく頭蓋骨はすっぽりととりだされ、あとで盃に作られました。どんな外科医でもあうまくはできないでしょう。

一方骨をぬきとった頭はぐにやぐにやのゴ

ムマスクのようになり、この中に焼けた砂を何度も何度も出し入れするうち少しずつ縮んでゆき、五日もするととうとうオレンジ位の大きさの干首になってしまいました。手のひらにのる位のかわいい首、髪の毛はそっくりしているのに異様に長く感じられました。しかもありし日の面影がそっくりのこつています。わたしは宿望を達したわけですが、次は自分の番だと思うと恐怖しか感じられませんでした。

わたしが救出されたのは、その二週間後です。もう十日おくれたら、わたしは首だけしか帰れなかったでしょう。またもつと早ければクローも助かったでしょう。それが彼女にとって幸か不幸かはわかりませんが。

今わたしの前にクローの干首がおいてあります。随分考えた末、彼女の遺言通りにする決心をしました。即ち博物館行きです。それにしてもクローとはどんな女性だったのか、一体どんな罪をおかしたのか、どんな風にしてあんなところに居たのか……今ではすべてが謎となりました。



団 鬼 六

屈辱と羞恥の極

川田は、口にした煙草に火をつけながら、屈辱と羞恥の極にある京子の顔をしたり顔して眺め、

「へっへへ、じゃ、素直に社長と親分のお仕置を受ける気になったというんだな。二度と今のように暴れたりしやがると、おめえの代りを美津子に仕置をするぜ。いいな」

川田に、ピシヤリと尻を平手打にされた京子は、身を震わせて、屈辱にむせび泣くのだった。

「ちょっと、お待ちよ」

仲間の者に注がれたウイスキーを一息に飲んだ朱美が川田にいう。

「今、性こりもなく、あたい達にさからった罰として、先に浣腸してやったらどうさ。それがすめば、この唐手姐ちゃんもおとなしくなって、社長と親分のお仕置を喜んで受けることになると思うよ」

つまり、暴れ止めの注射の代りに先に浣腸を打つわけさと朱美はいう。

そいつは妙案だよ、とズベ公達は手をたたいてはやしたてた。

京子は、血の出る程、固く唇をかんで、首をがくりと落す。妹の美津子が、この悪鬼達の虜となっていなければ舌をかんで、この地獄の屈辱から逃げることも可能なのだが、それすら許されぬ京子は、ただ身を固くし、葉桜団の暴虐な責めを待つより仕方がないのである。

「今更、嫌とはいわせないよ。いいね」

銀子も煙草の煙を京子の顔に吐きかけながら、含み笑いしている。

連載小説 「花と蛇」

- 第一回 昭和三十七年八月号 (在庫)
- 第二回 昭和三十七年十一月号 (売切)
- 第三回 昭和三十七年十二月号 (売切)
- 第四回 昭和三十八年七月号 (売切)
- 第五回 昭和三十八年八月号 (売切)
- 第六回 昭和三十八年十一月号 (在庫)
- 第七回 昭和三十八年十二月号 (在庫)
- 第八回 昭和三十九年二月号 (在庫)
- 第九回 昭和三十九年三月号 (在庫)
- 第十回 昭和三十九年四月号 (在庫)

「だが、京子姐さんにしてみりゃ始めてのことだ。一度、ここで見本を見せてやりやいと思うのですが、どうです、社長」

川田が田代に提案する。

「ほう、見本とは？」

「静子夫人ですよ。京子姐さんが、こうして色々、これからお仕置を受けなきゃならぬのに令夫人が引っこんだままなのは、不公平じゃありませんか。夫人の方も同罪なのですからね」

川田の説明を聞くと、田代は成程と顔をくずした。

「じゃ、令夫人にも、ここへ御出馬願う事にしようか」

身を固くしていた京子は、思わず顔をあげ憤怒のこもった瞳を川田と田代に向けた。

川田は、そんな京子をせせら笑うように、

「そうそう、おめえ、この葉桜団をスパイするためにもぐりこんだ時、奥さんの浣腸図を見たっけな。あの時は相当びっくりした顔だった、今度は我身がされる番だ。もう一番よく奥様の浣腸を見せてやるぜ」

京子は激しく首を振った。

「お願いです。もうこれ以上、奥様を、黷りものにするのはやめてっ、お願いです」

京子は、黒眼がちの美しい瞳をキラキラ涙で光らせながら、川田に哀願するのだった。川田と田代は、ニヤリとして含み笑いをし、顔を見合わせる。

「そうかい。じゃ、おめえは、奥さんの浣腸の分まで自分が引き受けるというのだな。二人分計六十CCになるが文句はねえな」

川田は、唇を舌でなめながら、京子の顔を見る。

京子は、再び眼を伏せて、屈辱に大きく肩を波打たすのだった。

ならず者達の衆人環視の中でこのようにさらされているという地獄の羞恥に、更に気も狂わんばかりの浣腸責めが加えられようとしているのである。京子は、もう人間的な感情を捨て切ったように顔をあげる。

「私は、私はどうなってもかまわない。けれど、美津子と奥様だけは——」

あとは言葉にならず激しく嗚咽する京子だった。

そんな京子のすぐ隣には、これも、姉と同じく妹の美津子が、がちり緊縛された身を一本の鎖に支えられ、つま先立ちをしている。必死に両足をびったり密着させている美津子は紅生姜のように真っ赤に染まった顔を

深く垂れ、すすりあげているのだ。軽く自然のウェーブのかかった初々しい黒髪に女学生らしい黄色いリボンが結ばれてあったが、それが、美津子のすすりあげる毎、小刻みに震え妙に哀れっぽい。

川田は、そうした状態の美しい姉妹を眺めていたが、

「そんなにまでいうなら、美津子と静子夫人を酒の肴にするのは、かんべんしてやろう。そのかわり、おめえは、俺達や葉桜団のいう事にゃ絶対服従だぞ。いいな」

川田に再び弾力のある尻を平手打ちされ、

京子は消え入るようになすくのだった。

「じゃ、準備にかかろうか。六十CCの浣腸のためにね」

朱美が酒に酔った足をふらふらせながら仲間の人達に指図する。

「昨日は小さい方をお目につけたが、今日は大きい方を見て頂くってわけね」

ズベ公達は、キャッキョッキョ騒ぎながら、隅から大きなテーブルを持ち出して来る。

悦子とマリが、京子を縛ってある縄尻を鎖から外し、鎖の先端に一米位の青竹を横にしてつなぎ止めた。悦子の合図で、青竹をつないだ鎖は、ガラガラと音を立て、上方へ上が

っていく。次に、テーブルが、その下へ置かれた。

「さ、京子姐さん、そのテーブルの上に、仰向けにおねんねするのよ」

悦子が、京子を縛ってある縄尻をとって、どんと京子のスベスベした背をついた。

テーブルのすぐ上に、鎖に中央部をつなぎ止められた青竹がゆらゆらと揺れている。

京子は、ハツとして真っ赤になった顔を横に伏せた。ズベ公達がどのようなポーズを自分に強いるのが京子にわかり、体が硬直して、悦子に背を突かれても、京子は足を踏み出さない。

川田が声をかけた。

「浣腸の最中に縄が解けちゃまずいぜ。どこかゆるんでねえか、よく点検しろい」

ズベ公達は、京子の縄を調べ始める。背中に高々と縛り合わされているところを更に手に唾して固く結んだズベ公達は、京子の前へ廻り、豊かな乳房の上下をしめあげている二本の麻縄を握ったりして試し、

「大丈夫だよ。これだけ固くしめてありゃ、どんなに暴れたってゆるむもんかね」

さあ、皆んな、手をかしな、と、銀子の合図で、京子は数人のズベ公達に寄ってたかっ

て、担ぎ上げられてしまふのだった。

「よいしょ、こらっしょ」

ズベ公達は、担ぎあげた京子をテーブルの上へ乱暴に置く。

「ああー」

京子は、テーブルの上へ投げ出されるや、本能的に足をすくめ、横に身を伏せようとするのだった。

「何をしているんだよ。」朱美が鎖につないである青竹を引き寄せてどなった。

ズベ公達は、京子の両足首を青竹の両端に縛りつけようとするのだ。

京子は、びったりと両腿を閉じ、歯ぎしりして鳴咽する。

「まだ、あたい達にさからう気なのかい。美津子の方に代りをさせるよっ」

京子が、そうされまいとして両肢に力を入れると朱美が舌打ちするというのだった。

川田が、ニヤリと顔をくずして近づいて来る。

「へっへへ、京子姐さん。可愛い妹を助けてえのなら女達にさからっちゃいけねえな。唐手を使って散々暴れたおめえじゃねえか。こうなりゃいさぎよく観念して、葉桜団のお仕置を受けなきゃ駄目だよ」

川田や朱美に、美津子を代りに立てるぞと再三おどかされた京子は、もう一切をあきらめたよう両肢の力を抜くのがあった。朱美と銀子の手が京子の左右の足首にかかる。遂に京子のすらりとした形のいい両肢は左右に割り開かされ、青竹の両端に足首は縄でゆわえられてしまうのだった。京子の美しい顔は火のように真赤になる。

「さて、青竹をつりあげて、この阿女を這さにうんと持ちあげるんだ」

朱美に命令されたズベ公達、よいしょ、よいしょと鎖をひく。

ギイギイと鎖はきしんで青竹が徐々に上へあがり、京子の肉づきのいい両肢が、それにつれて上へたぐり上げられていく。

「ああー」

京子は、激しく首を振って、気が狂いそうになる屈辱を耐えているのだ。

適当なところで青竹は停止し、京子はテーブルの上に仰向けになったまま、両の足首を高々と上へあげているという言語に絶する姿をさらしているのだった。

「ふ……、いい恰好ね」

銀子は、テーブルの上の京子にいう。非情な麻縄に固くしめあげられ、くびれるばかり

になっている京子の乳房を指ではじいた銀子は、ちらとすぐ傍で、立縛りにされている美津子の方を見た。

黒真珠のように美しい美津子の瞳には、露のような涙がにじみ、キラキラ光っている。

「どうか、姉を許して下さい、と哀願するようなそのキラキラする美津子の瞳を見ても、銀子は何の感情も起らぬようだ。いや、それだけではない。少女が美しく、可憐であるだけに、むしろ、もっと、いじめてみたいという倒錯的な心理にかわっていくのである。」

銀子は、残忍なものを眼の中に浮かべて、美津子にいった。

「ねえ。あんたのお姉さん、これから、みんなの見ている前で六〇CCの浣腸を受けるのよ。助けてあげたくはない？」

美津子は、銀子のその言葉にすがりつくように、恥も外聞も忘れたように哀願する。

「お願いします。姉さんを、姉さんを助けて下さい！」

銀子は、何か意味ありげに口元を歪めて笑う。

「そう。じゃ姉を思う妹の気持に免じて、姉さんにこれからする六〇CCの浣腸を、三〇CCにへらしてあげるわ。その代り、姉さん

からへらした三〇CCは貴女が受持たなくちゃ駄目よ」

それを聞く美津子の顔からは一瞬血が引いたようになったが、テーブルの上で、逆さになりきり縛りあげられている京子も、激しく身悶えして叫び出すのだった。

「そ、そんな事を美津子にしたら、承知しないわよ。美津子には他の罪もない。約束が違うじゃないの！」

京子は、青竹につられて両肢をくねらせながら、泣きわめくのがあった。

「美ちゃん、きつと誰かが救い出してくれる。負けちゃ駄目よ。姉さんの事は心配しないで！こんな連中と口をきいちゃ駄目よ！」

京子は必死になって、美津子にいうのだった。そして、京子は、周囲のズベ公達に、

「貴女達も人間なら約束だけは守って頂戴。美津子には手を出さないで！さあ、私を責めるなら、早く責めて。六〇CCでも、百CCでも、か、覚悟はできてます」

「そういい切ると、テーブルの上の京子は、たまらなくなつたように声をあげて泣き出すのだった。」

銀子と朱美は顔を見合わして舌を出す。

朱美は、仲間のズベ公達にいった。

「テーブルをもう一つ、それに青竹と縄を持って来な。せっかくだから、姉妹仲よく並ばせて沅腸してやるんだ」

京子は、それを聞くと逆上したようにテーブルの上でのたうち廻る。しかし、嚴重にかけられた麻縄はビクともするものではない。ただ、無暗に空間に突き出している開かされた両肢を悶えさせるだけで、ズベ公達はそれを見て声をたてて笑うのだった。

耳たぶまで朱に染めて、首を垂れ、震え出した美津子の縄にしめあげられている白桃のような乳房をつついた朱美は、

「いいかい。お嬢さん。テーブルの上に乗ったたら、姉さんのように大きく股を開いて青竹の上へ足首を乗せるんだよ」

身代りにたつ夫人

何かを思いついたように川田はふと地下室から出て行ったが、間もなく、静子夫人を引き立てて戻って来た。

田代と森田に散々痛めつけられた静子夫人は、身も心も疲れ果てたような乳白色の素肌をうしろ手に縛りあげられたその縄尻を川田にとられ、よろめく足を踏みしめるようにして地下室へ降りて来たのだ。夫人の腰には、

屈辱的な紫地の色褌がしめられている。

地下室では、京子の隣に同じくテーブルがすえられ、美津子がズベ公達の手で、その上へ仰向けにさせられているところであった。テーブルに平行するように上から垂れ下がっている青竹にズベ公達は、美津子のしなやかな両肢を開いて足首を縛り止めようと懸命である。

「嫌っ、嫌です、ああ、お姉さん、助けて」
美津子は、狂乱して、両足をばたつかせ、絶叫する。姉に助けを求めても、その京子は全身を台の上に固定され、どうしようもないのだ。

「ち、畜生、悪魔っ、けだものっ、よくも美津子まで——」

京子は、台の上で、どうしようもない身を悶えさし、わめきつづけているだけだ。

遂に美津子は、ズベ公達に足を取り押さえられ、青竹の両端へ開かされてしまう。ズベ公達は、素早く縄をかけるのだった。

「ああ——お、お姉さん！」
美津子の全身は、火柱のように赤く燃え立つ。

清純で無垢な十八の乙女が、けだものに等しい人間達の環視の中で、そのような姿をさ

らさねばならぬとは。京子は、妹の気持を思うと、気が狂いそうになる。

「やれやれ、ずいぶんと骨が折れたよ」

悦子とマリは、美津子を姉の京子と同じような恰好に縛り止めると、ほっとしたように川田の方を見た。

「どう。そこから見りゃ、たまらない眺めでしょう」

実際、田代も森田も、自分達が坐っているところからの、この美人姉妹の逆さ縛りの姿態が、あまりにも見事なので、呆然としていたのだ。

田代と森田の間に立膝をして小さく坐っている静子夫人が、たまらなくなつたように首をあげ、涙にうるんだ切長の美しい眼を川田に向けた。

「川田さん、貴方は、な、何という、何という恐ろしい人なの」

静子夫人は、柔軟な白い肌を震わせていうのだった。

「ふん、今更、何をいいやがる。おめえにわざわざここへ来てもらつたのはな。その台の上の京子姐さんと美津子嬢が、自分達が沅腸され、排泄するまでをせひとも奥様に見て頂きたいというるさく頼むからなんだぜ。先輩と

して、批評をしてやってもらいてえんだ。ふふふ」

川田のその言葉が耳に入ったのだろう。台の上に固定されている京子と美津子は一きわ激しく泣き出す。

「用意にかかろうかね」

朱美は、悦の方に眼くばせをする。

あらかじめ用意されてあったらしいガラス製の三十CC洗腸器が二本、それに洗器、ブリキ製の便器などがズベ公達の戸で持ちこまれて来る。

静子夫人は、チラとそれを見ると、たまらなくなつたように左右に坐つてニヤニヤしている森田と田代に必死になつて哀願し始めるのだった。

「お願いです。京子さん達を……して！私が、私が悪かつたのです」

静子夫人は、自分を救出しようとしてこの家へ忍びこんだ京子が、もうこれ以上、悪魔達の囂りものになるのを見てはいられない。京子がこのような恐ろしい目に逢わねばならぬ破目と……つたのも、つまりは自分のため。のだと静子夫人は、京子とその妹の美津子の代りに自分になると三人の男達に泣きじゃくりながら哀願するのだ。

「なるほどね。やっぱり、上流社会の令夫人ともなりや心がけが違うよ。京子がこんな事につたのも自分の故だから、身代りになりてえとおっしゃる。どうしましうかねえ、長」

川田は、いやらしく笑いながら田代の方を見る。

「とか何とかいって、本当は洗腸がしてほしくて、うずうずしてるんだらう」

田代は、横で立膝をして、屈辱に身を震わせている静子夫人の美しい顔をのぞきこむようにして、そんな事をいう。

夫人は、口惜しさに歯をキリキリかみ、憤怒にふえた眼を田代に向けるのだった。

「たまらねえな。そんな風に怒つた顔をする、と、ぞつとするような色気が出るぜ」

田代は、隣の森田の肩をつつくようにして笑つた。

「じゃ、奥さん。この二人を助けるためならどんなひどい目にあわされても、かまわねえというんだな」

川田は、静子夫人のあごに手をかけて、その美しい顔をぐいと上へこじあげた。

静子夫人は、緬念したように眼を固く閉じかすかにうなずく。

今更、どんなひどい目にあつてもいいかとおどかされても、これまで、死ぬより辛い恥しい目に合わされ続けている彼女である。自分を救おうとして、この面白半分な囂りものになつてしまった京子と妹の美津子の身代りになろうと、静子夫人は悲痛な決心をしたのだった。

「そうかい。じゃ、奥さんが、どれほど俺達に忠実になつたか、テストさせて頂きましうか」

川田は静子夫人の縄尻を取つて立ち上らせる。

川田に耳うちされた朱美が、アイヨ、と顔をくずして、隅のハンドルに手をかける。

天井から再び鎖が一本、がらがらと下がつて来た。静子夫人は、テーブルの上に固定されている京子と美津子を背後に、そして、ニヤニヤして酒をくみ交している田代と森田を正面にした形で、縄尻を鎖につなぎ止められすつくと乳白色の肉づきのいい体を立たされているのだった。

川田は、そんな静子夫人の横に立ち、眼の前の田代と森田に向かつていった。

「じゃ、社長と親分はしばらく酒を飲んで、そのまま、待っていて下せえ、今、朱美と銀

子等と相談して、この奥様のお仕置を考えますから」

お前達も、社長さんのお酒の酌でもしてなと川田にいわれたズベ公達、思い思いに田代と森田の周囲に陣どって、にぎやかにウイスキーを飲み、スルメをかじり出す。

そんな喧噪の中で、これからどのような騷りものにされるのかと身も凍る思いで震えている震子夫人を取囲んでいる川田、銀子、朱美の三人、何やら笑い合いながら相談し合い、それを首を垂れ続けている夫人の耳元に口を寄せて何やら告げている。

川田と銀子が交互に夫人に何か告げる毎、静子夫人の美しい瓜実顔にパツと血の気が浮かび、ああと首をのけぞらして、静子夫人は嫌嫌をするように真赤な顔を左右へ振っている。

アルコールによんだ眼を、そんな静子夫人に向けていた田代と森田は、組んだ足を解いて、腰をうかせながら、

「ずいぶんと時間がかかるじゃねえか。まだ打合わせがすまねえのか」

と待ち切れなくなったように怒鳴る。

川田は、ペコリと田代達に頭を下げ、再び静子夫人の縄にくびられている豊満な乳房を

指ではじきながらいう。

「じゃ、奥さん、いいね。今、教えた通りの事を、社長と親分に宣誓するんだ。実に簡単な事じゃねえか。さ、始めな」

川田にそういわれて、静子夫人、もう一切をあきらめたよう美しい顔をあげ、眼を閉じたまま、唇を小さく開くのだった。

「——色々と、御面倒を、お、おかけ致しましたが、遠山静子、二十六才は、心を入れかえ、本日より森田組のため、い、い、一生懸命、働く事を、ち、ち、ちかいます——」

静子夫人は、血を吐く思いで、そこまでのうと、がつくりと首を落し、肩を震わせて口惜しさに嗚咽する。

「おっと、それだけじゃ駄目だよ。まだ、つづきがあったじゃねえか。社長と親分に特別お願いしなきゃならない事が。今、教えたばかりなのに、もう忘れたのかい」

川田がニヤニヤしながら、夫人の尻を靴の先でつつく。

「うしろの二人を助けたいのなら、ちゃんというだけの事はいわなきゃ駄目だよ」

銀子も、夫人の艶やかな白い背を平手打ちしていうのだった。

静子夫人は、キリキリと歯がみしながら、

すすりあげるようにいう。

「そして、私は——一日も早く、妊娠するよう心がけ、美しい妊婦ヌードとして、森田組のお仕事をさせて頂きたいです。どうかよ、よろしくお願い致します——」

やっと、ここまでのうと、静子夫人は、わっと堰を切ったように泣き出した。

田代も森田も、ズベ公達も手をたたいて、キヤッキヤツ笑い合う。

川田は満足げに一座を見廻し、
「へっへ、社長も親分も、一つ努力して、この静子夫人の、おボンポンを立派に大きくしてやっておくんない。俺もその点、力を貸しますぜ」

と笑う。

銀子と朱美は、激しく泣きじゃくる静子夫人の顔を下からのぞきこむように見て、

「ふ……、奥さんも大分素直になってきたようね。えらいわ。だけど、そんなに泣いてちゃせつかくの美しい顔が台なしじゃないの」
銀子は、ハンカチを出して、静子夫人の涙をふき出す。

川田は、田代に注がれたウイスキーを口をとがらして吸いこみ、再び、静子夫人のもとに戻ると、

「さて、奥さん、次は、あんたの得意の小唄をお酒の余興として、社長と親分に聞いていただくじゃないか」

それを聞くと、田代は肩を乗り出すようにして、

「ほほう。この奥さん、小唄ができるのかい？」

川田は得意顔で、

「できるってもんじゃありませんぞ。この奥さんは、れっきとした小唄の名取りでさあ。

小唄だけじゃなく、日本舞踊、それに、お茶お花、すべて一流ですよ。これだけの美貌と教養、その上、この見事なおっぱいにおヒップ。どうです、これだけの玉は、山と金を積んでも、手に入るもんじゃありませんぞ」

川田は、鼻をムズムズさせながらいう。

「なるほどな。遠山財閥の令夫人だけの事はある。それを森田流に飼育するんだから、これほど男冥利につきる事はないよ」

田代は太鼓腹をゆすって喜ぶ。

社交界の花形でもあった美貌と教養に包まれた令夫人が、今は、その豪華な衣類はことごとく剥ぎ取られ、雪のように艶やかな肌を隠すものは紫地の色褌一本というみじめな姿を厳しく緊縛されて、さらし者になっている

のである。

「じゃ、日本舞踊の方は、いつか拝見させてもらうとして、一つ、今夜は、名取りの小唄つてのを、じっくり聞かしてもらおうか」

いささか、その道を学んでいる田代は、興味を覚えたらしく、身を乗り出すのだった。

川田は、静子夫人の頬をつつき、

「奥さん。よかったね。田代社長は小唄が趣味なんだよ。銀子や朱美なんぞは、酒の席の余興にバナナなんかを使って、とんでもねえ事を奥さんにさせようとしてたんだぞ。芸は身を助けるってのはこの事だ。三味線はねえが、一ついいのをきかして社長を喜ばし

てあげな」

小唄を唄うだけで、ズベ公達が考えていたひどい責めは免れるとはいふものの、丸裸に褌一本の屈辱的な姿で、小唄を唄わねばならぬ情なさ。静子夫人は、唇を固く噛みしめてうなだれてしまう。

「それとも、朱美好みの責めの方がいいって

いうのかい」

川田に耳もとでいわれた静子夫人は、ハッ

としたように首をあげ、

「う、唄います。そのかわり、川田さん」

「それで、京子さんと妹さんは、艶りものにならないと約束して下さいますか？」

川田は、ニヤリとして、

「そら、田代社長の機嫌が、お前さんの小唄でよくなつたら話だ。さあ、うんと色っぽいやつを頼むぜ」

静子夫人は、眼を固く閉じ、静かに美しい顔をあげた。川田は、田代に向かっている。

「社長、何かリクエストしておくんなさい。何しろこの奥さんは名取りさんですからね。何でも知っているでしょうが、もし、希望に応じられなかったら、女達に責めさせる事にしようじゃありませんか」

なるほど、と田代はうなずき、意地悪く清元の雁を希望し、それも、唄う箇所まで指定する。

静子夫人は、肩まで垂れかかっている房々とした黒髪を後へ跳ねあげると、眼を閉じたまま唄い始めた。

「さすがは教養高い令夫人だ。社長のリクエストにあっさりと答えましたね」

森田が田代の横顔を見ている。

田代は、感服したように静子夫人の美しい声に耳をかたむけている。洗練され、格調があり、色香を感じさせるその声色は、小唄や

清元なんかとは縁のない川田やズベ公達まで
うっとり聞き惚れてしまう。

へ櫛のしずくか、しずくか露か、

濡れて嬉しき朝の雨――

川田は、森田と顔を見合わせて、ニヤニヤ
し、唄っている静子夫人の縄にしめあげられ
ている、はち切れるばかりに豊かな乳房、形
のいい臍、そして、むくむくと白い脂の乗っ
た肉づきのいい太腿、股間をかたくしめあげ
ている紫地の色禪などに眼を注ぎつつける。

静子夫人は、自分の背後で、無残な姿に縛
りつけられている京子と美津子を救うのだと
それだけを胸の中でくりかえしつつ、血を吐
く思いで、やっと、一節を唄いおわり、急に
力が抜けたように、がっくり首を落とすのだ
った。

「見事だ」

田代は、感激したように拍手する。ズベ公
達も、一せいに手をたたいて口々にいう。

「全く、この奥さん、顔もきれいだが、声も
きれいだね」

静子夫人は、屈辱を必死にこらえるように
して、顔をあげる。

「こ、これで、京子さんと妹さんは許してい
ただけますね。お願い、川田さん。京子さん

達の縄を解いてあげて下さい」

川田は、わざとらしくゆっくり煙草に火を
つけて、

「なかなかいい声だったよ。社長さんもすっ
かりご機嫌がよくなったようだ。だから、こ
こから逃げ出そうとした事に対するお仕置は
それで棒引きにしてやろうじゃないか。どう
です。社長」

川田は、意味ありげに田代の方を見る。

「よかろう。俺も、かなり小唄や清元に熱中
したが、こんないい声を聞いた事はない。さ
すがは遠山財閥の令夫人だ」

田代は、おろおろした表情の静子夫人から
眼をそらせるようにしているのだ。

川田がつづいていう。

「だが、それだけじゃ、うしろの京子と美津
子のお仕置を中止するわけにいかねえ。も
う一きばりしてもらわなきゃあね。なあ、朱
美」

川田は朱美と銀子の方を向いているのだ。

朱美は、口元を歪めて、静子夫人の横に立
つ。

「ふん。いくら小唄の名取りか知らないけれ
ど、唄うだけで、京子達の身代りになれた気
でいるのかい。虫が良すぎるよ、令夫人」

朱美は、いきなり、夫人の尻をつねりあげ
るのだった。

静子夫人は、悲鳴をあげて身悶えしながら
半分捨鉢になったように叫ぶ。

「一体、ど、どうしろというのです。どうす
れば貴女達は気がすむのです」

そんな状態の静子夫人の後方では、台の上
に仰向きに縛りあげられ、両足を高々と吊ら
れている京子が、自分の立場も忘れたように
たまらなくなつて声をあげた。

「奥様、お願いです。私達の事はかまわない
で！ こんな、けだもの達の口車に乗らない
で下さい！」

京子は、吊られている両足をくねらせるよ
うにして、泣き叫ぶのだった。

悦子が眼をつりあげて、狂乱状態の京子の
横面を激しく引っぱたく。

「うるさいよつ、おとなしくしないと、隣の
美津子を痛めつけるわよ」

悦子は、ナイフを出して、京子のすぐ隣に
これも姉の京子と同様、台の上に縛りつけら
れ、両足だけを高々と吊られている妹の美津
子の体のあちこちを突つく。

絹をさくような美津子の悲鳴。京子は、そ
れを聞くと、もうどうしようもないように身

悶えする事をやめ、顔を横へ伏せて、すすりあげるのだった。

「ふん。ちょっと人には見せられねえような恰好にされているくせに、往生ぎわの悪い阿女だ」

川田は、舌打ちしてそういうと、再び、視線を静子夫人に向ける。

「何だかバタバタしたが、どうでい奥さん。うしろの京子と美津子をお前さん、本当に助けてやりたいのだね」

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

静子夫人は、まつ毛の長い美しい瞳を哀願的にしばたきながら、川田を見て、はっきり意志を表示するようにうなずくのだったが、どのような辛い目を川田は自分に与えるのかと静子夫人の見事な肉体は、意志に反して、小刻みに震えるかのようだった。

銀子と朱美は川田を中にはさむようにして何やらひそひそ相談し始める。如何に静子夫人をお仕置するか相談に違いないが、思いついて、……やろうか、とか、……責めがい

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、真実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙を御使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

い、とか、想像するだに恐しい言葉が、うなだれている静子夫人の耳に入ってくる。

何か話がまとまったらしく、川田は、唇を舌でしめしながら、体を硬化している静子夫人に近づいて来た。

川田は、震えている夫人の耳もとに口を寄せる。

「奥さん。一応、こういう責めなんだがね」ニヤニヤしながら、夫人の耳もとで何か、ささやく川田。静子夫人の美しい顔は火のようになり真っ赤になった。

「嫌よ、ああ嫌、そんな事だけは、か、かんにんして——」

静子夫人は、房々した艶のある黒髪を激しく左右に振って、泣きじゃくる。

「今更、嫌といわせねえぞ。京子と美津子はどうしても助けてえと見栄を切ったくせに悲鳴をあげるとは何でえ」

川田は、せせら笑いながら、銀子達の方へ目くばせをする。

静子夫人は、美しい艶やかなうなじを大きく見せて、あえぐように顔をのけぞらせ、「後生です。そ、そんな事だけは、かんにんして——嫌、嫌、ああ、嫌——」

うわ言のように叫びつづける天女のような静子夫人の泣顔を川田は、うっとりするような見つめていた。

(未完)

女斗美フアンタジック・シリーズ

真夜中の女子レスリング

(重子と昭子の決斗より)

芦 浦 素 舞 夫

一、

一月のある土曜日の夜のことだった。

夕方から降りだした雪はすでに舗道に三センチ近く積っていた。街角の喫茶店の片隅のボックスに人待ち顔の重子が坐っていた。重子は昭和十七年生れの二二才、商工会議所に勤めているB Gである。入口のドアが開くたびに彼女は腰を浮かせた。しかし今度も違っていた。重子は苛立たしそうに腕時計を見た。すでに七時を過ぎている。彼女はこうして一時間以上も恋人の達也を待っているのだ。

喫茶店の中は土曜日のせいか若いアベックが多く、重子の隣のボックスにも恋人同士らしい二人が何か楽しそうに囁きあっている。みんな幸せそうにみえた。重子はいつまでもこうして待たされている自分がみじめになつてきた。店のウェイトレスやお客達が自分を笑っている様にさえ思えてきた。遂に、いたたまれなくなった重子は逃れる様にして喫茶店を出た。

雪は止む気配もなく、なお降り続いていった。重子は雪の中をあてもなくただ歩き続けた。重子は悲しかった。達也は遂に来てくれ

なかった。以前はあんなに優しくかった彼だったのに、あの時から彼は人が変わった様に冷くなってしまったのだ。昭子がいけないのだ。重子の胸に昭子に対する憎悪がこみ上げてきた。昭子とは、重子が一緒に間借りしている友達である。昭子は、昭和十二年生れの廿七才、児童雑誌社に勤めているが容貌、スタイルとも重子よりはるかに優っていた。重子はいつも昭子に劣等感を抱いていたのである。

昨年のクリスマスの夜だった。重子は恋人の達也を昭子に紹介した。それは日頃、美貌の昭子に対する劣等感を自分の恋人を紹介す

ることにより少しでも挽回しようとする考えだったのだが、かえって、それがいけなかった。達也は昭子の美貌に惹かれてしまったのである。それ以来、二人は親しくなり、たびたび逢っている様子だ。一緒に間借りしているが、昭子には女性の感でそれが分っていた。近頃では達也は重子が誘っても何かと理由をつけては彼女を避ける様になった。今夜こそ達也に逢って本当の気持ちを聞きだそうと思い電話をかけて待っていたのに、達也は遂に逢ってくれなかったのだ。重子の最後のはかない望みも無惨にも打ち砕かれてしまったのである。今夜こそ重子は、はっきりと昭子に対し敗北を感じた。

今頃、昭子は達也と逢っているに違いない。重子は昭子への嫉妬で気が狂いそうだった。昭子が憎かった。重子は唇を噛んだ。そして何かを決心した様にきつと顔を上げ暗い空を睨んだ。重子の顔に粉雪がはらはらとふりかかった。

その頃、昭子は達也とあるレストランのテーブルに向いあっていた。

「ねえ、達也さん、貴方とこうしてお逢いするのは、重子さんに悪いわ」

昭子は、切れ長の眼を色っぽく達也に向けた。

「実はね、さっき彼女から電話があつてね、喫茶店で待ってるっていつてたけど……」

達也は困った様な顔をして答えた。

「まあ、ひどい方ね、直ぐ行つて上げなきや重子さんが可哀想よ、私は帰りますわ」

昭子はわざとらしく腰を上げかけたが達也は慌てて止めた。

「昭子さん、一寸待って、ほんとに彼女とは何でもないんだ。それよりもね、昭子さん、僕は貴女を……」

達也はひたむきな表情で何かいいかけた。

「ねえ、ここを出ましようよ」

昭子は達也に皆までいわず立上った。達也も仕方なく伝票を手にして昭子に従った。

二人は表通りへ出た。昭子は達也に寄り添って腕を組んだ。やがて達也は昭子を誘って路地裏にある小さなバーのドアを押した。そして二人がそこを出たのは、すでに十一時近かった。雪のせいかな通りは少なかった。二人はひたと寄り添って歩いた。雪の中に街燈の青白い光が舗道を照らしていた。雪の降る夜更けの街が二人をロマンチックな雰囲気包んだ。曲り角まで来た時、達也は昭子の肩を

強く抱き寄せた。

「いけないわ、重子さんに……」

昭子は達也の腕の中でもがいたが、やがて眼を閉じた。ひしと抱きあつた二人に音もなく雪が降りかかっていた。

二、

昭子が達也と別れて家に帰ったのは、十一時過ぎだった。重子はまだ寝ないで待っていた。

「昭子さん、今頃まで何処をほつつき歩いてたのよ、それに貴女、お酒のんでるわね」

重子は昭子の顔を見るなり、突っかかって来た。昭子はいつにない重子の激しい言葉に驚いたが何喰わぬ顔で答えた。

「ええ、会社のお友達と、ちよつとね」

重子には、取り澄ましてぬけぬけと嘘を言う昭子の態度が憎らしかった。

「嘘おつしやい。達也さんと一緒だったに違いないわ、隠しても駄目よ、ずっと前から貴女が達也さんと、こそこそ逢つてたのを私はちゃんと知つてたのよ」

重子の眼は昭子への嫉妬と憎しみで血走っていた。昭子は内心きくつとしたが開き直った。

左手を逆手とられて馬乗りに跨がられる



「そお、知ってたの、じゃ仕方がないわね、でも別に隠してたわけじゃないのよ。そんな事、一々言う必要はないと思ったの。それに言っとくけど、私の方から誘ったんじゃないかってよ、悪く思わないでね」

昭子は冷やかに笑って重子を見下した。昭子のやや眼尻の釣り上った顔がよけいに傲慢そうにみえた。重子は悔しそうに唇をかんだ。それをみた昭子は嵩にかかって続けた。

「ああそうそう、重子さん、今夜、貴女は喫茶店で達也さんを待ってたんですね。この寒いのに、ご苦労だったわね。フフ」

この昭子の言葉は傷心の重子には余りにも残酷過ぎた。余程悔しかったのか、さすが勝気の重子の眼にも涙が溢れてきた。重子の胸に昭子への激しい怒りがこみ上げてきた。

「よくもいったわね。じゃこ

れから、はっきり勝負をつけようじゃないの」

重子は今にも飛び掛りそうな勢で昭子に喰って掛った。この重子の激しい剣幕に、さすが昭子も、少しいい過ぎたと後悔したが「勝負つけるって、どういう意味よ」

昭子はわざととぼけて聞いた。

「分ってるじゃないの、貴女とレスリングやって決めるのよ、さあ早く支度なさいよ」

女性がレスリングするなんて、普段だったら、とても考えられない事だった。しかし、今夜の重子は昭子への嫉妬と憎悪で正常さを欠いていた。一方、昭子も普段だったら笑って取り合わなかったに違いない。しかし今夜の昭子は、先程からの重子の挑戦的態度に感情的になっていた。それに酔も多分に手伝っていた。

「いいわよ、貴女なんかに、負けるもんですか」

昭子も負けずに言い返した。昭子の美しい眼元がほんのり桜色に染まっていた。重子は早くもセーターを脱ぎ始めた。そしてブラジャーとパンティだけになった。

真冬の凍りつく様な寒さも、今夜の重子にとって問題じゃなかった。昭子は重子の姿を

見て思わず息をのんだ。まさかこんな姿でレスリングやるとは思っていなかったのだ。

「昭子さん、何をぐずぐずしてるのよ、さあ早く脱ぐのよ」

さすがにためらっている昭子を、重子は腹立たしそうに急ぎ立てた。昭子はさすがに後悔した。しかし今となつては仕方がない。

昭子はストッキングを脱いだ。昭子の脚はすらりとして美しかった。十文の素足は巾が狭く、足指も細長くして恰好が良かった。しかし足の裏は脂足のせいかな真冬でも、じつりと汗ばんでべとついていた。

「昭子さん、貴女はひどい脂足ね、ストッキングがこんなに汚れてるわ、不潔よ。ああ臭いわ」

重子は昭子のストッキングをひったくり、爪先の汚れた部分を鼻で嗅ぎながら顔をしかめた。美貌の昭子への重子の精一杯の皮肉だったのだ。これは昭子もムツとした。

「ふん!! 大きな世話よ、ストッキングを嗅ぐなんて、貴女どうかしてるわよ」

昭子は思い切った様に服を脱ぎだした。そして重子と同様、ブラジャーとパンティだけになった。酔いが彼女を勇気づけたのだ。昭子の身体は色が抜ける様に白かった。

細長い首、ふっくらとした乳房、よく切れたウエスト大きなヒップ。身長一五六センチ体重四六キロの中肉中背の均整のとれた見事な体格だった。相手の重子は身長一五〇センチ、体重五〇キロで昭子より背は低かったが肥えていた。足の文数も九文三分で十文の昭子より小さかったが巾は逆に広く、足指も太く短かった。肌の色は赭らんでいて色白の昭子と対照的だった。

「昭子さん、さあ始めるわよ。今夜は階下のおばさん達は親戚の家へ泊りがけで行って留守だから、この家は貴女と私の二人だけよ。どんなに泣いたって喚いたって誰にも知れやしないわよ、達也さんも助けには来られないわよ」

重子の眼は昭子に対する憎悪の念で燃えていた。冬の夜は深々と更け渡り、静かな部屋の中に棲ましい殺気が流れた。

重子と昭子の女性の恋と意地を賭けたレスリングが今まさに開始されようとしていた。時計の針はちょうど十二時を指していた。

三、

八畳の部屋の中央で重子と昭子は睨みあつて身構えた。真冬のしかも、この夜更けにブ

ラジャーとパンティ一つの異様な姿で睨みあつた二人を、もし人が見たら仰天したに違いない。

昭子はさすがに酔いも覚め、寒さと緊張で顔面蒼白になっていた。

昭子はもともと活発な性質であり、高校時代にハンドボールの選手をしていたほどで体力には自信があつた。現に小柄な重子より二寸程上背もあつた。しかし昭子は女性として相撲やレスリングをやってみたくないなんて夢にも思つた事はなかつた。それが達也をめぐる感情の繚れから、重子とこうしてレスリングで決斗する破目になってしまったのだ。それも昭子には、そんな必要はなかつたのである。何故ならば、昭子は恋の勝利者だったのだ。しかし重子の方は違つていた。重子にとって昭子は恋人を横取りした憎むべき相手なのだ。今の重子には女性としての羞らひはなかった。あるのは美貌の昭子への嫉妬と憎悪のみだった。斗争本能をむき出しにした重子の姿こそ、或は女性の真の姿だったかも知れない。こうして二人の斗志には、おのずから差があつた。もしこれが戯れのレスリングだったら、体力的にやや優る昭子が勝つたかも知れなかつた。

さて二人はオン・ガード・ポジション（自護体）で睨みあった。重子が今にも飛び掛りそうな攻撃的な構えをとったのに対し、昭子は腰を引き防禦の体勢で油断なく身構えた。

重子はじりじりと昭子に迫った。昭子は重子の凄ましい斗志に押されてだんだん後退した。小柄な重子がぱっと組みついてきた。昭子は女性の本能から腰を引き、両腕を伸ばして重子を近づけまいとした。二人は手四つの体勢で睨みあった。上背のある昭子に防がれて小柄な重子は容易に組つくことが出来なかったがしやにむに押し立てた。重子の激しい押しに昭子も部屋の隅まで押しこまれたが、足を踏んばって必死に押し返そうとした。と重子は押すと見せかけながら昭子の押し返してくる力を利用して、いきなり一、二歩飛び退った。

この重子の早い引足に昭子は思わず前にのめりかけた。重子は昭子の髪を掴んで強引に引っ張った。女性が喧嘩の時よく使う手である。昭子は痛さに悲鳴を上げた。重子は右手で昭子の首筋を抑えつけて引き落そうとしたが、自らも腰が砕けて畳に尻餅をついてしまった。昭子は素早く重子の足を取った。そして小柄な重子を引きずり廻してから、足取り

固めで決めようとした。どうやら体力に優る昭子の方が優勢の様に見えた。しかし重子は左足で思い切り昭子を蹴り上げた。この荒っぽい重子の反撃に昭子は思わず小さな叫声をたてて撫んでいた重子の足を放した。重子は素早く跳ね起きた。二人はまた離れて睨みあった。重子はしやにむに昭子に組みついて行った。そして自分より六センチ程上背のある昭子の首に右手を捲きつけた。昭子も止むなく小柄な重子の腰を抱いて双差しになった。二人はがっぷり組みあったのである。小柄な重子は何とかして昭子を倒そうと焦ったが、上背のある昭子には仲々通じなかった。昭子は逆に外掛けで攻めた。重子は昭子の首にしがみついて耐え様としたが昭子が激しく上体を浴びせたので、たまらず畳の上に仰向けに倒れてしまった。昭子も重子の上に折り重なって倒れ彼女を組み敷いた。重子は昭子を跳ね返そうと必死にもがいたが、昭子は重子の両手を抑えつけ彼女の上に馬乗りに跨がった。

「重子さん、わたしには勝てっこないわよ、早く降参なさいよ、そしたら許したげるわ」昭子は勝ち誇った様に重子を見下した。美貌の昭子に恋に破れた重子は力づくで挑戦し

たのだが今またレスリングでも屈服させられ様としていた。

重子は齒軋りして悔しがった。重子の眼にはくやし涙が溢れてきた。それを見た昭子はさすがに重子が可哀想になった。それに女だてらにあられもなく取っ組みあいをやっている自分が羞しくなってきた。昭子は不覚にも重子を抑えつけていた手を放した。と突然重子は右手を伸ばして昭子のブラジャーを驚掴みにした。

昭子は悲鳴を上げて仰け反った。そして胸を両手で抑えてその場に蹲った。ほんの一瞬の出来事だった。素早く跳ね起きた重子は豹の様に昭子に襲いかかった。昭子の髪を驚掴みにして引き倒し馬乗りに跨った。形勢は一瞬にして逆転した。重子は右手で昭子の咽喉首を力まかせに締め上げた。美しい昭子の顔がみるみる内に苦痛で歪んできた。左手で重子の手を必死になんて外そうとした。重子の攻めは激し過ぎた。先程の昭子はこれ程までには、しなかった。ただ重子の両手を抑えつけていただけで重子の咽喉は締めなかったのだ。重子は今度はお尻をずらせて昭子の首の上に跨った。小柄といっても重子は体重五〇キロあった。上背のある昭子よりも重かった

のだ。昭子は呻き声をたてた。重子は、ふと昭子の脱ぎ捨てていたストッキングに気がついた。重子はこれを捨うと昭子の鼻先へ突きつけた。

「昭子さん、これは貴女のストッキングよ。とてもいい臭いでしよう。フッフッフ貴女の足の裏の臭いのよ、さあ、遠慮しないで、うんと嗅ぐがいいわ」

重子は憎々しく言った。そして今度はストッキングをわざわざ裏返しにして爪先の最も汚れた所で昭子の口を強引に抑えつけた。昭子はむっ!! と呻き声をたてた。いくら自分の物とはいえ、汗と脂で湿って饅えた様な臭いのするストッキングで口を塞がれた昭子は息苦しそうだ。顔を左右に振って必死に避け様としたが重子の太腿でがっちり首を挟まれていたため、そのもがきも空しかった。重子は残忍な笑いを浮かべながら、尚もストッキングを昭子の口に押しつけた。昭子は苦し紛れに重子のお尻を振りあげた!! 重子は痛さに思わず腰を浮かせた。その隙に昭子は重子のお尻の下から必死に逃れ出た。重子は昭子にお尻を抓られ一瞬、怯んだが再び攻勢に出た。今度は足で昭子の首を挟みつけた!! そして、その太い足首でぐいぐい絞め上げた。

ヘッドシザーという攻めである。昭子は自分の頸に喰いこんでいる重子の足首を掴んで必死に外そうとした。だが挟みつける力は手よりもかえって脚の方が強いのである。重子は更に足に力を入れて締め続けた。昭子の顔が苦痛で引きつった。苦しまぎれに重子の九文三分のむっちりした足を掴み、その短い丸っこい足指を引き裂こうとした。これにはさすがの重子も悲鳴を上げ思わず昭子の首から足を離した。昭子はやっと重子のヘッドシザーから逃れる事が出来た。

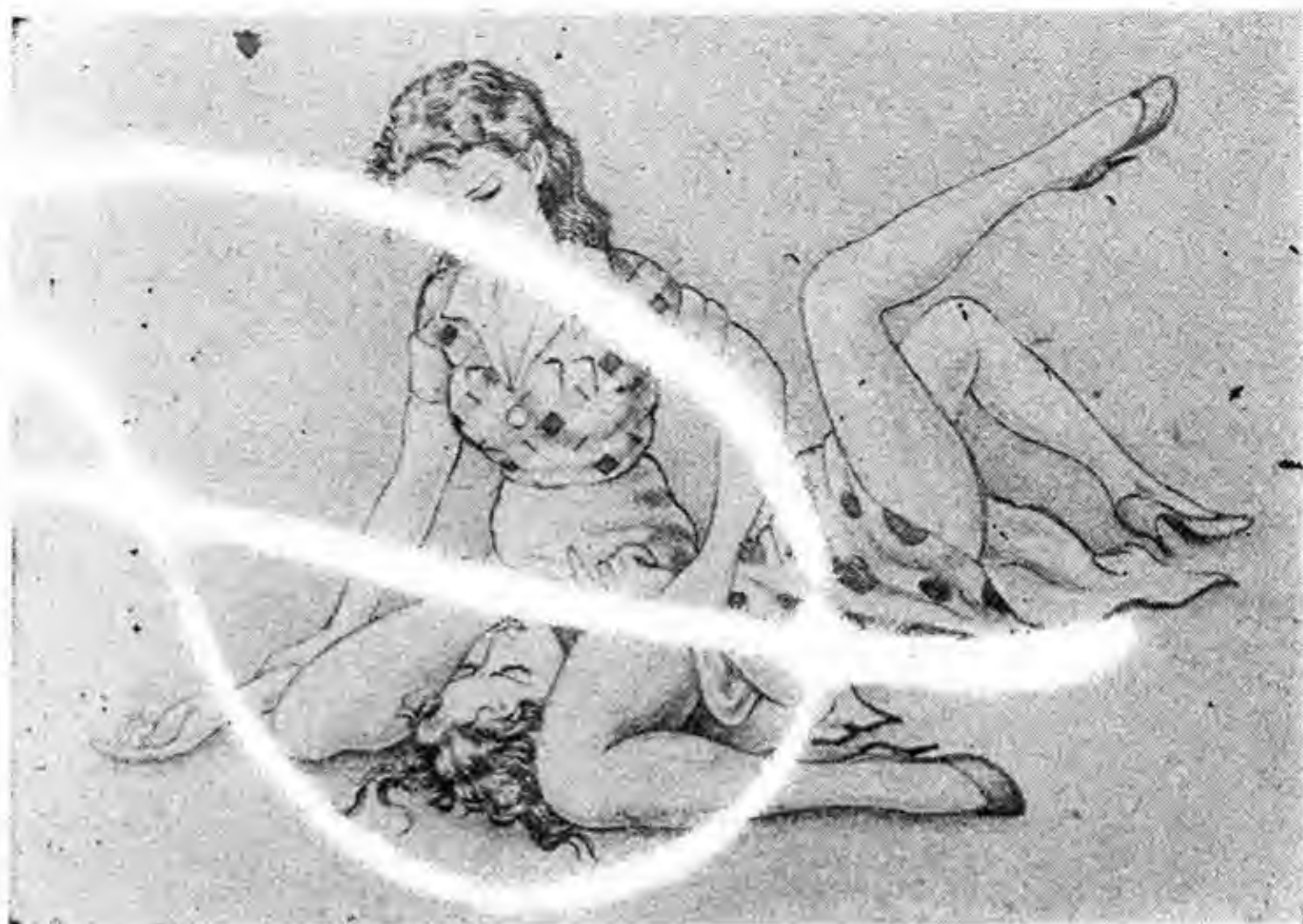
重子は痛そうに足の指をさすっていたが再び攻勢に出た。小柄な重子のいったい何処にこんなファイトが秘められているのか驚くほどだった。重子は、やっと身を起し畳に手を支えて立ち上ろうとした昭子に横から襲いかかった。重子は左手で昭子の腰を抱き寄せ、右手を腋の下から差し込み昭子の首筋を抑えつけた。ネルソンである。昭子は畳に両手をつっ張って必死に頭をもたげて、起き上がろうと、蹴いた。重子は昭子の背中にのしかかっって腰を抱きかかえ、右手で昭子の首を折曲げるように強く抑えつけた。重子は昭子をおび固めで一気にフオールしようとしたのだ。しかし昭子が大きなお尻をもち上げ必死に抵抗するので、なかなか決まらなかった重子は今度は左手を伸ばして昭子の左足首を掴んで引き寄せた。このホールドは相手を疲れさせるのに最も効果のある攻めである。今や完全に重子が優勢だった。先程体力に優る昭子に馬乗りになり組み敷かれた時は、九分九厘まで重子の負けと思われた。それが昭子のちよっとした油断から、攻守ところを変えてしまったのだ。

それにしても重子に乳房を強引に掴まれたのが致命的だったのだ。重子はそのままの体勢で昭子を抑えつけていたが、ふと左手で掴んでいる昭子の足をふり返った、そして何を思ったか昭子の首筋を抑えていた右手を離し身を翻えし、昭子の背中に後向きに跨った。そして両手で昭子の両足を抱え込んだ。昭子は重子の重みに耐えきれず畳に俯伏せになってしまった。重子は昭子の両足を抱えて思いきり反り身になった。逆えび固めという強引きわまる攻めである。昭子は背骨が折れるような痛みを感じ思わず絶叫した。

「ああっ痛い!! 止めて!! お願い!!」

昭子は痛みに耐えきれず涙をばろばろ流した。重子はやっと反り身を止めたが、今度はお尻をずらせて昭子のお尻の上に跨った。そ

首に馬乗りに跨つて押さえ込まれる



して昭子の足首を掴んで自分の顔に近づけた。重子は昭子の足をこんな近くで見るとは初めてだった。昭子の足は足首が細くくびれて、踵はアキレス腱が浮き出ており、スポーツをやっていたのを物語っていた。十文の足の裏は土踏まずが深く、足指も長くて恰好がよかったが脂足のせいとか赤味を帯びて汚れべとついていた。重子は昭子の足の裏をつくづく眺めながら

「昭子さん、貴女の足の裏は細長いわねえ。十文なんて女性には大き過ぎるわよ。それに貴女は美人のくせに足の裏は汚いわねえ」

重子は指先で昭子の足の裏を擦った。昭子は足をばたつかせて身悶えた。重子は昭子の足指の股に鼻をつけて嗅いだ。脂足特有の蒸れた様な匂いが鼻をついた。

「わあ臭い!! たまんない匂

いだわ」

重子は大袈裟な声をだした。そして遂に重子は昭子の塩辛い足指を舐め始めた。

「ああ、しょっぱい味だわ!!」

顔をしかめながらも、尚ぺろぺろ舐め廻した。確かに、今夜の重子はどうかしていたのだ。昭子は足の裏を重子の舌で舐め廻され擦りたいというより気味が悪くなった。昭子は足をばたつかせた。その拍子に重子の顔を蹴飛ばした。重子は思わずあっ!! と叫び声をあげて畳の上に転り落ちた。そして暫くは起き上れなかった。昭子は驚いて身を起し、心配そうに重子の顔を覗き込んだ。

「重子さん、大丈夫? ごめんなさいね、わざとしたのじゃないのよ。あんまり擦ったかったんですもの」

昭子は、本当に済まなさそうに重子に謝った。気の強い重子は歯を喰いしばって起き上った。

「よくもやったわね!!」

重子は眼を睨いて昭子に掴み掛ろうとした。昭子は逃げるように立ち上って

「重子さん、もう勘忍して!! 私が負けたわ」
昭子は哀願する様にいったが、重子は承知しなかった。

重子は嫌がる昭子に組みついた。そして最初と同じ様に昭子の首を捲いて投げつけ様とした。昭子は懸命に耐え様としたが駄目だった。重子の強引な首投げに畳の上にどっと投げ倒されてしまった。普段だったら体力に優る昭子は、小柄な重子にそう易々と投げられはしなかっただろうが、先程から重子の荒技に散々痛めつけられグロッキーになっていたので耐えきれなかった。これも重子に乳房を掴まれたのが遠因していたのだ。

昭子を首投げで倒した重子は、そのまま抑え込みにはいかず、昭子を引き起した。そして再び組つき首投げで倒した。こうして、立て続けに二、三回昭子を投げつけた。小柄な重子は自分より上背のある美貌の昭子を首投げで倒すことにより、快感を味っていたのかも知れない。昭子も必死だった。自分より五つも年下で小柄な重子に一方的に首投げで倒され、さすがに悔しかったのだろう。しゃにむに首を捲きにくる小柄な重子に対し、最後の力を振り絞ってタックルで反撃しようとしたが重子の執拗な斗志には勝てなかった。

小柄な重子は昭子の首を右脇深く抱え込み強引に投げ倒そうと攻めた。昭子は重子の太い腰に抱きつき、腰を落して必死に耐え

た。重子が太い右脚を昭子の長い左脚に絡ませた。重子の九文三分の指の短い、巾広い足と昭子の十文の指の長い巾の狭い足が激しく纏れあった。重子が激しい気合をかけて首投げをうった。

昭子は呻き声をあげ必死に耐え様としたが及ばず宙に大きく一回転して悲鳴をあげて畳の上にどっと倒れた。しかも右手を重子の左で抱え込まれていたため畳に手について支えることが出来なかった。重子も勢い余って右腕深く昭子の首を捲いたまま、昭子の上に折重なって倒れた。重子に乳房を強く圧迫された昭子は思わず呻き声を上げ一瞬気が遠くなりかけた。小柄な重子はすかさず昭子を抑えこみにかかった。短い丸っこい右腕で昭子の細長い首をぐいぐい絞め始めた。ヘッド・ロックである。昭子は跳ね返そうと必死にもがいたが、すでに力は尽きかけていた。小柄とはいえ重子の五〇キロの体重は容易に跳ね返せなかった。重子は昭子の顔を覗きこんだ。

「どお？ 昭子!!」

重子は昭子を呼び捨てにした。昭子は顔を真赤にして苦しそうに重子を見上げて

「重子さん、許して!! 私が悪かったわ!!」喘ぎながら重子に哀願した。しかし重子は

鼻の先でせせら笑って答えた。

「ふん、今更何をいってるのさ、こうしてやる!!」

重子は昭子の首を力一杯締め上げた。

昭子はむうっ!! と呻き声をたて、足をばたつかせてもがいた、昭子の美しい顔は眼が釣り上り苦痛で引きつっていた。昭子の大きなお尻からすーっとおならが出た。強く首を絞められると起る生理的現象である。昭子は苦し紛れに重子の乳房を掴み爪をたてた。重子は痛さに悲鳴を上げ体を浮かせた。二人は組みあったまま畳の上を転って争った。もうそこには女性の羞いも何もなかった。

重子は後から襲いかかった。そして昭子の背におぶさる様にして組みついた。右手を昭子の頸へかけて首を絞め両足で胴を挟みつけ絞め上げた。ヘッド・ロックとボデーシザーの同時攻撃である。昭子の身体が苦痛でのたうった。十文の細長い足の裏は滲み出た汗と脂に畳の汚れがつき赤黒くべとついているのが印象的だった。畳の上に激しくもがく昭子の十文の足の裏が如実に昭子の苦しみを物語っていた。昭子の胴を締めている重子の九文三分の勝ち誇った様な足の裏と全く対象的だった。

(おわり)

【読者体験記】

△私はこんな変った体験をした▽

鼻に狂う

齊藤金雄

電車はかなり混んでいた。吊革につかまっていた私の前に二十二、三才の女性が坐っていた。その女の顔を見た私は急に胸が高鳴るのを押さえることが出来なかった。その女の鼻があまりにも鼻マニヤの私の好みにぴったりの鼻だった。すっきりと高く、肉が程よくついたすばらしく形の整った鼻に、脂性なのか脂が浮いて、たまらなくなまめかしい。なんてすばらしい鼻なのか、この顔を仰向けたら孔がすばらしい形にあいているに違いない。そしてその孔を自分の思うままに形

を変えて楽しむことが出来たら、どんなにすばらしいだろう。でも、きっとこの女はそういうことを許さないだろう。大事な鼻を、この美しい鼻を他人の自由にまかせることは、自尊心が許さないだろう。そんな氣品がこの女にはあるのだ。

彼女は眼を閉じている。更に混んでいるので私はぐっと彼女に近づいた。私の手のすぐ前に彼女の鼻がある。そして更に押されて彼女の鼻を押しつぶしてしまった。クニャツと高い鼻がつぶれた。なんてやわらかい鼻なのだろう。「痛い！」彼女は小さくいって眼を開

いたが、再び眼を閉じた。更に押されて彼女の上におおいかぶさる様になった私は、すぐ眼の前にある彼女の鼻を見ると、ぴったり手をつけずにはいられなかった。ヌルとして、クニャとして再び彼女の鼻がつぶれた。そして電車のゆれる度に、彼女の形のいい肉の厚い鼻が左右に曲りつぶれるのだ。彼女はもう眼を閉じたまま私に鼻をかませている。混んでいるのだという氣持が彼女をそうさせるのか。私は歓喜に酔っていた。なんとすばらしいことだ。

もっともっとこうしていたい。しかし、次



は私の降りる駅なのだ。よし、こうなった
ら彼女の降りるところまで行こう。そう思
ったが、私の降りる駅に電車がすべりこむ
と彼女は眼をあけた。そして私の手を軽く
持つと、自分の鼻からそっとはなして「す
いません」といって微笑して私の前に立つ
と、するりと抜けて、人をかきわけて降り
た。私もつづいて降りた。私はつけてみよ
うと思った。名前だけでも知りたかった。
彼女はかなりゆっくり歩いて行く。と私は
思わず、飛び上る位ドキッとした。私の友
人が経営している理髪店のドアを開けて彼
女が中に入ったのだ。顔剃をしてもらい
行く以上、あの鼻も床屋の自由にされるの
だ。私は中の様子を見た。客は彼女一人ら
しく、待合室の椅子に坐って本を読んでき
る。やがて「どうぞ」と友人にいわれて、
本を置いて立上った彼女は客用の椅子に坐
らせられた。

何か笑いあって話している。美しい笑顔
だった。私はあまり店の前で立っているの
も変なので歩き出した。そして七、八分す
ぎてから店の前に行ってみると、丁度彼女
がギーと後に倒されるところだった。倒さ
れ乍ら笑って何かいっている。友人も何か

答えている。ねかされてぐったり眼を閉じて
何か話している彼女の顔に鼻だけ出してやん
わりと蒸しタオルをあてて、少し上から顔を
押してから友人は奥へ入って行く。よし、今
だ。私は店に入った。

店内は私と、蒸しタオルを顔にかぶせられ
て形のいい高い鼻だけを出して仰向けにねか
されている女と二人だけだった。私は彼女に
近づいた。初めて見る孔が二つあいている。
想像していた通りの、すばらしい形の孔だっ
た。私はいつもポケットにしまっているペン
カメラのシャッターを切った。そしてタオル
の上から顔を押ししたついでに彼女の鼻をギョ
ッとして左に曲げた。孔がななめになった。そし
て、又ゴミをとるみたいに軽くつまんだ。シ
ャッターを切る。女は友人がやっていると思
っているのか、身動き一つしない。やがて、剃
られるであろう鼻毛が孔から可愛くのぞいて
いる。

私が席にもどると同時に友人が出て来た。
友人が蒸しタオルをとると、上気した女の顔
があらわれた。友人は私に挨拶すると、女の
顔に石鹸をぬりはじめる。眉と頬を剃られて
いる間、私は彼女の仰向いて余計高く感じら
れる鼻ばかり見ていた。タテに長くあいた形

のいい孔、やがてその孔も、友人の手によつてさまざまな形に変わるのだ。遂にその時は来た。鼻全体に石鹼をぬられている。死んだように眼をとじている女、鼻を自由にされることは覚悟している表情である。私はまばたきを忘れてしまったかのように彼女の鼻をみつめた。

まるで静物をいじるように友人の手が彼女の鼻をつまんでいる。はなしてはつまみ、つまんでははなして、左右に曲げている。孔の形がはげしく変化する。かすかに唇が開いて白い歯がのぞいている。更に孔が密着する位きつくつままれた。苦しうに女の口があくしかし、眼はかすかに笑っている様だった。更に鼻をつぶし、再びつまむ。女の伸ばしていた脚が片方だけの字に曲る。そして、今まで胸においていた手が片方だけ椅子のわきにだらりとたれた。そのぐったりした女のしぐさが私の心を更に熱っぽくさせずにはおかなかった。

彼女が何かいって笑っている。やがて彼女の鼻の孔が大きくひろげられて豚の様になった。中を剃られている。女の呼吸が激しくなったようだ。隆起した胸が激しく上下している。ひろげられた孔から荒い呼吸がもれている。

る。友人は私みたいに鼻に興味はないに違いない。そうしたら全くもったいない話だ。替ってやりたかった。女の鼻はコンニャクみたいに動いている。やがて鼻を終り、顔を私の坐っている方に向けられた彼女は初めて眼を開いて私を見た。やがて友人の手が近づいたので、女は再び眼を閉じる。顔剃りが終り蒸しタオルをあてられてキュッキュッと荒く顔をふかれて、彼女は微笑して友人の顔をにらむように見る。クリームを顔全体にぬられて、電車の中で見た時よりも更にギラギラ光った鼻がそびえていた。やがて、顔中もまれて、ゴムのように顔が躍っている。そして、鼻を左右交互につまみ上げられている。女は眼をかすかに開いているようだった。

椅子の上に起こされた女は満足そうに鏡の中の自分の顔を見てから椅子から降りた。私のそばに来た女は「おまたせしました」といってバッグから金を払って「お世話様」といって出て行った。友人は彼女はいつも水曜日の夜来るのだといっていた。私はすぐ外に出た。かなり前を彼女が歩いている。床屋から出た女が大抵するように彼女も剃られた顔を撫でていた。私は走って追いついた。囲りに人はいなかったので思い切って「あの、失礼

ですが」といった。「はい」といって振り返った顔が美しく、いぶかしげに私を見た。「何か?」そして、さっき床屋にいた男だと気づいたのか

「なさいませんでしたの?」と聞いた。

「ええ、ちょっと貴女に」

「何でしょう」美しい眉を寄せた。

「ええ、すごく厚かましいんですが……。私は髪を刈るために、あそこにいたのではないのです」

「まあ、じゃあ、なぜですの」

「貴女の顔剃りを見たいためだったのです」

「まあ、はにかしいですわ」と赤くなった。

「あたくし、ちっとも知りませんでしたわ」

「貴女は、鼻をいじられるの、お好きなんですか?」

「何故ですの?」

「さっき、あんなにつままれても、すごく気持ちよさそうにしてたから」

「ずっと見てらっしゃったんですか」

「ええ、ずっと」

「いやですわ、どうしてですの」

「好きなんですか」

「なんてお答えしたらいいのかしら」くすつと笑った。嫌いじゃないのだ。

「私のお願いっていうのは、あのように私に貴女のその鼻をつまませて頂きたいのです」

「まあ、そんなこと！」

びっくりした様にいった。いきなり眼の前の女の鼻をつまみたかった。

「こわいわ」と彼女はいった。

「どうして？」

「困るわ、あたくし」

「どうしてですか、さっきは、あんなにおとなしく……」

「でも、あれは……」

「床屋だからというんでしょう」

「ええ、そうですわ、床屋さんに行くからには仕方のないことですわ」

「でも、仕方のないという表情ではなかったでしょう。むしろ快よさそうだった」

「でも、どうしてあたくしの鼻なんか」

「形のいい、肉の厚い、それに貴女は脂性でしょう」

「ええ、困ってますの」

「その脂の浮いた鼻が私にとってはすばらしく魅力的なのです。つまんだ時は脂があった方が柔かいし、見ても、脂の浮いた鼻は美しいのです。一度つまませて下さいませんか」

女は考えている。

「困りますわ。本当に」と、あえぐようにいった。私は彼女の鼻を見た。なんてすばらしい鼻なのか、あの友人はこの鼻を自由にしたのだ。私は名刺を渡した。

「今度の日曜日、お待ちしています。誰も見ていない私の部屋でつまませて下さい」

彼女は名刺を受取って微笑していった。

「あなたって変わった方ですね」

二

私は日曜日は珍らしく早く起きた。多分来て呉れないだろう。でも、もしやという期待があったのだ。床屋に顔剃りにわざわざ来る女はマゾ的な性格を持った女だというのが私の持論だったからだ。その証拠に、顔を剃られていて不快な表情をしている女は一人も見ることがなかった。皆、快感の表情を浮かべているのだ。友人の床屋にいつか来ていたあの若い女は助手の顔剃りが、いつもより早く終わったので「もうおしまいなの？」と不満そうにいったものだ。

二時が過ぎても、彼女は現れなかった。やはり駄目だったのだ。私の期待が甘すぎたのだ。見も知らぬ男に大事な鼻をつまませるなんて、そんな女がいるものか、それは夢でし

かないのだ。しかし、あの鼻の魅力は忘れることなんか出来るものではない。写真だけでもとらせてもらって、それを実物大に引き伸してつまんでみたい。でも、それでは肉の感触はまるでないではないか。その時だった。トントン、ドアをノックする音。軽いノックの音だった。(来たッ！)

私は部屋をつんのめる様にしてドアに走った。外には、まぎれもないあの女が立っていた。クリーム色のそでなしのツーピースだった。口紅を塗っただけの顔が、かえって野性的で美しかった。鼻に脂が浮いてすばらしかった。

「やはり来て下さったのですね」と私はうわずった声でいった。

「さ、どうぞどうぞ」

私は彼女の手をとって中に入れた。

「なんだか厚かましいみたいで、とても迷ったんですけど」

「いや、厚かましいのは私の方ですよ。いきなり、あんなことお願いして」

「この間は、ほんとに驚きましたわ」

「でも、来て下さったのですからOKして下さいだったのですね」

彼女は黙って笑った。



「この間は、あんな事仰しゃるので駄目かと思いました」

「だって突然でしたし、あんなところで鼻をいきなりつままれたら、どうしようかと思つて、人に見られたらおかしいでしょう、はづかしかったんです。それに……」

「それに？」

「こわかったわ、こわい顔してらっしゃいま

したもの」と私を見た。

「すいません」

「でもお部屋ならと思つて伺いましたの」という。そして彼女は「あら」といった。

「これをお済みですか？」と私の部屋に置いてあった奇クを手にとって聞いた。

「ええ、ずっと」

「そうです」

「あなたも？」と聞くと「ええ」と小さい声でいった。なんという偶然なのだろう。なんというラッキーなのだろう。それでは話は早い。愛読者同志なのだ。

「そうだったのですか」と私は急に親しさを覚えていった。彼女はマゾだと告白した。殊に顔を床屋で剃られると体中がぞくぞくするのだという。他の経験はないといった。彼女はコンパクトを出して「こんなに脂が浮いてしまつて。家を出る時拭いて来たんですのに」というので「拭かないで」と制した。彼女にコーヒーとケーキをすすめてから「小西京子」という名前と会社を知った。丸の内に勤めているのだそう。奇クの読者と知つて、私は勇気が出て、彼女に縛らせて呉れと頼んだ。彼女は今まで縛られたことはないし、裸は困るといったが、洋服の上からだと服がいたむからというところだ。

「縛らなくても鼻をつままれるだけなら暴れませんわ」といって笑ったが、自由を奪われた女の鼻をもてあそぶ方がすばらしい事を説明すると納得した。

「痛いでしょうね」と悲しそうにいった。

「大丈夫。きつと縛られるのが好きになりま

すよ。」

裸にした女の肉体は見事だった。乳房が日本人には珍らしい位、発達していた。後手に縛ると「痛い！」といったが、やがて観念したのか、眼を閉じて体の力を抜いた。後はお私になすがままだった。完全に縛り上げると「どんな気持？」と私は聞いた。ぐったり横たわった女は眼を閉じていたが「ふっふっふっふっ」と含み笑いをして

「まだこわいわ、何をされるのかと。でも何をされても、こうなったらもう駄目ね」と私を見ていって「ああ」と溜息と共に眼を閉じた。私は彼女の体を明るい窓辺の下まで運ぶことにした。いきなり抱くと

「何をするんですか？」と力なく聞いた。

「後でわかりますよ」

可成り重たかった。運ばれる間、女は眼を閉じたままだった。私は彼女に眼かくしをした。彼女は黙っていた。カメラのシャッターを切った。明るいところに運んだのは写真をとるためと、鼻の脂のブツブツしたイチゴのブツブツに似たものを、あとで針でとるためだった。

「何の音？」と女がいった。

「さあ」

「写真をとったんですか？」

「そうですよ。写真が一番記念になりますからね」

女は黙った。彼女の頭を私のひざの上にのせた。そして鼻を見た。横を向かせる。なんて形のいい鼻なのか、脂がかたまったブツブツが人一倍すごい。鼻の頭から小ばなにかけて無数にある。孔を見る。なんて美しい孔なのか、この間は困りますなんて生意気をいつていた女が、今は私のために自由を奪われて私の前に横たわっている。あんなにつまみかかったこの女の鼻がすぐ眼の前に高くそびえている。この鼻をどんなにもてあそんでも自由なのだ。

「さて、はじめにこの鼻をどうしようかな」

女は聞こえてるのに黙っている。

「なんて肉の柔かそうな鼻なのだ。それに形のいいこと。その鼻を」といって孔を見乍ら「こうしてつまむと」といって、ユックリつまむ。孔がだんだんにつままって肉が薄くなって、やがて孔が完全に密着して水ももれない位にふさがってしまう。なんと奇妙な形になったものだと、自分でつまんでいる女の鼻を見ておかしかった。女の口がパーと苦しそうに開く。

「やはり思った通りの、いやそれ以上に柔らかい鼻だね」

女はただ口を開いている。

「苦しい？」と喜びにふるえた声で聞くと女は「ぶふ……」と吹き出した。

「どうして笑うの？」

「こんなことされてるのが、何だかおかしくて——」離すと孔が元の形になる。

「ただつまんでるだけではつまらないから、さていよいよ鼻いじめに入ろう」というと、

「何をするんですか」と心配そうに聞く。

「今に分りますよ」

私の眼は鼻の脂のブツブツに集中した。針を片手に持って、片手で彼女の鼻をギュッとつまんだ。肉が盛り上る。ブツブツの一つに針をさす。

「痛い！」

「静かに」

「何なの？」と眼かくしを取ろうとして顔を左右に振る。彼女の顔を股にはさんで動かないようにしてから、又鼻をつまみ、針を突き刺す。

「痛い、痛いわ、もう許して」

女は体をくねらせてのたうつ。針がそれで血が出る。

「ほら、ブツブツからはずれてしまったじゃないか、余計痛いよ」

「穴があくわ、取らないでよ」

「又出てくるさ、脂のかたまりだもの」

一つ、二つと、取れたものを紙の上に並べる。あまり暴れるので、彼女の胸の上に馬乗りになる。

「痛い！ 手が折れそう！」と呻く。

「もう少しの辛抱だよ」

「痛い！ もう我慢出来ないわ。ね、お願いもう止めて、ただつまむだけにして、つまむだけのお約束だったわ」

と哀願するようにいうのが、かえって私の気持を煽る結果となり女のムッチリした乳房が私の膝の下でつぶれるのを感じ乍ら女の体を更に押さえつけてはげしく鼻をつまんだ。又針を肉に刺す。眼かくしがはずれる。女の眼から涙があふれる。泣き乍ら鼻をつままれて苦しんでいる女の表情はすばらしいものだった。カメラのシャッターを切る。

「もう死にそうよ」

口を大きく開いて呼ぶ。

「そんな顔したら、せっかくの美人も台なしさ」

「だって、こんなことするなんて」と涙声で

いう女の哀れさが楽しかった。この間の、手のとどかないような美しい女が、私のためにこんな目に合わされて涙と苦悶でくしゃくしゃになった顔を私の前にさらしている。縛られてぐったり伸ばした脚が女の無防備の状態を物語っていた。

女をどうするかは私の自由だった。又、それに抵抗するには余りにも彼女は不自由なのだ。でも、私は彼女の肉体よりも鼻に目的があるのだ。あんなにつまみかかったこの鼻が今は思いのままなのだ。私は更に彼女の高い鼻を今度は押しつぶした。肉が横にひろがり孔が平たくつぶれておかしかった。小ばなに針をあてる。

「まだやるの、もう、もう死にそうよ」

女は更に泣いた。私は涙を拭いてやり乍ら「もう少しだ」と叱る。女は

「やはり来なければよかったのよ」とぐったり眼を閉じて涙を落す。

「そんなことないよ。僕をこんなに楽しませて呉れたのだから」

女の鼻をもみほぐし乍らいうと

「こんなひどい目に合うとは、思わなかったわ」と睨む。

「もう終りだ」

私はメンソレータムをぬる。

「しみる？」

「ううん」

女は鼻をもまれ乍ら、じっとしている。それがすむと蒸しタオルをあて、床屋がやったみたいに鼻だけ出した。なんというすばらしい孔だろう。

「孔の形がすばらしい」

彼女はくすと笑う。

「脂のかたまりのブツブツがずい分ある」
「気になってるのよ」と、私に蒸しタオルで顔を拭かれ乍ら、彼女がいう。

「僕にとってはすばらしい鼻だよ」とはげしくつまむ。つまんでは離し離してはつまむ。
「この肉、この肉。なんてやわらかいのだ。なんてやわらかい鼻なのだ」

女は吹き出して

「もう許して。鼻がはれちゃうわ」

「止められるもんか、止められるもんか」

私は狂ったように女の鼻をつまむ。夢中でつまみ続ける私のはげしさに、女はもう言葉すらなく、口をぐったり開いて死んでしまったように動かない。ただ、私につままれて高い鼻だけが、はげしく動いているだけだった。

(付記)

それから幾度も私に鼻を自由にさせて呉れた彼女は七月に突然、父親と共に北海道へ行ってしまった。それは私にとってどんなに悲

しいことだっただろう。あの鼻のすばらしい魅力は、とうてい忘れる事が出来ない。二人しか知らない秘密は今となっては思い出だけになってしまった。でも、私は人が経験しな

いような事をしたのだから、満足に思っている。小西京子の代りをつとめて呉れる女性の読者の方は、いらっしやらないだろうか。私はそんな方の現れるのを毎日待っている。

【代理部新版分譲品一覧】

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てほ)

六尺褌の変形姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆは)

白晒六尺褌(正面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しは)

白晒六尺褌(背面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しろ)

黒フンドシの女(正面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くま)

黒フンドシの女(背面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くう)

相撲褌を締め込む

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(すい)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆお)

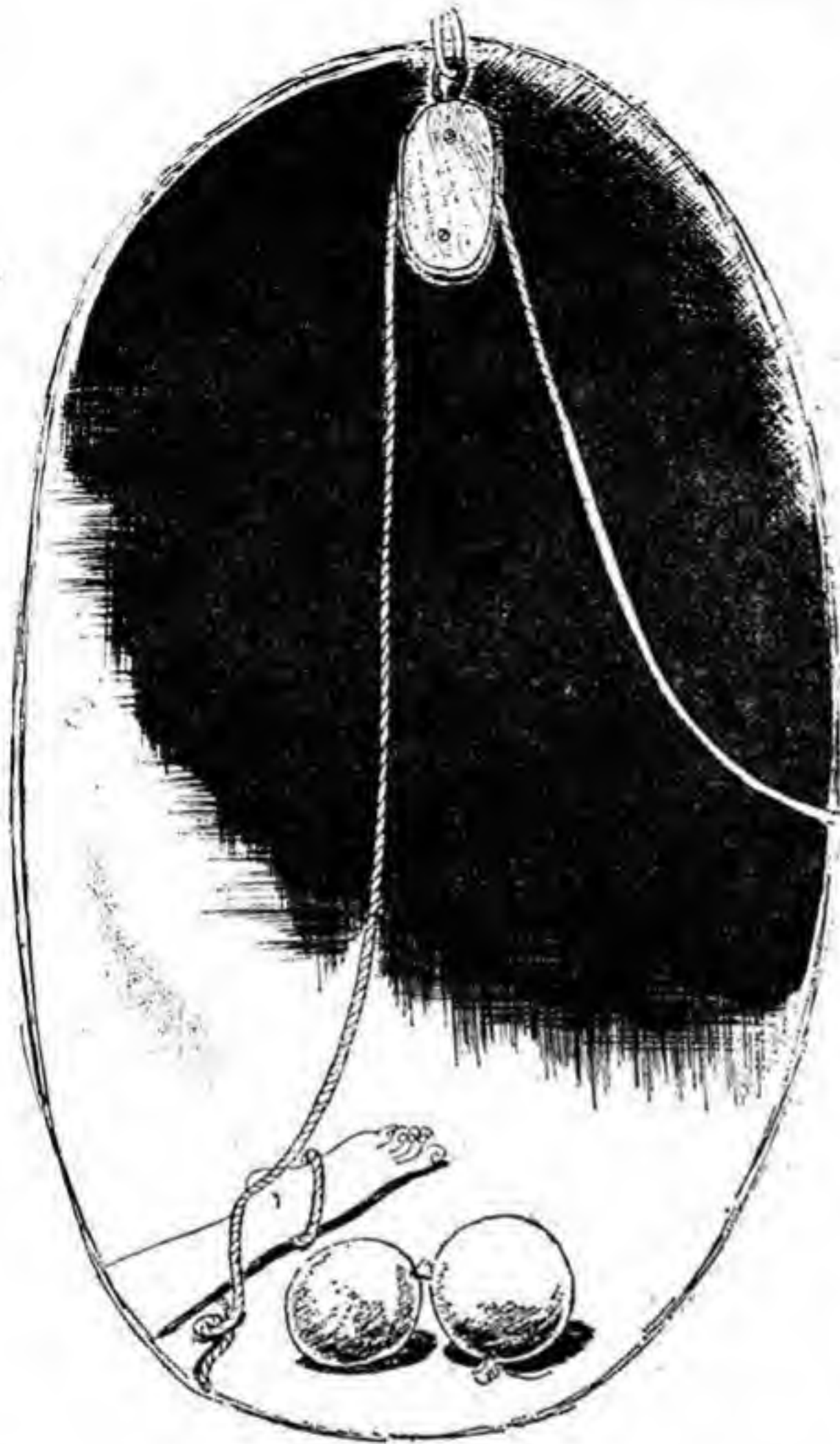
月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆす)

贗作「妖花」

羽村京子夫人に関する小品

芳野眉美



A 開花

一、昭和二十七年

羽村京子、二十一才、身長一五一糎、体重五十斤、新妻。

夫の帰宅が遅い。会社の残業であれば、電話で連絡してくるはずであった。すでに、八時を廻っている。京子は、夫を待つ外何もすることが無い。

九時、石畳の靴の音で中腰になる。夫の足音に新妻は敏感だ。門と玄関に夫は鍵をかけている。が、京子は迎えに立とうとしない。唐紙を開けた夫は、小さなエプロンを握りしめて、スネている新妻を発見する。

「ごめんごめん、急用があったんでね」

「お電話すればいいのに」

「そう怒るなよ」

夫は高価なフランス製のナイロン・ストッキングをそっと差し出す。

「おみやげ」

スネるのは、それまで。

「お食事は」

「会社ですましたよ」

「つまらない」

「馬鹿だなあ、たべないで待っていたのか」

「だって——」

着物に着がえて、横になった夫の顔の上に京子は柔かいお尻をのせる。

「ねえ」

と鼻をならす。

夫は妻のお尻に空気を吹き込んでやる。しようがない奴だな。

京子の太い腸管はむくむく膨らんでゆく。

京子はお尻からビールを飲まされる。前もって、大腸を空気で膨らませておいたから、空気と入れ替えにビールは彼女の体内に入っていく。

くすつと京子が笑った。

その笑ったのがいけないという。京子は縄でぎりぎりに縛られる。痛いわ。

「土曜日じゃないのよ」

「そんなことかまうものか」

足首を括られて、真逆様に天井から吊り下げられた。時計の振り子のように振り廻されて、京子は呻めく。しっ、声が高いぞ。夫はあわてて、そこにあった布切れで妻に猿ぐつわをする。

さらに、夫は妻の手足を縛り合わせて、部

屋の真中にぶら下げた。狸とまちがえているのかしら、失礼しちゃうわね。夫は妻を独樂のように回転させる。今夜の夫は変だわ。

やっと宙吊りから解放されたと思ったら、京子は机の上に仰向けに縛りつけられた。胴のくびれを縄でぎゅうぎゅう締めつけられて彼女のすべすべした腹部は丸く膨らむ。その上に、夫は重い漬物石を置いた。

しだいに息苦しくなり、顔が蒼白くなる。ひたいに汗がにじみでた。夫はポンプで彼女の大腸にせっせと空気を送り込んでいる。やめて。京子は失神した。

大きな姐の上に、腹をざっくり断ち割られて、横たわっている自分の夢を見る。

のけぞった顎からすつと下に、腹部の真中を切断して、京子はきれいに左右に切り離されていた。一塊になった腹わたが、どろっと姐の上に流れ出ていた。体内の臓物はすっかり取り出され、皮をはがれて赤い肉になった京子は、両脚を開いて逆さに吊される。

京子の肉は贅沢なハイソサエティの人たちの食卓を賑わし、彼女の子宮や腸管、膀胱などは珍重され、特に、京子の卵巣の肉は、やわらかくしまつて高価だった。

夫に責められた余韻があとを引いているら

しい。

土曜の午後、S子来訪。用件は、病気の夫の入院費と分娩の費用借金のため。

S子、二十三才、妊娠十ヵ月。女学校時代の京子のエス。

「そのくらいなら」

京子は夫に相談する。

「さしあげてもいいわね」

「うん」

「そのかわり——」

その夜、夫婦はS子を薬で眠らせ、彼女の衣服をすっかり剥ぎとった。心おきなく、妊婦の肉体を鑑賞する。二人共、妊婦の腹に異常な興味を持っているのだが、まだ京子にその前兆は無い。

はち切れそうな腹部は、皮膚が引っぱられて、きんきんに張っている。京子はS子の丸く膨れあがった腹を手であきるほど撫で、叩いたりもした。なんてかたいんだろう。

翌日、S子に、いろいろなポーズをとらせ、夫婦は写真を取った。彼女は、泣き出しそうな顔をしながら、おとなしく京子のなすがままになっていた。

そればかりではなかった。

臨月の妊婦を縛って、天井から逆さに吊る

したりした。考えられないことであった。

妊娠したい、と京子は思う。

S子は、その後無事出産した。この時のことを思い出して、

「本当に呆れるやら、驚くやら、情ないやらで本当に困ったわ。京子さんは一風変っているけれど、憎めない人ね」といつている。

「弱味につけこんで、ごめんなさい。慾望に駆られて誘惑に負けてしまったの」

昭和二十七年十二月号『狂い咲くカンナ、其の後の告白』より。

二、昭和二十八年

京子、二十二才。

いたずらをして、夫を驚かせてみようと思える。そう思うと、夫の帰宅時間が待ちどろしい。

戸締りをして、京子はワンピースを脱ぐ。

天井裏に上がり、両足首をロープで縛り合わせてから、滑車から逆さに吊り下がる。

書けば簡単だが、実行はむづかしい。

やっと天井からぶら下がり、ふくらましたゴム風船をお尻にあてがうと、十分位で京子の腹部はゴムまりのように丸く膨れあがった。

た。

ふと、不安になる。いつもの時間に、夫は帰って来るかしら。あまり長く逆さに吊り下がっていると、頭の血が集って失神する。だいいち、逆さまに畳を見ているのは奇妙な感じ。

合鍵で戸を開けて入って来た夫は、お尻に大きなゴム風船をつけ、腹部を蛙のように空気で膨らまして、天井から逆さにぶら下がった妻の姿を発見して、ぎょっとなる。

「おいおい」

「グッド・アイディアでしょう」

「あぶないよ」

「苦しいわ、おろして」

「早く帰って来てよかったよ」

夕食を終えて、夫はタバコに火をつける。

京子は素肌の上に夫の丸首セーターをかぶっただけで、夕食の仕度をし、テーブルに坐り、あと始末をしている。だから、セーターの下から、真白なお尻はのぞきっぱなしだ。

「はい、お茶」

膝のところに座布団を当て、むきだしのお尻を高くあげて、胸を畳につけ、夫の前で京子ははらばいになった。

「私にも頂戴」

タバコの火は、ぼっぼっと赤く色づく。青い煙を夫の鼻先に吐き出す。どう、上手になったでしょう。

「もう一本」

夫は新しいタバコをつけてやる。

京子のこんな性癖は、夫に告白し、夫の協力を得られるようになってから、本格的に始まった。妻一人の秘密が、夫婦二人の秘密になった。

夫に告白することは、勇気のいることだ。いわゆる「正常になりたい」という気持が京子に無かった訳ではない。今でも、道徳的な常識的な気持は絶えず持ち続けている。つくづく、自分の性癖を呪わしく思うこともある。いやになる。

だが、夫婦生活は単調なものだ。長い一生を二人で暮すのだから、退屈しないために、いろいろ手のこんだSMプレイが二人の間にあってもいいのではないかと思う。夫婦生活に、正常だとか、異常だとか、外の雑音の入る隙間は無い。夫婦生活は理屈ではない。

京子に、自己弁護は必要ではない。思い立ったら、実行するだけだ。それでいいではないか。誰にもめいわくはかけていないのだ。京子はこんな空想をする。

肉屋の店先には、赤や青の新鮮な果物のよ
うな京子の臍物が、綺麗に水洗いされて、す
っかり開け広げて並べられている。京子の美
しい死体はまだびちびちした弾力を残し、脂
肪が水を弾き返してところどころに露のよう
な水玉をつくっている。

籠に盛られた京子の五臓六腑からは、むん
むんするような強烈な香りが発散し、なかで
も、むくむく蠕動する長い腸は、栄養が充満
しておいしそうだ。

幻想の世界はあくまで美しく、妖しく、強
烈な感覚的刺激は、いつしか京子を夢路に誘
い込んだ。

夢の中で、両脚を別々に二頭の馬につなが
れ、反対方向に二頭の馬が走って、股から両
肢を真二つにされる残酷な刑罰を宣せられて
京子は神に感謝した。

「二股裂きにされて死ぬのが、私の望みでし
た」

昭和二十八年二月号、『妖花』九月号「京
子の生活と意見から」より。

三、昭和二十九年

京子、二十三才、長女誕生。
出産後三カ月の京子の日記。

赤ちゃんが生まれても、私の倒錯した性癖
は一向に改まりそうにない。でも、このよう
な奇妙な生活を、私たちが割り切ってい
るつもり。

私の性癖は浣腸に対する激しい執着と、腹
を割られて腹わたをひきづりだされる幻想。

浣腸するにしても、注入される液体が非常
に多量でなければ満足しなくなった。膨満し
た腹部と腸の感覚を私は好む。単なる浣腸で
なくて、大腸充滿願望という嗜好なのだ。

だから、排泄促進の薬剤ではなく、ただの
ぬるま湯のほうがいい。ぬるま湯のほうが刺
激がなくて多量に注入することが出来る。こ
のために、私たちはイリガートルを用いてい
る。

夫は、漏斗を用いて、ヤカンからお湯を流
し込むのが面白いらしいけれど、私にとって
お尻を完全に向上きにするのは苦しい。漏斗
さえあれば、お酒でも、ビールでも、お尻か
ら飲めるから楽しい。

空気浣腸にして、お腹がボールのようにか
ちかちかになるまで膨らまないと気が済まな
い。二人のときは、夫に自転車の空気入れて
注入してもらうのだけど、空気を入れると、
どういうわけか、お腹が痛みます。

ゴムホースを使用して、ある程度までは自
分で自分のお腹を膨らますことは出来る。腹
に力を入れないで、口だけで吹き込むのが秘
訣。でも、夫に見せられない。

夫の居ない昼間、鏡台の前で一人でプレイ
しているのだけ。

妻の悪癖に夫が協力してくれているのかも
知れないけれど、倒錯の甘美な陶醉を夫婦生
活に持ち込み、それを大切にそだて夫と一緒に
成長して行こうと、いつも思っている。

育児と家事に追い廻されている平凡な主婦
にすぎないけれど、こんな我儘な妻を、夫は
限りなく愛してくれている。

夫の居ない生活なんて、考えられないこと
だ。

昭和二十九年十月号『浣腸通信に寄せて』
「吾妻先生の公開状」より。

B 妖花

一、昭和三十六年

羽村京子、三十才。

女の腹が美しいためには、或る程度、脂肪
がついていることが重要である。腹は軽く盛

り上っていないなければならない。

脂肪が発達し過ぎると筋肉で与えられた輪郭が全部消えていわゆる「蛙腹」ができる。

腹に脂肪が豊かに沈着している女の特に性的な美しさということを考えて、時に、妊娠している女を肉体的にいちばん美しい型と感ぜざるを得なくなることがある。

ヨーロッパの文化発展にも、美理想がかなり月の進んだ妊娠の標識をも含んでいたある時代があった。

十五、十六世紀には、妊娠した女を裸で人の眼に曝すことさえ躊躇しなかった。

「肉体の讚美」を読みながら、京子は妊娠ストリップの雑誌記事を思い出す。

座敷には、五人ほどの客がいた。京子はちらっと客を見てから洋服を脱ぎ始める。相棒の男が使い慣れて鮎色に光ったエネマシリンジを持って京子に近づく。

京子が出演したのは、単なるお座敷ショーではない。浣腸実演。

テープの説明と、スローな摩登ジャズの外は、出演者も客も無言だ。

ただ「ううっ」「ううっ」という京子の呻き声だけが、強いライトの中で反射した。

約十五分。三リットルのぬるま湯が京子の

腹の中に吸いこまれた。客の深い嘆息。

京子の腹はぷっくりふくらんで、苦しそうに肩で息をする。

客の一人々々に、京子はぬるま湯が注入された大きな腹にさわらせた。

「強く押して」

と客の一人に京子はいった。

休憩。

化粧を直した京子は、蟬の羽根のように薄いナイロンのネグリジェで座敷に現わる。ネグリジェの下は、何も着ていない。

京子は客の一人々々に、いちじく浣腸を握らせた。客は、京子に浣腸をするのだ。慣れないから時間がかかる。

すべての客が浣腸し終るまで、京子はじつと排泄をがまんしなければならない。

やがて、客の目の前で京子は便器をまたいだ。強烈な排泄。

京子のお座敷ショーは、京子が妊娠して最高潮になる。

今夜の客は十人を越えていた。が、まるで無人の部屋のようにであった。低音のブルースがすすり泣くようなメロディをかきたたせていた。

京子はすすると着物を脱ぐ。大きな乳房

はゆったりと重そうに少したるみ、乳首のまわりは大きく暈をえがき、乳首はぼったりと黒ずんでいる。

柔かな臀部は申し分なく十分に発達し、均衡のとれた綺麗な肢体であった。

客の眼は、京子の膨れ上った大きな腹に集中する。真白な腹はときどきぐぐぐと突っばって形を変え、胎児が動いているのが実証された。

臍は裏がえしになって、怒張した腹壁の内部の圧力のすさまじさに、客は我を忘れて見つめていた。

強烈なライトは、臨月腹の妊娠線をみにくいほどくっきりと浮び上がらせる。

客があらそって写真をとり始めた。

正面、側面の妊婦の全身像。膝を立てて坐った座像、その膝をぐっと京子は開く。うしろ手に縛られた京子のおしつぶされそうになって異様にふくらんだ臨月腹と、京子はいろいろな型を演じ続ける。

クライマックスは、妊婦の逆さ吊り。

京子は猿ぐつわをされ、うしろ手に縛られがんにがらめに縄をかけられる。

天井の滑車がまわり、京子の脚がぐっと宙に上がった。みるみる脚が垂直になる。足首

が引っぱられているのだが、膝と腰にも縄をかけて、力が平均に行くようにしてあった。やがて、京子の身体がぐらりとゆれて、孕んだ女は頭を下に完全に宙吊りになった。ぐいぐいと引かれて、五十糎もあがっただろうか。

「三分間、三分間たったらおろしますから。写真を早くとって下さい」

相棒の男が叫ぶ。

臨月の腹が、上と下を縄にきっちりしめつけられて、大きく飛び出している。それが異常に馬鹿でかく見えるのは、逆さ吊りのせいかもしれない。

ライトの光りの中で京子の大きな腹が苦しそうに波打っている。

三分たって下ろされた時、京子は真青になって、口もきけなかった。ぐったりと畳にく

ずれ落ちた。客の顔も青い。見たくても見られない。一生に一度のショーであった。

但し、現実の京子のショーの観客は、愛する夫だけ。

三十六年二月号、三月号『蛙腹物語』八月

号『妊娠ストリッパー』より。

二、昭和三十七年

京子、三十一才。一男一女有り。

「このようなお手紙を差し上げますが、どれほどはしたない行為であるか、よく承知しています。

ちゃんと夫があり、二人の子供たちの母親でもある三十才にもなった女が、こうした行動に出るまでには、相当のためらいがあるものです。

あなた（とお呼びすることをお許し下さいませ）は、ほんとに罪なお方ですわ。何気なく書かれた文章の中に、あなたは、わたしにたいする特別な好意をお示しになりました。わたしたちの世界では、お互いの間のちょっとした特別の感情でさえも、異常な敏感さでキャッチされます。あなたがことごとくをこ存知ないはずはありません。

正常な人たちの間では、と



うてい考えられないほどはげしく、わたしたちはお互いに求め合っているのです。

わたしは一貫して、大量な注腸と空気の送入による、自分の腹部の膨満をテーマとして、告白をくりかえしくりかえし書いてきました。

わたしは、あなたがどれだけわたしの性向と近い立場にいらっしゃるかを、昨年の間にあなたが発表なさったものの中から、具体的に例証してさし上げたいと思います」

京子の手紙は続く。

「日常生活の中で、わたしは、平凡な主婦に過ぎません。平和な生活を乱されたくないと思っています、どこにでもいる普通の女です。ですから、あなたと、ご交際するのも、ただ誌上だけのことで、実際の生活でも、愛されたいなどという、無分別な考えを実行にうつすだけの勇氣は、とても持ち合わせていませんわ。夫はわたしの異常な性癖に、理解と同情をもっています。浣腸とか蛙腹とか、いずれもわたしたち夫婦の間では日常茶飯事のことで。しかし、根本では夫は正常な人間なのです。異常な性癖をもつ妻の要求を適当に満足させながら、そのようなわたしを自分のもとに留めておきたいと願うような、善良な

夫なのです。

自分の妊娠したヌードを編集部に送ろうかどうかと迷っていたとき、夫はそれをわたしに許さなかっただけでなく、夫はいつの間にもそのネガを焼き捨てて送れないようにしてしまったのです。それでよかったと思っています。

あなたへの手紙は認めてくれても、それ以上のことは、お互いの合意の上でしないことになっています。わたしもそれを破ろうという気はありません」

ここで、京子は深い嘆息をついた。

二通りの気持が手紙にあらわれているからだ。夫のある女が書くラブレターとは、こんなものか。

「あなたの嗜好が、蛙腹や妊婦から離れてしまふことを、わたしは恐れているのです。

仮りに（本当に仮りにの話ですが）わたしがあなたの前に（責めて下さい）と体を投げ出したとしたら、あなたはどのような方法でわたしを責めて下さいますか」

いつまでもあなたの京子より、と書いて、その人の名前を書こうか、書くまいか京子はまよう。が、一息に書き終る。

「辻村隆さま、みもとに」

夫が社用で三日ほど家を留守にしたせいか出張から帰った夜は旅行疲れで浣腸プレイまではしてくれなかった。

それが不満だったのか、夫以外の男性に手紙を書いてしまったという刺激のせいか、長女を学校に、長男を幼稚園におくりだすと、京子は朝から夫にねだらないではいられなかった。

「いくら午後から出勤すればいいからといったって」

「だって、便秘しているんだもの」

「京子とプレイすると、なんだか気がたかぶって、一日中仕事が手につかないんだよ」

「うれしいわ」

「うれしい？」

「だって、それだけ私を愛してくれているわけでしょう」

「おいおい、二人共、三十を過ぎた大人なんだけ」

「だから、浣腸するの手伝ってよ。今日はちょっとかわった方法でやってみたいの」

京子は夫の前に腹部をむき出しにして立ち、膨れ具合がすぐ見えるようにしながら、水道からホースで注腸し始めた。

はじめはゆっくり、水道の栓をにぎって自

分で水勢を加減しながら、お腹が少しきつくなるまで注水してとめ、ホースをはずした。

腸全体が麻痺してしまうのか、お腹の前面が冷えていくのがわかり、二、三分すると、身体全体ががくがくふるえてきた。

そのまま畳の上に横になる。寝ていると、ふるえもある程度とまって、知覚が遠のいていくような恍惚感にとられる。そのまま身体が深い谷間に落ち込んでいくようだ。

十分間で、水道浣腸の実験は終ることにする。すっかり出てしまうまでは三十分ぐらいかかったが、その後一時間ぐらいは尿意を感じる。排泄された量をはかってみると、二リットルあった。

「下腹がでてきたね」

と夫が新しい発見でもしたようにいった。

「中年ぶとりでしょう」

「やや蛙腹になってきたな」

夫を会社に送り出すと、京子は手紙を書き始めた。

「親愛なる辻村隆さま、わたしを料理して下さい」

三十七年四月号『あるラブレター』八、九月号『わたしを料理して下さい』より。

三、昭和三十八年

京子、三十二才。

「妊婦フォトのモデル安原さゆり様、お写真を興味深く拝見しました。」

おそらくご夫婦の間からでしょうか。安心して妊娠しているからだを、すっかりさらけ出して撮影されていらっしゃる。

それが発表されて好事家のあくなき鑑賞に供せられる。思っただけで、何という素晴らしいマゾ感でしょう。あなたは勇敢にもそれを実行なさったのですわ」

夫が妊娠した写真を発表するのに反対したことを思い出す。あれでよかったのだと京子はある。そして、この手紙を書いている。

どうせ、京子の奇妙な性癖は死ぬまで離れはしないのだ。一生つきまとうにきまっている。夫婦生活の中に、夫と妻である京子の二人の中にずっと。

結婚して以来、時にはいつそ止めてしまいたいと思ったこともあった。のがれられないと知りながら、京子は悩み、苦しんだ。そして、そのあとでまた、しびれるような深い惑溺を求めて、夢中で前以上の深みに入り込んで行った。

それを繰り返すうちに、苦いあきらめのようなものが徐々に出来上って行った。人に言えない特異の世界の甘美な味をするようになった。

京子はうったえる。

原始時代に豊作をねがった人たちが、妊婦の像をつくったように、妊娠した女体が現代でもフェティッシュになりうることを。

女が男性のフェティッシュ（物神）になるときは、女が動物にかえるときであり、女が動物にかえるときは、それは妊娠して、大きくなったオナカの中に胎動を感じるときであることを。

本能だけで動いている生物のメスの自覚で身体中が充実している感じを、妊婦がうたえるとき、女は動物にかえるのだ。

人に言えない秘密の世界に遊ぶことを知った京子は、ノーマルな人たちには閉ざされている、甘美な陶酔の味を覚え、人間性の奥底にある快楽に触れたのだ。

快楽と苦悩をないまぜて、ノーマルとアブノーマルの谷間で、京子は生き続ける。

三十八年六月号『女が動物にかえるとき』九月号『読者通信』十二月号『ナルシスの発見』より。

「本誌既刊号総目次」

昭和三十六年十一月号

(定価二〇〇円)

△目次裏▽川柳「マニヤ幻想句」
 (佐保忍・作、滝れい子・画)
 △イメーヅ▽リンチに遭う小鳩
 (北原純子・画)
 △グラビヤ▽緊縛美の祭典▽庭園の美観(梨花)▽ゴム布の嵌口(絹川)▽膚はコードにくびれて(大塚)▽組写真、責めに憑かれて(梨花)▽美しき干物(梨花)▽豊満と乳房(桜井) 涕泣(梨花)▽灯台(大塚)▽アブ双曲線▽大輪の妖花(絹川)▽連続組写真、女性の血紅切腹(梨花)▽Mフオト組写真、ハイヒール(絹川)▽組写真、エビしぼりプレイ(大塚)▽バンドの猿轡(大塚)▽足と手と(前本)▽人身御供(梨花)△口絵▽女相撲「外掛け」(提供・雪崎京人)▽スケを張れ(滝れい子・画)▽坊主の嫉妬(滝れい子・画)▽車輪とムチ(四馬孝・画)▽深夜のオフィス(四馬孝・画)▽悪童日記(南村俊平・画)▽学生馬(滝れい子・画)▽殉死(滝れい子・画)○雑踏の中の孤独(辻村隆)
 △色刷頁▽緊縛フォト撮影の実際「若奥様の悦虐ムード」▽首縛と足首縛りの一例(塚本鉄三) 火星への招待(三好謙)

△奇クサロン▽○作者の姓名につ

いての私見○私の描いた責画○風流サド談義○あるカメラマンの自伝○懲罰と折檻の構想○告白

「解剖」について○クリスタ

万才○備えあれば憂なし○マゾ画

「お化粧」○浣腸風物詩○切腹し

ポート○我が思いを托して○絹川

文代さんの麗姿○公衆便所の奥さ

ん○或る現実の断相○玉稿落穂集

○「痴人」設立試案○連作「少

女」

△本文▽奇譚クラブの性格につ

て(衣軍)○奇譚三十九夜物語(辻

村隆)「東映」最近の縛りシーン

(東山映史)女学生の切腹「野に

散る花」(黒木節夫)マゾヒスト

の告白、生涯の灯は何処に(小

林誠高)女斗美シリーズNo. 5

「熱戦譜」(雪崎京人)シナリオ

「ジェラシー」(兵与志夫)猿轡

考(原白英二)切腹実見記と雑感

(田地原規雄)ファンタジヤ・マ

ゾヒスティカ(山本節夫)切腹と

白足袋と女装「果しなき夢」(桜

恵之助)女相撲物語(雪崎京人)

宇宙のどこかで(佐治麻造)異教

徒(草薙久人)樹の壁(横村奏)

ある陸上選手の訓練「ぜいにく」

(北村浩二)大奥裸女血斗の果て

(吾嬌博)灸責め熱海の一夜(保

田徹)わが甘美なるもの(とやま

・かづひこ)私の実験(笹緑)麻

女(中平靖)
 昭和三十六年十二月号
 (定価二〇〇円)
 △目次裏▽川柳「情緒日本調」
 (佐保忍・作、滝れい子・画)
 △戯画▽獣人街の競り市(南村俊平・画)
 △グラビヤ▽緊縛美の祭典▽揺れる女体(梨花悠紀子)▽喘えぐ猿轡(絹川文代)▽組写真、縛り過程の変化(大塚啓子)△宙に耐える(梨花悠紀子)▽美しき女囚吊り▽白肌供養▽マゾ・モデル募集▽几帳のかげで▽制服のめしうど▽回転する囚衣▽M組写真「強制される法悦境」▽女体切腹擬態ポーズ▽春日ルミ女史尻敷きプレイ▽ネットの麗人
 △口絵▽雨中の折檻(滝れい子・画)○カラス蛇の鼻責(四馬孝・画)○高慢な鼻を灼く(四馬孝・画)○奇怪な湯浴み場(牧高志・案、滝れい子・画)○マゾ画廊(春川ナオミ・画)「スベリ台」「ブランコ」○アクロバット・ダンサー(滝れい子・画)○緊縛フォト撮影の実際「前手縛り縄抜けの一例」(塚本鉄三)
 △色刷頁▽読者通信の女性を縛る「ひろ子緊縛記」(辻村隆)○「嫉妬夜叉」(杉原虹児)
 △奇クサロン▽○泥中の運たれ○絵画と写真のアイデア○告白「私の好きなネル」○写真「私の切腹」

○連作「少女」取調べ、お勉強室で○お尻頌歌○緊縛の宣伝マツチ○私の責絵「胴吊りの女」○続「解剖」について○身分倒錯と逆転趣味○ゴミ捨場のBG○読者サロン○灸責フォト思いつくまま○倒錯のための倒錯行為○あるカメラマンの自伝○まぞ川柳「花嫁の靴」○サドと呼ばれる出戻り娘○五人の娘○甘美なロマンの極致○女装ということ○女性の禪と股間縛り○空想虫責め(蜜蜂)○男の冥利「裸女とコーヒ」
 △本文▽千草氏の論理(宇宙人)告白「贗医者」(渡部かね)女斗美絵巻シリーズ「引落し」(雪崎京人)体験告白「黒いコート」(宇野一)思いつくことども(中康弘通)奇譚三十九夜物語(辻村隆)マゾヒストの夢幻小説「奴隷哀歌」(獅子鼻明)わが身を灼く屈辱感(とやま・かづひこ)ミシンを踏む女(三条卓史)女性の切腹「凶礼式」(数寄咲)マゾヒズム通信「馬と女性」(鞍良人)おむつかバーマニヤの記録「試作室レポート」(関根彰)老画家の手紙(榎本秀彦)女形の想い出「仮装の一夜」(阪東秀美)平家の馬場秘聞(桂牧次郎)宇宙のどこかで(佐治麻造)私の浣腸(北沢操)日本アマゾン記「遠淡海」(二俣志津子)旅と女と縄と(南方佳男)続・白足袋のこと(木下明美)梨花悠紀子と猿轡(藤本久)愛のプレ

イ (志麻謙二)

昭和三十七年一月号

(定価二〇〇円)

△目次裏▽悦唐川柳ムード集 (佐保忍・作、滝れい子・画)

△少女大相撲▽美世の川、核塵播を倒すの図 (南川俊平)

△グラビヤ▽美しき緊縛▽美と凌辱 (梨花悠紀子)▽足のいたぶり (大塚啓子)▽カバー・ガール (竹野ひろ子)▽献身の極致 (絹川文代) 憂愁の囚女 (梨花悠紀子)▽攪り責め (大塚啓子)▽黒い手套 (絹川文代)▽ビニール袋の機密室 (竹野ひろ子)▽白壁と首枷 (梨花悠紀子)▽捨てられた人形 (大塚啓子)▽連続組写真「女性の血紅切腹」 (梨花)△組写真「逆手吊りの変化」 (梨花)▽女主人と奴隷—足舐めの構図▽撮影会風景 (大塚啓子)▽縛り人形の横顔 (大塚啓子)▽マゾフォト—奴隷哀歌▽吊り上った瞬間 (梨花)▽圧感に咽ぶ (大塚啓子)▽新しい目ざし (竹野)

△口絵▽泰安祈願の生簀風 (牧高志・案、滝れい子・画)▽踊子の訓練 (石橋純一・画)▽奇妙なドレス (石橋純一・画)▽尻の玉屋 (南村俊平・画)▽新年歌留多取り (滝れい子・画)▽重量感 (春川ナミオ・画)▽人妻椿 (四馬孝・画)▽十五夜 (滝れい子・画)○続・ひろ子緊縛記「おしめ・カパー・ガール」 (辻村隆)○緊縛

フオート撮影の実際「逆エビ縛りの一例」 (塚本鉄三)

△色刷頁▽絵物語「狂熱の鞭」 (岡千春)

△奇クサロン▽〇KK誌はエロ誌か〇巷に拾う「浣腸」の絵〇ガン作・マニヤのノート〇孕女秘戯図〇まぞ川柳自註〇マゾ画廊「ボー

ト」〇写真「檻」〇六対味会入会の手引〇男性友愛趣味〇春日女史に奉仕した三日間〇「裸の乙女達」探訪記〇白い肌と縄〇連作「少女」〇取調べ〇写真「私の切腹」〇ベッドの女神〇最近号読後感〇女奴隷に憧れる〇或る割腹事件〇短信往来、アブストラクト

〇或る温泉場にて〇私の夢願

△本文▽「うづぼかすら」 (巽羊三郎) 女体切腹小説「十五夜」 (石井章造) 女の復讐 (山岸操)

「女装生活」の幸福 (長浜章一)「マゾ放浪記」美しき脅迫者 (恒川文彦) 少女のお灸折檻 (水木清一) 宇宙のどこかで (佐治麻造)

遅ましき空想「ヘルニヤ少年特別検診」 (森太一) 雪責抄 (北潤)

乗馬風流譚 (倉仁成人) わが生涯の良き日 (とやま・かずひこ) 釜

力崎の女 (長田進) 御土産女相撲 (円山景三) あわやの一瞬 (雪崎

京人) 蛙腹と妊婦責めのアイディ

ア (瀬沼四郎) 川端多奈子嬢に「悦

虐と愛情と」 (近藤一) 輝 (久我芳一) 麻生保氏の生活と意見 (麻生保) 奇譚三十九夜物語 (辻村隆)

白い部屋の片隅から (東一郎) 或るトルコ娘の偏執「針とお脛と」 (須藤律夫) 体液銀行 (角田三郎) 体験小説「夜の告白」 (村田雪夫)

昭和三十七年二月号 (定価二〇〇円)

△目次裏▽風流いろは歌留多 (三十八夜同人作、滝れい子画)

△戯画▽珍魚釣り (南村俊平)△口絵▽仇な初雪 (滝れい子) 香

水のかおり (黒川不二夫) 珍案ピ

ール飲法 (香川ナミオ) 迷える小

羊 (南村俊平) 柱と鏡 (滝れい子)

晴衣の令嬢 (滝れい子) 懐槍のイ

メージ (滝れい子) 女相撲図絵 (雪

崎京人) 〇新作責絵集 (四馬孝)

「奴隷運搬術」〇鼻と足の指指

「白いイモ虫」〇飢えた野良猫

「冷えた番茶」〇有閑令嬢と下

僕」〇新案舞台の実験

△グラビヤ▽〇粘着する嵌口具 (絹川文代)▽妖奇の部屋 (梨花悠紀子)▽さるぐつわを求める女 (竹野ひろ子)▽排泄を耐える卓 (大塚啓子) 吸血女郎蜘蛛 (絹川文代)▽連続組写真「女性の血紅切腹」 (梨花悠紀子)▽檻棲に至るまで (梨花悠紀子)▽マゾの境地 (梨花悠紀子)▽剥玉子と縄 (熱海容子) 筐底の牝豹 (絹川文代)△巻頭色頁▽緊縛フオート撮影の実際 (塚本鉄三)△色頁▽魅せられた舞台 (柴里雷九)

△奇クサロン▽〇似みに答える〇奇ク論争に寄せて〇連作「少女」未知への恐怖、船倉の少女〇女体と縄の反応〇マゾ画廊「首締め」〇「女権」へのあこがれ〇メンスの数学〇韓信の股ぐり〇アブチック・アフリカ〇切腹のS・M性

〇脱げないパンティ〇愛と束縛と

〇アブストラクト〇天声虹言〇最

高のキス〇私のサド遍歴〇MS対

話「あの女とある男」〇竹野ひろ

子嬢へ〇アブ誌探点表〇まぞ川柳

自註〇M写真「奴隷の一日」〇切

腹俳句〇写真「私の切腹」〇M女

性への手紙

△本文▽私の意見「KK誌はマニ

ヤ誌である」 (南村俊平) 私の希

望 (四季春彦) 淡い想い出「賢

母」 (西田仁) 或るオムツマニヤ

の夢 (赤井茂) 奇譚三十九夜物語

(辻村隆) ファンタジヤ・マゾヒ

ステイカ (山本節夫) 絆 (近藤一)

わたしは奉仕がしたい (とやま・かずひこ) 宇宙のどこかで (佐治麻造) 女体切腹秘話「百舌鳥」 (石井章造) 私は訴える (高崎勉) 洋

画の縛り映画 (東山映史) 芳汗淋

漓 (雪崎京人) 黒い夢を抱いて

(京信司) ドレイ・ボーイ (津久

井毅) こんな映画をつくりたい

(南方佳男) 空の浣腸器 (山岸悠

子) 仮想見学「少年モデル訓練

所」 (杉俊夫) 妊婦の切腹「絢爛

たる復讐」 (黒木節夫) 契約書

(北村浪々)

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

大好評ノ注文殺到売切れ近し

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

目下発売中 直接お申込を 定価一部五〇〇円 (送共) 略号 (文献)

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れますと、補充がつかまへん故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折り返えし急送いたします。

〔第一グラビヤ〕 (十六頁)

自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成
棒責め愉悅……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首縄……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子
〔巻頭口絵〕 (オフセット八頁)
△絵物語△白ターバンの女……………四馬孝・画

第一図章△捕獲……………第五図章△美容
第二図章△飼育命令……………第六図章△洗腸
第三図章△調教……………第七図章△矯正
第四図章△訓練……………第八図章△仕上げ

〔第二オフセット〕 (八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画
〔第二グラビヤ〕 (十六頁)
五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞らい……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿……………大塚 啓子
憧れの優美ポーズ……………長野 良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使 (トカゲグループ)……………由岐 敏夫
1、「みんな剥いじまいな」
2、「その顔をめちやくちやにしてやる」
3、「それだけは止めておきなさい」
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」

臨時増刊号

〔写真と絵画〕 文献特集号

略号「文献」について

○本特集号は、上記内容目次に記してあります通り、もう二度と公刊できないような充実した内容を、グラビヤ写真、オフセット口絵並に写真、活版写真及び本文と縦横に駆使して、どっしりとした重量感のある上質紙に盛り上げております。

○只今書店の店頭からは、完全に姿を消しております。発行所に僅か残部があるだけです。から、未入手の方は即刻天星社へお申込み下さい。毎日在庫が減少しております。売切れになりますと、もう二度と御入手は不可能です。この程度の充実した内容のものは、当分公刊は不可能だと思っております。

○従来若干在庫しておりました限定版特別号第一弾、第二弾、第三弾、第四弾 (各一部定価五〇〇円) 並にサディズム特集号第一集、第二集、第三集、第四集 (各一部定価三百五十円、半額割引百八十円) は目下全部売切れとなっておりますが、売切れとなつてからも毎日のように御注文が参つております。中には、定価の倍出してもいいから、というような方もございますが、もう一冊も残っており

投げ出した脚線美……………絹川 文代
 悶悦ポーズ二題……………絹川 文代
 厳重な本縄掛け……………梨花悠 紀子

〔写真版アルバム〕 (十六頁)

裸女斗争場面……………絹川 大塚
 浣腸部屋の悦楽ムード……………大塚 啓子
 浣腸器を握って……………大塚 啓子
 縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子
 女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子
 女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子
 高手小手二ツ折り……………松本アサ子
 エビ縛り二種類……………松本アサ子
 血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子
 サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
 縛り過程の構成……………大塚 啓子
 鼻責めシーンの点綴……………絹川 文代

〔本文・解説〕 (三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………辻村 隆
 絵物語「白ターパンの女」……………辻村 隆
 新しいモデルを写す……………宮井美佐子
 (告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
 (告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
 自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三
 (第三グラビヤ) (十六頁)

台所のめしうど……………新井マリ子
 飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
 椅子に呻めく……………新井マリ子
 長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
 豊満への擦過……………遠藤百合子
 美しき小鳩の緊縛……………長野良子
 ポリウム自慢絵模様……………長野良子
 床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子
 煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
 組上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
 二ツ折り縛り……………大塚 啓子
 鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
 上からと横からと……………梨花悠 紀子

〔第一オフセット写真〕 (十六頁)

神さまへの人身御供……………絹川 文代
 腕と脚の双曲線……………梨花悠 紀子
 足首の縄を解く……………大塚 啓子
 緊縛女体モザイク模様……………愛川悦子
 光と影の表と裏……………梨花悠 紀子
 縄に狙われたポーズ……………梨花悠 紀子
 女相撲「四ツに組む」……………梨花悠 紀子
 女相撲「吊り合い」……………梨花悠 紀子
 爪切りと白足袋……………梨花悠 紀子
 高手小手腰縄……………梨花悠 紀子
 底園の塑像……………梨花悠 紀子

〔第四グラビヤ〕 (十六頁)

女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
 ゴム衣着用中……………梨花悠 紀子
 バンド着用後手縛り……………梨花悠 紀子
 荒縄さらしと折檻場……………梨花悠 紀子
 下着の散乱する中にて……………新井マリ子
 用意周到なる馴致……………新井マリ子
 白刃に狙われた柔肌……………大塚 啓子
 浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠 紀子
 くさり、くさり、くさり……………長野良子
 団子鼻をいためる……………長野良子
 (第二オフセット写真) (十六頁)

美しき乳房……………長野良子
 愛らしき羞ら……………長野良子
 仰角のいたずら……………長野良子
 顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
 森の中のニフ……………大塚 啓子
 緊迫の演技(斬られる女)……………愛川悦子
 ヘッドロックと首絞め……………春田愛子
 S Mの魅力プレイ……………三木 愛子
 前手縛りと後手縛り……………梨花悠 紀子
 黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
 M フット陳列……………大塚 啓子
 の下で。凌辱される男ドレイ……………鉄鎖と手枷
 クで……………鉄鎖と手枷
 愉悦ポーズ二景……………絹川 文代

ません故、どうすることも出来ません。折角半額割引きをしておりましたのですから、その時お申込を頂いておけばよかったのに、と申し上げるのですが、今となっては後の祭です。

○どうか、この特集号も在庫しているうちに御注文下さるよう、お願い致します。二年前発行された本誌が古本屋にて定価の三倍の値がついていたと驚いて報告された読者の方がありません。本特集号も書店への配本が円滑にゆかない最悪の条件下で発刊されましたので、印刷部数はほんの一握みぐらいの数でしかありません。従って、その点からも全国に氾濫するといった流布性はありせん故、稀少価値は多分にあるわけです。

○只今でしたら、一部定価五〇〇円を御送金下さるだけで、送料は当方負担にて折返しし御送本申し上げます。入手されたマニヤの方は一様に、金色さん然たるシックでモダンな表紙の八臨時増刊号Vを貴重なコレクションとして愛玩されております。

○私たちは、ここ当分の間、この定価でこの程度の素晴らしい内容とポリウムのある臨時増刊号を発刊する自信を持っておりません。その意味におきまして、本誌愛読者中年の紳士淑女の方々に對して、双手を挙げておすすめ致します。尚、未成年者の方の御購入は固くお断り致します。

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13種)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歎(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上ののびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	臍そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけたれた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外の後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六しぼり加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビニ反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上的の若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)
E 89	令嬢後手高手小手(絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ(東浦)

女体切腹資料 分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(せめ)

禪裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ)

今月の新版分譲品

女体切腹「血紅立腹」

大手札五枚一組 五〇〇円
モデル 大塚 啓子 略号(るな)

フンドシ一本の裸身ですくっと立った大塚啓子が下腹を血だらけにしなから、キリキリと切りさばいてゆく連続切腹フォト。

木馬責三態

大手札三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子 略号(もく)

後手高手小手に縛しめられて、両手の自由のきかない女体を鋭い三角板の頂点にまたがされて、痛い痛い悶え苦しむ木馬責め。

椅子責の果

大手札三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子 略号(いす)

二月号の口絵にのった椅子しばりの女体を、弓のように逆エビに反ったまま、あっちへ転がしこっちへ転がし、さんさんに責んだ果太鼓のような胸部腹部の正面からその苦痛のさまに狙いをつけました。

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
モデル 長野 良子 略号(そう)

全く素晴らしく大きく恰好のよい乳房ですね。彼女は自分でもそれを意識して殊更強調しようとします。縄は只さえ巨大な乳房をくくり上げて更に大きくくびる。

動感エビ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子 略号(とう)

柔肌を喰い込むばかりに縛られたばかりか、胸、二の腕の厳しい縄目と両足首の縄目を連結した上右に左に、ごろごろと転がし、お尻を中心にぐるぐると回したりする。喰い込む縄にもだえる表情と姿態を早いシャッターでキャッチしました。

色禪開股縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
モデル 長野 良子 略号(いふ)

縛られた縄もはじきかえすばかりのポリウム。喰い込む色フンドシ一本で、思うままにあばれまわる美麗な裸身のもだえ。



寒さ厳しき折柄、貴社益々御隆昌の段お喜び申し上げます。小生過日、街の本屋にて雑誌を物色中貴社発行の奇譚クラブを窺て、大変驚きました。でも思い切った内容には些か敬服致します。人間誰れしもアブノーマルな性質は多少共持って居るものです。小生もサドの傾向がありますが、貴誌を読んでいると、心が晴れて来て、人生がバラ色に映ってきます。それからその本屋にある奇譚クラブの古いものを片端しから借用して読み耽けりました。どれもこれも素晴らしい記事ばかりですが、特に感動するのは、やはり男子の腹切りです。三十七年四月号に（読者通信）載っていた京都の小川さんの

切腹空想は小生と全く同感で、天にも昇る程の嬉しさです。そして何月号か、忘れましたが、「ある俳優の死、黒い喪蝶」と言う美男俳優が舞台で本当に切腹して死ぬ小説は、とても感動的な読物でした。どうか、これからも男子の切腹記事を載せて下さい。それから貴社の在庫の中に、男子の腹切りフォトがありましたら、そのポーズ、その他を具体的にお知らせ下さい。お願いします。追伸、男性女性を問わず、男子の切腹に興味のある方と文通したいのです。よろしく、御願致します。（大阪八矢田ハジメ）

最込、悪書追放とかで私達の愛読誌もリストに上っていました。門外漢には、私達の心理が分からないでしょう。サディストが関係外の人に直接行動をとると犯罪的になりましようが、そんなことは殆どなく映画にあつた位で大して気になることでなく、一般のサディストは、もっぱら空想の世界で耽美しているのです。私なんかマゾヒストとフェチシストのあいこのことです。他人に迷惑をかけることはなく、ただ空想の世界を一人楽しんでいただけです。出

来れば、私にふさわしいサディスト女性が現われてくれたら、それこそ願ってもない幸福ですが、現在では相手がいないで退屈です。私達のために「奇譚クラブ」が益々充実、発展して行ってほしいのです。中止することなく永久に残していつて下さい。私は、女性から平手打を受けたり、注射をされたりするのに憧れているもので、今迄にも貴社へ、体験記を三回送りましたが、載せて頂けたのは昨年十一月号へ載った二回目だけで一回目と三回目の分は没になっております。出来れば、是非載せていただきたいのです。下手な文章で拙い絵ですが修正して下さい。なり他の秀れた画家に依頼して下さい。豪華なものを載せて下さい。下手ながらも自分の書いた文章と絵が懐かしいのです。平手打注射、浣腸、黒皮かばんのファンは、私以外にも相当多くいらつしやると思いますので、これらの特集号を是非発行して下さい。値段はたとえ高くともファンなら買うと思います。（千円でも二千円でも）私の絵と文を「奇クサロン」へ、是非載せて下さい。報しゅうは不要です。載せて頂けるだけで「奇譚クラブ」に愛着が深まり毎

日が楽しみになるのです。これからは暇をみつけて「体験談」「目撃談」「映画、テレビのシーンから」「雑誌、小説から」などマゾヒズム、フェチシズムに関する資料と絵や写真を送らせていただきますから、是非掲載して下さい。今日も、私の体験と目撃した話を「女に平手打される男達」という題で送ります。次号へ是非掲載して下さい。そして巻頭グラビアや口絵に適當なものをお願いします。戦時中の女教師の生徒に対する制裁についての体験談や物語の掲載をお願いします。どうか私の希望を叶えて下さい。では御奮闘と御発展をお祈りします。（岡山八青木繁）

読者の皆様、お元気でございませう。短い冬の日を奇クと共に私なりに味っております。私でございます。前回にも申し上げます通り女名前により、色々な事を述べさせていたのが、せめても夜慕い、うらやましく想っている私の理想の女の暮し、近くにある様でも仲々遠い世間の柵があるので。そして私の淋しい自由な時の自身で行なう責めは肌に桃色、又

は赤ネルのオコシ、肌ジュパンをつけ、その上に毛糸のみやこコシ、こんな姿で責めます。女の受けるよろこび、マゾ感を体中に満たせ、そして満足してしまいうまで行ないます。何時間でも……。どなたか理解のある女の人と共に、髪から足もとまで女装した私が女中として一日中働いて見たいものと願っております。家事を行なっている立ちふるまいでの間に体を感じる着物の裾から出て見えるネルのオコシが身心共にマゾ女の如く変えてくれるものと想います。以前に、書いておられた中島満子様、西成の高源早苗様、野中様、そして同好の男、女の皆様、毎月十日から二十日頃までの間にただける様にお便りを下さいませ、編集部の方に指定局名などお願い申上げてございます。(八里乃糸 枝)

大阪の北川京子さん。戦前の娘さんならともかく、今どきのBGの方で切腹に興味をお持ちなのは珍しいと思います。殉国処女譜そのほか本誌に載せて頂いた拙稿や小著「切腹―悲愴美の世界」お読みでしたら、ご感想をお寄せ下さい。香川の岐溪秀峰さん。風水害

や転居などの間にお所書きを失いました。お元気でしうか。お便り下さいます様に。(京都市中京郵便局止八中康弘通)

フォト多数お送りいただき有難うございます。A組新井嬢の若々しさが最もすばらしく、新宮氏提供の「こけ」もかなり気に入りましたが、トリックを用いて足首がダラリと下るところまでは、出来なかつたでしょうか。特に後面からの一枚で足が床についている効果は半減します。むしろ踏台の上ののせる方が執行直前の感じがでて面白いと思います。でもくでは大塚嬢ともあろうものが下の横木に足をかけてはなりません。両足首に分銅をつける位にして苦痛を倍加してもらいたかった。優秀な人だけに勝手な注文をつけるわけですが。三枚一組のフォトはいずれも同じ様な場面なのは感心しません。木馬責めにしても1、片脚をあげてまたどうとする瞬間2、身体が三角の頂点にのる、3足場をはずし悲鳴をあげる。という風にしたらいかかなものでしうか。それにしても木馬責めは女性に効果的で日本でも幾多の報告がありますが、南北戦争当時女性

「今月の新版分譲品」

オシメ・フオート

・シリーズ

おしめ着用

連続写真

第一集

前開きゴム製カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しま)

第二集

前開き布製防水カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しな)

オシメ・マニヤの方々の強い要望によって、ここに大塚啓子嬢を煩して、連続写真を新しく撮影しました。一糸まとわぬ全裸となった彼女が、自らオシメを整え、中腰になって当てつつオシメ・カバーをつけてゆく有様を刻明に捉えました。尚、カバーの間からオシメがはみ出ている状態も、オシメだけ前に当てた状態も、仰向けになつてオシメを当てられている状態も加えました。マニヤの方々のお申込みが多いようでしたら、更に御希望のアイデアによって、次々に撮影したいと思ひます。何

卒奮ってお申込み下さい。

乳房しばり

略号

(うは)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野良子

凄く恰好がよくて大きな乳房は、彼女の自慢のものである。只でさえ、むっくりと突き出て両手でも掴みきれないほど立派な乳房のまわりを、ロープでぎゅうぎゅう力一杯しめつけられ、只さえ大きい乳房が一層強調されて物凄いくらい見事な張りきりぶりを見せている。同じ責めらるなら、これぐらいの乳房をいたぶるのが効果的である。

鼻責と緊縛

略号

(うい)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

何にもつけていない豊かな胸に縄が喰い込み、後手首は背中で痺れるように括られていて、でも早や彼女はどのよう鼻をいたふられようとも、無抵抗の状態におかれていて。鼻の穴を上に向けてあお向にころがされ、た上、ドキドキと光る短刀で、金属棒で足の裏で、ゲイと鼻の先をあぐらにされる。無抵抗な女性の鼻責めに、関心をお持ちの方のために最近撮影の写真の中から選びました。

生首フォト 分譲

△新宮明夫氏提供△

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(のく)

本誌口絵グラビアに発表して大好評を博した新宮明夫氏が美しき愛妻をモデルとして撮影された生首フォトの中、氏が生首の乱れ髪を纏んで晒首台の上に置かんとしていたところなど、分譲品ならではの傑作を特に氏の御好意により生首ファンにこそらんにいれます。

斬首フォト 分譲

△新宮明夫氏提供△

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(のき)

自晒フンドシ一本の裸身を後手にきびしく縛り上げられた可憐な死刑囚の細首に振り下される白刃。痛々しき風情の彼女は目かくしをされて首の座にすわり、今や身首を異にしようとしている残酷美のなかに、そこはかとなく漂う哀れさとエロチシズム。

スパイに對し行なったものは先を鋭くとがらした棒杭の上にのせたというからすさまじく、殆どが自白して甘んじて絞首刑をうけたとか、第二次大戦では鉄棒の上をまたがらし、両足首をしばって重しをつけたまま放置する。これもたまたまものでなく白状するとようやく心臓に一発おちこまれて苦しみを終わる。しかし死体はそのままの恰好で晒らされたと伝えられます。ローソク責めも沼氏のいわゆる様に乳房やおへソに立てるのが面白いと思います。身体をささえたロープにローソクが結ばれ、その火がロープに燃えうつって焼き切れたとたん絞首刑になるものを考えており、いずれ「十三人」

にあらわれるかもしれせん。悪口はこれ位にして三月号を見てみますと内容刷新とうたったわりには、何となくものたりない感じがします。新宮様、前川様の作品がなはいもあるでしょうが。読者通信はやはり一番最後がよいのではないでしょうか。私も仕事が一段落しおちつきましたので旧号をとりよせ拝見してますが、ますます、「十三人」の幼稚さが気になります。「御前試合」などもいざ活字になってみますと作者の私でさえつまらないのですから、女斗彦様やその他の皆様の御期待にそえず申しわけありません。しかし今後はくどくど弁解するのを止め、一人でも喜んでくれる方があれば幸

い、といった調子で投稿をつづけます。この点女斗彦様は私にとつて貴重な存在なのですが、何とか文通できぬものでしょうか。尚今回ナタリーヌはまだ良いとして、ミッチイ、デビーがステニー、デナールと書かれていたのは残念でした。次回は「大決戦」が大風呂敷をひろげすぎてまとまらないので、別篇「殺し屋」を投稿いたします。例によって自分のことばかり、勝手なことを並べましたがお許しのほどを。(福島にて八佐出須登△)

御誌益々御発展の様子愛読者の一人として、誠に喜びに耐えません。先日ようやくK誌二月号を手に入れる事が出来ました。小生胸をわくわくさせながら目次を聞くにあつたあつた小生が大好きなサド小説「花と蛇」が又登場して居るではありませんかうれしかったですね、先月号など「花と蛇」がのっていないので味気なく一沫のさびしさが御座居ましたが、今月号は京子の妹まで加わり益々面白さを倍加してこの続きが一日も早く読み度く思います。三月号、四月号にも欠かさずのせて下さる様御願ひ致します。とにかく、小生

「花と蛇」及び関谷富佐子さんのグラビアの付いていない月号は面白くありませんから、これは欠かさず御のせ下さる様御願ひ致します。そう言えば最近ここ、二カ月程、関谷夫人のグラビアがのってませんが、如何ですが、何か関谷夫人の方に都合の悪い事でも出来たのか、まさか塚本さんが横着にかまえて仕事をさぼってんじゃないでしょうか。塚本さんに代って小生が関谷夫人とプレイする事が私の夢ですが、何とかこの夢かなわないものでしょうかね。尚前々から「花と蛇」の二回目、三回目の付いてるK誌は何月号かと言う事、問い合わせていたが全然返事がないので半分あきらめていた所先日私の行き付けの古本屋(此処にはK誌の古本が沢山あります)にて偶然発見し「花と蛇」を第一回からずうと続けて読む事が出来ました。所がこの古本三十七年十一月号と十二月号ですが一体幾らに値段が付いていたと御思いです。何かと三倍の値の六百円です。それだけの価値は私にとっては充分有りましたが確かにそれ程高い値を付けても売れると言う事はそれだけ名古屋にもK誌のファンが多い事を示しているわけですね。

私「花と蛇」を一回から今月号までずっと再読しまして此んな事を考えついたんですが如何でしょう、即ち「花と蛇」の場面集とも言うべき連続フォトをK誌のモデルさん達に演じて頂き作成して頂き度いと思ひ次の様な配役と各場面を記しました故何かの御参考にもなれば幸いと存じます。

◎配役遠山静子夫人——(関谷富佐子)娘佳子——(遠藤百合子)女探偵京子——(大塚啓子)妹美代子——(梨花ユキ子)葉桜団銀子——(絹川文代)その他川田、森田、田代等は塚本氏、辻村氏及び編集部の方々に演じて頂きました。◎名場面集一、全裸の佳子半裸の静子の前で銀子に吊り下げられムチ打たれる。二、全裸の佳子の前で同じく全裸にされた静子銀子により流腸させられる。三、全裸であぐら縛りにされた静子、川田と銀子になぶり物され、酒を無理矢理のまされる。四、静子、川田にオムツを取られ洗面器に小用させられる。五、静子、銀子にメンスバンドをはかされる。六、静子、川田にメンスバンドを森田や田代の前で取りはずされる。七、静子、川田に森田達の前で流腸させられる。(佳子と共に)八、静

子、森田と田代にくくりつけられ色々責められる。(おへソイジメでも鼻なぶりでも宜しい)九、京子、静子を助け出そうとして森田組に見つかり半裸になって森田組を相手に大ふんとう。十、捕えられた京子と静子、色の付いたフンドシをはかされ、吊り責めにされる。十一、京子ヤカンの水をのまされる。そして森田が静子をムチ打つのを止めさせる為に皆の前で小用する。十二、京子、川田と銀子にあぐら縛りにされなぶられる。十三、捕えられた京子の妹の美代子、森田組の若い者によってたかつて全裸にむかれる。二月号が此処までで終って居りますから本当は美代子に対する責めがもっとふえると存じますが、それは団先生の氣持しだいですが、次号ももっともっと面白くなる事をいります。以上十二、三、考え付きましたが編集部の方でもっと良いアイデアがあれば何かの足しになればと存じます。どうか、一度こういった様なストーリーのある連続フォトを作っていただけませんか。私達Sファンの夢をかなえて下さい。(平岡洋平)

「サディスティンの皆様へ心から

の御願ひ」何時の頃芽生えたのかもう、十年以上も自分のマゾヒスティックな性癖に悩み続けて居ます。その間には海外生活の経験もあり、白人女性との交際も多かったのですが遂に本当のサディスティンには廻り遭う事が出来ませんでした。本誌に紹介されているいろいろのプレイは、私にとって遂に想像の域を出ず、今や、サディスティンに出会う事が自分の終生の目的の様な実感さえ抱いて居ます。勿論、本意ではありませんが金銭で話のつく女性を相手にプレイの真似事をやってみた事はありません。しかし、この場合、それならそれでこんな事で金を払うとは面白い男も居るものだ、そんなに苛められるのが好きなのなら……と面白半分には遠慮なく思い切って虐待して呉れればよいのですが、何となくおずおずと仕方なしにプレイされたのではかえって落胆します。私は二十九才、スポーツで鍛えた体は相当の責めに堪ええく自信があります。よく実際にプレイしてみたら口程にもなく悲鳴を上げる様な男が多いとの御不満を誌上で見うけますが、その様な事はないいつもの事です。排泄物以外食物も飲物も一切口にさせて貰えず鞭

新宮明夫氏提供

「処刑」フォト 分譲

新宮明夫氏から「夫婦のSMプレイ」として提供を受けました本誌口絵発表が不適当です。分譲品として処刑マニヤの方々にお分けいたします。

一、絞首刑 略号(こけ)

大手札三枚一組 三〇〇円
後手高手小手、胴じばりにされ目かくしをされた麗人が、首に痛ましい吊り縄をかけられて絞首にされる哀れな処刑の姿を、前、後、側面からごらんいただけます。

二、磔 略号(はみ)

大手札三枚一組 三〇〇円
両手を左右いっぱいひろげて側木に厳じつけられた可憐な女囚が、大の字に、或は十の字に将又哀れみを乞う膝立の姿勢でハリツケられる美しい裸身をどうぞ。

三、晒し 略号(さら)

大手札三枚一組 三〇〇円
両手首を揃えて高々と吊り上げられ、或は万才の形に左右にせい一杯ひろげて吊り上げられて、衆人の目の中に、かくすことなき裸身の隅々までを視線になぶられる晒しの処刑ポーズ。

とハイヒールで苛め抜かれて、遂には、豊満なお臀の下で息を引取るのが最大の望みです。現実一度でも本当のサディスティンの足下にひれ伏し、奴隷として、犬として便器としての誓いをしてみたいのです。何卒機会をお与え下さい。心よりお願いです。(東京都中央区西銀座四の三西銀座デパート内「ブリッジ」三十号A三原寛V)

私は二四才梨花悠紀子さんのファンです。半年程前から「奇ク」の読者になりました。今までは他の雑誌を見ていましたが、内容の点こちらに移って月々楽しく過しております。若い女性の方で話し合いてを搜している人、又軽いプレイならと思っている人お知らせ下さい。私は口下手なれど心はいつも日本晴、顔は半人前。編集部の方々御健闘を祈ります。貴社ますます栄える様に。(神奈川県八真澄V)

三月号、川田和茂様の一文を読み、全く驚きました、世の中もせまいものだとしみじみ思われましたが、同夫人の協力なされている様子が目に見える様です。近畿地

方の方でしたら、御会いして色々とお話してみたいものと思えます。それに今月号の「十三人の死刑囚」はすごいもので、私の好みとぴたり。これに充分な挿絵を添えて代理部扱いに是非出して下さい。なお口絵の方にもよくば一つ御願います。又、川田氏へ。是非8ミリで撮影されては如何ですか、DPがむつかしかったらカラーフィルムへという手もあります(私は実行済み)通信欄への御登場を御待ちしております。(中尾敷真)

奇譚クラブ毎月たのしく愛読いたしております。読者通信欄の小林薫様、誌上での教えまことに有難うございました。早速五〇〇ccを注入しましてオシメを重ね、オシメカバーを当てまして横臥しましたまま、このお手紙を書いておきます。度々の御親切厚く御礼申し上げます。豊橋までも一とのお言葉に感激致しました。しかし、とてもお目にかかります勇氣が御座いけませんので申訳ございません。が悪しからずお許し下さいませ。お会いして御一緒にプレーできましたらと思いますと氣も狂わんばかりでございますが、残念でなり

ません。いつか上京の機会がございましたら、その時こそお会いしまして存分に私を責めて下さいませ。その節は必ず御通知いたします。そして小林様は先日の方法で責めてさしあげましょう。またこんな方法は如何でしょう。エネマシリンジ(ゴム球の浣腸器)の嘴管を深く直腸内に入れゴム球を圧してどんな空気を送りこみます(つまり空気浣腸ですね)。そしてお腹がぼんぼんに張った頃、シリンジの端をグリセリン液の容器に浸しグリセリン液を注入(五〇〜一〇〇cc)し嘴管を外しましたら脱脂綿で強く押えます。空気浣腸とグリセリン浣腸の二重の苦痛排便と排ガスの二重の羞恥を味わうことでしょうか。先日自分で試みましたところ排泄をこらえますとBU音(ごめんない)が激しくゆるめれば洩れそうになり思わず真赤になりました。一度おためしになつてはいかが。病院で例の処置をうけてまだ二日目なのに、いまでもお腹が苦しくなりまして。きつとお薬が利いてきたのでございましょう。今夜はこのままオシメします。そして汚れたオシメのまま明朝まで赤ちゃんのように休みます。ああもし明日の朝、

「今月の新版」

全裸の切腹悦楽

モデル 大塚啓子

△第一組V略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

△第二組V略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

女体切腹プレイの醍醐味は、一糸まとわぬ全裸になつて演ずるそれであるというところは、切腹マニヤの若き女性、例えば信太蓉子さんの告白をはじめ多くの女性の方々の言によつて裏づけられていきます。三宝を前にして、衣服をきちんとつけ、腹巻に身を固めて切腹プレイに興じていた彼女も、次第に衣服を脱し、それらの散乱した中に、一糸まとわぬ全裸の肉体をさらして、さまざまポーズによつて柔肌を白刃によつて切りさばいてゆく。

私のオシメカバーを外し汚れたお尻をきれいに拭いて下さるのが貴方様の御手であつたら、どんなに素晴らしい事でしょうね。同じ様に私も小林様に浣腸してオシメカバーを当てて差上げたいのです。そ

浣腸関連フオト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号「るい」

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

してお腹をゆっくりマッサージしてあげます。やがてべとべとに汚してしまった貴方のお尻を熱いタオルで優しく拭いてねいに拭いてあげましょう。大好きな「コンニチワ赤ちゃん」を口ずさみながら。お休みなさい可愛い大きな赤ちゃん——浣腸という孤独な遊戯に溺れる私に貴方様のような優しいお友達の出来ましたことを、英子とても嬉しく思います。お目にかかれなくても貴方様のお顔を思ううかべます。勇気のおありになる男性の方を羨しいと思います。今度のお手紙、前のとおり局止でよろしいのかどうか心配ですので編集部宛にお送りします。御住所お差つかえごさいませんでしたら、誌上にてお知らせ下さいませ。(いま排泄がはじまりましたひざががくがく英子いまでも幸福です)(豊橋八吉村英子V)

最近、とみに激しくなった貴誌へのいまわしい圧力に、敢然と戦い、毎号りっぱな雑誌を発行されている編集部の方々に、心から敬意を表し、今後もしつそう頑張つて戴くようお願い申し上げます。さて私の楽しみの一つに、読者通信があります。嘘の無い内容——といっ

てはお叱りを受けるかも知れませんが、ほとんどの作品は体験、手記、告白と申ししましても、いささかの手ごころを加え、誇張があるもの。現に私などは、どうしても小説風には書けないし、かといって本当のことをそのまま描写も出来ず、よくセミ・フィクションだなんて勝手なことをいって駄文を書いている始末です。ただこの読者通信だけはそういった点で嘘のない読者各位のお気持ち、御意見がうかがえるので、非常に愛読している次第です。編集部の方もどうかこの欄は一番大切に、材料豊富に扱って下さい。非常に制約された範囲内でつくられたと思われる二月号のグラビアですが、決して従来と迫力において何ら変わりありません。ただ傾向が違っているな、と印象づけられたのは、いままでは女性の肢体美に重点があったようですが、同号からはそれがやや薄らぎ、無残美の方に力が入れられているかの感じがします。しかしこの傾向もいろいろの制限とから今後当分は続くだろうと想像されます。でも私のようにS派には「あれでよい」という気がします。その他の愛好者の方には気の毒ですけど、わが「奇譚クラ

「プ」を守るためにいま少しの間、幅広い心で辛抱しましょう。第二グラビアの冒頭、大塚啓子さんの「磔処刑構図」は、私の待ちに待った写真でした。磔の写真はとも無駄な空間が多いので、グラビアには不向きなんだろうと思って、いたところだったのです。これを契機に梨花悠紀子さん、絹川文代さんらも奮起して、T型、Y型、X型、大の字型など各種の磔スタイルをみせて下さい。それから大塚啓子さんをお願いがあります。あのグラビア写真から推察すると磔柱に足台をつけていないようです。両腕、腋下脇腹、などに体の重味がかかり、相当に苦しかったと存じます。一つ磔体験記を書いていただませんか。どのあたりかの縄目がどんなに痛かったとか。女性が最も不安を感じる無防備姿にされて、ピンと感じた心境とか。どのていどの時間辛抱できるものかとか。私はそれを貴重な資料にしたいと思っています。編集部の方にもぜひ企画していただきたいし、もし公開できないなら、直接大塚さんから私へお便りをあつせんしていただけないでしょうか。お願い致します。手前勝手なことばかり並べましたが、どうかお許

して下さい。乱筆拙文、大変失礼致しました。(南方佳男)

○

灼熱の乗馬ズボンは面白かったです。他にも切腹物があるが、やはり藤山さんに限ります。最近出ないので困ります。藤山さんの芝居があるそうですが、どこでやっているかわからないので毎号切腹劇の情報を書いて下さい。それから昔の藤山さんのシリーズを再録して下さい。古本屋をさがしてももう手に入らないし読んだ人もあまりないのではないのでしょうか。お願いします。僕は字が下手だし文章も下手ですが、オフジへの愛情は変らぬのです。僕の結婚も不幸に終りオフジの小説が僕のメッカです。あのトレンチコートや乗馬ズボンのガバガバしたタッチこそ心の灯です。僕は毎日店が終ると女装します。そして乗馬ズボンをはいてプレイするのです。乗馬ズボンにムチを持ったスタイルの写真もよいのです。このファンは金持が多いから手紙やはがきを書くのは、めんどろうだと思っています。だから僕が書くのです。僕らのメッカ藤山さんの作品を、どしどしとのせて下さい。お願いします。(東京八藤山 党V)

女性禪マニヤ(愛読者)

フンドシ姿写真分譲

本誌の読者通信に投稿された愛読者の栗本ミチ嬢のフンドシ・フォトですが、御本人がグラビアに登場するのを恥かしがって特に分譲品としてほしいと希望を申し出られましたので、ここに芳紀二十一才のBG栗本ミチ嬢の白晒六尺禪一本のりりしい姿をマニヤの方にごらんになります。彼女は一六二センチの身長につりあう均整のとれた中肉中背、ピチピチと張りきったスポーティな肢体、愛らしい童顔の持主です。

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふの)
しなやかな肢体にきりりと締めたフンドシ姿の魅力が開股し横臥しかがむことによって画面いっぱいにむんむんと発散される。

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふへ)
六尺禪を締めるのが好きだということは、それを裏がえせばフンドシ姿に対して異常なまでの羞恥心を持っているというところである。彼女の初々しい羞らいの、フンドシ姿をごらん下さい。

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふな)
フンドシをきりりと締めた栗本嬢の魅力を、そのまわりからあまさず狙いうちしました。

フンドシの変った姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふに)
両股を開いてかかんだポーズや尻の割目に喰い込んだ晒を強調する尻振りポーズ、前袋をあらわにした横臥ポーズなどを揃えました。

二月号に岡山地方の馬淵進君、桐原純一君、山形達一君の三人の方の通信文を拝見して我が岡山地方にも奇クの愛読者がおられるという自信が出来て、奇クの為にも

非常に心強く感じました。小生も数年前より奇クを愛読しているSの男性ですが、我が岡山地方にも奇クの愛読者グループを作り色々と意見の交換や体験談を語り合う懇親会を開いて悪書追放の余波を

受けている奇くに幾分でも貢献しようではありませんか。そして本当にS・Mの人々が時には安心してプレイができるグループまでに発展していったならば、どんなに楽しいことでしょう。どうか本当に清潔なS・Mプレイをしようとする男性女性の方達で私の意見に賛成して頂けますなら御連絡下さい。誌上にての通信をお待ちいたします。電話連絡でしたら夜分岡山局③四四八二番に御連絡下さい。ば大抵あります。岡山地方のS・Mの男女の皆様御連絡を心から御待ちしております。(岡山市八早川敏男)

小生、KKファンとなつてまだ一度もお手紙した事ございませんので読者の皆様よろしく願います。そして又お友達として御交際して下さい。小生はS・Mいずれも持っております。そして女性下着の愛好家で、女性の下着に大いに興味を持っております。どなたか小生にパンティ、スリッパ等をお譲り下さいませんか。どうか勿論実費で頂きます。まさか

小生が自分自身で買いに行けないので悩んでおります。こんな小生を可哀そうな人と思われる女性がおられましたら、よろしくお願いします。それから小生をいじめて下さる女性、小生にいじめられた女性はお手紙下さい。(布施市△S・M生)

寒さもかなりきびしくなってきましたが、皆様にはお変わりないことと思います。例の問題も見通しはかなり明るくなったようです。が、皆様の地方ではいかがでしょうか。ところで死刑マニヤである私には、新宮様の作品以外満足する様なグラビヤがないので次の様な勝手なことを想像しています。一月号の甘味を慕う蟻。口おさえの木片はとってやります。その方が蟻に対し親切ですからね。目、鼻、耳、口などに蜜をぬりこんでおけば、蟻はもっと喜ぶでしょう。最後には大鎌で首を刈りとってもよいし、大刀をゴルフのクラブの様にふりまわして首を刎ねてもよい。いずれにせよ、地中から血汐が高く噴きあがることでは

う。猛レッスンのバレーは四肢をX字型にひろげ、その中央のオヘソを狙つての銃殺です。これ以外の緊縛はそのまま首を刎ねるだけ。二月号の吊り上げられた梨花。下から火あぶりにしてもよいし或は槍で突くことにしますか。大刀で両脚を腰のところからパツサリと切断し、上半身が重くなつてグラリと首が前にのめるところタイミングよろしくたたき斬る。身体は三つになつてしまふわけ。

梨花さんがこれからどんな殺され方をするのか、といった表情をしているのがよろしい。椅子しばりの大塚さんは四枚とも首が長く伸びています。さぞ斬りやすいことでしょう。同じく磔処刑はふたつの乳房の下をこれから刺さんというところ、是非両脇に槍をもった刑吏にいてももらいたかった(刑吏も女性に限る)。革拘束具もこの恰好のまま電氣を通すとか、大型ギロチンで胴切りにするなどが想像できます。回転のこぎりで両断なども面白くないですか。落城美女の奮戦も間もなく姫の首が槍先に梟けられるのでしょうか、これは実現させてもらいたいもの。処刑マニヤ、生首マニヤの増加は喜ばしい。私もまだ一年たらずです

が、思ったことをどんどん書くつもりです。先輩の方々、どなたか今まで奇くにのつた生首、処刑に関する事項について、何年何月号何々という様に知らせていただけませんか。昨年五月号よりの「女曾我」からは拝見しております。(黒田寿)

読者通信欄の皆様、並びに編集者の皆様、お変わり御座いませうでしょうか。最近、新刊本屋で入手出来なくなり、一駅先の古本屋まで足を伸ばさなくてはならず大変な不便を感じます。しかし毎月二十五日を過ぎると喜々としてノコノコ電車に乗ってまでその本屋まで足を運ぶのですから、一駅位の不便さはそれ程感じないのでしよう。この雑誌自体にその不便さを上廻る何物かがある訳です。それが何か、それは読者の皆様自身御存知の事でしょう。一度読んだらやめられない。酒やタバコの魔性にも優るとも劣らない魅力がある訳です。それが唯単なる魅力であるとか、いったようなものではなくしてある一定方向の風俗雑誌としてあらゆる趣好を取り入れた編集方法にも眩惑されているのではないのでしょうか。そしてこの

次号(五月号)は三月二十五日発売いたします。

今月の新版分譲品

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

身動きもできぬ真白な裸身をも
だえさせて、火のついた巻煙草を
無理にぶかぶかと吸わせられる。

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろも)

ふり乱す長髪のもだえ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろめ)

肉体美に自信のある長野良子は
もともとポニーテールの長髪を巻
いていたのだが、この二つの写真
集は、その長髪をふり乱して強烈
な縛りにボリウムのある身体をう
ねりにうねらす彼女の最近作。口
絵に不適のため特に分譲品に。

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らく)

愛川悦子によって背後から抱え
られるようにして、臍の下も鎌に
よって掻き切られている可憐な女
子大生田中芳代嬢。

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らみ)

虚空を掴んであお向けに倒れた
芳代の上に跨った悦子が、その咽
喉元へぐざりと短剣のとどめを刺
し、後から抱えて、首を掻き斬ろ
うとするところ。

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円
絹川 文代 略号(らふ)

美貌の絹川文代の真白い下腹に
或は脇腹に、のど元にドキドキと
する脇差が突き刺って、断末魔の
苦悶にあえぐ表情と、死のけいれ
んにゆがむ四肢と指先、血紅を使
用して斬られる女の真迫的な美し
さとスリルを盛り上げました。

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

敷蒲団の上に長々と寝そべって

雑誌がインテリ受けしていること
も内容によって判断出来ます。と
いつてある学者、或いは有名人と
の会話の中からこの雑誌が話題に
載ったというのではなく、本文の
文章自体、他の同系雑誌には到低
及びもつかない見事なものである
し、読者通信欄においても相当知
識階級の人達だなど思うような文
章がざらにあるからです。そこへ
もって来て小生如き輩が仲間入り
をさせて呉れというのもまことに
もって不見識極まりない事なので
すが、前述したように不便さを感じ
させないこの雑誌の特性が小生
をその魅力の虜にしてみました訳
です。ところで、小生自身、以前
から何人ものかたが仰言られまし
たようにS・Mの両性を兼ね備え
ております。が自己判断によると
Mが80パーセント、Sが20パーセ
ント程度のようなのです。そして
又そのMが乱暴を好まず、かとい
って全然精神的なMでもないの
です。ですから甘い、Mとしては初
期の、異性の馬になったり、又は
プレイ程度のレスリングをしたり
等を望んでいるのですが、未だそ
れ等の気配すら感じられません。
又、Sとしての小生は相手を縛り
上げて逆さに吊したり、針でチク

リチクリといったことはとても小
生の真似の出来ない事で反対に馬
にして部屋中を歩かせて見たりす
る位を望む、といった気の小さい
男です。(身体もあまり大きくない
人ですが)一般にMである、或
いはSであるといったものは性格
で区別出来るものでしょうか。温
順しい性格の持主、或は妥協的な
性格の持主がMで、乱暴な性格で
あるとか、自己本位的な性格の持
主がSである。等と。しかし小
生自身はと見ると中学、高校を通
して喧嘩っばやいので学校中に名
前が知れわたっていたし、かとい
ってすぐ人に同調してしまう、或
いは飽くまで人の都合によって計
画を立てるような妥協的な面もあ
る訳なのにMが80パーセントとい
うのは変だと思っっているのです。
さて、小生今までのこのMの望みを
全然果してないのでそろそろ実行
に移そうと思っております。とい
って今いる何人かのガール・フレ
ンドにそんな話を持ちかける訳に
行きません、気の小さい為には。
口で面と向ってはいえないのです。
そこでこの読者欄をお借りしてど
なたかのお力を借りたい訳です。
小生のこの儚ない夢を満たす為呼
びかけに応じて下さる女性はお

浣腸を待つ女の足元から、一〇〇CCの大きな浣腸器が施術者の手によって、迫ってくる。

自から施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸しようとしているところを描きました。

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

イルリガートル、エネマシリンジ、一〇〇CC、三〇CC、二〇CC浣腸器などを弄ぶ若き女。

縄目にもだえる夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほく)

猿ぐつわも厳しく後手に縛られた夫人が、乳房も太股もお臍もあらわに、平常のつつしみ深さも忘れて、もだえぬ魅力的ポーズ。

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほむ)

正面向いて顔をはっきりと見せた夫人は、強烈な亀甲縛りに全身をひしひしとしましめられ、髪をむずと握んで引きまわされる。

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ほふ)

豊満な柔肌、ふっくらと膨らんだ下腹に切り込む鋭い刃先。床の間を背にして演じられる大胆奔放な切腹の姿態。

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ろみ)

全身に皮下脂肪がのり、殊に下腹のポリウムの増したひかるが、相撲褌一本で立った勇姿。

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(へみ)

代理部分譲品総目録

十円切手封入の上お申込み下さい。

ませんか。そして又、小生自身、そのプレイより写真撮影の方に興味を持つていたのです。当誌に掲載されたMフォト、この主人公の顔が小生自身に置きかえる事が出来たらどんなに素晴らしいかと思っ

「美しき縛しめ」(第三集)の発売を記念して、第一集、第二集をもっている人を捜す(KKにその旨の広告を出す)ことにより、その人から、しばらくそれをかりて復写して多少鮮明度がおちても、発売して頂けませんか。これは貴社の歴史を回顧する意味でも、大いに意義ある事と思いますが、御

悪書追放とやらの断圧に屈せずKKを毎月発行される努力と勇氣に拍子を送ります。さて2月号の広告によりますと二月中旬頃「美しき縛しめ」第三集が出されるとのこと今から楽しみに一日も早く発売されることを祈っています。そこで一つお願いがあるのですが私は貴誌の昭和26年頃以来の愛読者で大判型の一、二冊とそれ以後のKKは二、三冊を除いて(残念

「美しき縛しめ」(第三集)の写真選定に当たっては、KK誌の自粛をばんかいする意味でもパンチのきいた写真をお願いします。平凡なものはマンネリ的です。(東京都八北本望)「編集部より」○アルバム「美しき縛しめ」第一集、第二集は一般書店へは一冊も配本しませんでしたので古本屋で求めることは絶望でしょう。編集部にも一冊も残っていないません。

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」

○自分はこのような人に言えぬ変った趣向を持つてゐるという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのような奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」

○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御自分の生活のこと、社会一

三、体験

般のこと、本誌のこと、同好者への呼びかけ等なんでも結構です。

「私はこんな変った体験をしました」

○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄く体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変った体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けられた事柄を、この際再び追体験して下さい。

◎以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の「特集号」に一括掲載したいと思ひます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
◎締切日、毎月三十日

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思ひ出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△（映画、雑誌）通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお待ちの事項或はマニヤ各傾向の本

誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の栞 ☆

一月分（1冊）二五〇円△送共△
三月分（3冊）七〇〇円△送共△
半年分（6冊）一三〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価二五〇円

四月号

（第十八巻第四号）
（通巻第一八八号）

昭和三十九年三月二十日 印刷
昭和三十九年四月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月三日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願ひます。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫してありますから、売切れぬ中御注文願ひます。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。